

芸術工学研究科
芸術工学専攻

博士論文 2015

ヴィトゲンシュタインの建築に関する研究
- ストンボロー邸の二重ドアについて -

A Study on The Architecture of Ludwig Wittgenstein
- An Analysis on the Double Doors of Stonborough Villa -

神戸芸術工科大学大学院
石田 優

目次

ヴィトゲンシュタインの建築に関する研究

- ストンボロー邸の二重ドアについて -

- 目次 -

第1章 序論	1
1-1 研究の目的と背景	3
1-2 論文の構成	9
1-3 既往研究について	13
1-4 用語の定義	31
第2章 ヴィトゲンシュタインとストンボロー邸	43
2-1 エンジニア・論理学者・哲学者	45
2-2 共同設計者エンゲルマン	59
2-3 設計の経緯	69
2-4 ストンボロー邸の配置図	79
第3章 ドアを主題とした建築	89
3-1 論理哲学論考について	91
3-2 ストンボロー邸の空間に内在する秩序	95
3-2 ドアと寸法体系に関する仮説	99
第4章 実測調査	109
4-1 実測調査について	111
4-2 既存図面	115
4-3 内部寸法表	119
4-4 内部寸法表における既存図面との比較	123
4-5 開口部寸法表および建具表	127
4-6 開口部寸法表における既存図面との比較	129
4-7 部屋の容積の比較	135
4-8 実測調査まとめ	141
4-9 図面資料	147

第5章 化粧壁の役割	161
5-1 朝食室	163
5-2 夫人居間	165
第6章 ドアの寸法体系	173
6-1 ドアの種類	175
6-2 ドアの開閉パターン	181
6-3 二重ドアの開閉機構	183
6-4 ドアの配置	187
6-5 部屋の内的な秩序	191
6-6 二重ドアの役割	193
6-7 図面資料	201
第7章 結論	207
註・図版出典	215
参考文献	229
謝辞	

論文要旨

ヴィトゲンシュタインの建築に関する研究 -ストンボロー邸の二重ドアについて-

石田 優／芸術工学専攻 13DT001

●主査教員／小山 明

1. 序

1-1. 研究の背景

哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインが建築家パウル・エンゲルマンと共同で設計を行なったストンボロー邸は、1928年に建設されている。設計当初は、ヴィトゲンシュタインの姉マルガレーテ・ストンボローがエンゲルマンに設計の依頼を行っているが、最終的な建築申請図面には、ヴィトゲンシュタインとエンゲルマンの二名の署名がみられる。ストンボロー邸は、ヴィトゲンシュタインがその生涯で唯一「建築家」として仕事を行った建築である。(図1、2、3)

ストンボロー邸の建築に関する研究は、ヴィトゲンシュタインの哲学研究と建築学的研究の二つの観点からの見方がある。哲学の学問領域においては、ヴィトゲンシュタインの前期哲学と後期哲学の移行する時期に設計された建築として位置づけられている。

ストンボロー邸の完成後には、ヴィトゲンシュタインやエンゲルマンによって建築雑誌などで建築の概要は語られることもなく、家族と友人や関係者以外立入ることができない状況が続いていた。

1971年に当時の所有者トーマス・ストンボローが不動産業者に売却し、取り壊されることが公表されたことにより、バーナード・レイトナーを中心とする建築保存運動が始まり、ここからこの建築の建築学的な研究が本格的に開始する。レイトナーによってストンボロー邸の正確かつ非常に詳細な記録写真・図面資料が整理され、その特徴的な空間構成とスケールが知られることとなった。

しかしその後、所有者が代わり1976年から1977年にかけて内部の改造が行われ、グンター・ゲバウアー等の研究グループにより、この改造後に初めて実測調査が行われている。これらの研究資料を基盤にして、パウル・ヴェイデフルトなどの研究者によって現在も継続的に研究がなされている。

国内においては、前述のレイトナーの著書を翻訳した磯崎新はヴィトゲンシュタインの写像理論を例に、ストンボロー邸は、アイデアの正確無比な写像の繰り返しによって作り出されていることに言及している(註1)。また多木浩二は『論理哲学論考』との類似性に触れ、その哲学の内容ではなく、記述の形式に強い類似性のあることを指摘している(註2)。また小山明は、ホールに設置されたドアの左手用と右手用のドアハンドルが恣意的に一定の論理のもとに配置されていることなど数学的な特徴があることを指摘している(註3)。



図1(左上) ヴィトゲンシュタイン。アドルフ・ロースの弟子P. エンゲルマンと共同で設計をおこなっている。

図2(左下) 建築申請の際に記されたヴィトゲンシュタインとエンゲルマンのサイン(右下部分)。他は建設施工会社 CARL KORN、法律事務所のサイン。

図3(右) ストンボロー邸外観。内外ともに装飾はなく、床には温水床暖房、ペリメータゾーンには床下からの温風の吹き出し暖房装置、壁面内にはロールカーテンやブラインド、地下からカウンターウェイトを使用してせり上がる鉄製シャッター等の環境制御装置が組み込まれている。

1-2. 研究の目的と方法

ストンボロー邸は、主階のホールを中心とした求心的な空間構成、各部屋の壁面に見られる左右対称形に整えられたドアの配置、また部屋と部屋とを接続するドアの形状と開閉方法に強い特徴があると考えられる。ホールとそれを取り囲む4部屋のドアはすべて両開きのドアであり、それらは一重及び二重のドアの二種類から構成されており、この二重ドアは主階にのみ配置されている。

本論ではストンボロー邸のドアに注目し、主階のホールを含む5部屋に配置された全てのドアの種類に関して、形状および寸法をもとに分類をおこない、ホールを中心とする部屋に配置されたドアの寸法体系から各部屋の内部空間の主要な構成要素としてのドアの役割、そしてそれらの空間を接続する装置としてのドアの役割に注目し、ストンボロー邸の空間構成を考察する試みをおこなう。

こうした研究には、現在残されている基本図面をはじめとする図面(施行図面、確認申請図面、実測図面など)(註4)からの寸法に関する情報、また上記の70年代の実測調査の結果得られた情報では寸法体系の考察の資料としては不十分であり、特に本論で問題とする二重ドアに関してはより詳細な

ドア両面の寸法の把握が必要であり、計測精度の高いレーザー測距器を使用してブルガリア文化研究所の協力のもと実測調査をおこなった（註5）。

2. 主階における空間の配置とドアの役割

ストンボロー邸の主階は「ホール（Halle）」を取り囲むようして「朝食室（Frühstückszimmer）」「居間（Wohnzimmer）」「サロン（Saal）」「食堂（Speisezimmer）」が配置されることにより「ホール」を中心とした求心的な空間構成が作り出されている（図4、5）。

ストンボロー邸の玄関から真っ直ぐに前室を抜けてホールに至ると、その部屋には多くのドアがあり、これらのドアからこの建築のすべての部屋へと続く動線が始まっている。このホールを経由しない限り、どの部屋に到達することも不可能であり、ホールは機能的にもまたトポロジカルにもこの建築の中心となっている。

また、ホールを中心として朝食室・居間・サロン・食堂の4部屋が順に左回りに配置されており、それらの部屋のそれぞれの1壁面の開口部の最大数は「1・2・3・4」の数列を構成している。これらの開口部はそれぞれの部屋の内部壁面に等間隔かつシンメトリカルに配置されている。

ホールおよびそれを取りまくそれぞれの部屋には、壁面上の「ドア」の配置に基づく独立した内部空間の構成秩序が存在する。一方でこれらの部屋と部屋とを接続することになる「ドア」はストンボロー邸においては主階平面全体のホールを中心とする平面構成の秩序を作り出す重要な役割を担っていると考えられる。またドアそれ自体に付属するドアハンドルの組み付け方法にもその部屋の属性に従った方向性の秩序が存在している。

このように、ストンボロー邸においては、その空間構成におけるドアの受け持つ役割が非常に大きいものであると考えられる。その意味でストンボロー邸を建築学的にとらえる場合、ドアを手がかりに、それらの種類、配置方法、ディテールなどを比較することで、部屋と部屋との関係および全体の空間構成を把握する方法が有効であると考えられる。

3. ドアおよび実測調査の結果

ストンボロー邸主階の二重のドアの開閉メカニズムは、一定の方向に開く方式と、前後に開く方式の二種類に分類される。食堂を含む居間やサロンの外部に接するペリメーター部分には、すべてが内側に開く両開き二重ドアが設置されている。これらのドアは前後それぞれのドアの回転中心の計算された位置の設定や、取り付け金具の精巧な設計により、前後のドアが全く干渉することなく、重なり合って開くメカニズムとなっている（図6）。

ドア形状の種類と一重および二重ドアの組み合わせは「ガラス製ドア」「鉄製ドア」「ガラス製二重ドア」「ガラス・磨り



図4) ホールより玄関入口を見る。左手の両開き二重ドアは居間に続き、右手のドアは朝食室に続くドアである。居間に続くドアには右手用のドアハンドル、朝食室に続くドアには左手用のドアハンドルが設置され、ドアハンドルそのものが左右対称形に配置されていることが確認される。



図5左) 食堂に並ぶ4つの二重ドア。右の三つのドアは全て内側に開き、左端の二重ドアは前後に開く。

図6右) 二重ドアの二種類の開閉方式。左の二重ドアは、前後のドアが全て部屋の内側に開き、外部に面する居間の「K」「L」、サロンの「M」「N」、食堂の「S」「T」、夫人居間「M」「Q」の二重ドアが相当する。右の二重ドアは前後に開き、部屋と部屋を接続する箇所に設置されている。

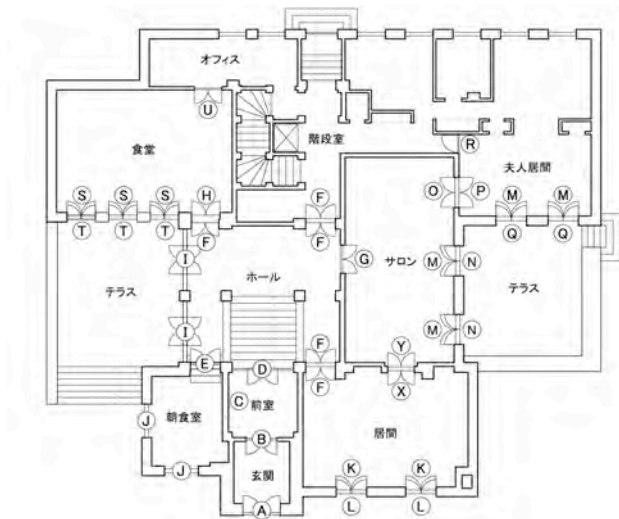


図7) ホールをとりまく部屋に設置された全ドアの配置図。ドアは各部屋の内部の左右対称性の空間構造を創り出すエレメントであると同時に部屋と部屋とを視覚的につなぐ役割を持っている。一重のドアと二重ドアとの配置、一方方向に開く二重ドアと前後に開く二重ドアの配置が表現されている。サロンと居間との間を隔てる壁面は現存しない。このため、「X」および「Y」の寸法は実施図面より転載した寸法となっている。

ガラス製二重ドア」「鉄製二重ドア」「ガラス・鉄製二重ドア」6種類によって配置されていることがわかる(図7)(表1)。

サロンの内部壁面に3つ並ぶドアは、左の夫人寝室へ続く「O」が鉄製のドアで、中央と右のテラスへ続く「M」のドアがガラス製のドアとなっている。それらは互いに異なる素材のものであるが、3つのドアは同じ寸法(幅・高さ)・同じ形状である。壁面の中心軸上に中央のドアを配置し、左右のドアを等間隔に配置することで左右対称な壁面が構成されている。また、食堂の内部壁面に4つ並ぶドアのうち、右の3つの食堂からテラスへ続く「S」はガラス製ドアであり、左端の食堂からホールへ続く部分には「H」の磨りガラス製ドアが設置されている。それらのドアは、サロンの「M」および「O」のドアと同様に、ドアの素材は異なるが同寸のドアである。それらの壁面以外においても、居間の2つ並ぶ「K」のガラス製ドア、夫人居間の2つ並ぶ「M」のガラス製ドアも、そのドアが属する壁面が左右対称形になっていることがわかる。主階の部屋はそれぞれの部屋の内部壁面を左右対称形に構成するという「内的な秩序」に基づいて計画されている。

一方で、居間の2つ並ぶ「K」のドアと食堂の4つ並ぶ「H」「S」のドアの幅は同寸法であるが、居間のドアの高さは食堂のドアより210mm低く設定されている。それは、食堂の天井高さ(CH: 3,790mm)と居間の天井高さ(CH: 3,520mm)が270mm異なる為、それぞれの部屋の天井高に合わせてドアの高さも調整したものであると考えられる。すなわち、天井高さとドアの高さの比率は、食堂が「1.17」であり、居間が「1.16」ではほぼ等しい比率となっていることが明らかになった。

4. ドアの寸法体系と二重ドアの役割について

ストンボロー邸において、壁面上のドア配置の左右対称性は非常に重要な形態言語となっている(図8)。

各部屋それぞれが左右対称形にドアの配置された壁面を有しているが、なかでもサロンには3つの左右対称な壁面があり、部屋そのものに非常に強い緊張感のある空間特性を与えていることがわかる。また、ホールは入り口からの軸線上にあり、最も強い左右対称性を有しており、ここにも3つの左右対象形な壁面があることがわかる。ストンボロー邸は、それぞれに独自の左右対称性をもった部屋が互いに接続され、全体の空間構成を作り出していると考えられる。

前項で示したようにストンボロー邸に設置されたドアの種類は、まずそれぞれのドアが属する部屋の壁面構成に従ってその数、そして種類が選択され、各部屋の天井高との関係によりドアの寸法と位置が決定されていると考えられる。

すなわち、各部屋の内部の秩序によりドアの形状と種類が選択され、ドアの寸法体系は、これにより決定されていることがわかる(図9)。前項の食堂と居間の比較からも、まずペリメーター部分のドアの幅が全体で共通の寸法に統一されて

記号	幅	高さ	素材
A	1,200	2,100	ガラス
B	1,200	2,100	鉄
C	1,200	2,100	ガラス・鉄
D	1,200	2,100	ガラス
E	1,200	2,100	鉄
F	1,200	2,100	ガラス・鉄
G	1,200	2,100	ガラス
H	1,200	2,100	磨りガラス
I	1,200	2,100	ガラス
J	1,200	2,100	ガラス
K	1,200	2,100	ガラス
L	1,200	2,100	ガラス
M	1,200	2,100	ガラス
N	1,200	2,100	ガラス
O	1,200	2,100	鉄
P	1,200	2,100	ガラス
Q	1,200	2,100	ガラス
R	1,200	2,100	ガラス
S	1,200	2,100	ガラス
T	1,200	2,100	ガラス
U	1,200	2,100	ガラス
V	1,200	2,100	ガラス
W	1,200	2,100	ガラス
X	1,200	2,100	ガラス
Y	1,200	2,100	ガラス

表1) 建具表。主階に設置された一重のドアおよび二重ドアの記号(AからY)は、図7のドアの配置図と対応する。

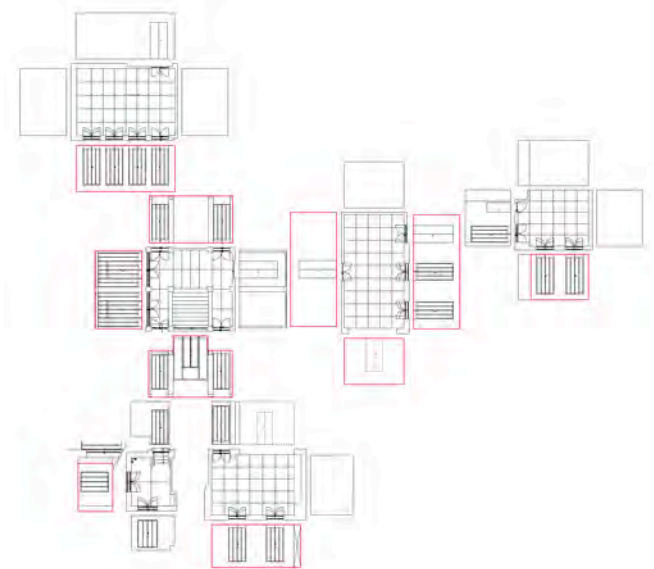


図8) ストンボロー邸主階展開図。赤色で示す壁面は左右対称な壁面である。ホールが主階の平面計画の中心となっており、ホールを経由しない限りいかなる部屋に到達することも不可能である。

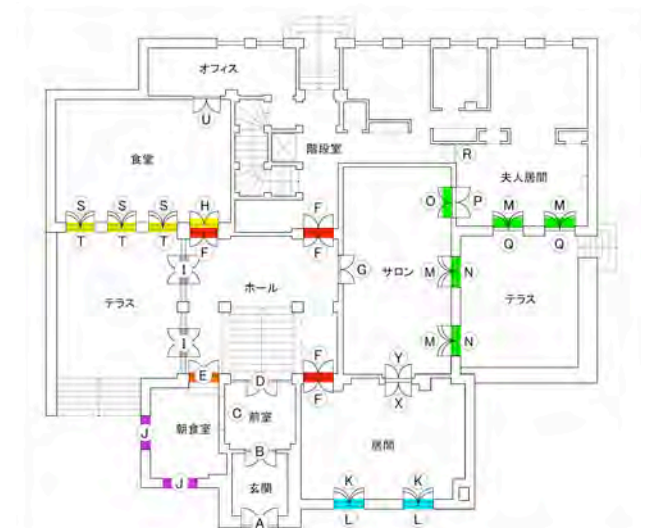


図9) ドアの寸法体系。ドアの幅および高さの両方の寸法が等しいドアを同色で示す。各部屋は固有のドア寸法を有している。「ホール」と「食堂」をつなぐ(F)及び(H)の二重ドアはそれぞれの部屋の寸法から設定されたドアの寸法を二重ドアのドア枠内で調整している。「サロン」と「夫人居間」をつなぐ(O)と(P)のドア、また現存しないが「サロン」と「居間」との間の(X)・(Y)のドアも同様の役割を果たしている。

いるが、ドアの高さはそれぞれの天井高に合わせて調整されている。

一方、各部屋は「ホール」および他の部屋との関係の中に置かれている。各部屋はそれぞれ部屋の一箇所のドアにより「ホール」の空間と結ばれている（図 10）。

すなわち、すべてのドアは、

- 1) 壁面上の左右対称性という各部屋の内部の秩序
- 2) もうひとつの部屋の壁面上の左右対称性という秩序の両方の領域に属し、また
- 3) それらの部屋を特徴的な開閉形状により、物理的かつ視覚的に接続する役割を担っているといえることができる。

すなわち、二部屋の壁面上の左右対称性を構成するエレメントであると同時に部屋と部屋とをつなぐ役割を担っている。

前述のように各部屋にはそれぞれの壁面の構成秩序があり、それに基づきドアの位置及び形状と寸法が決定されている。

ホールの四隅には互いに同形状のドアが配置されており、これも厳密なホールの内部の秩序を満たすべくそれらの形状と寸法と位置が決定されている。ドアハンドルの方向性もこうした考え方に従って組みつけられている。このホールの4つのドアのうち前述の食堂へと続くドアは二重であり、その一方はホールに開き、一方は食堂側に開く（図 11）。

実測調査の結果、このホール側のドアは（幅 1,380 mm/高さ 3,170 mm）、食堂側のドアは（幅 1,410 mm/高さ 3,250 mm）であることが確認され、同形状であるにも関わらず、寸法が異なっていることが明らかになった（図 12）。こうした差異は、サロンと居間とを接続する二重ドア「X」「Y」にも同様に存在する。こうしたことから、ストンボロー邸における二重ドアは、各部屋の内部の寸法の体系をお互いに調整する役割も担っていたことが考えられる。

5. 結論

ストンボロー邸主階に位置する、ホールを中心とする全てのドアの実測調査を行い、寸法の比較を行うことを通して、それらの配置の中にある寸法の体系を考察した。

ストンボロー邸は、壁面の左右対称性という各部屋それぞれ自身もつ自律的な秩序を有している。そして、各部屋はホールを中心とした構成によって成立していると考えられる。

実測調査の結果、外見上は同形状かつ同寸法に見えるドアにも、微細な寸法の差異があることが明らかになった。また特に、部屋と部屋とを接続する位置にある「二重ドア」は前後で寸法が異なるものが存在していることが明らかになった。

ストンボロー邸主階に配置された二重ドアは、各部屋の内部の寸法の体系を、お互いに調整する役割を担っていたことが考えられる。またこれらの二重ドアは前後の間隔が大きく、内部に空間性をもったドアであり、その開閉にともない視覚的に接続を示す形状をそこに生成するという特徴を有し、内部の空間構成において重要な役割を担っていたと考えられる。

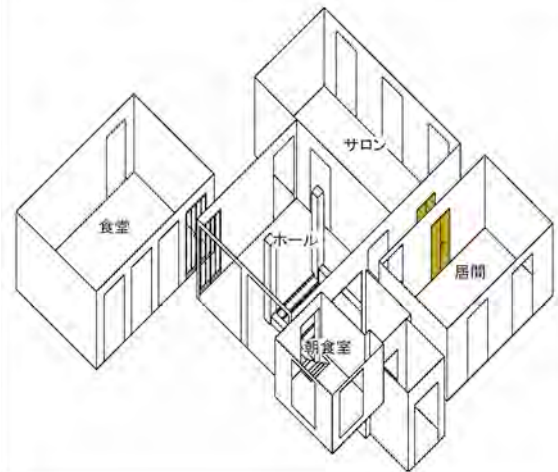


図 10) 前後で寸法の異なる二重ドアの位置を示す図。食堂に属する面とホールに属する面では寸法が異なる。サロンと居間の間の鉄製のドアも同様である。二重ドアは、それぞれの部屋の内部の左右対称性をはじめとする内的な空間構成論理に従属し、また一方では部屋と部屋を接続する役割を有している。

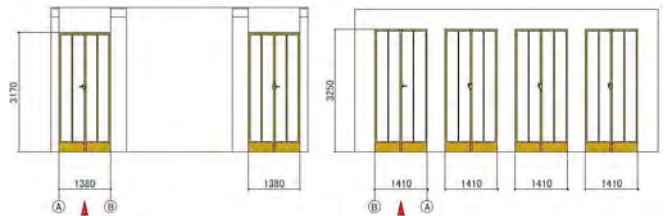


図 11) 左はホール側から見た食堂へ続くドア。「A」「B」で左右を示す。右は食堂から見たホールへ続くドア。



図 12) ホールと食堂をつなぐ二重ドア詳細。上記の二重ドアは前後で寸法が異なる。寸法の差異は二重ドアの間で調整されている。

註

- 1) 磯崎新、「建築家ヴィトゲンシュタイン」、『現代思想 3-12 月号』、1975
- 2) 多木浩二、「ヴィトゲンシュタインの家について」、『ヴィトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996。
- 3) 小山明「ストンボロー邸の空間構成について」日本建築学会学術講演梗概集、2010、pp. 123-124
- 4) 研究の基盤となるストンボロー邸主階平面図は、研究者レイトナーの『The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, 1976』45 頁に掲載の施工図面と、『Das Wittgenstein Haus, 2000』49 頁に掲載の建築申請図面、研究者ゲバウアー『Wien・Kundmannngasse 19, 1982』の 40 頁に掲載の実測図面を示している。
- 5) 測距器の機種は、レーザー距離計 BOSCH GML-50 であり、小数点以下を四捨五入し、ミリメートルの単位を使用して記録をおこなった。これまで不明であった朝食室の寸法を明らかにしている。石田優、小山明「ストンボロー邸朝食室の寸法について」日本建築学会学術講演梗概集、2014、pp. 855-856

図版出典

- 1) Rush Rhees, “Recollections of Wittgenstein”, Oxford Paperback Reference, 1984
- 2) Bernhard Leitner, “The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation”, New York University, 1976, p. 44
- 3)、5)、12) 石田優撮影
- 4) Paul Wijdeveld, “Ludwig Wittgenstein Architekt”, Loecker Erhard Verlag, 1993, p. 109
- 6)、7)、8)、9)、10)、11)、表 1) 石田優作成

A Study on The Architecture of Ludwig Wittgenstein

- An Analysis on the Double Doors of Stonborough Villa -

Name: Yu ISHIDA Division: Design Research, ID No.:13DT001, Adviser: Akira KOYAMA

1. Introduction

1.1. Research Background

Stonborough Villa was built in 1928 by the Philosopher Ludwig Wittgenstein in collaboration with the Architect Paul Engelmann. Wittgenstein's older sister Margarethe Stonborough requested Paul Engelmann the initial designs for the house, however on the final drafts the signature of both Engelmann and Wittgenstein can be seen. Stonborough Villa is the only work of Wittgenstein as an Architect. (Fig. 1,2,3)

The research of Stonborough Villa can be viewed from two aspects a philosophical and an architectural perspective. With the philosophical discipline, it sets a transition period from Wittgenstein's first and late philosophy.

After Stonborough Villa was completed it wasn't published in any architectural magazines or papers, throughout the years only family and friends knew of the design and had actually entered the house. In 1971 the owner at the time Thomas Stonborough sold the house to a real state agent where it would be scheduled to be demolished. It was at this time that Bernard Leitner began a movement to preserve the building and began the first research into the design of the house. Accurate records, detailed photo documentation and drawings collected by Leitner revealed the characteristic spatial composition and scale of the building.

However, in spite of all the efforts to preserve the monument of Wittgenstein shortly after being purchased the new owners carried out a remodeling on the inside of the house from 1976 to 1977. The Gunter Gebauer research group was the first to perform a field measurement of the building after the renovation was concluded. Following Leitner and Gebauer's publications new researchers like Paul Wijdeveld and Jan Turnovsky began their analysis into Ludwig Wittgenstein.

In Japan, Arata Isozaki wrote a theory on the mapping of Stonborough Villas as well as the translated version of Bernhard Leitner's "Stonborough Villa" which mentions the accuracy and repetitions of the blueprint Taki Koji, touched similar subjects in "Logical Philosophy Discussion" in which he pointed out that there is a strong similarity in the description format.

In regards to the Stonborough Villa Akira Koyama pointed out the mathematical features and the door handles for the right hand and left hand installed in the halls.



Fig. 1 Upper Left.) Wittgenstein.

Fig. 2 Lower Left.) Application form filed for the construction of Stonborough Villa. Wittgenstein and Engelmann's signature are present as well as the construction company CARL KORN.

Fig. 3 Right.) Stonborough Villa. Currently, serves as Bulgarian Cultural Institute.

1-2. Purpose and Research Method

This thesis focuses on the Double Doors of Stonborough Villa, the role the doors have in this architecture and the differences, which present themselves in Stonborough Villa. In this building the doors have a crucial aspect being considered a major component of the internal space corresponding to each room while at the same time the spatial focus of how each door is connected leads to an understanding to the spatial composition of the house.

As a starting point this research used the dimension information taken from the original plans and data gathered by prior researches, including any other remaining documentation that could clarify the intended scales and dimensions of the infrastructure. From the prior collected data of the measurements, along with the survey that took place in the 70's after the renovation had taken place, there were still some components of incomplete data regarding the first floor. For this thesis to grasp the details necessary to clarify the questions regarding the double doors of Stonborough Villa a field research took place in the current Stonborough Villa owned by the Bulgarian Culture Institute using a high range precision measuring laser.

2. The Role of the Doors in the Main Floor

The main floor of Stonborough Villa is formed around the Hall, followed by the Breakfast room, Salon and Dining Room, in a centripetal spatial structure (Fig. 4,5).

When entering the Hall from of Stonborough Villa you can see a room with many doors, the Hall is where the flow line leads to a connection of all of the rooms in the building. It is not possible to reach any room if not through the Hall, the Hall also has a topological function in which it is the center of the building.

In addition the Breakfast Room, Living Room, Salon and Dining Room are arranged counterclockwise around the Hall. The Maximum number of opening in each of the walls of the rooms is composed by a sequence of "1,2,3,4". These openings are arranged in equal and symmetrical intervals inside the walls of each room.

The Hall and the rooms surrounding it have their own independent logical spatial configuration that is based on the "Doors" on the wall. On the other hand, the "Doors" that connect the rooms of Stonborough Villa are considered to play an important role in creating a planar configuration of the entire first floor. Additionally, the doors and door handles assembly method as well as the directional systems are accommodated to the attributes required for each room.

This means, that for Stonborough Villa, the role the doors play is very important. If looked at from a purely architectural perspective, it is possible to understand the overall relationship and spatial configuration from room to room by analyzing the role of the doors though the clues in the form, arrangement method and details of which they are composed.

3. Result of the Door Survey

The opening and closing mechanisms of the Double Doors in the main floor of Stonborough Villa can be classified into two types for opening the front or back door. Including the Dining Room, the perimeter in contact with the Living Room and Salon's external walls all have Double Doors installed that open to the inside of the rooms. The doors' center is set in a calculated position in which the front and back door are aligned in an elaborate hinge design, without the interference of either the mechanism has an overlapping opening (Fig. 6).

As demonstrated in this research the Door combinations of the type of shapes and Single or Double Doors are as follow: "Glass Door" "Steel Door" "Glass Double Door" "Glass Translucent Glass Double Door" "Steel Double Door" "Glass - Steel Double Door" In total 6 types (Fig. 7, Table 1). The symmetrical shape of the wall is constructed by arranging the Doors of the same size (Width and Height). The Doors are lined up to the three internal wall of the Salon continuing to the left into the Bedroom "O" is a



Fig. 4.) The entrance from the Hall. The door to the right connects to the Breakfast Room. The door to the left connects to the Living Room.



Fig. 5. Left) The four doors to the right are lined up in the Dining Room. The three doors on the right continue onto the terrace, the door on the far left leads into the Hall.

Fig. 6 Right) There are two types of opening mechanisms for the double doors. The double doors on the left open in the same direction and lead outside of the home these are (K) (L) of the Living Room, (M) (N) of the Salon, (S) (T) of the Dining Room and (M) (Q) of Margarethe's Room. The image on the right shows the double doors that open in opposite direction with the purpose of connecting the rooms.

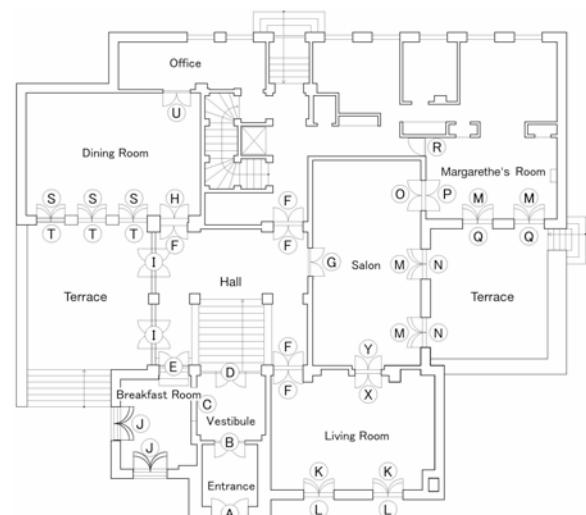


Fig. 7) Layout view of all the doors that have been installed in the Hall. The Doors role to connect the room and the rooms and are elements while at the same time create the spatial structure of the symmetry of the interior of each room. Arrangements of the single door and double doors, placement of double doors as well as the direction in which they open are illustrated. Since the wall that separated the Salon and the Living Room was demolished during the renovation. Therefore, the dimensions for "X" and "Y" are taken from prior plans of the house.

“Steel Door”, to the subsequent center and right Terrace the Doors “M” are “Glass Doors”. Although they are of different materials the 3 doors are the same shape and size (Width and Height). This places the center of the door on the center axis of the wall, the door to the right and left form a symmetrical wall with equal intervals.

In the Dining Room’s internal wall four doors are aligned, the three doors on the right leading from the Dining Room to the Terrace, the “S” Doors are made of “Glass”, “Translucent Glass Doors” from the Dining Room to the Hall are “H”, others are the Salon’s “M” and “O” although the material of the doors might be different but they possess the same dimensions.

In the Living Room two “K” “Glass Doors” are also in place. In Margarethe’s Room two “M” “Glass Doors” which also correspond to the bilateral symmetry like the others. In the main floor the “internal logic” is planned in the basis of a left-right symmetry throughout the inner wall surfaces (Fig. 8).

At the same time, the width of the “K” doors in the Living Room and the width of the four “H” and “S” doors in the Dining Room is the same, however, the height of the Living Room door is 210mm lower than the door of the Dining Room. The reason for this is because the height of the ceiling in the Dining Room is (CH:3,790mm) and the Living Room ceiling height is (CH:3,520mm) there is a 270mm difference between the two for which the size of the door was adjusted to this proportion. In other words, the proportion of the ceiling height and the height of the door in the case of the Dining Room is “1.17” and in the Living Room “1.16” they have been matched to an almost identical scale.

4. The Role and Dimension System of the Doors

Stonborough Villa, the left-right symmetry of the door placement on the wall has become a very important form of language. Although each of the doors in the rooms is symmetrically aligned, among them the salon has three symmetrical walls that give the room a very severe and tense feeling. Furthermore, the Hall is located on the axis of the entrance and has the strongest symmetry; in this room as well we can see three symmetrical walls. The Stonborough Villa connects all of the individual symmetries of the rooms respectively to create a complex spatial configuration. The types of Doors installed in Stonborough Villa, are firstly chosen to fit the structure of the wall corresponding to the room it will be in, then the sizing and positioning is determined (Fig. 9).

Basically, the shape of each room is selected by an internal logic that forms a symmetrical wall, and so, this determines the dimensions of the doors. For example, if we compare the Dining Room and the Living Room, although the width of the door’s perimeter is unified as a common whole, the height is adjusted to match the respective ceilings of the rooms. Meanwhile, the

Door Type	Label	Width (mm)	Height (mm)
Single Door	A	1,200	2,100
Single Door	B	1,200	2,100
Single Door	C	1,200	2,100
Single Door	D	1,200	2,100
Single Door	E	1,200	2,100
Single Door	F	1,200	2,100
Single Door	G	1,200	2,100
Single Door	H	1,200	2,100
Single Door	I	1,200	2,100
Single Door	J	1,200	2,100
Single Door	K	1,200	2,100
Single Door	L	1,200	2,100
Single Door	M	1,200	2,100
Single Door	N	1,200	2,100
Single Door	O	1,200	2,100
Single Door	P	1,200	2,100
Single Door	Q	1,200	2,100
Single Door	R	1,200	2,100
Double Door	S	2,400	2,100
Double Door	T	2,400	2,100
Double Door	U	2,400	2,100
Double Door	V	2,400	2,100
Double Door	W	2,400	2,100
Double Door	X	2,400	2,100
Double Door	Y	2,400	2,100
Double Door	Z	2,400	2,100

Table 1) Door Schedule. Graph of the single doors and double doors installed in the main floor of Stonborough Villa.

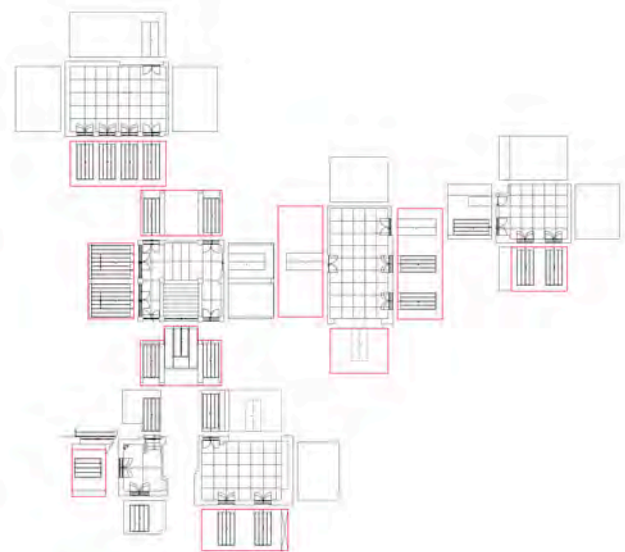


Fig. 8) Plan of the main floor in Stonborough Villa. The walls highlighted in red are symmetrical. The Hall is where the focus of the main floor is centered; it is also not possible to reach any room without going through the Hall.

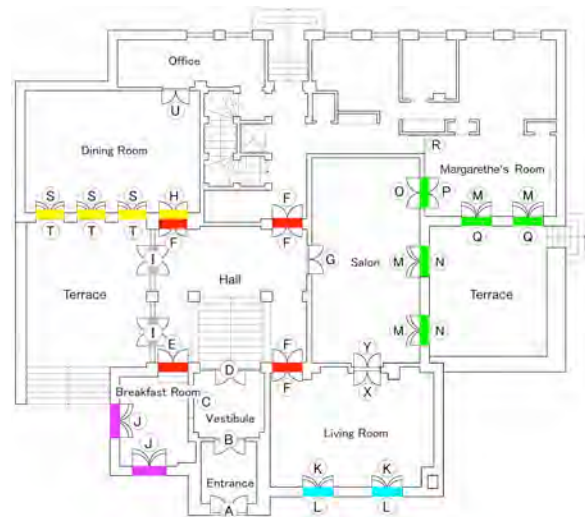


Fig. 9) Dimensional system of the doors. The same color doors indicate that the dimensions of both the width and height are the same. (F) and (H) connect the Hall and Dining Room the dimensions of these double doors are determined by the internal proportions of their corresponding rooms which is also present in the differences in sizing of where the pair of double doors open. (O) and (P) connect the Salon and Margarethe’s Living Room, (X) and (Y) connect the Salon and Living Room have the same logic as (F) and (H). (X) and (Y) are no longer existing.

connection of the rooms as a total is placed in the Hall. So, each room is tied together in one place though its doors, this is the purpose of the Hall (Fig. 10).

1) The bilateral symmetry of each room has a very specific internal logic.

2) The Hall belongs outside of the bilateral logic as it plays the role of connecting the rooms.

In every room, as described above, there are logical configurations to the walls, the position, shape and dimensions of the doors by a fixed concept. For example, The 4 doors in the Dining Room have the same shape and are aligned symmetrically on the same wall, there are two types of opening and closing mechanisms, the double door to the far left connected to the Hall opens into the Dining Room and the Hall, but the three doors to the right only open into the Dining Room (Fig. 11).

Moreover, the four corners of the Hall the doors of the same shape are arranged, their position and dimensions meet the strict criteria of the Hall's logic. The directions of the door handles have also assembled in accordance to this logic. Of the four doors mentioned the one, which leads into to the Dining Room, as previously, described is a Double Door of which one pair opens into the Hall and the other into the Dining Room.

The Survey results revealed that the door which opens into the Hall's measurements are (Width 1,380mm/Height 3,250mm) and the door opening into the Dining Room's are confirmed as (Width 1,410mm/ Height 3,250mm). Despite seemingly the same the actual dimensions are quite different from each other. Such differences can also be found in the double doors that connect the Salon and the Living Room (Fig. 12). For these reasons we can state that the double doors in Stonborough Villa's role of adjusting adequately into the proportional system for each room is clear.

5. Conclusion

On the Main floor of Stonborough Villa, the survey performed in the Hall revealed the classifications and systems regarding the Doors and their dimensions. Stonborough Villa has a strong autonomous inner logical system relating to each room's symmetry. It can be concluded that the logical hierarchy structure, which connects every room, is centered on the Hall.

The results reveal that even though the doors appear to have the same shape and dimensions there are differences even though in some cases minute. This is particularly clear in the Double Doors, which connect the rooms in which the front and back doors have different dimensions.

Lastly, the Double Doors in Stonborough Villa are composed of very different spacing whether it is the front or back door, when the front door's left or right wing become fully open it features a

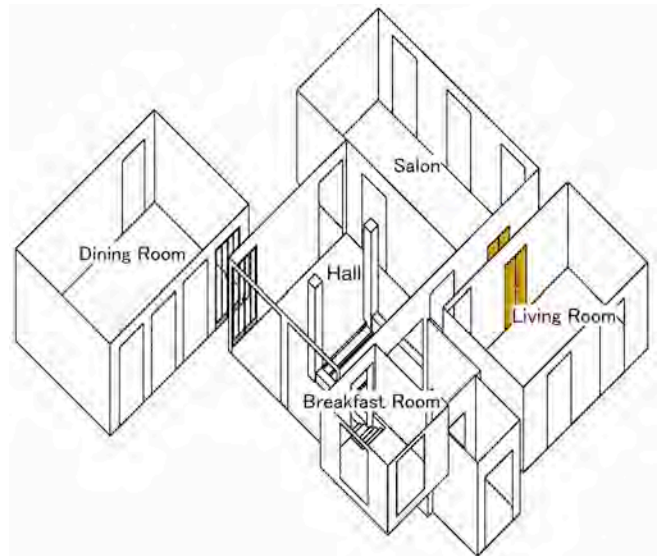


Fig. 10) Display of the positions of the different double door dimensions front and back pairs. Dimensions are different whether the door is facing the Hall or the Dining Room. The metal door between the Salon and the Living Room is the same. Double doors depend on internal space configuration logic regarding the inside of the bilateral symmetry of each room, and in the as well as the role of connecting room to room.

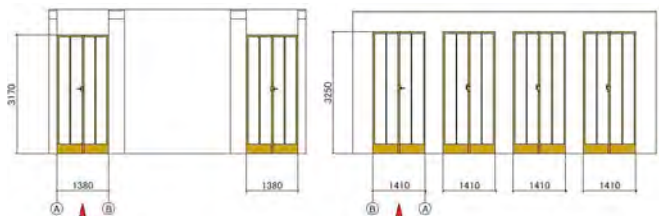


Fig. 11) Left, Hall. Right, Dining Room. A and B explain the where the door is facing



Fig. 12) Double Doors between the Hall and Dining Room. The measurements for both doors are different. The wall is the central point of the proportion.

three-dimensional feature to the design that characterizes the connection from room to room. This is where the bilateral symmetry of the walls, discussed in this thesis, shows the close relationship between rooms for which the doors are a key component.

第1章 序論

1-1 研究の目的と背景

1-2 論文の構成

1-3 既往研究について

1-4 用語の定義

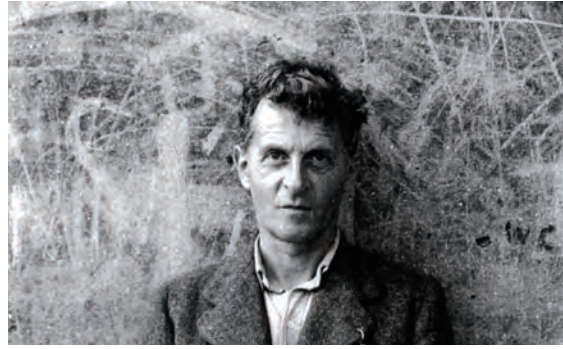


図1) ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein, 1889-1951)。哲学者として『論理哲学論考 (Logisch-Philosophische Abhandlung, 1921)』を出版した後、建築家としてアドルフ・ロースの弟子パウル・エンゲルマンと共同でストンボロー邸の設計をおこなった。



図2) ストンボロー邸 (Stonborough Villa, 1926-1928) 正面ファサード。内外ともに装飾は排除されている。外観は、縦長の開口部が均質に計画され、上部にいく程開口部の背は低くなっている。1階の床レヴェルを高く計画することにより、床には温床暖房、ペリメータゾーンには床下からの温風の吹き出し暖房装置、壁面内にはロールカーテンやブラインド、地下からカウンターウェイトを使用してせり上がる鉄製シャッター等の環境制御装置が組み込まれている。姉マルガレーテ・ストンボローのために、ヴィトゲンシュタインがその生涯で唯一設計をおこなった建築である。(撮影: 小山明 Akira Koyama)

第1章 | 序論

1-1 | 研究の背景と目的

ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein, 1889-1951) は 20 世紀の哲学を大きく変えた哲学者の一人として哲学の領域においては認知されているが、彼は建築家として姉のマルガレーテの為にウィーンにストーンボロー邸の設計を行なっている (図 1、2)。

ヴィトゲンシュタインの哲学における活動においては、前期の『論理哲学論考』と後期の『哲学探究』との間には大きな思考の転換があったことが哲学の領域においては周知の事実となっている。このストーンボロー邸の設計は、そのちょうどふたつの著作の中間の時期におこなわれている。ヴィトゲンシュタインの生涯のなかで『論理哲学論考』が唯一の生存中に刊行することのできた書物であり、その後刊行された『哲学探究』は、遺稿管理人の G.E.M. アンスコム、R. リース、フォン・ライトによって、ヴィトゲンシュタインの死亡後に整理され刊行された書物である。これらの著書は全く異なる研究の段階に書かれたものであり、また全く異なる内容と記述形式を有している。ヴィトゲンシュタインの哲学を象徴する二つの書物が思考された間の時期に、彼は建築家として「ストーンボロー邸」の設計をおこなっていることになる。

ストーンボロー邸は、ヴィトゲンシュタインの姉マルガレーテ・ストーンボロー (Margaret Stonborough, 1882-1958) が、建築家アドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933) の弟子であり、またヴィトゲンシュタインの友人でもあった建築家パウル・エンゲルマン (Paul Engelmann, 1891-1965) にその住宅の設計を依頼した。当時、小学校の教師をしていたヴィトゲンシュタインにエンゲルマンが 1925 年 11 月 27 日に送った手紙^[註1]で、マルガレーテからウィーンに建設する住宅の設計を依頼されたことの報告をしており、またヴィトゲンシュタインの手紙^[註2]の返

註 1、2) Paul Engelmann, Letters from Ludwig Wittgenstein, Horizon Pr, 1968, p.78



図3) 建築申請がおこなわれた際に提出された書類。右下にヴィトゲンシュタインとエンゲルマンのサインが記載されている。なお他は、建設施工会社カール・コーン (CARL KORN)、法律事務所サインも見られる。



図4) ヴィトゲンシュタイン (上) とエンゲルマン (下) の手書きのサイン。その上には「PAUL ENGELMANN & LUDWIG WITTGENSTEIN Architectes Wien, M. Parkgasse 18.」と住所の押印が見られる。



図5) ヴィトゲンシュタインが神経質なまでにこだわりをみせたドアの鍵穴。ドアハンドルおよび鍵穴の形状は、ドアの表と裏で異なっている。

信には、その住宅の設計に彼は非常に関心を持っていることが綴られている。その後ヴィトゲンシュタインは、姉マルガレーテとエンゲルマンから共同で設計をおこなうことの提案を受け、この建築の設計活動に参加することになり、最終的にはヴィトゲンシュタインとエンゲルマンの両者の名前が、建設準備の際に提出された公式な建築申請図面に記載されることとなった（図3、4）。

当時の建築では考えられない程までに装飾を徹底的に排除した内部空間、部屋と部屋との間の非常に明確な空間構成、ドアの機械工学的な仕組みや暖房ラジエーターなどの工作精度の高さなどにはヴィトゲンシュタインの強い関与があったと考えられる。施工現場では極めて高精度の機械工作を建築の次元に対してもミリ単位の精度で要求されたために建設工事は難航し、完成に至るまでに三年の時間が費やされている。

この建築の主階には「ホール」を中心として「朝食室」「居間」「サロン」「食堂」の主要な五つの部屋が配置されている。内部は、それぞれの部屋における各部屋としての機能的な意味が取り除かれ、全くの無装飾な空間の接続によって主階全体が構成されている。

そうした主階の内部空間において最も特徴的なものは、非常に背の高いドアの存在である。主階に設置されているドアは全て両開きのドアであり、それらは一重および二重ドアの二種類のドアから構成されている。この二重ドアは主階にのみ配置されている。またドアは金属で製作されており、一般的な住宅で用いられるドアの重量とは比較することができない程に重く、ドアに取り付けられた把手は人の肩ほどの高さに設計されており、これらのドアには、通常のドアがもつ機能や形状とは大きく異なる設計がおこなわれていることがわかる（図5）。

錠前屋がヴィトゲンシュタインにドアの鍵穴の位置について尋ねたときに「ちょっと、技師さん、たった1ミリがあなたにとって重要なんですかと問うと、錠前屋が言い終わらぬうちに大きな声で<ヤア（そのとおり！）>という

- 1* Die Welt ist alles, was der Fall ist.
- 1.1 Die Welt ist die Gesamtheit der Tatsachen, nicht der Dinge.
- 1.11 Die Welt ist durch die Tatsachen bestimmt und dadurch, dass es alle Tatsachen sind.
- 1.12 Denn, die Gesamtheit der Tatsachen bestimmt, was der Fall ist und auch, was alles nicht der Fall ist.
- 1.13 Die Tatsachen im logischen Raum sind die Welt.
- 1.2 Die Welt zerfällt in Tatsachen.
- 1.21 Eines kann der Fall sein oder nicht der Fall sein und alles übrige gleich bleiben.
- 2 Was der Fall ist, die Tatsache, ist das Bestehen von Sachverhalten.
- 2.01 Der Sachverhalt ist eine Verbindung von Gegenständen. (Sachen, Dingen.)
- 2.011 Es ist dem Ding wesentlich, der Bestandteil eines Sachverhaltes sein zu können.
- 2.012 In der Logik ist nichts zufällig: Wenn das Ding im Sachverhalt vorkommen kann, so muss die Möglichkeit des Sachverhaltes im Ding bereits präjudiziert sein.
- 2.0121 Es erschiene gleichsam als Zufall, wenn dem Ding, das allein für sich bestehen könnte, nachträglich eine Sachlage passen würde.
Wenn die Dinge in Sachverhalten vorkommen können, so muss dies schon in ihnen liegen.
(Etwas Logisches kann nicht nur-möglich sein. Die Logik handelt von jeder Möglichkeit und alle Möglichkeiten sind ihre Tatsachen.)

図6) ヴァイトゲンシュタインの著書『論理哲学論考 (Logisch-Philosophische Abhandlung)、1921』の命題の記述方式。短い命題の集合で構成され、その命題には整数値および小数値かななる番号が与えられ、それらの関係性、ヒエラルキーが厳密に規定されている。



図7) 食堂に4つ並ぶ二重ドアを全開にした状態。その内右の3つの二重ドアは、全て内側に開きテラスに接続する。左の二重ドアは、前後に開き、ホールに接続する。

ので錠前屋はもう退くほかありませんでした」と姉のヘルミーネは記述している^[註3]。

ヴィトゲンシュタインにとってここでは設計した全てのものが重要であり、そのなかでも特に「ドア」について強い関心があったことは明らかである。1928年11月10日にドアを製作した鉄鋼会社へ送った手紙には「あなたたちの精密な仕事がなければ、この建築を完成することは困難であった」^[註4]と感謝の文を綴っている。

ストンボロー邸は、当時の建築家による計画の考え方は大きく異なる方法により秩序づけられた内部空間の関係性を持っており、著書『論理哲学論考』における命題の厳密な記述方式との類似性も指摘^[註5]されている(図6)。その意味においては、この建築の空間構成の解釈は、哲学者としてのヴィトゲンシュタインの活動や著作との関連を読み解く上でも必要な作業のひとつであると考えられる。

このようなストンボロー邸の非常に緻密に考えられ、かつ高い精度で工作されたディテールとその空間構成をたどり、ヴィトゲンシュタインの設計意図を読み解くためには、細部にわたる正確な寸法の把握と、空間を関係づける寸法体系の把握が前提となる。しかし、現在残されている寸法関係の情報、すなわち1920年代の建設のための申請図面、および1976年に実施された実測調査記録図面などの中には、こうした寸法体系を把握するために必要な情報は十分ではない。それらの情報は互いに不一致であり、また欠落しており、特に本論で問題とする「二重ドア」(図7)の寸法に関してはより詳細なドア両面の寸法の把握が必要であった。

本研究ではブルガリア文化研究所(ストンボロー邸の現在の所有者)の協力のもとに、ストンボロー邸主階に配置されている「ホール」「朝食室」「居間」「サロン」「食堂」「夫人寝室」の5つの部屋に「玄関」「前室」の2部屋を加えた計8部屋の内部空間と、それらの部屋に配置された全てのドアの実測調査をおこなうことを研究の基盤としている。またそれらのドアの種類に関して、寸法および形状を

註3) Rush Rhees, *Recollections of Wittgenstein*, Oxford Paperback Reference, 1984, p.6

註4) Bernhard Leitner, *Das Wittgenstein Haus*, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.84

註5) 多木浩二、「ヴィトゲンシュタインの家について」、『ヴィトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996、pp.176-179



図8) ストンボロー邸竣工直後の南東からみた写真。この建築は、周辺の街路から高い位置に、建設されている。手前の建物は、現在は取り壊されて見ることができない。また建築の周囲は植栽で覆われている。



図9) ストンボロー邸玄関。改修前の外壁はクリーム色の塗料で覆われていたが、現在は、白色で塗り直されている。また開口部のドアも同様に当時の色とは異なっている。玄関のドアの上部に取り付けられている照明も現在のものとは異なる。

もとに分類をおこない、ホールを中心とする部屋に配置されたドアの寸法体系から各部屋の内部空間の主要な構成要素としてのドアの役割、そしてそれらの空間を接続する装置としてのドアの役割に注目し、ストンボロー邸の空間構成を考察する試みをおこなっている（図8、9）。

1-2 | 論文の構成

本論文は以下の7章から構成されている。

第1章では序論として、この研究の背景と目的、研究の視点、研究の方法について述べている。またストンボロー邸に関する研究や論評をはじめとする既往研究の成果について触れると共に、これらの諸研究に対する本論文の位置づけを示している。また、本論文を記述する上で重要な鍵概念となるいくつかの用語についての定義と表記方法の整理をおこなっている。

第2章では、哲学者ヴィトゲンシュタインと建築家エンゲルマンがストンボロー邸の設計に関わるまでの経緯について記している。ヴィトゲンシュタインは生活様式の中における家具の装飾について自分自身の考え方を手紙に記録している。またエンゲルマンは、建築家アドルフ・ロースの弟子であり、ヴィトゲンシュタインの最も親しい友人であるが、そうした彼の建築家としての仕事に焦点をあて、エンゲルマンとヴィトゲンシュタインの建築に対する考え方の差異について記している。

またストンボロー邸の生活をスケッチやテキストで記録している姉ヘルミーネの回想録を参照し、この建築の内部空間の特徴と施工現場での出来事について記している。また実測調査を行うに先立ち、既往研究のドアに関する研究の成果に基づく知見を改めて確認し整理している。これらの研究は、この建築の内部空間におけるドアの持つ意味が重要であることを示唆している。そうした内部・ドアに関



図 10) ホール内部。この部屋へは玄関、前室を通り抜けて、階段を上がって入る。奥がガラス壁内に設置されたテラスへ接続する二重ドア。左が朝食室へ続くドア。

して、既存の図面である「建築申請図面」「施工図面」「1970年代の実測図面」から読み取ることが可能な範囲を示すと共に、図面上に記載された「寸法」について整理をおこなっている。そうしたなかで、残された図面と実際に建築された内部空間との差異について論じている。

第3章では、ストンボロー邸がドアを主題とした建築であり、主階の空間構成の中にはそれらの寸法体系が存在するであろう、という仮説を置く研究方法を述べている。

この建築では、ヴィトゲンシュタインによって、建築を構成する装飾的なものは意図的に排除されており、なにもない白い部屋の中には壁と壁の上に配置されたドア以外のものが存在しない。その意味で、各部屋の壁面において「ドア」の左右対称配置が主要な形態言語のエレメントとなっており、空間構成における「ドア」の担う役割が非常に大きいものであると考えられる。ストンボロー邸を建築学的な領域で捉えようとする場合、ドアを手がかりに、それらの種類、配置方法、ディテールなどを比較することで、部屋と部屋との関係および全体の空間構成を把握する方法が有効であることを論じている（図10）。

第4章では、実際に2回の現地実測調査より、主階に計画されている全ての部屋の内部寸法と壁面構成の実測と主階に存在する全てのドアの実測をおこなうことで、各部屋の「壁面構成」とドアの「寸法体系」の把握を試み、データを表として整理・図面化をおこない、5章および6章における考察をおこなうための基礎的な情報を整理している。

また、実測調査結果とこれまでに確認することのできる当時の確認申請図面および1970年代に行なわれた実測調査図面との比較をおこない、部屋の正確な寸法の把握、ドア（開口部）の正確な寸法の把握を行ない、それらを一覧することが可能な図表、建具表の作成をおこなった。これにもとづき、対象とするホールを中心とする5部屋の面積および容積の比較をおこなった。

第5章では、これまでの既往研究において、寸法およ



図 11) ホールからテラスへ接続する二重ドア。
ドアハンドルの位置は、ドアを開けようとする女性
の顔付近の高さに組み付けられている。また二
重ドアある一枚のドアを開くだけで、人間が通り
抜けることが可能な多きであることがわかる。

び内部の状況を示す写真情報等が最も欠落していた朝食室の全容を実測調査より明らかにしている。これにもとづき、朝食室の内部壁面の一部分の壁の厚みを厚くすることによる「ふかし壁」の意味を解説したトゥルノフスキーの研究の展開として新たに記述をおこなっている。また、ストーンボロー夫人の居間にも存在していた「ふかし壁」の意味についても論じている。

第6章では、主階に配置された全てのドアを正確に実測することで得られた情報をもとに、ドアの寸法体系の把握を試みている。実測調査の結果を視覚的に整理する作業を通してドアの種類、ドアの開閉パターン等について記述した(図11)。これらのドアの寸法から比較をおこなうための全体配置図を作成し、ドアの役割、特に二重ドアの役割、それぞれの部屋の内的な秩序と空間構成の秩序について論じている。

第7章では、論文全体のまとめを行い、ドアを主題とした建築という仮説の設定から得られた考察を述べている。

1-3 | 既往研究について

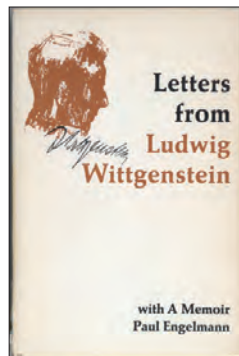
1928年秋にストーンボロー邸が完成した後、ヴィトゲンシュタインは建築の専門家達に対して、また建築雑誌などに建築を公表することによってそのことが話題になり議論されることを非常に嫌っていた^[註6]。そのためヴィトゲンシュタインの家族と友人以外には、ヴィトゲンシュタインが建築家として仕事をおこなったということは全く知られていなかった。

初めてこの建築が社会に認知されるのは、1951年にヴィトゲンシュタインの友人であったルードヴィヒ・ハンセル(Ludwig Hancel)によって書かれたヴィトゲンシュタインの死亡記事によってである。記事は以下のように記述されている。

註 6) Bernhard Leitner, Bernhard Leitner, Das Wittgenstein Haus, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.32



☒ 12) Karl Schwazer, Wiener Bauten -1900 bis heute Taschenbuch-, Österreichisches Bauzentrum, 1964



☒ 13) Paul Engelmann, Letters from Ludwig Wittgenstein, Horizon Pr, 1968

「ヴィトゲンシュタインは小学校とケンブリッジの教員の仕事の間に、ウィーンのクンデマンガッセに姉のために住宅の設計し、彼は建築家エンゲルマンの仕事を徐々に奪いました。その家には「精神美 (great spiritual beauty)」「厳密 (austere)」「高貴 (noble)」「無装飾 (without any ornament)」が見ることができます」^{〔註7〕}。

1964年に刊行された、ウィーンの1900年から1965年の間に建設された現代建築を紹介した『Wiener Bauten-1900 bis heute』(図12)において、ストンボロー邸の外観の写真と紹介がされ、その所在地がウィーンの地図上に示されている。そこではしかし建築の名称は、ストンボロー邸ではなく「Wittgenstein」と表記されている。

また翌年の1965年には、イタリアの雑誌『Aut aut』において写真と建物の解説が掲載されている^{〔註8〕}。

1967年に共同設計者であるエンゲルマンが出版したヴィトゲンシュタインとの往復書簡集『Letters from Ludwig Wittgenstein with a Memoir』(図13)には、エンゲルマンとヴィトゲンシュタインの非常に多くの手紙の遣り取りがまとめられているが、ストンボロー邸に関する記述は全く存在していない。

1969年にはウィーンの建築ジャーナル『Bau』において、ストンボロー邸の平面プランが掲載され、その記事が、2年後の1971年になって日本国内の建築雑誌『エー・アンド・ユー、9月号』^{〔註9〕}に翻訳され、これにより国内メディアにおいては初めてストンボロー邸が知られることとなった。

これら上記の資料によって非常に断片的であるが、ストンボロー邸の存在が長い年月をかけて認知されてきていることがわかる。

① バーナード・レイトナー (Bernhard Leitner)

ストンボロー邸に関する本格的な研究は1970年代に始まっている。1958年にマルガレーテが亡くなり、家は彼女の息子であるトーマス・ストンボローが所有者となった

註7) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.12

註8) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.14

註9) バーナード・レイトナー、「哲学者ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインの設計した住宅」『a+u Architecture and Urbanism 建築と都市』、エー・アンド・ユー、1971年



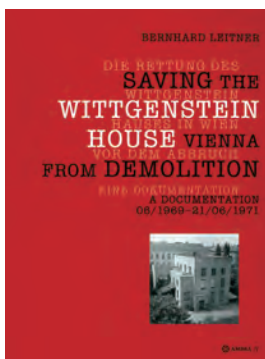
14) Bernhard Leitner, Die Rettung des Wittgenstein Hauses in Wien vor dem Abbruch Saving the Wittgenstein House Vienna from Demolition, Birkhäuser Verlag GmbH, 2013, p.31



15) Bernhard Leitner, The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, New York University, 1976



16) Bernhard Leitner, Das Wittgenstein Haus, Hatje Cantz Verlag, 2000



17) Bernhard Leitner, Die Rettung Des Wittgenstein Hauses in Wien Vor Dem Abbruch, Ambra Verlag MMag, 2014

が、1971年にストンボロー邸を不動産業者に売却したため、建築も取り壊されることが契機となり、建築の保存運動と連動したストンボロー邸の研究がこのときから本格的に開始された^{〔註10〕}。

研究者バーナード・レイトナーは1970年に開催された「Art Forum」（図14）において、ストンボロー邸が重要な建築物であることを説明している。また、ストンボロー邸に関する初めての写真集『The Architecture of Wittgenstein』（図15）を1973年に出版したことで、これまでは断片的にしか見ることができなかった建物内部の全容を多くの写真を使用して明らかにし、この建築の驚くほど無装飾な内部空間や、その特徴的なドアの形状とスケールが知られることとなった。この書籍は後述するように建築家磯崎新によって日本語に翻訳されている。

またこのレイトナーを中心とした建築保存活動により、ストンボロー邸はブルガリア文化研究所によって購入されることになり、現在にいたるまで存続することとなった。しかし1976年から1977年にかけてこの建築の外部環境と内部空間はこの研究所によってある部分に関しては変更されてしまったため、レイトナーによって出版された記録は、建設当時のストンボロー邸の姿を知ることのできる極めて少ない資料のなかでも最も重要なものとなった。

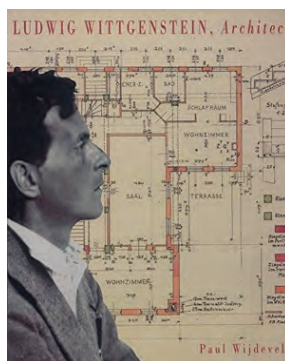
レイトナーは2000年には、さらに細部の写真と詳細な解説を加えた『Das Wittgenstein Haus』（図16）。また2014年には、ストンボロー邸の1969年から1971年におこなわれた保存運動の活動の資料を整理した『Die Rettung Des Wittgenstein Hauses in Wien Vor Dem Abbruch』（図17）を出版している。レイトナーは、個人的な解釈をできる限り加えずに対象となるものそのものを正確に伝えようとする写真図版構成とテキスト構成をおこなっており、これらの書籍の資料性は非常に高く評価されている。

レイトナーはウィーン在住の電子音楽を中心とするメディアアーティストであり、ウィーンデザイン大学（Uni-

註 10) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.15



☒ 18) Gunter Gebauer, Wien • Kundmanngasse 19, Fink, 1982



☒ 19) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993

versität für angewandte Kunst Wien) において教授を務めていた。

② グンター・ゲバウアー (Gunter Gebauer)

上記のストンボロー邸内部改造後の1982年には、保存のための実測調査をまとめた報告書『Wien・Kundmannngasse 19』(図18)がグンター・ゲバウアー (Gunter Gebauer) 等のグループ^[註11]によって出版されている。

この書籍は施工会社の図面類と新たな実測図面が非常に多く掲載された記録図面集であり、ここでは、実測調査図面と建設時の図面を左右に見開きの形で比較可能にすることで、改造された部分を明確に把握することが可能である。また、4つのドアの並ぶ食堂の立面図、ラジエーターの設計図面、二重ドアの回転機構図などが加えられ、図面集としての資料性が非常に高い。

註11) ゲバウアーの実測調査をおこなったグループは下記で記した人物によるものである。Gunter Gebauer, Alexander Grünenwald, Rüdiger Ohme, Lothar Rentschler, Thomas Sperling, Ottokar Uhl

③ パウル・ヴェイデフェルト (Paul Wijdeveld)

ストンボロー邸に関する研究は、その建築が完成して半世紀以上経過しているにもかかわらずその数が極めて少ないのは、1980年代頃までは、関係者以外はこの建築の内部に全く入ることができなかったことが大きな理由として挙げられる。

そうしたなかで、1993年にオランダのライデン大学パウル・ヴェイデフェルト (Paul Wijdeveld) によって刊行された『Ludwig Wittgenstein Architekt』(図19)には、これまでの断片的な資料を時間軸上に正確に再構築し、ストンボロー邸をはじめ建築史的に位置づけようとする試みが見られる。

また、ヴィトゲンシュタインと共同設計者であるエンゲルマン (アドルフ・ロースの弟子) との関係について、ヴィトゲンシュタインが設計に参加する以前からのエンゲルマンのスケッチを10段階に分類することで、エンゲルマンの設計プロセスに関する分析、また建築が完成に至るまで

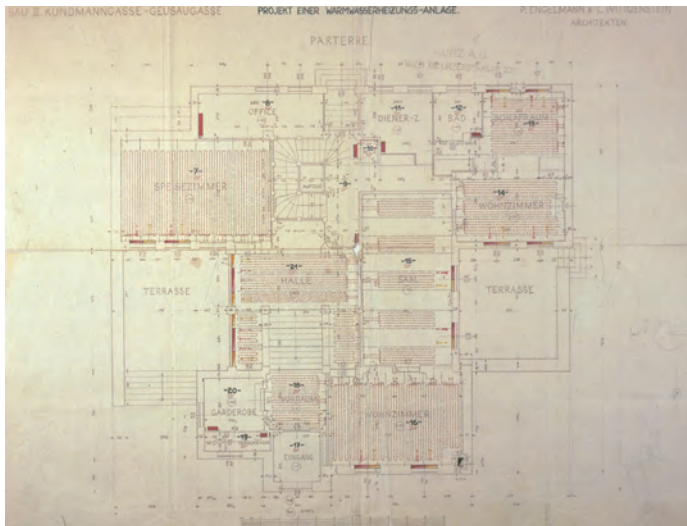


図 20) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein
Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.139



図 21) Jan Turnovský, Die Poetik Eines
Mauervorsprungs, Birkhäuser Verlag, 1987

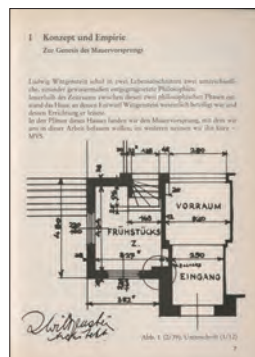


図 22) トウルノフスキーは朝食室の化粧壁を問
題とする (丸印の部分)。開口部の中心線が部屋
の壁面の中心線と一致するように化粧壁が図面上
に描かれている。

の背景と人間関係などについて詳細に記述している。

また、地下室の暖房メカニズムやその他の設備関係の図版（図 20）の収集をおこない、ストンボロー邸の表面上は全く見えない数多くの機械工学的な部分、技術的な側面を解説している。これらの図版はヴィトゲンシュタインのエンジニアとしての思考方法をたどる上できわめて資料性が高い。

④ ヤン・トゥルノフスキー（Jan Turnovský）

ストンボロー邸の内部のディテールに関するもうひとつの建築学的な分析は、1987年にドイツのヤン・トゥルノフスキー（Jan Turnovský）による『Die Poetik Eines Mauervorsprungs』（図 21）においておこなわれている。そこでは、朝食室のある壁面にみられる化粧壁（Mauervorsprungs）^{〔註 12〕}のディテールについて、古典建築との比較をおこないながら、この建築にみられる壁面構成の方法論、シンメトリーを構成するための壁の意味についての考察をおこなっている（図 22）。

ストンボロー邸の各部屋にある左右対称性は壁と壁との間に配置されたドアによって構成されている。それゆえに、「壁」は非常に重要な要素であるということが出来る。壁面は左右の壁面によってその幅が規定され、その幅の中にドアが配置されるからである。トゥルノフスキーは、朝食室の図面の中にその左右の幅を決定するための化粧壁がつけられていることを図面から発見し、ヴィトゲンシュタインにとっての部屋の概念と壁の概念についての考察をおこなっている。この研究は、ストンボロー邸のただひとつの部屋の、あるディテールのみを論じたものであるが、ヴィトゲンシュタインによる空間構成を考える上で前提とすべき「壁面」の存在を初めて明らかにしたものであるということが出来る。

近年の海外の研究では、これまでの資料を基盤にして、ウィーンの研究アウグスト・ザーニッツ（August Sarnitz）が 2011 年に『DIE ARCHIECTURE

註 12) 日本語では「化粧壁」と翻訳をしている。ドイツ語は「Mauervorsprungs」、英語は「Wall Projection」と訳されている。



図 23) August Sarnitz, Die Architektur Wittgensteins, Böhlau, 2011



図 24) Daniele Pisani, L'architettura è un gesto, Quodlibet, 2011



図 25) バーナード・レイトナー、『ART VIVANT 16』、磯崎新 (Arata Isozaki) 訳、河出書房、1985。レイトナーが出版した『The Architecture of Ludwig Wittgenstein』が全訳されて掲載されている。



図 26) 磯崎新が問題とするサロン入口のドア。鉄製のフラッシュ構造で作られ、ディテールを見せないフラットな仕上がりとなっている。

WITTGENSTEIN』(図23)^[註13]、イタリアの研究者ダニエレ・ピザーニ(Daniele Pisani)も同年に『L'architettura è un gesto Ludwig Wittgenstein architetto』(図24)^[註14]を出版している。そのなかでストンボロー邸の主階図面を様々な手法での図式化による分析がおこなわれている。

日本国内におけるストンボロー邸に関する建築学的研究は未だに非常に少なく、次にあげるいくつかの研究および論評において確認することができるのみである。

⑤ 磯崎新 (Arata Isozaki)

磯崎新は1975年3月から12月の『現代思想』における連載記事「建築家ヴィトゲンシュタイン」^[註15]と、1976年『エピステーメー』の「ヴィトゲンシュタインの現代」シンポジウムの記録^[註16]、1979年『建築の地層』^[註17]、1984年『建築の修辭』^[註18]において、ストンボロー邸に関する記述をおこなっている。また1985年の『アール・ヴィヴァン』第16号「ヴィトゲンシュタインの建築」(図25)特集において、レイトナーの『The Architecture of Wittgenstein』の全訳をおこなっている。図版は大きさの変更はあるが、全て省略されず掲載され、これが国内では最初の詳細なストンボロー邸に関する視覚的な情報となった。

磯崎新はそうした一連の論評のなかで『論理哲学論考』にみられた「写像の理論」をこの建築においてもヴィトゲンシュタインが同様に展開したと推測している。設計図面から施工過程を経て完成した建築の間のプロセスにおいては、「建築物が設計図の正確な写像であるためには全てが完璧な精度で制作されねばならないこと」^[註19]またヴィトゲンシュタインにとっては「正確な写像の実現だけが関心事だった」^[註20]ことを指摘している(図26)。

⑥ 増成隆士 (Takashi Masunari)

増成隆士は1976年に刊行された『美学』「ヴィトゲンシュタインの建築作品—その特徴と存在意義について」^[註21]に

註13) アウグスト・サーニッツは、ウィーン建築家アドルフ・ロースやオットー・ワグナーについて下記の書籍を出版している。

・ Adolf Loos, Taschen Verlag, 2010

・ Otto Wagner 1841-1918, Taschen Verlag, 2013

註14) Daniele Pisani, L'architettura è un gesto, Quodlibet, 2011

註15) 磯崎新、「建築ヴィトゲンシュタイン」、『現代思想』3・5・7・10・12月号、青土社、1975

註16) 磯崎新、「ヴィトゲンシュタインの現代」『エピステーメー』9巻2号、朝日出版社、1976

註17) 磯崎新、「論理」の表現として—ヴィトゲンシュタインの「ストンボロー邸」、『建築の地層』、彰国社、1979、pp.319-324

註18) 磯崎新、『建築の修辭』、美術出版、1984年、p.249

註19) 磯崎新、「建築ヴィトゲンシュタイン」、『現代思想』7月号、青土社、1975、p.13

註20) 磯崎新、「論理」の表現として—ヴィトゲンシュタインの「ストンボロー邸」、『建築の地層』、彰国社、1979、p.320

註21) 増成隆士、「ヴィトゲンシュタインの建築作品—その特徴と存在意義について」『美学』、美術出版、1976



図 27) ミハエル広場の建築 (Haus aud dem Michaelerplatz)。またの名称を ロースハウ (Looshaus)。この建築のエントランス部分には、古典主義の建築から引用したとされる、大理石の列柱が配置されている。その一方、上層部のファサードは装飾が取り除かれ、ストンボロー邸の外観との類似性が指摘されている。



図 28) 小川明 (Akira Koyama)、「ワイトゲンシュタインの建築問題」『ワイトゲンシュタイン』、河出書房新社、2011

において、アドルフ・ロースとヴィトゲンシュタインの二人の建築には、論理の差異が内在していることを指摘し、彼の関心が「それぞれの必要最小限度の簡潔な形態をもつ一定の数量の部品が厳密に組み合わせられて一つの全体をなしている機械というもの」に向けられて、建築と『論理哲学論考』との関係において「この建築作品は、『論考』と同様に、極めて興味深い、極めて徹底したひとつの実験による結晶」と記述している^{〔註22〕}。また、1995年に「ウィトゲンシュタインの美学」^{〔註23〕}のなかで、美学を鍵概念として『論理哲学論考』とストンボロー邸の関係についての考察を記している。

註22) 増成隆士、「ヴィトゲンシュタインの建築作品—その特徴と存在意義について」『美学』、美術出版社、1976、p.54

註23) 増成隆士、「ウィトゲンシュタイン」『ウィトゲンシュタイン読本』、法政大学出版局、1995、pp.320-332

⑦ 八束はじめ (Hajime Yatsuka)

八束はじめは1987年に刊行された『現代思想』「世紀末の二つのレトリック、ヴィトゲンシュタイン家の住宅をめぐって」^{〔註24〕}、『ウィトゲンシュタインの知88』「建築」^{〔註25〕}において、ストンボロー邸を当時の世紀末ウィーンの歴史・文化・芸術から捉える試みをおこなっている。その中で、ウィーンの芸術および文化を批判した建築家アドルフ・ロースの建築とストンボロー邸の差異について「無装飾」の鍵概念について次のように論じている。「ロースにおいてはそれは殺害された記号であり、ヴィトゲンシュタインにおいては論理の結末と呼んでも残部と呼んでもよいだろう」^{〔註26〕}。そうした、ストンボロー邸とロースの建築を対比させることにより、近代建築という大きな枠組みの中において、ストンボロー邸を捉える試みがなおこなわれている (図27)。

註24) 八束はじめ、「世紀末の二つのレトリック」『現代思想』、青土社、1987、pp.206-227

註25) 八束はじめ、「建築」『ウィトゲンシュタインの知88』、新書館、1999、pp.32-35

註26) 八束はじめ、「世紀末の二つのレトリック」『現代思想』、青土社、1987、p.221

⑦ 小山明 (Akira Koyama)

小山明は1985年に刊行された『都市住宅』「ストンボロー邸 ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン」^{〔註27〕}、2011年の『ウィトゲンシュタイン』「ヴィトゲンシュタインの建築問題」^{〔註28〕} (図28)、日本建築学会の論文^{〔註29〕}等において、ストンボロー邸の内部空間にみられる数学的な特徴に注目

註27) 小山明、「ストンボロー邸 ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン」、『都市住宅2月号』、鹿島出版会、1985

註28) 小山明、「ヴィトゲンシュタインの建築問題」『ウィトゲンシュタイン』、河出書房新社、2011、pp.132-140

註29) 小山明、「ストンボロー邸の二種類の平面図について」、学術講演梗概集2014、pp.853-854



図 29) ストンボロー邸の中央ホールを中心とする4つの部屋の関係を示す例。左より、部屋の開口部数の最大値の左回りの数列(1・2・3・4)、中央ホールドアハンドルの取付方法(例:正面左側のドアは左手用ハンドル、右側のドアには右手用ハンドルが組みつけられているが、反対側玄関側のドアには正面とは逆の内向きの組み付け方法が行われている)、中央ホールの左側は透明がガラス壁面とガラスドアで構成され、右側は不透明な壁と鉄製の不透明なドアで構成されている、4つの部屋の軸線の数(左周りに2軸・1軸・2軸・1軸)の変化(小山作成、Akira Koyama)。



図 30) 多木浩二 (Koji Taki)、「ウイットゲンシュタインの家について」、『ウイットゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996

している。

そこでは「ホール」を中心とした「朝食室」「居間」「サロン」「食堂」の4つの部屋が左周りに配置され、各部屋のシンメトリーを構成する壁面開口部の数が順に「1・2・3・4」という数列を構成していること、ホールに設置されたドアの左手用と右手用のドアハンドルが恣意的に一定の論理(内向き・外向き)のもとに配置されていること、ホール壁面に存在する「透明」「不透明」の二項対比、各部屋のシンメトリーを構成する軸線の数の数列などの数学的な特徴を明らかにしている(図29)。

⑧ 多木浩二 (Koji Taki)

磯崎新の上記翻訳書の解説として記した「ウィトゲンシュタインの家について」(図30)において、多木浩二はこの建築と彼の哲学との関係について考察しており、特に『論理哲学論考』における「その内容の異様なまでの論理の厳密さと断片化、その断片の序列の仕方(つまりひとつの命題は次第に増えていく番号によって註積され細分化されていく)」^[註30]の命題の記述の方法、すなわち正確に番号によって各行ごとにその位置づけを規定された命題と命題との関係性の表現方法には、ストンボロー邸におけるヒエラルキーが厳密に表現された空間構成のあり方との強い類似性が存在していることを指摘している。

註30) 多木浩二、「ウィトゲンシュタインの家について」、『ウィトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996

⑨ 小川英明 (Hideaki Ogawa)

小川英明は1991年「ウィトゲンシュタインの建築・造形思想に関する考察」^[註31]で、足立美比古によって収録された「ウィトゲンシュタイン造形語録」^[註32]を基盤として『ウィトゲンシュタイン全集』と『反哲学的断章』を資料とし、建築および造形思想に関する論述を「ストンボロー邸に関する論述」「建築と身ぶりに関する論述」「〈言語〉哲学〈者〉と建築〈家〉との類似性に関する論述」の三主題に焦点を当てて考察をしている。

註31) 小川英明、「ウィトゲンシュタインの建築・造形思想に関する考察」、東海支部研究報告集、1991、pp.617-620

註32) 足立美比古、「ウィトゲンシュタイン造形語録」『ART VIVANT 16』、河出書房、1985

この他にいくつか、国内のストンボロー邸の建築に関す

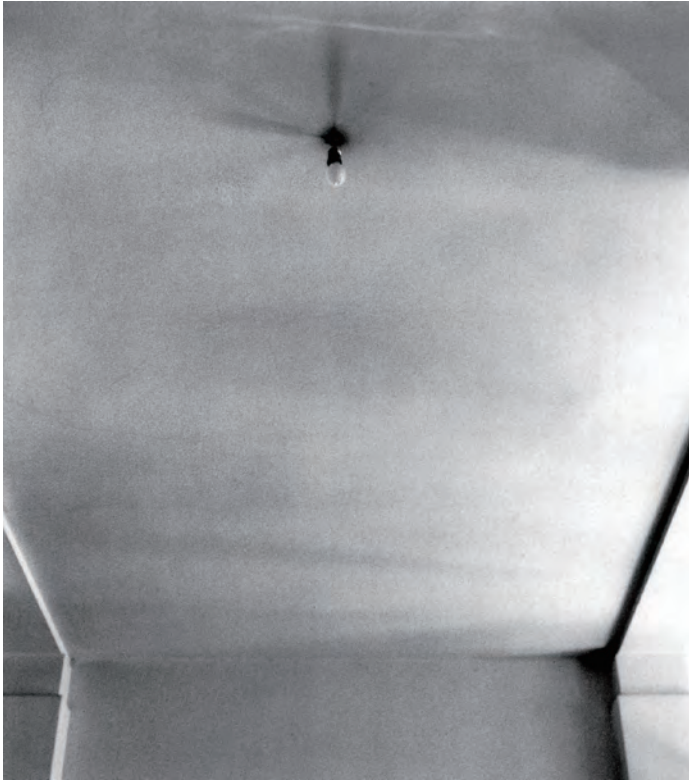


図 31) ホールの天井に取り付けられたひとつの裸電球。ストーンボロー邸の主階は、各部屋の内部を照らす照明は全て 200W の裸電球が設置されている。その数は、ホール：1、朝食室：1、居間：2、サロン：3、食堂：2、夫人居間：2 となっている。ホールは主階の中央に位置し、朝食室より大きいにも関わらず、ホールと朝食室の照明の数が同じである。しかし、ホールは最も多くの部屋と接続し、その透明なガラス製ドアから他の部屋の光を受け取ることが可能である。

る紹介や評論^{〔註33〕}も散見されるが、詳細な研究は少なく、上記の論評や論文が建築学領域におけるストンボロー邸研究の方向性を示す資料として参照すべきものであると考えられる。

哲学領域におけるヴィトゲンシュタインの伝記研究においては、ストンボロー邸は以下のように位置づけられている。

ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』を1918年に書き終えるまでを『前期哲学』とし、それ以降に哲学から離れて小学校教師、修道院の庭師と仕事を変更していくなかで、1926年の秋から三年間「ストンボロー邸」の設計と管理をおこなっている。建築完成後の1929年には、ケンブリッジに戻り『後期哲学』を開始したとされる。

1955年にヴィトゲンシュタインの遺稿管理者のゲオルク・ヘンリク・フォン・ライト (Georg Henrik von Wright) によって書かれた『ヴィトゲンシュタイン小伝』^{〔註34〕}においては、「この邸宅は、その細部までかれの手になるものであって、その建築者の特徴をいかに現している。それはどの装飾とも無縁で、寸法もつり合いも厳しい精密さによって象どられている。その美しさは、『論考』の文章に見られるのと同じ、簡潔で静的な種類の美しさである」^{〔註35〕}と紹介されている (図31)。

黒崎宏によって出版された1980年『ヴィトゲンシュタインの生涯と哲学』^{〔註36〕}と1987年『ヴィトゲンシュタイン小事典』^{〔註37〕}においてストンボロー邸に関する記述は、建築が建設された経緯についてをヴィトゲンシュタインの姉であるヘルミーネ・ヴィトゲンシュタイン (Hermine Wittgenstein) の回想による間接的な解説が大部分となっている^{〔註38〕}。

近年では、レイ・モンクによる1990年に出版されて、1994年に日本語に翻訳された『ヴィトゲンシュタイン-天才の責務1』^{〔註39〕}があり、そのなかでストンボロー邸の設計の仕事で出会った人物との人間関係が、前者と同様に

註33) 小林康夫、「治療としての建築」、『SD 93』、鹿島出版会、1993
田中純、「ヴィトゲンシュタインの扉」、『建築文化 580』、彰国社、1995
後藤武、「ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン、超越論的ディテール」『建築文化 631』、彰国社、1999

註34) ゲオルク・ヘンリク・フォン・ライト、「ヴィトゲンシュタイン小伝」、『回想のヴィトゲンシュタイン』、藤本隆志訳、法政大学出版局、1974

註35) ゲオルク・ヘンリク・フォン・ライト、「ヴィトゲンシュタイン小伝」、『回想のヴィトゲンシュタイン』、藤本隆志訳、法政大学出版局、1974、p.18

註36) 黒崎宏、『ヴィトゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、1980

註37) 黒崎宏、山本信、『ヴィトゲンシュタイン小事典』、大修館書店、1987

註38) ヘルミーネ・ヴィトゲンシュタイン、「家族の回想」、『ヴィトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996

註39) レイ・モンク、『ヴィトゲンシュタイン-天才の責務1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994

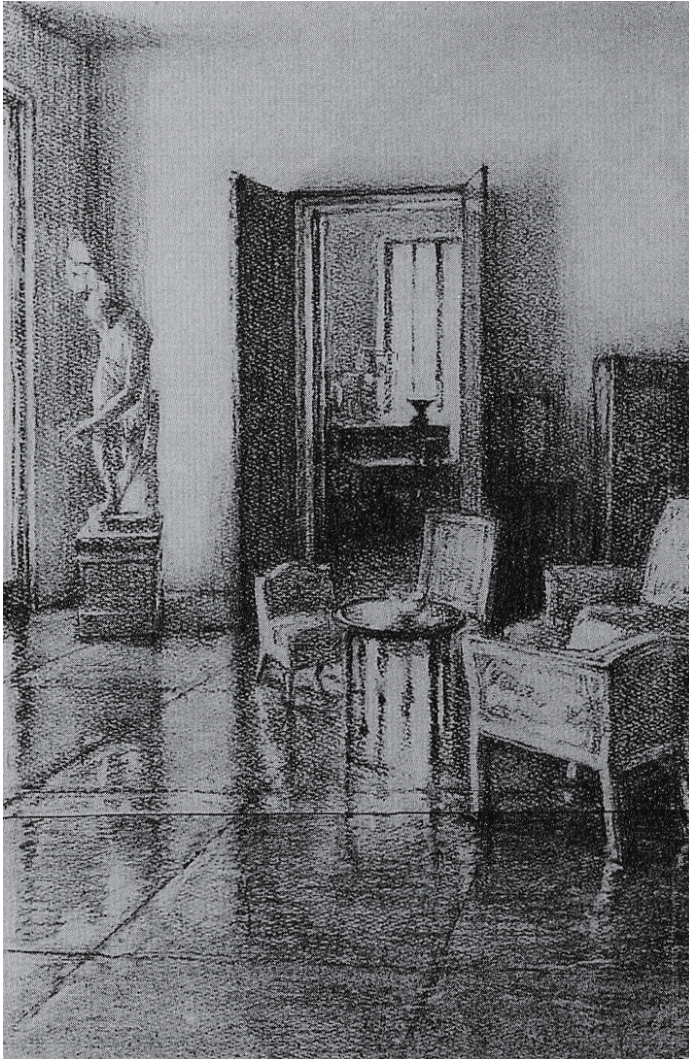


図 32) ヘルミーネ・ヴァイトゲンシュタイン (Hermine Wittgenstein) が描いたサロン内部のスケッチ。奥に見える部屋は居間で、サロンと居間との間には、鉄製ドアが描かれている。また各部屋には、マルガレーテによって蒐集された家具が配置されている。

ヘルミーネの回想によって当時の出来事として詳細に解説されている。そのなかで、ヴィトゲンシュタインが設計した背の高いドアにミリ単位での精密性を製作所に要求したことで、担当していた技師は非常に絶望したことなど、ヴィトゲンシュタインが異常なまでに精密さを建築に求め、現場においても施工を監督していたことが記述されている。

『論理哲学論考』の翻訳者としても認知されているブライアン・マクネギス (Brian McGuinness) の『ウィトゲンシュタイン評伝』^{〔註40〕} は、二巻刊行される予定であるが、現時点では第一巻のみである。なお第一巻は、1989年から1922年の『論理哲学論考』の出版に至るまでの経緯を綴っており、ストンボロー邸に関する記述は全く確認することができない。

註40) ブライアン・マクネギス、『ウィトゲンシュタイン評伝』1994年

上記以外にもいくつかの研究および論評においては、上記の記述と同様にヴィトゲンシュタインの伝記の一部としてストンボロー邸を設計したこととヘルミーネの回想より施工現場でのヴィトゲンシュタインの行動が紹介されているに過ぎない (図32)。

1-4 | 用語の定義

本論を論ずる上でキーワードとなる「ヴィトゲンシュタイン」「マルガレーテ・ストンボロー」「ストンボロー邸」の固有名詞の表記方法と、建築用語であるストンボロー邸の「室名」「ドア」「主階」「寸法体系」などの用語について予め整理をおこなう。

① 「ヴィトゲンシュタイン (Wittgenstein)」

「Wittgenstein」の表記名について、これまで確認した研究資料などでは「ウィトゲンシュタイン」と「ヴィトゲンシュタイン」の二通りの表記方法がある。これは、ヴィトゲンシュタインが英国に長く滞在したことにより、その名



図 33) 上空からストーンボロー邸を見下ろした写真。周辺はコートハウス型の建築が並んでいる。そうした住宅街の中央に、森に囲まれた公園のような場所に建築が建っている。

前が英語の発音で表記されるということのみならず、標準ドイツ語では濁音をつけた「ヴィ」と発音するが、オーストリアを含めた南ドイツでは「Wi」をドイツ語よりも軽く「ウィ」と発音するということによるものである。

本研究では、ドイツ語の標準の読み方である「ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン」に統一して表記をおこなう。

② 「マルガレーテ・ストーンボロー (Margaret Stonborough)」

「Margaret Stonborough」の表記名について、これまでの研究資料では彼女の名「マルガレーテ」と表記する資料と、ヴィトゲンシュタイン家での親しみを込めた呼び名である「グレーテル」と表記する二通りの表記方法がある。ヴィトゲンシュタイン家の長女ヘルミーネ・ヴィトゲンシュタインの回想録のなかでは、「マルガレーテ」のことを「グレーテル」と表記している。本研究での本文中では、慣用的な表記である「マルガレーテ」を採択している。一方、引用部分における文中ではそのままの表記による「グレーテル」を用いている。また「Stonborough」の日本語表記については、長音符「ー」を用いて、「ストーンボロウ」ではなく「ストーンボロー」に統一して表記している。

③ 「ストーンボロー邸 (Stonborough Villa)」

エンゲルマンとヴィトゲンシュタインが設計した建築の名称は、大きく分けて下記の三種類の名前がこれまで使用されている。第一に、ウィーンの伝統的な呼び方として、その家の敷地に入る主要街路の名前から「クントマンガッセ (Kundmangasse)」と呼ばれている。次に、ヴィトゲンシュタインが設計に関与したことから「ヴィトゲンシュタインの家 (Wittgenstein Hous)」と呼ばれている (図 33)。第三に建築主であり所有者であったマルガレー・ストーンボローの姓から「ストーンボロー邸 (Stonborough Villa)」と呼ばれている。本研究では、ヴィトゲンシュタイ



図 34) 食堂に並ぶ4つのドア。この壁面は南に面しているため、日中は太陽光が差し込む。右の三つのドアはテラスに続き、左端のドアはホールに続いている。

ンがマルガレーテのために設計をしたことから「ストーンボロー邸」の表記を使用している。

④「室名」

ヴァイトゲンシュタインとエンゲルマンの共通言語は独語であり、またストーンボロー邸の設計図面においても独語で室名が表記されている。それぞれの部屋の名称は以下のような日本語表記をおこなう。

Eingang	玄関
Vorraum	前室
Halle	ホール
Saal	サロン
Wohnzimmer	居間
Speisezimmer	食堂
Frühstückszimmer	朝食室
Terrasse	テラス

主階の最も奥の部分に位置するマルガレーテの部屋は、ひとつの部屋を仕切ることで機能的には二つの部屋として使用されていたと考えられる。その意味では主階の他の公的なレセプションに使用されるような部屋とは異なり、非常に個人的な性格を持つ部屋であるといえることができる。

マルガレーテの部屋については、それぞれについて以下の日本語表記をおこなう。

Schlafrum	夫人寝室
Wohnzimmer	夫人居間

⑤「ドア」および「窓」

ストーンボロー邸には、「ドア」そして「窓」と考えられる同一形状の「開口部」が混在している。例えば、食堂のテラス側に一列にならぶ4つの開口部がそうであるように、全く同じ形状・寸法をもった「ドア」と「窓」が同じ壁面状に存在している（図34）。この場合両者の開閉機構としての差異は、二重の両開きの「ドア」は前後に開き、「窓」は4枚の全てが部屋の内側に向かって一方向にのみ開くと



図 35) 1931 年に撮影されたマルガレーテ夫人の居間での集い。左のマルガレーテの寝台には、左からマルガリート・レスピンガー (Marguerite Respinger)、マルガレーテ・ストーンボロー (Margarethe Stonborough)。写真中央のヴァイトゲンシュタインは椅子に腰を掛けている。

いう点、また「ドア」の開閉には右手用もしくは左手用のドアハンドルが使用され、「窓」にはクレセント錠が使われている点が異なる。ペリメーターゾーンの雨に触れる位置には全て内側一方向にのみ開く形式のものが配置されている。意図的に意匠を統一されたと考えられるこれらの開口部の開閉装置としての「ドア」および「窓」に関して、本論においてはそれらを区別せずに「ドア」という用語で統一して論ずることとする。

また通常ドアは壁に空けられた開口部に枠を介して取り付けられる可動部分を指し示すものであるが、本論では特にその開口部の寸法を問題とする視点に基づき、枠を含む開口部全体を「ドア」という用語で指し示すものとする。

⑥「主階」

「Parterre」「Erdgeschoss」という一階もしくは地上階を示す用語が建築申請図面等には使用されている。ドイツ語圏における1階・2階などの表記は日本語との読み替えにおいて誤記の可能性があるため、本論では、主たる用途に使用される階層という意味で、「主階」という用語を用いる。

ウィーンのサロン文化の中心的存在であったストーンボロー夫人が来賓をもてなすことが最も重要な機能としてあったこの建築のホールやサロン・食堂がこの階にあること、また逆にこの建築の重要な特徴であると考えられる二重ドアがこの階以外には存在しないことから、建築的な用途としてこの階が主として用いられたと考えられることによるものでもある(図35)。

⑦「寸法体系」

「寸法体系」という用語は、個々のものを秩序づけて統一した全体、という意味で「体系」という語を定義する。また、それぞれの部屋にある部屋全体の寸法および開口部の寸法の秩序が主階全体の中でどのように位置づけられているかを示すために「寸法体系」という用語を用いるものとする。

註

- 1) Paul Engelmann, Letters from Ludwig Wittgenstein, Horizon Pr, 1968, p.78
- 2) ibid.
- 3) Rush Rhees, Recollections of Wittgenstein, Oxford Paperback Reference, 1984, p.6
- 4) Bernhard Leitner, Das Wittgenstein Haus, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.84
- 5) 多木浩二、「ウィトゲンシュタインの家について」、『ウィトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996、pp.176-179
- 6) Bernhard Leitner, Bernhard Leitner, Bernhard Leitner, Das Wittgenstein Haus, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.32
- 7) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.12
- 8) ibid., p.14
- 9) バーナード・レイトナー、「哲学者ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインの設計した住宅」『a+u Architecture and Urbanism 建築と都市』、エー・アンド・ユー、1971年
- 10) ibid.7, p.15
- 11) ゲバウアーの実測調査をおこなったグループは以下の構成メンバーからなる。
Gunter Gebauer, Alexander Grünenwald, Rüdiger Ohme, Lothar Rentschler, Thomas Sperling, Ottokar Uhl
- 12) 日本語では「化粧壁」と翻訳をしている。ドイツ語は「Mauervorsprungs」、英語は「Wall Projection」となっている。
- 13) アウグスト・サーニッツは、ウィーンの建築家アドルフ・ロースやオットー・ワグナーについて下記の書籍を出版している。
・ Adolf Loos, Taschen Verlag, 2010
・ Otto Wagner 1841-1918, Taschen Verlag, 2013
- 14) Daniele Pisani, L'architettura è un gesto, Quodlibet, 2011
- 15) 磯崎新、「建築ヴィトゲンシュタイン」、『現代思想 3・5・7・10・12月号』、青土社、1975
- 16) 「ウィトゲンシュタインの現代」『エピステーメ 9巻2号』、朝日出版社、1976
- 17) 磯崎新、「<論理>の表現として — ウィトゲンシュタインの<ストンボロウ邸>」、『建築の地層』、彰国社、1979、pp.319-324
- 18) 磯崎新、『建築の修辞』、美術出版、1984年、p.249
- 19) 磯崎新、「建築ヴィトゲンシュタイン」、『現代思想 7月号』、青土社、1975、p.13
- 20) 磯崎新、「<論理>の表現として — ウィトゲンシュタインの<ストンボロウ邸>」、『建築の地層』、彰国社、1979、p.320
- 21) 増成隆士、「ヴィトゲンシュタインの建築作品—その特徴と存在意義について」、『美學』、美術出版社、

1976

- 22) *ibid.*, p.54
- 23) 増成隆士、「ウィトゲンシュタイン」、『ヴィトゲンシュタイン読本』、法政大学出版局、1995、
pp.320-332
- 24) 八東はじめ、「世紀末の二つのレトリック」、『現代思想』、青土社、1987、pp. 206-227
- 25) 八東はじめ、「建築」『ウィトゲンシュタインの知 88』、新書館、1999、pp. 32-35
- 26) *ibid.*24, p. 221
- 27) 小山明、「ストーンボロー邸 ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン」、『都市住宅 2月号』、鹿島出版会、
1985
- 28) 小山明、「ヴィトゲンシュタインの建築問題」、『ウィトゲンシュタイン』、河出書房新社、
2011、pp132-140
- 29) 小山明、「ストーンボロー邸の二種類の平面図について」、『日本建築学会学術講演梗概集』2014、
pp. 853-854
- 30) 多木浩二、「ウィトゲンシュタインの家について」、『ウィトゲンシュタインの建築』、バーナード・
レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996
- 31) 小川英明、「ウィトゲンシュタインの建築・造形思想に関する考察」、日本建築学会東海支部研究報
告集、1991、pp.617-620
- 32) 足立美比古、「ウィトゲンシュタイン造形語録」、『ART VIVANT 16』、河出書房、1985
- 33) 小林康夫、「治療としての建築」、『SD 93』、鹿島出版会、1993
田中純、「ウィトゲンシュタインの扉」、『建築文化 580』、彰国社、1995
後藤武、「ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン、超越論的ディテール」、『建築文化 631』、彰国社、
1999
- 34) ゲオルク・ヘンリク・フォン・ライト、「ウィトゲンシュタイン小伝」、『回想のヴィトゲンシュタイン』、
藤本隆志訳、法政大学出版局、1974
- 35) *ibid.*24, p.18
- 36) 黒崎宏、「ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、1980
- 37) 黒崎宏・山本信、『ウィトゲンシュタイン小事典』、大修館書店、1987
- 38) ヘルミーネ・ウィトゲンシュタイン、「家族の回想」、『ウィトゲンシュタインの建築』、バーナード・
レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996
- 39) レイ・モンク、『ウィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994
- 40) ブライアン・マクネギス、『ウィトゲンシュタイン評伝』1994年

図版出典

- 1) Rush Rhees, *Recollections of Wittgenstein*, Oxford Paperback Reference, 1984
- 2) 小山明 (Akira Koyama) 撮影
- 3) Bernhard Leitner, *The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation*, New York University, 1976, p.44
- 4) *ibid.*
- 5) *ibid.*, p.116
- 6) Ludwig Wittgenstein, *Tractatus logico-philosophicus*, Suhrkamp Verlag, 2001
- 7) Bernhard Leitner, *Das Wittgenstein Haus*, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.99
- 8) *ibid.*3, p.36
- 9) Bernhard Leitner, *Die Rettung Des Wittgenstein Hauses in Wien Vor Dem Abbruch*, Ambra Verlag MMag, 2014, p.15
- 10) *ibid.*3, p.55
- 11) *ibid.*3, p.97
- 12) Karl Schwanzer, *Wiener Bauten - 1900 bis heute* Taschenbuch-, Österreichisches Bau-zentrum, 1964
- 13) Paul Engelmann, *Letters from Ludwig Wittgenstein*, Horizon Pr, 1968
- 14) *ibid.*9, p.31
- 15) *ibid.*3
- 16) *ibid.*7
- 17) *ibid.*9
- 18) Gunter Gebauer, *Wien • Kundmannngasse 19*, Fink, 1982
- 19) Paul Wijdeveld, *Ludwig Wittgenstein Architekt*, Loecker Erhard Verlag, 1993
- 20) *ibid.*, p.139
- 21) Jan Turnovský, *Die Poetik Eines Mauervorsprungs*, Birkhäuser Verlag, 1987
- 22) *ibid.*11, p.7
- 23) August Sarnitz, *Die Architektur Wittgensteins*, Böhlau, 2011
- 24) Daniele Pisani, *L'architettura è un gesto*, Quodlibet, 2011
- 25) バーナード・レイトナーの『*The Architecture of Ludwig Wittgenstein*』が全訳されて掲載された。『ART VIVANT 16』、磯崎新 (Arata Isozaki) 訳、河出書房、1985
- 26) *ibid.*, p.90
- 27) Benedetto Gravagnuolo, *Adolf Loos*, Rizzoli, 1982, p.127
- 28) 小山明 (Akira Koyama)、*「ヴァイトゲンシュタインの建築問題」*『*ヴァイトゲンシュタイン*』、河出書房新社、2011

- 29) 小山明 (Akira Koyama)、「ストーンボロー邸の空間構成について」日本建築学会学術講演梗概集、2009、pp.123-124
- 30) 多木浩二 (Koji Taki)、「ウイトゲンシュタインの家について」、『ウイトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996
- 31) *ibid.*3, p.101
- 32) *ibid.*19, p.123
- 33) *ibid.*3, p.43
- 34) 石田優 (Yu Ishida) 撮影
- 35) *ibid.*19, p.41

第2章 ヴィトゲンシュタインとストンボロー邸

2-1 エンジニア・論理学者・哲学者

2-2 共同設計者 エンゲルマン

3-3 設計の経緯

2-4 ストンボロー邸の配置図



図1) ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン。
9歳の時の写真。



図2左) ストンボロー邸のホール中央に配置された階段は、ヴィトゲンシュタイン宮殿の大階段を引用したものである。



図3右) ヴィトゲンシュタイン宮殿（1872年、ウィーン）。1950年に取り壊されたため現在はその姿を見ることはできない。



図4) 建築家ヨーセフ・ホフマンがデザインをおこなったヴィトゲンシュタイン家の室内装飾。

第2章 | ヴィトゲンシュタインとストーンボロー邸

2-1 | エンジニア・論理学者・哲学者

ルートヴィッヒ・ヨーゼフ・ヨーハン・ヴィトゲンシュタインは、1889年4月26日にカール・ヴィトゲンシュタイン (Karl Wittgenstein, 1847-1913) とレオポルディーネ・カルムス (Leopoldine Kallmus, 1850-1926) のとの間に8人兄弟の末っ子として、当時オーストリア・ハンガリー帝国の首都ウィーンで生まれた (図1)。ヴィトゲンシュタイン家は、カールの鉄鋼会社で大成功を収め、カールはオーストリア鉄鋼業界の指導者的な人物となった。ヴィトゲンシュタイン家は、ハプスブルク朝のウィーンでは最も裕福な家庭のひとつであり、彼らの住宅はアレーガッセ (現在はアルゲンティーナガッセ) に「ヴィトゲンシュタイン宮殿 (アレーガッセの家)」 (図2,3) そして「ノイバルデックの別荘」「ホッホライトの別荘」を所有していた。カールは視覚芸術の偉大なパトロンとしてウィーンの芸術家たちを支援している。また、ヨゼフ・マリア・オルブリッヒによって設計されたウィーン分離派館 (Wiener Secession, 1897-1898) の建設の援助もおこなっている。またカールの子供達や甥や姪達のアパートメントの室内装飾の多くはヨーゼフ・ホフマンによって設計されている (図4)。

ヴィトゲンシュタインの兄弟はヘルミーネ、ヨハネス (以下ハンスと記す)、コンラート (以下クルト記す)、ヘレーネ、ルドルフ、マルガレーテ、パウル、ルートヴィッヒ (以下ヴィトゲンシュタインと記す) の男四人・女三人からなり、ヘルミーネからルートヴィッヒは15歳も年齢が離れていた。カールの子供たちに対する教育方法は、自分自身の少年時代の経験が根底にある。カールは、古典を重んじるギムナジウムに通っていたが全く馴染むことができず、レイ・モンクによると17歳のときには魂の不滅を否定するエッセイを書いて放校となった^{〔註1〕}と記されている。そして個人教師のもとで家庭での教育を受けたが、ニューヨークに

註1) レイ・モンク、『ヴィトゲンシュタイン - 天才の責務1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994, p.6



図5) ヴィトゲンシュタイン家の8人の兄弟。中央の長姉ヘルミーネ (Hermine) に抱きかかえられている子供がルートビッヒ (Ludwig)。左から順に、ヘレーネ (Helene)、ルディ (Rudi)、グレートル (Gretl)、パウル (Paul)、ハンス (Hans)、クルト (Kurt)。



図6) クリムトが描いたマルガレーテ・ストーンボロー夫人の肖像画。ストーンボロー夫人はウィーンの社交界の中心人物であり、多くの音楽家、画家達が彼女のもとを訪れている。

逃げ出している。ウィーンに帰国した後は、ウィーンの工科大学で工学を1年程学び、事業の成功により莫大な富を勝ち得ている。カールは自分自身の人生の成功過程に絶対的な自信があり、息子たちに対する教育方法においても決して学校に通わせることはなく、家庭教師のもとで勉強をさせている。黒崎宏は「家庭教師による厳格な規律に従った課程こそが唯一の本当の教育である」^[註2]とカールが確信していたことを指摘している。

註2) 黒崎宏、『ヴィトゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、1980, p.26

ヴィトゲンシュタイン家の子供達は芸術の才能においても恵まれていた(図5)。特に音楽の才能については、母親レオポルディーネの影響によるものが大きかった。レオポルディーネは、最高級の基準で評価を受けたほど特別に音楽に秀でていた。彼女の周辺には著名な音楽家達、ヨハネス・ブラームス、ダフタフ・マーラー、ブルーノ・ワルターなどが集い、夕方になるとヴィトゲンシュタイン宮殿を訪れている。

子供達はこのような環境のなかで成長していたが、ハンス、クルト、ルドルフの3人の息子達は自ら命を絶っている。ハンスは音楽の天才で、幼少期にしてすでにヴァオリンとピアノを覚え4歳で作曲をしている。しかし、厳格な父親から実業界で仕事をするように言われたため、アメリカへ逃れたが24歳の時に自殺している。またルドルフとクルトも同様に自殺している。そうしたなかで、最後まで自殺をすることのなかったのは、パウルとヴィトゲンシュタインのみである。ピアニストであったパウルは、第一次世界大戦で右腕を失っているが、モーリス・ラヴェルは彼のために「左手のための協奏曲」を書いている。彼は世界的に認められた片腕のピアニストとして成功している。一方、長女ヘルミーネは才能に恵まれた画家であり、ストンボロー邸の内部空間の詳細なスケッチをおこなっている。また、ヘルミーネは画家グスタフ・クリムトを賛美していた。クリムトは、マルガレーテの結婚記念肖像画(図6)を描くようにヘルミーネから依頼されている。

ジークムント・フロイトと親交があったマルガレーテは、



図7) 幼少期のヴァイトゲンシュタイン。ミシンの
実用模型の製作中。

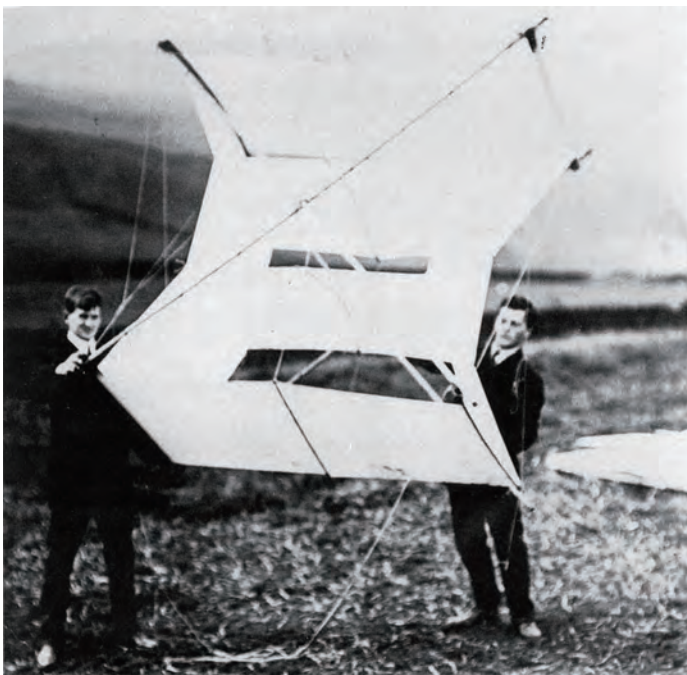


図8) 昇の観察実験。右がヴァイトゲンシュタイン、
左が技師のエクルズ。マンチェスターでのヴァイト
ゲンシュタインは航空工学の研究に携わり、エン
ジン、プロペラなどの設計をおこなっている。

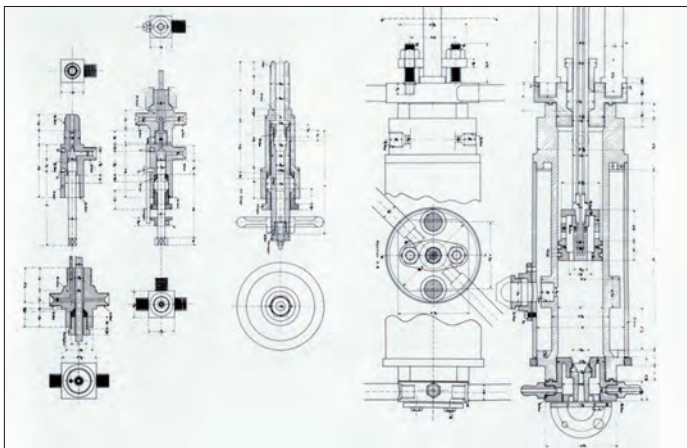


図9) ヴァイトゲンシュタインが設計をおこなった
エンジンの図面。

ヴィトゲンシュタインに多くの影響を与えている。ヴィトゲンシュタインは、音楽的、芸術的、文学的な才能は幼少期にみられることはなかったとされる。4歳になってようやく話し始めたほどであった。しかし、10歳の時にマッチ棒と針金で裁縫ミシンの実用模型の製作といった実用的・技術的なことに熱中し（図7）、伝統主義的な教育方法をとるギムナジウムではなく、技術的な教育方法で教えるリンツの実業学校に1903年から1906年まで在籍している。ウィーンから離れた位置にある工業都市リンツの実業学校が選ばれたのは、ヴィトゲンシュタインの学力ではウィーンにある学校に入学することが困難であったからであり、当時の彼のリンツでの成績についてレイ・モンクは、あまり良いものではなかったことを記している^[註3]。

註3) レイ・モンク、『ヴィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994、p.16

こうした時期にヴィトゲンシュタインに最も多くの知的な影響を与えたのは姉のマルガレーテである。レイ・モンクによれば、彼女は、ヴィトゲンシュタイン家のなかでも最も新しい知識を取り入れていた。建築家アドルフ・ローズなどに影響を与えたカール・クラウスの評論雑誌『Die Fackel (炬火)』の熱狂的な読者であり、ヴィトゲンシュタインにその雑誌の存在を紹介したと記している^[註4]。

註4) レイ・モンク、『ヴィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994、p.17

実業学校の卒業後は父親カールの強い意見もあり、ベルリンのシャルロッテンブルクにある工科大学（現在のベルリン工科大学）の機械工学を勉強するために1906年に入学している。しかし、2年後の1908年には、航空工学を研究するためにマンチェスターに渡っている。彼の研究は、グロソップ近郊にある気象観測所で、実験用の凧を用いて、飛行機のための実験（図8）をおこなうことであった。そこで気象学の研究調査を指導するために訪れていた技師のウィリアム・エクルズと出会っている。マンチェスターでのヴィトゲンシュタインは、航空機のエンジン（図9）の設計と製作をおこない、プロペラの設計についての研究をおこなっている。またプロペラの設計について、レイ・モンクによれば大学からの研究奨励金を受け1911年8月17日に特許権が認められていることが記されている^[註5]。

註5) レイ・モンク、『ヴィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994、p.35



図 10) 18 歳頃のヴァイトゲンシュタイン(1912 年)。



図 11) バートランド・ラッセル (Bertrand Russell, 1872-1970)。ケンブリッジ大学の教授で、ヴァイトゲンシュタインの指導教員であった。論理学・数学・哲学を専門とした。



図 12) ジョージ・ムーア (George Moore, 1873-1958) ラッセルと同じくケンブリッジ大学で教授で、哲学を専門とした。



図 13) 第一弾世界大戦で従軍した際のヴァイトゲンシュタインの身分証明書。ヴァイトゲンシュタインの地位は「中尉 (leutenant)」と表記されている。

そうしたなかで、研究の仲間の学生からバートランド・ラッセル『数学の原理』が紹介され、ヴィトゲンシュタインは工学的な問題よりも哲学的問題に没頭することとなり、彼のマンチェスターでの研究は、数学に関する哲学と航空工学のふたつの専門領域にわたっていたが、次第にヴィトゲンシュタインは哲学に取り憑かれてしまうことになる。その後のケンブリッジでのラッセルとの出会いがヴィトゲンシュタイン人生のなかで大きな転換点を与えている（図10、11）。

ヴィトゲンシュタインはケンブリッジ大学入学後、一時的に短い間ではあるが、論理学および哲学の研究に集中するためにノルウェイの小屋で生活をしている。そこには、哲学者ジョージ・ムーア（図12）が訪問している。黒崎宏によれば、当時ムーアは自分自身の哲学上の問題について悩んでおり、それらについてヴィトゲンシュタインと議論したのではないかと推測している^[註6]。そうしたなかで、ヴィトゲンシュタインはこれまでの論理についての研究の成果をムーアに口述筆記させている。

ここでのヴィトゲンシュタインの目的は、文学士の学位をとることであり、その完成した論文「論理」をケンブリッジ大学へ提出している。しかし学士を習得する論文には規則があり、特に「前がき」と「註釈」をつけなくてはならなかった。ヴィトゲンシュタインが書いた「論理」にはそれらのことが記されていなかったため論文として受理されることはなかった。そのことについてヴィトゲンシュタインはムーアに「あなたの手紙は私を怒らせました」^[註7]と悪態の手紙を書いている。それからムーアとヴィトゲンシュタインの関係は1929年の1月まで途絶えている。このことにより、ヴィトゲンシュタインの学位の取得も挫折することになる。

第一次世界大戦が始まると、ヴィトゲンシュタインはヘルニアのため兵役を免除されるにもかかわらず、直ちに志願して軍隊に入隊している（図13）。そしてヴィトゲンシュタインは戦争の傍、時間のある時は論理学の研究を進めて

註6) 黒崎宏、『ヴィトゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、1980、p.46

註7) Brian McGuinness, George Henrik von Wright, Ludwig Wittgenstein Cambridge Letters, Blackwell Publishers Inc., 1995, p.85

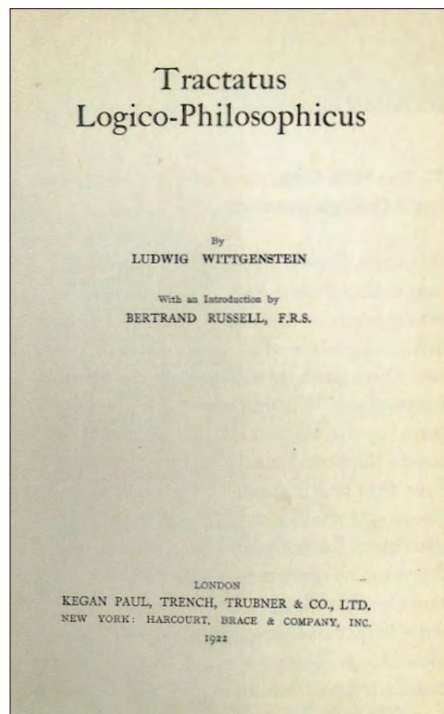


図 14) 『論理哲学論考』(Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)。『論理哲学論考』のタイトルは、様々な議論がおこなわれる中で、ムーアの提案が採択され、哲学者バルーフ・スピノザ (Baruch Spinoza, 1632-1677) の『神学政治論 (Tractatus Theologico-Politicus)』にならったものである。

いる。G.H. フォン・ライトによれば、東部戦線での服
務中の時に、ヴィトゲンシュタインはパリで起こった自動車
事故について載っている雑誌を読んだ時に、実際に起きた
事故と模型との間にみられる対応関係において「写像理論」
を見出したとされている^[註8]。

戦争中の1915年10月22日に自分自身の研究について、
ヴィトゲンシュタインがラッセルに送った手紙^[註9]のなか
で「私は目下その全体をまとめ、そしてそれを論文の形に
書き記しています」と述べ、後の『論理哲学論考』となる
ものをまとめている(図14)。その『論理哲学論考』は実
際には1918年8月に完成したとされている(図3)。そして、
再び彼は前線に戻るが、11月にオーストリア・ハンガリー
帝国壊滅と同時にイタリア軍の捕虜となり、南イタリアの
モンテ・カッシーノの捕虜収容所に収容された。そこで、
ヴィトゲンシュタインはラッセルと連絡を取り、ケンブ
リッジ時代の友人のケインズを通して、ラッセルにその原
稿を送っている。またその他に、フレーゲとエンゲルマン
にもその原稿を送っている。1年後、ヴィトゲンシュタイ
ンは、1919年8月21日に釈放されている。

この時期のヴィトゲンシュタインがエンゲルマンへ書い
た手紙には「私は非常によくありません(私の精神状態に
関してです)」^[註10]と記し、またラッセルへの手紙におい
ても「私はまだ全く正常な状態になっていない」とヴィト
ゲンシュタインは疲労困憊している様子を見せている。し
かし、彼を最も落胆させたのが『論理哲学論考』の出版で
ある。ウィーンの出版社である「ブラウミュラー社」に出
版依頼をおこない、フレーゲを介して哲学雑誌『ドイツ観
念論の哲学への寄与』に、フィッカーが編集している『ブ
レンナー』に、エンゲルマンを介して『レクラム』に出版
の依頼をおこなったが、ヴィトゲンシュタインの納得のい
く返答がなかった。そして『論理哲学論考』の出版は、ラッ
セルに委ねられることになるが、ラッセルは中国に行き、
その後は、「ケンブリッジ大学出版局」、ドイツの三つの雑
誌「心理学と感覚器官の生理学のための雑誌」「体系的哲

註8) ゲオルク・ヘンリク・フォン・ライト、「ウィ
トゲンシュタイン小伝」、『回想のヴィトゲンシュ
タイン』、藤本隆志訳、法政大学出版局、1974、p.14

註9) Brian McGuinness, George Henrik von
Wright, Ludwig Wittgenstein Cambridge Letters,
Blackwell Publishers Inc., 1995, pp.103-104

註10) Paul Engelmann, Letters from Ludwig
Wittgenstein, Horizon Pr, 1968, p.17



図15) オッタータールの小学校での集合写真。右端に立っているのがヴィトゲンシュタイン。



図16) 小学校のための辞書。この辞書は、ヴィトゲンシュタインが板書した語を生徒に書き取らせた単語帳が原型になっている。なお、ヴィトゲンシュタインは出版をおこなう際に、辞書に記載した語の順序をアルファベット順の形式とそうではない形式の二つを作成している。前者のアルファベット順に語を並べた辞書には、同種の語と語との間に異種の語が入り込むことが問題であるとし、ヴィトゲンシュタインは後者を選択している。



図17) デヴィッド・ピンセント (David Pinsent, 1891-1918)。トリニティー・カレッジの学生で数学を専攻していた。ヴィトゲンシュタインの最も親しい友人であり、二人でアイスランドなど様々な場所を旅行している。ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』は、第一次世界大戦に従軍して戦死したピンセントに捧げられている。

学のための雑誌「自然哲学年報」と交渉をおこなっている。そのなかで、論文はウィリアム・オスワルトが編集していた「自然哲学年報」に受け容れられた。しかし、ヴィトゲンシュタインはオスワルトから出版の詳細について相談されることなく、また校正に関与することなく印刷されたため誤字が多く、レイ・モンクによれば、「ヴィトゲンシュタインは、それを見て〈海賊版〉だとエンゲルマンに書いた」ことを記している^[註11]。その後は、ラッセルによって「キーガン・ポール社」に出版の依頼をおこなっている。これはフランク・ラムゼイによって翻訳され、チャールズ・オグデンによってヴィトゲンシュタインの希望を忠実に聞き入れられ、1922年に正式に印刷されることになる。

捕虜収容所から釈放されヴィトゲンシュタインは『論理哲学論考』の出版以外に、小学校の教師になるためにマルガレーテの紹介によりクントマンガッセにある教員養成学校に入学している。小学校の教師になったのは、捕虜時代の短い期間であるが教養のあるルートヴィヒ・ヘンゼルやフランツ・パラクからの影響があったように考えられる。また学校の夏休み期間に、クロスターノイブルクで庭師の助手として採用されたことをエンゲルマンに手紙で報告している^[註12]。そしてウィーンに戻ったヴィトゲンシュタインは教師として、ロラッテンバッハの小学校、オッターターの小学校に着任し、この時期に『小学校のための辞書』を出版しているが、この小学校の教師の生活は長く続くことはなかった（図 15、16）。

1926年春ヴィトゲンシュタインは教師の仕事を辞めている。ヴィトゲンシュタインは、病気の子供の耳を両手で叩き、部屋の隅に強制的に立たせたことにより、その生徒は倒れ、ヴィトゲンシュタインは道徳的な責任を問われたのである。

そうしたヴィトゲンシュタインの仕事のなかで『論理哲学論考』は、唯一生存中に出版された書物である。また、ヴィトゲンシュタインの親友デヴィッド・ピンセント（David Pinsent, 1891-1918）（図 17）に捧げられている。ピンセ

註 11) レイ・モンク、『ウィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994、p.219

註 12) Paul Engelmann, Letters from Ludwig Wittgenstein, Horizon Pr, 1968, p.35



図 18) アドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933)。



図 19) モラー邸 (Villa Moller, 1927-1928) 正面ファサード。ストーンボロー邸と同時期に計画施工され完成している。外壁面は、ストーンボロー邸と同様にクリーム色で塗装されている。開口部は左右対称形になるように配置されている。ストーンボロー邸とは、外壁面の無装飾において類似しているが、開口部の形状は全く異なっている。



図 20) モラー邸内部。上が音楽室、下が食堂。その二つの部屋は連続的につながっている。

ントは、トリニティー・カレッジの数学の学生であり、ヴィトゲンシュタインと同様に哲学と音楽に関心を持っており、ラッセルを通じて知り合いになっている。ピンセントとは、自分の新しい部屋の家具を探しに家具店に行っている。ピンセントの日記によれば、店員がヴィトゲンシュタインに見せた家具に対して「駄目だ、ひどい」と絶叫し、何も購入することなく店を出ていることを記している^[註13]。ヴィトゲンシュタインは、それらの家具に付いているありとあらゆる不要な装飾を嫌がり、家具に単純さを求めている。最終的には、自身の好みに合わせて家具の製作をおこなっている。またその家具を見たピンセントは、「かなり風変わりであったが、悪くはなかった」^[註14]と記している。

ウィリアム・エクルズとの旅行で下宿屋に同室したヴィトゲンシュタインは、部屋の壁に掛かっていた絵画と部屋の装飾を全て取り除き、部屋の内部を寝具と椅子だけにしている。エクルズは新しい家のためにデザインをおこなった家具について、ヴィトゲンシュタインに意見を求めている。エクルズが新しく設計した応接間は、ヴィトゲンシュタインのケンブリッジの部屋を模倣したものあり、壁も白で塗られている。その手紙には、エクルズのデザインを行う中でのコンセプトが書かれており、実用的であることや、構成要素の簡素さについて配慮したことを記している。そうした彼のデザインについてヴィトゲンシュタインは「素晴らしい」と手紙で返答している。またその手紙には補足で、クローゼットのドアにあるクロスピースがドアの中心にないこと、ドアの開く方向はカーペットの上ではない方向に開いた方が良く、寝具の設計については、余計な装飾的な部分を取り除くこと、特にベッドの足元に付けられてキャスターに対してヴィトゲンシュタインは「まさかあなたの家のなかをベッドに乗って旅行するのではないでしょう!？」^[註15]と指摘している。

ヴィトゲンシュタインのそうした余計な「装飾」に対する考え方は、建築から徹底的に装飾の排除をマニユフェス

註13) レイ・モンク、『ウィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994、p.57

註14) レイ・モンク、『ウィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994、p.58

註15) レイ・モンク、『ウィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994、p.114



図 21) ヴァイトゲンシュタインがノルウェーに建設した木造小屋。ここに2年間過ごした。



図 22) パウル・エンゲルマン (1937年、オロモウツ)。ヴァイトゲンシュタインの友人であり、ストンボロー邸の共同設計者である。

トとしていたウィーンの建築家アドルフ・ロース（図 18）と類似しているようにも見る事ができる（図 19、20）。
ヴィトゲンシュタインとロースは、ルートヴィッヒ・フォン・フィッカーを介して知り合い、1933年にロースが亡くなるまで親交が続いた。エンゲルマンの回想では、ロースはヴィトゲンシュタインに対して「あなたは私だ」^{〔註16〕}と言いつ残している。

註 16) Paul Engelmann, Letters from Ludwig Wittgenstein, Horizon Pr, 1968, p.127

ヴィトゲンシュタインは、1912年から二年間ほど、論理学および哲学の研究を集中するためにノルウェイで生活をしている（図 21）。1913年10月17日にラッセル宛に出した手紙には「私の住所は、ノルウェイ、ソグン、ショルデン、ハルヴァルド・ドレグニー、ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインとなる予定です」^{〔註17〕}と記している。

註 17) Brian McGuinness, George Henrik von Wright, Ludwig Wittgenstein Cambridge Letters, Blackwell Publishers Inc., 1995, p.41

その後のヴィトゲンシュタインは、小さな湖の近くの傾斜面に小屋の建設をおこなっている。その家は、周辺の建築物と同じ大きさの木造であるが、その家に関する資料や設計図面は残されていない。また現存していない。

2-2 | 共同設計者エンゲルマン

パウル・エンゲルマン (Paul Engelmann, 1891-1965) は、ユダヤ人の父マックス・エンゲルマン (Max Engelmann, 1847-1913) と母エルネスティーネ・ブレッヒャー (Ernestine Brecher, 1850-1926) との間に、モラビアの首都オロモウツ (現在のチェコ共和国) に、三人兄弟の長男として1891年6月11日に生まれている (図 22)。

エンゲルマンの父マックスはオロモウツで商人として働いている。また母は有名なユダヤ人の家系であり、祖母ギーディオン・グレッチャーは医者であり、大学の研究者である。エンゲルマンの弟ペーターエンゲルマン (Peter Engelmann, 1892-1939) は風刺漫画家で「ペーター・エンク」としてウィーンで有名である。妹アン・エンゲルマ



図23) 炬火(DIE FACKEL)。1899年に創刊され、1912年からはカール・クラウスの個人誌となっている。



図24) ロースからエンゲルマンに贈られたノート。表紙には、「Adolf Loos」と直筆でサインがされている。

ン (Anny Engelmann, 1897-1942) は「ササカ」という名のイラストレーターとしてドイツで、子供の本のための絵を描いている。

エンゲルマン家には、ユダヤ人の知識人達が頻繁に出入りしていた。エンゲルマンは、後にヴィトゲンシュタインも参加することになるオロモウツの若いユダヤ人のグループの一人でもあった。そのグループには、音楽家フリッツ・ツヴァイク、作家マックス・ツヴァイク、弁護士ハインリッヒ・グロアック等がいた。

エンゲルマンは、はじめ文学や哲学に興味を持っていたが、結局は 1909 年にウィーンにある工科大学 (Technische Hochschule) で建築を学んでいる。

そして 1911 年にアドルフ・ロースがロース建築学校 (Adolf Loos Bauschule) を設立すると同時に、エンゲルマンは在籍していた大学を辞めて、ロースの最初の生徒となっている。ロースの学校では、主にインテリアと素材に関する知識を修得し、またロースの事務所で働いている。ヴェイデフェルトによれば、そうした時期にロースはラウムプラン (Raumplan) を考案したとされている^[註18]。

エンゲルマンはロースが 1910 年に設計をしたミハエル広場の建築についてのソネット「Das Haus auf dem Michaelerplatz」を執筆し、前述のカール・クラウス (Karl Kraus) の雑誌『Die Fackel』に投稿している (図 23)。また、エンゲルマンはクラウスのアシスタントでもあり、エンゲルマンの仕事は、クラウスの風刺の反戦のプロパガンダのために役立つ記事を新聞から切り抜いて収集することであった。

1921 年 9 月 12 日、エンゲルマンはロースからその建築デザインを褒められ、ロースから彼の建築の考えをまとめたノート (図 24) の複写を受け取っている。その表紙には、「わたしの大事な生徒へ」^[註19]と書かれている。

最初の戦争の何ヶ月かの後に、エンゲルマンは戦争に行くことになったが、子供の時からの持病であった肺の病気でオロモウツに帰るが、ロースとクラウスにとの交流は続

註 18) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein
Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.48

註 19) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein
Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.54

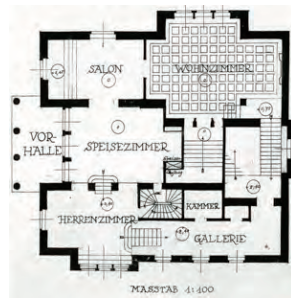
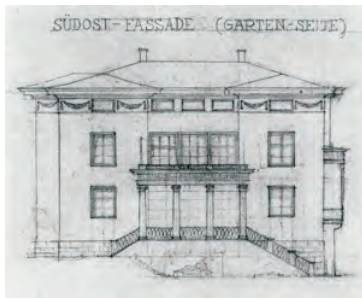


図 25 左) コンスタントハウスの立面図 (Konstant House, 1919)。ロースとエンゲルマンの共同設計
 図 26 右) コンスタントハウスの平面図。



図 27 左) エンゲルマン設計のミュラー邸 (Müller Villa, 1926-1928) 外観。
 図 28 右) ミュラー邸内部。



図 29 左) アドルフ・ロース設計のルファー邸 (Rufer Villa, 1922) 外観。
 図 30 右) ルファー邸内部。

いている。エンゲルマンはウィーンを代表する思想家クラウスと建築家ロースの弟子あり、哲学者ヴィトゲンシュタインの友人あった。

エンゲルマンの建築家としての活動は、ウィーン、オロモウツ、パレスチナにおけるインテリアおよび住宅の設計であった。しかし、ストンボロー邸の設計に関わる以前には、住宅の設計を単独でおこなった経験は持っていない。

エンゲルマンの最初の建築の設計は、ロース学校在籍時に、ロースの建築課題の延長として、共同でマウリッツ広場 (Mauritzplatz) にあるコンスタントハウス (Konstandt House, 1919) の設計であった (図 25、26)。この建築の外観は、古典建築の様相を有し、正面ファサードは左右対称形の壁面で構成されている。また内部は、ダイニングルーム、リビングルームなどの部屋は全て連続した空間構成がみられ、それらの部屋と部屋との接続にはロースの住宅に似た階段が用いられている。

ウィーンにおけるエンゲルマンの仕事は、室内装飾の仕事であり、そこでヴィトゲンシュタインの家族のために室内装飾の設計をおこなっている。エンゲルマンは、自分が設計した室内装飾について、ヴィトゲンシュタインに手紙で、意見を求めている。「あなたが私の仕事が好きではないことはとても残念です。私は丁寧に平面計画をしましたが、成功しているのかがわかりません。あなたの意見を楽しみにしています」^{〔註20〕}と記している。

その室内装飾が契機となり、エンゲルマンとヴィトゲンシュタイン家との交流が始まり、マルガレーテが主催しているトスカーナパークの社交界に招待され、そこでストンボロー邸の設計を依頼されている。

エンゲルマンのオロモウツでの建築および室内装飾の仕事は、エンゲルマンが所属していたユダヤ人グループを通して依頼されている。そのひとつが、1926年から1928年のストンボロー邸の設計と同じ時期に、オロモウツに建設されるミュラー邸 (Muller Villa, 1926-1928) であった (図 27、28)。

註 20) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.51



図 31) ミュラー邸平面図。壁に化粧壁を設け、外観にシンメトリー部分を作り出す手法。同じ手法がエンゲルマンのストンボロー邸スケッチに見られる。

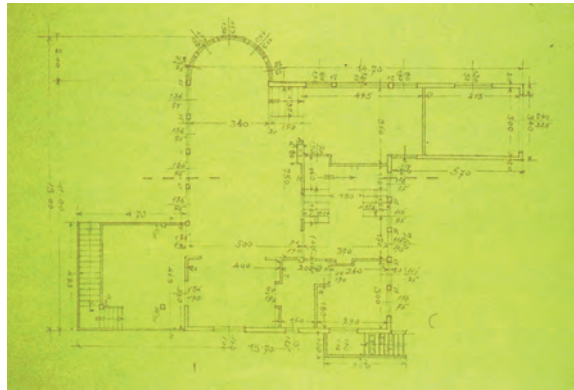
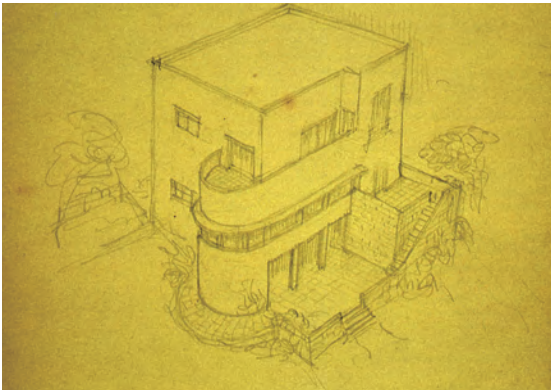


図 32) エンゲルマンがパレスチナに設計した、ヤードリンハウスの外観スケッチと平面図。



図 33) ヤードリンハウスの外観 (Yadlin House, 1938)。

ミュラー邸は、ロースが設計をおこなったルファー邸 (Rufer Villa, 1922) (図 29、30) と建築の規模と、装飾がない外観において非常に似ており、いかにもロース風の建築の形態を見ることができる。内部空間においても、部屋の床面は様々な高さに配置されており、それらの部屋と部屋を階段で接続するラウムプラン (ロースが提唱した計画方法であり、平面的に空間を並べるのではなく立体的に空間を接続する) で空間が構成されている。またそこには、ロースの建築の内部にも見られた木製の床、木製の家具、天井には梁があり、室内装飾品としては、ヴィトゲンシュタインが決して使用することの無いカーペットやカーテンが用いられている。

この建築の開口部は、内部を覆う外壁面の四方に配置されている。この建築における開口部の配置は明らかに内部の空間より配置されていることがわかる。しかし、エンゲルマンは、外壁に凹凸をつけることで、左右対称な壁面を、内部および外部において計画する試みをおこなっている。これは、ストンボロー邸においてエンゲルマンが計画した最終的な平面図にもみられる手法である (図 31)。

オロモウツでのエンゲルマンは、哲学と文学に関心があり、金銭面で困窮した時にのみ建築や室内装飾の仕事を引き受けていたが、しかしその多くの仕事は、室内装飾の仕事であった。

1934年には、エンゲルマンはパレスチナに移り住み、室内装飾の仕事が続いている。そこでは、住宅建築ヤードリンハウス (Yadlin House, 1938) の設計を行なっている (図 32)。その建築は、これまでの建築に見られたロースの建築スタイルと、インターナショナルスタイルの混合された形態がみられる。外観ファサードの曲面 (図 33) で計画された壁面には、水平連続窓が配置されている。またその開口部の上部にはひさし取り付けられている。

そうした建築家エンゲルマンとヴィトゲンシュタインの出会いは第一次世界大戦中のことであった。

ヴィトゲンシュタインは士官としての訓練を受けるため

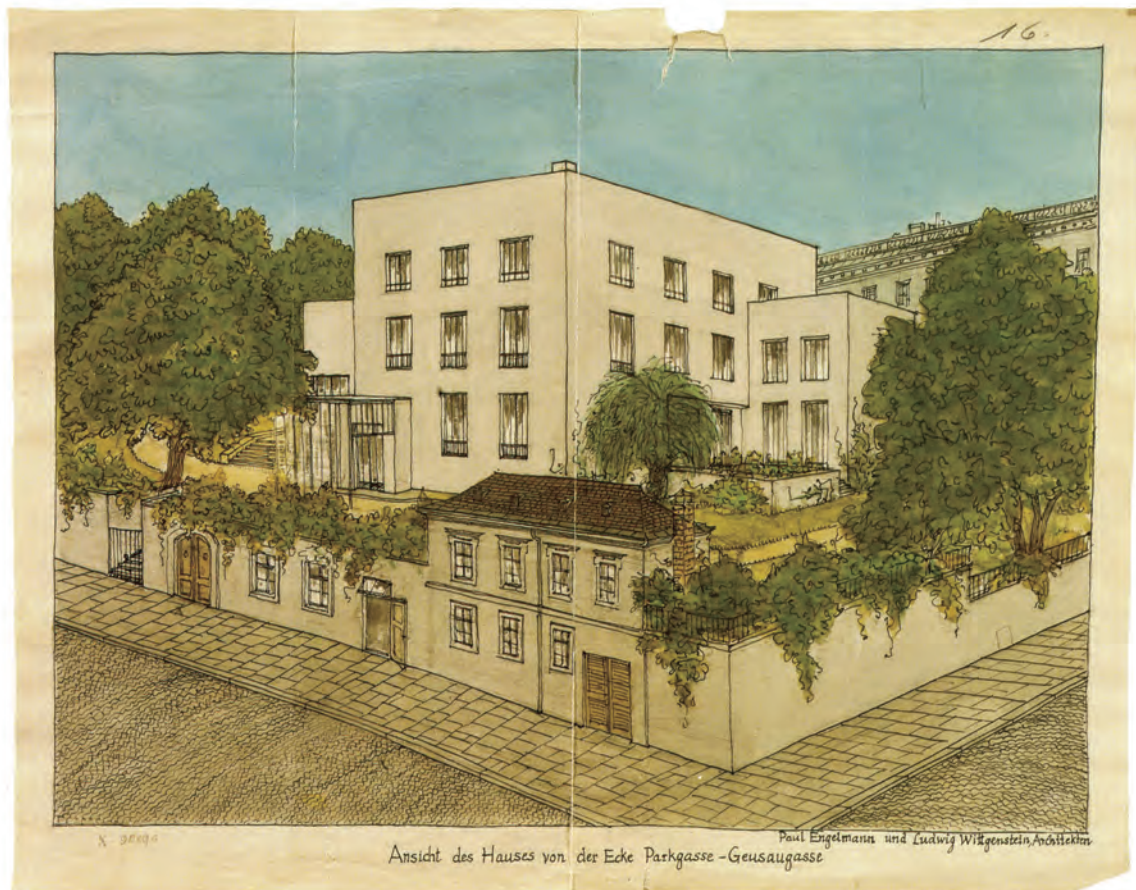


図 34) エンゲルマンが描いたストーンボロー邸のスケッチ。ストーンボロー邸の入り口には、ガラスで覆われている。また右下には、「Paul Engelmann und Ludwig Wittgenstein Architekten」と表記されている。

に、モラヴィアのオロモウツの連隊指令部に派遣されている。オロモウツに行く前の休暇をヴィトゲンシュタインは、ウィーンで過ごしている時にロースから以前の弟子で、結核のためオロモウツの家族のもとで保養していたエンゲルマンが紹介されている。ヴェイデフェルトによると、エンゲルマンの母親にヴィトゲンシュタインは「私は悪い人間です」^[註21]と話し、エンゲルマンに強烈な印象を与えている。エンゲルマンの回想では「私は本当に会いたかったが、ヴィトゲンシュタインはどのように思っているかわからない」^[註22]と記しているが、彼らは、すぐに会うことになる。ヴィトゲンシュタインにとってエンゲルマンは最も親しい友人であり、エンゲルマンにとってもヴィトゲンシュタインは尊敬できる友人となる。

ヴィトゲンシュタインは、エンゲルマンが所属していたユダヤ人グループに参加している。そこで、芸術、文学、音楽などについて彼らの話しに加わっている。また彼らは、ヴィトゲンシュタインの様々なものに対するクリティークについて尊敬をしている。なかでもエンゲルマンとは、ヴィトゲンシュタインが戦争中に書いている哲学に関して話し合っている。

ヴィトゲンシュタインは「私が文章に表現するのが難しい時には、エンゲルマンが鉗子を持ってきて私から引き出したのであった」^[註23]と述べている。ヴィトゲンシュタインにとってエンゲルマンは、彼の哲学の話しを聞いてくれる良い聞き手であった。エンゲルマンの回想によると、エンゲルマンの家からヴィトゲンシュタインの借家アパートと一緒に帰るときにも会話は続き、ヴィトゲンシュタインの部屋についてからも夜遅くまで議論に熱中していたこと、ヴィトゲンシュタインの考えをエンゲルマンが明解にして、論考を再解釈することがヴィトゲンシュタインにとっては非常に大事であったと述べている^[註24]。

戦争が終わり、『論理哲学論考』を書き終えて、ヴィトゲンシュタインが小学校教師を辞め、心身ともに疲れ切っていた時に、エンゲルマンは彼にユダヤ人グループの友人

註 21) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.49

註 22) Paul Engelmann, Letters from Ludwig Wittgenstein, Horizon Pr, 1968, p.49

註 23) Paul Engelmann, Letters from Ludwig Wittgenstein, Horizon Pr, 1968, 94
レイ・モンク、『ヴィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994, p.158

註 24) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.50

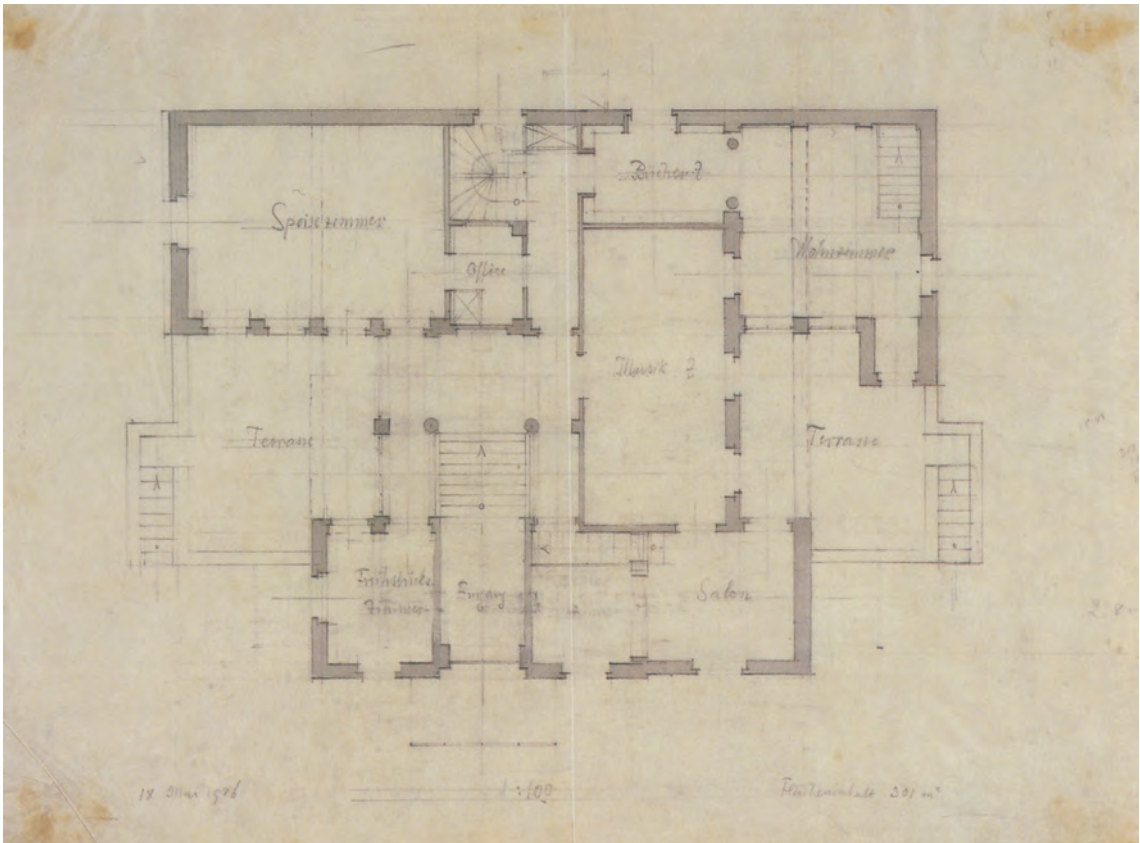


図 35) エンゲルマンのプラン。ホールを中心に装飾的な円柱が描かれている。(87 頁参照)

の所に仕事があることを紹介している。またエンゲルマンは、マルガレーテからストーンボローの設計（図34）の依頼を受けた時にもヴィトゲンシュタインのその仕事について1925年11月27日の手紙で相談^{〔註25〕}をしている。その手紙には「このことについてあなたと話しをしたい」記し、ヴィトゲンシュタインの手紙の返信^{〔註26〕}には、彼も住宅の設計に関心があることが記されている。

しかし二人の関係は、ストーンボロー邸の設計を共同ですることによって壊れてしまうことになる。

1953年2月16日にエンゲルマンはヴィトゲンシュタインとの建築の仕事について、ヴィトゲンシュタインの母方の従兄であるフリードリッヒ・ハイエク（Friedrich Hayek）への手紙で、「私ではなく、彼がその建築家でした。彼がその計画に参加する以前には、基本的な設計はできていましたが、最後の設計は彼の仕事であり、私の設計したものではない」^{〔註27〕}と述べている。これまでエンゲルマンにとって、ヴィトゲンシュタインは素晴らしい友人であった。当時ヴィトゲンシュタインは、精神的な病気であり、その療養のためにエンゲルマンは、ヴィトゲンシュタインを建築の仕事に誘ったが、その建築の仕事にそこまで熱心に取り組むことは全く予想していなかったと考えられる。またエンゲルマンは、ヴィトゲンシュタインとの仕事を通して、ヴィトゲンシュタインの横柄な態度、頑固な一面を見ることになる。全てがヴィトゲンシュタインの頭の中で決定されるため、エンゲルマンがこの建築に関わる意味がないのではないかと感じ取っていたと推察できる。エンゲルマンによって、ヴィトゲンシュタインは建築家として働くことになる。

註25) Ilse Somavilla, Wittgenstein – Engelmann. Briefe, Begegnungen, Erinnerungen, Haymon Verlag, 2006, p.78

註26) Ilse Somavilla, Wittgenstein – Engelmann. Briefe, Begegnungen, Erinnerungen, Haymon Verlag, 2006, p.78

註27) レイ・モンク、『ヴィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994、p.252

2-3 | 設計の経緯

ストーンボロー邸は、1925年11月にマルガレーテ・ス

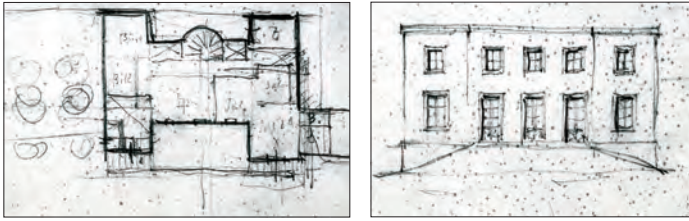


図 36) 「1」段階目のスケッチ。左が平面。右が立面。

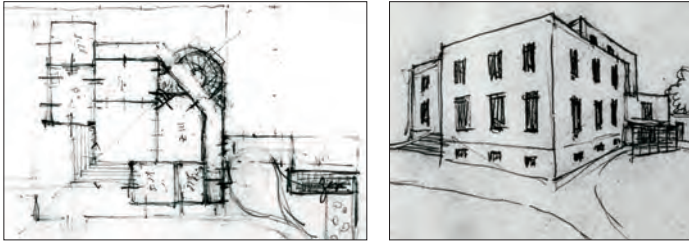


図 37) 「4」段階目のスケッチ。左が平面。右が立面。

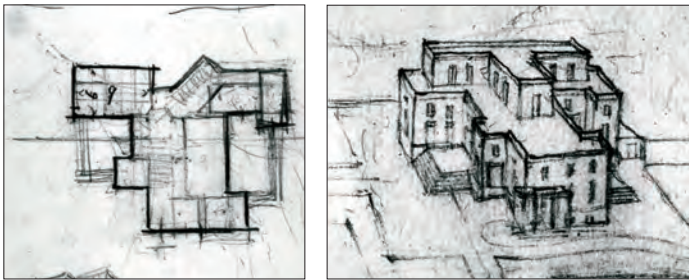


図 38) 「6」段階目のスケッチ。左が平面。右が立面。

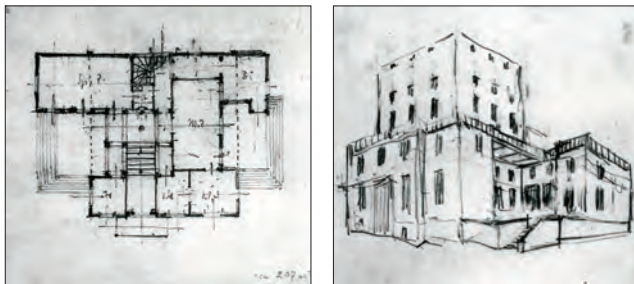


図 39) 「7」段階目のスケッチ。左が平面。右が立面。

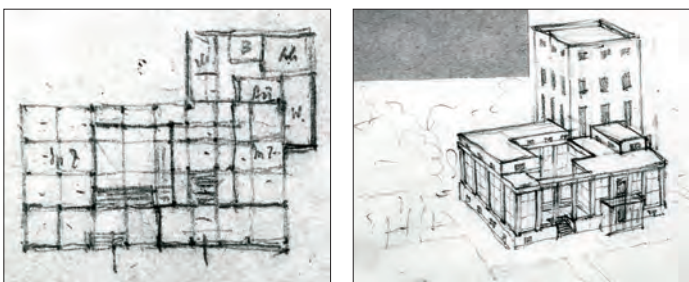


図 40) 「8」段階目のスケッチ。

トンボローが建築家パウル・エンゲルマン設計の依頼をおこない、設計が始まっている。

当時のウィーンには、ウィーンを代表する建築家アドルフ・ロース、ヨーゼフ・ホフマンらが建築家として活動していたにも関わらず、マルガレーテはエンゲルマンに依頼をおこなっている。その第一の理由は、エンゲルマンがヴィトゲンシュタインの友人であったこと、第二にエンゲルマンは、ヴィトゲンシュタインの家族の部屋の室内装飾をそれまでに設計していたことなどがある。しかし依頼の最大の理由は、建築主であるマルガレーテ自身もストーンボロー邸の設計過程に関与することを望んでいたことが考えられる。そのことについて、エンゲルマンは回想では、「私よりヴィトゲンシュタインの方がマルガレーテの気持ちが分かる」^{〔註28〕}と述べ、エンゲルマン自身がマルガレーテの要求を計画図面に反映することに苦闘していた様子がわかる。

最初のストーンボロー邸の平面図としては、エンゲルマンによって1926年5月18日の日付記載の図面（以下エンゲルマンのスケッチプラン）が作成されている（図35）。その建築内部には、ロースに似た平面計画がみられる。そうした平面スケッチに加えて、外観のスケッチを小さい本の形にしたものを、クリスマスプレゼントとしてマルガレーテに贈っている。ヴェイデフェルトはエンゲルマンのスケッチに通し番号を付け、10段階に分類して時系列に並べた整理を行っている。その最初の段階のエンゲルマンのスケッチには、古典主義建築の様式がみられる。また最後にエンゲルマンが提出したプラン（彼の最終平面図）は、第7段階のスケッチが基盤になっていることが指摘されている^{〔註29〕}。

エンゲルマンのスケッチの多くは外観のスケッチによる検討のためのものであるが、そうしたなかで、平面のスケッチがあるのは、段階「1」「4」「6」「7」「8」の5つの段階である（図36、37、38、39、40）。それらの平面スケッチは、「ホール」を中心に部屋を配置した平面構成と「テ

註 28) Bernhard Leitner, *The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation*, New York University, 1976, p.24

註 29) Paul Wijdeveld, *Ludwig Wittgenstein Architekt*, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.80



図 41)「10」段階目の外観スケッチ。外観ファサードに配置されている縦長の開口部、建築の両側のテラス配置はこの段階においてもみられる

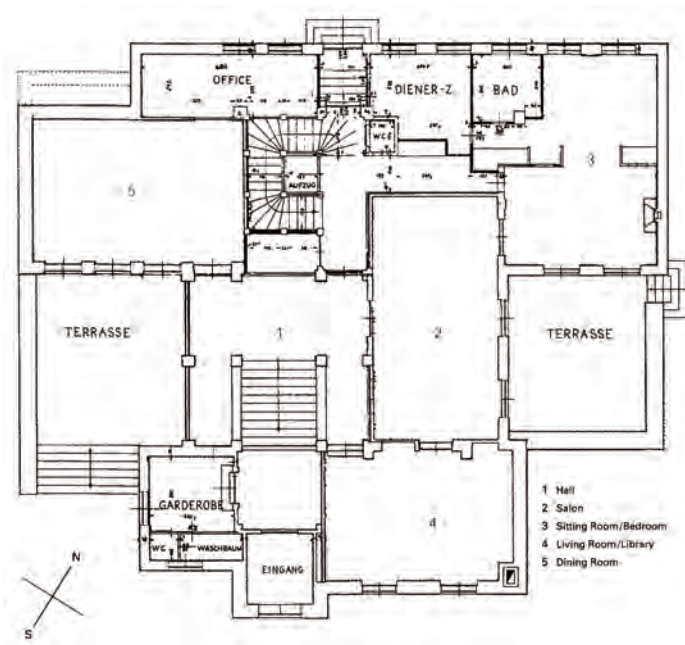


図 42) ヴィトゲンシュタインが設計に関与してからの図面。主階の部屋名を下記に示す。

- 1 ホール
- 2 サロン
- 3 夫人居間・寝室
- 4 居間
- 5 食堂

ラス」を中心に部屋を配置する平面構成の二種類に分類することができる。前者は段階「6」「7」、後者は段階「1」「4」「8」が相当する。最終的には、全体平面の中央にホール、その両側にテラスを配置する方法が選択されているが、ヴェイデフルトが指摘しているように「7」段階目に計画しているスケッチがそれにあたる。

また外観スケッチでは、統一して縦長に切り取られた開口部が配置され、また幾何学的なボリュームの構成による検討が行われている。「10」段階目に描かれた外観スケッチは、のちに完成するストンボロー邸の外観と最も近いと考えることができる（図41）。

そうしたエンゲルマンのスケッチの数の多さと様々なデザインがあることから、ヴェイデフルトはエンゲルマン自身この建築に懐疑的になっていたのではないかと推測をしている^{〔註30〕}。

それらのスケッチにみられる計画は、施主であるマルガレーテの強い要求もあり、エンゲルマンの性格を考慮すると、それらがエンゲルマンの意図したデザインであったと断定することはできない。しかし、エンゲルマンが回想で「もうすでにプランは完成していた」^{〔註31〕}述べているプランは、この時期に彼がマルガレーテと共同で作上げ、マルガレーテの要求をエンゲルマンがスケッチに反映させながら描いている半年間にできたスケッチであることを指している。

その後、ヴィトゲンシュタインは、姉マルガレーテとエンゲルマンから新しい住宅の設計を共同ですることの誘いを正式に受けて、ストンボロー邸の設計活動に参加することになる。1927年の夏にヴィトゲンシュタインは手紙で「私は建築の仕事をするようになりました。私はウィーンに建設する住宅の設計をしています。」^{〔註32〕}とケインズに報告をおこなっている。

ヴィトゲンシュタインが設計に関与した後の図面（図42）とエンゲルマンのスケッチプランとの比較をおこなうと下記の点が異なっていることがわかる（図43）。

註 30) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.95

註 31) Bernhard Leitner, Das Wittgenstein Haus, Hatje Cantz Verlag, 2000, pp.23-24

註 32) Brian McGuinness, George Henrik von Wright, Ludwig Wittgenstein Cambridge Letters, Blackwell Publishers Inc., 1995, p.222

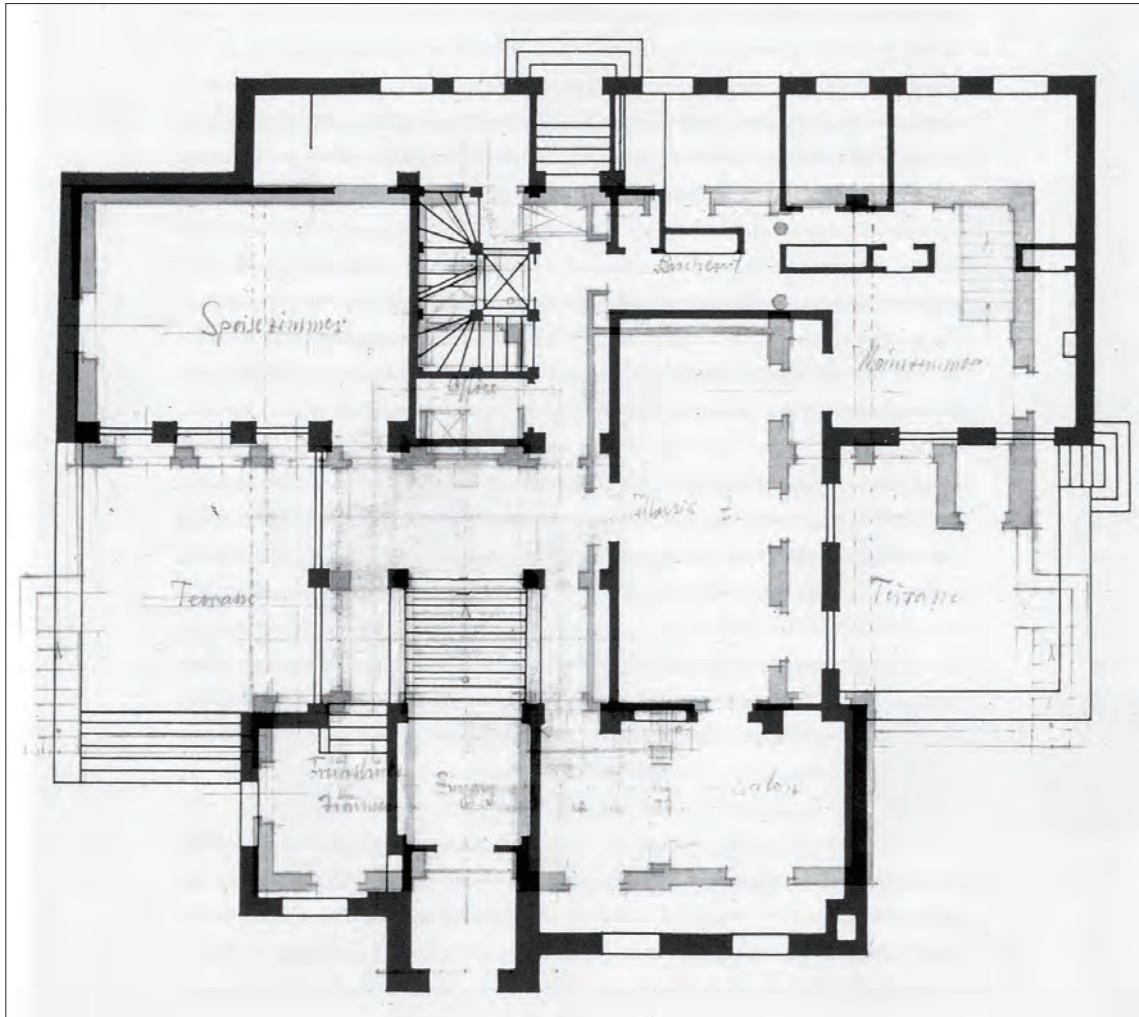


図43) エンゲルマンのスケッチプランとヴォイトゲンシュタインが関与した後の図面を重ねた図。
(B.Leitner)

- ① 主階平面全体の拡大
- ② 各部屋のプロポーションの変更
- ③ 部屋名の変更
- ④ 両側のテラスと庭の動線の変更
- ⑤ 玄関と前室の二つの部屋を追加
- ⑥ ホール柱の形状変更（円柱から角柱へ）
- ⑥ ホール柱の装飾（コリント式）の排除
- ⑥ ホール壁面に付け柱の追加

ホール壁面に柱を追加したことで、ホールは垂直の方向性が強調されている。すなわち、ホールは他の部屋と異なり、建築の構成要素のなかでも垂直性を示す階段や柱などが配置されることにより、厳格な空間性をもった内部になっている。

またエンゲルマンのスケッチプランはロースの建築を想起させる空間構成であったが、それらはヴィトゲンシュタインによって排除され、当時の建築では考えられない程度までに装飾を徹底的に排除した内部を有している。

また、ヴィトゲンシュタインによって外壁面における左右対称性の語もが整理されている。エンゲルマンの図面においても、エンゲルマンが設計したミュラー邸と同様に、壁に凹凸をつけた壁面構成により正面入り口周りに左右対称性を作り出す手法が見られたが、それらはヴィトゲンシュタインによって全て排除され、最も単純な方法による左右対称性に作り替えられている。

当時のヴィトゲンシュタインの設計の関与について、姉ヘルミーネの回想によると「グレーテルとよく相談しながら図面をつくったのです。この時期にルートウィッヒが加わり、図面と模型に強い関心をしめし、ついでこれを変更しはじめ、ますます熱中し、最後に完全に自分のものにしてしまいました」^{〔註33〕}とあるように、ヴィトゲンシュタインの特異な性格とこの建築への情熱に触れていく一方で、逆にエンゲルマンはこの建築の仕事から離れること以外に選択肢はなかったのかもしれない。また、ヘルミーネの回

註33) ヘルミーネ・ヴィトゲンシュタイン、「家族の回想」、『ヴィトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996、p.35

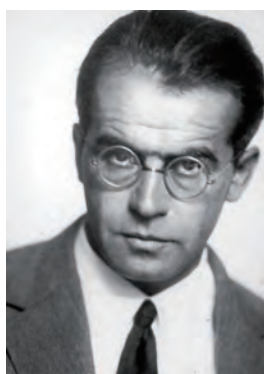


図 44) ジャック・グロアグ (Jacques Groag) ストンボロー邸の施工と同時期に、ローズが設計したモラー邸 (Moller house, 1926-1927) の施工もおこなっている。

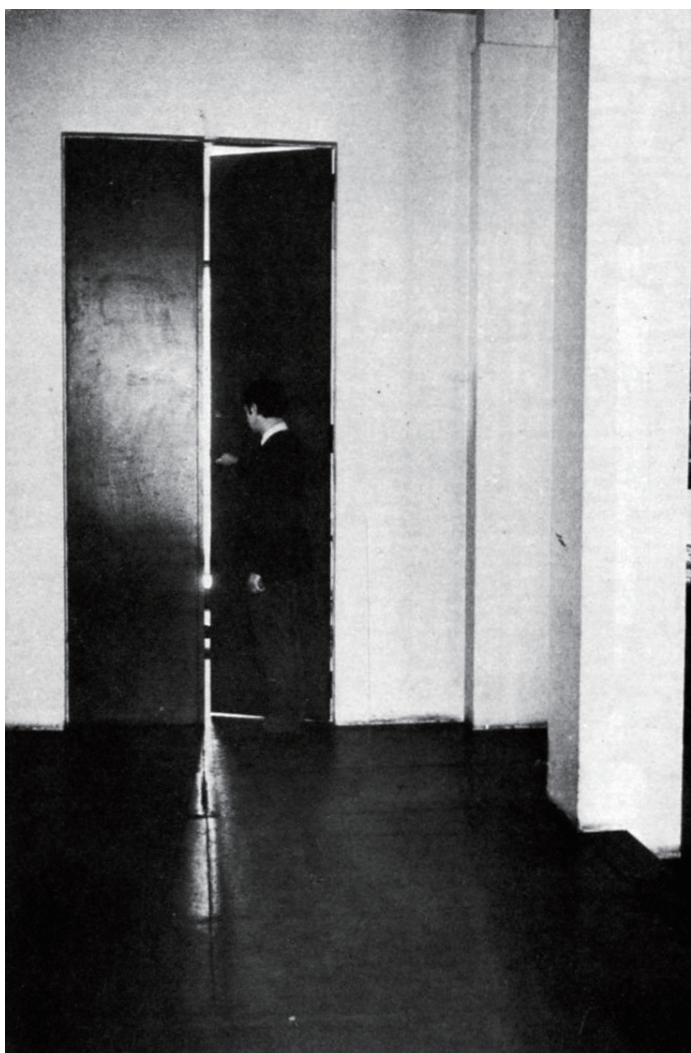


図 45) ホールに設置されたサロンへ続く鉄製のドア。男性の胸の高さの位置にドアハンドルが組みつけられている。片側のドアを開くだけで、容易に人が通ることができる。

想のなかでヴィトゲンシュタインの設計は部屋だけでなく「ルートウィッヒは、全ての窓、扉、窓の把手、放熱器などを、あたかも精密機械でもあるかのような精度で、すばらしいプロポーションのデザイン仕上げました」^{〔註34〕}と述べていることから、最初の図面で明確に決定されていなかった部屋および開口部の寸法といった内部空間からドアの把手に至るまでの、全てを計画し直したと考えられる。

またエンゲルマンは、1928年2月オロモウツに一度帰って、ウィーンに戻ってきた時にはストンボロー邸が完成している。すなわち、エンゲルマンが最も得意としていた室内装飾についても、ヴィトゲンシュタインが一人で設計をおこなったことは明らかである。ヴィトゲンシュタインがこの建築に求めた精度に関して、ヘルミーネの回想によると「ルートウィッヒの精密度にかかわる無慈悲さの強力な証明は、おそらく住宅が完成して清掃をはじめかけたときに、ホール状の部屋の天井を三センチだけあげる決定をしたことにうかがえます」^{〔註35〕}と記述されている。ヴィトゲンシュタインよって緻密に計画された寸法を施工現場においてもそのミリ単位の精密さで製作するように要求し管理されていたことは明らかであり、ロースの弟子でストンボロー邸の現場監督であったジャック・グローク (Jacques Groag) (図44) は、手紙に「ひどい喧嘩をして、言い争って、腹を立てて、1日が終わって帰ってくるころには、もう気分は最悪だし、頭も痛い。これがしょっちゅう起こるのだ。たいていは僕とヴィトゲンシュタインのあいだで」^{〔註36〕}とヴィトゲンシュタインへの不満を漏らしている。またドアに関しても、錠前屋がヴィトゲンシュタインに鍵穴の位置について尋ねたときに「ちょっと、技師さん、たった一ミリがあなたにとって重要なんですか？」と彼が言い終わらぬうちに大きな声で「ヤア (そのとおり！)」というので錠前屋はもう退くほかありませんでした^{〔註37〕}と記している。ヴィトゲンシュタインにとってここで設計した全てが重要であり、そのなかでも特にドアについて強い関心があったことは明らかである (図45)。

註34) バーナード・レイトナー、『ART VIVANT 16、ヴィトゲンシュタインの建築』、磯崎新訳、西武美術館、1985、p.21

註35) Bernhard Leitner, The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, New York University, 1976, p.66

註36) アレグザンダー・ウォー、『ヴィトゲンシュタイン家の人びと』、塩原通緒訳、中央公論新社、2010、p.226より引用、Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.146

註37) Rush Rhees, Recollections of Wittgenstein, Oxford Paperback Reference, 1984, p.6

1928年に11月10日にドアを製作した鉄鋼会社へ送った手紙には「あなたたちの精密な仕事がなければ、この建築を完成することは困難であった」^[註38]と感謝の文を綴っている。

そうした当事者による回想から確認できるように、ヴィトゲンシュタインは部屋やドアの機械工学的な仕組みや暖房ラジエーターなどの異常なまでの工作精度に関しては強い関与をおこなっていたことが推測される。また施工現場においても極めて高精度の機械工作を建築の次元においてミリ単位で要求したために工事は難航し、完成に至まで二年の時間が費やされている。そうしたヴィトゲンシュタインは建築に熱中していた二年間の間は、友人のラッセルやムーアらに手紙でのやり取りを全くおこなっておらず、建築が1928年の秋に完成したことをヴィトゲンシュタインは手紙でケインズに「私は、私の家が完成しました。この2年間はとても忙しかったです」^[註39]と記し、家の写真を同封して報告している。

註 38) Bernhard Leitner, *The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation*, New York University, 1976, p.20

註 39) Brian McGuinness, *George Henrik von Wright, Ludwig Wittgenstein Cambridge Letters*, Blackwell Publishers Inc., 1995, p.224

2-4 | ストンボロー邸の配置図

1928年に完成したストンボロー邸は、ウィーンの一部に位置するウィーン・ミッテ (Mitte) 駅からラントシュトラーセ (Landstraße) 通りを20分ほど緩やかな坂を上った静かな住宅街の敷地に建設されている。

敷地は、クントマンガッセ (Kumdemanngasse)、パルクガッセ (Parkgasse)、ゴイザウガッセ (Geusaugasse) の3つの街路に囲まれている。また、ストンボロー邸の建築申請がおこなわれた時の配置図では、南北に長い敷地の北側部分に建築が計画されていることがわかる (図44)。また断面図からは、ストンボロー邸の地盤面は、この敷地に面する街路から非常に高い位置に設定され建設されていることがわかる (図46、47)。



図48) クントマンガッセ側のストーンボロー邸外観。この建築の正面には、大きな木が立っている。



図49) ストンボロー邸の地下に設置された巨大装置。この装置は、居間の真下に位置している。奥にはカウンターウェイトでせり上がる鉄製のシャッターが組み込まれている。

ストーンボロー邸は、この道路面との高低差により完全に周辺環境から視覚的に切り離されている。また、建物は3階建ての建築物であるが、道路からみると4階建てに相当する「巨大な建築」であると認識させられる（図48）。

当時の計画では、敷地周辺部分にはこの建築を覆い隠すように、多くの植栽が配置されている。特に敷地の南側は、非常に多くの木々が計画されており、当時の周辺の住民にとっては、建築よりもその周縁に植えられた大量の樹木の印象が強かったことを推察することができる。

また、竣工直後の敷地への出入り口は、クントマンガッセ側に配置され、建築を左手に見ながら回り込むような動線で、ゆるやかな傾斜の小道がストーンボロー邸の玄関まで続いていた。

しかし、戦後の所有権の移転およびリノベーションにより、この建築の周辺環境は下記の2点において大きく変化している。

- ① 敷地の出入り口の変更。現在は、クントマンガッセ側ではなく、パルクガッセ側からのアクセスとなっている。
- ② 高層建築物の建設。分割された敷地の南側の半分以上を占めていた植栽部分に高層の建築物が建設されている。

この建築の一階部分を高い位置に設定することにより、地下には巨大な空間が計画されている。そこには、この建築の内部環境の制御をおこなうための巨大な装置（多くの部屋の温水床暖房、ペリメーターゾーンの温風暖房、スチームラジエーターによる暖房）が組み込まれている（図49）。

註

- 1) レイ・モンク、『ウィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994, p.6
- 2) 黒崎宏、『ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、1980, p.26
- 3) *ibid.*, p.16
- 4) *ibid.*, p.17
- 5) *ibid.*, p.35
- 6) 黒崎宏、『ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、1980, p.46
- 7) Brian McGuinness, George Henrik von Wright, Ludwig Wittgenstein Cambridge Letters, Blackwell Publishers Inc., 1995, p.85
- 8) ゲオルク・ヘンリク・フォン・ライト、「ウィトゲンシュタイン小伝」、『回想のウィトゲンシュタイン』、藤本隆志訳、法政大学出版局、1974, p.14
- 9) *ibid.*7, pp.103-104
- 10) Paul Engelmann, Letters from Ludwig Wittgenstein, Horizon Pr, 1968, p.17
- 11) *ibid.*1, p.219
- 12) *ibid.*10, p.35
- 13) *ibid.*1, p.57
- 14) *ibid.*1, p.58
- 15) *ibid.*1, p.114
- 16) *ibid.*10, p.127
- 17) *ibid.*7, 1995, p.41
- 18) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.48
- 19) *ibid.*18, p.54
- 20) *ibid.*18, p.51
- 21) *ibid.*18, p.49
- 22) *ibid.*18, p.49
- 23) *ibid.*10, 94
*ibid.*1, p.158
- 24) *ibid.*10, p.50
- 25) Ilse Somavilla, Wittgenstein – Engelmann Briefe, Begegnungen, Erinnerungen, Haymon Verlag, 2006, p.78
- 26) *ibid.*
- 27) *ibid.*1, p.252
- 28) Bernhard Leitner, The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, New York

University, 1976, p.24

29) *ibid.*18, p.80

30) *ibid.*18, p.95

31) Bernhard Leitner, *Das Wittgenstein Haus*, Hatje Cantz Verlag, 2000, pp.23-24

32) *ibid.*7, p.222

33) ヘルミーネ・ウイトゲンシュタイン、「家族の回想」、『ウイトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996, p.35

34) バーナード・レイトナー、『ART VIVANT 16、ウイトゲンシュタインの建築』、磯崎新訳、西武美術館、1985, p.21

35) *ibid.*28, p.66

36) アレグザンダー・ウォー、『ウイトゲンシュタイン家の人びと』、塩原通緒訳、中央公論新社、2010、p.226
より引用、Paul Wijdeveld, *Ludwig Wittgenstein Architekt*, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.146

37) Rush Rhees, *Recollections of Wittgenstein*, Oxford Paperback Reference, 1984, p.6

38) *ibid.*28, p.20

39) *ibid.*7, p.224

図版出典

1) Paul Wijdeveld, *Ludwig Wittgenstein Architekt*, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.23

2) *ibid.*, p.172

3) *ibid.*, p.25

4) *ibid.*, p.26

5) Michael Nedo, *Ludwig Wittgenstein, Ein biographisches Album*, Beck C. H, 2012, p.37

6) *ibid.*1, p.62

7) *ibid.*1, p.27

8) *ibid.*1, p.27

9) *ibid.*1, p.28

10) *ibid.*1, p.28

11) *ibid.*5, p.198

12) *ibid.*5, p.271

13) *ibid.*5, p.134

14) *ibid.*5, p.262

15) *ibid.*5, p.229

16) *ibid.*5, pp.232-233

- 17) *ibid.* 5, p.102
- 18) *ibid.* 5, p.238
- 19) Benedetto Gravagnuolo, Adolf Loos, Rizzoli, 1982, p.195
- 20) *ibid.* 19, p.198
- 21) *ibid.* 1, p.30
- 22) Ursula A. Schneider, Paul Engelmann (1891-1965), Folio, 1999, p.10
- 23) *ibid.* 5, p.35
- 24) *ibid.* 1, p.54
- 25) *ibid.* 1, p.54
- 26) Allan Janik, Judith Bakacsy, Paul Engelmann und das mitteleuropäische Erbe, Folio, 1999, p.35
- 27) *ibid.* 1, p.55
- 28) *ibid.* 1, p.55
- 29) 石田優 (Yu Ishida) 撮影
- 30) Ralf Bock, Adolf Loos, Leben und Werk 1870-1933, Dva Dt.Verlags-Anstalt, 2009, p.67
- 31) 石田優 (Yu Ishida) 作成
- 32) *ibid.* 1, pp.58-59
- 33) *ibid.* 1, p.60
- 34) *ibid.* 1, p.100
- 35) *ibid.* 1, p.99
- 36) *ibid.* 1, p.80
- 37) *ibid.* 1, p.83
- 38) *ibid.* 1, p.87
- 39) *ibid.* 1, p.89
- 40) *ibid.* 1, p.90
- 41) *ibid.* 1, p.93
- 42) Bernhard Leitner, Das Wittgenstein Haus, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.29
- 43) *ibid.*, p.31
- 44) *ibid.* 1, p.38
- 45) Bernhard Leitner, The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, New York University, 1976, p.56
- 46) *ibid.*, p.93
- 47) *ibid.*, p.93
- 48) 小山明 (Akira koyama) 撮影
- 49) *ibid.* 29

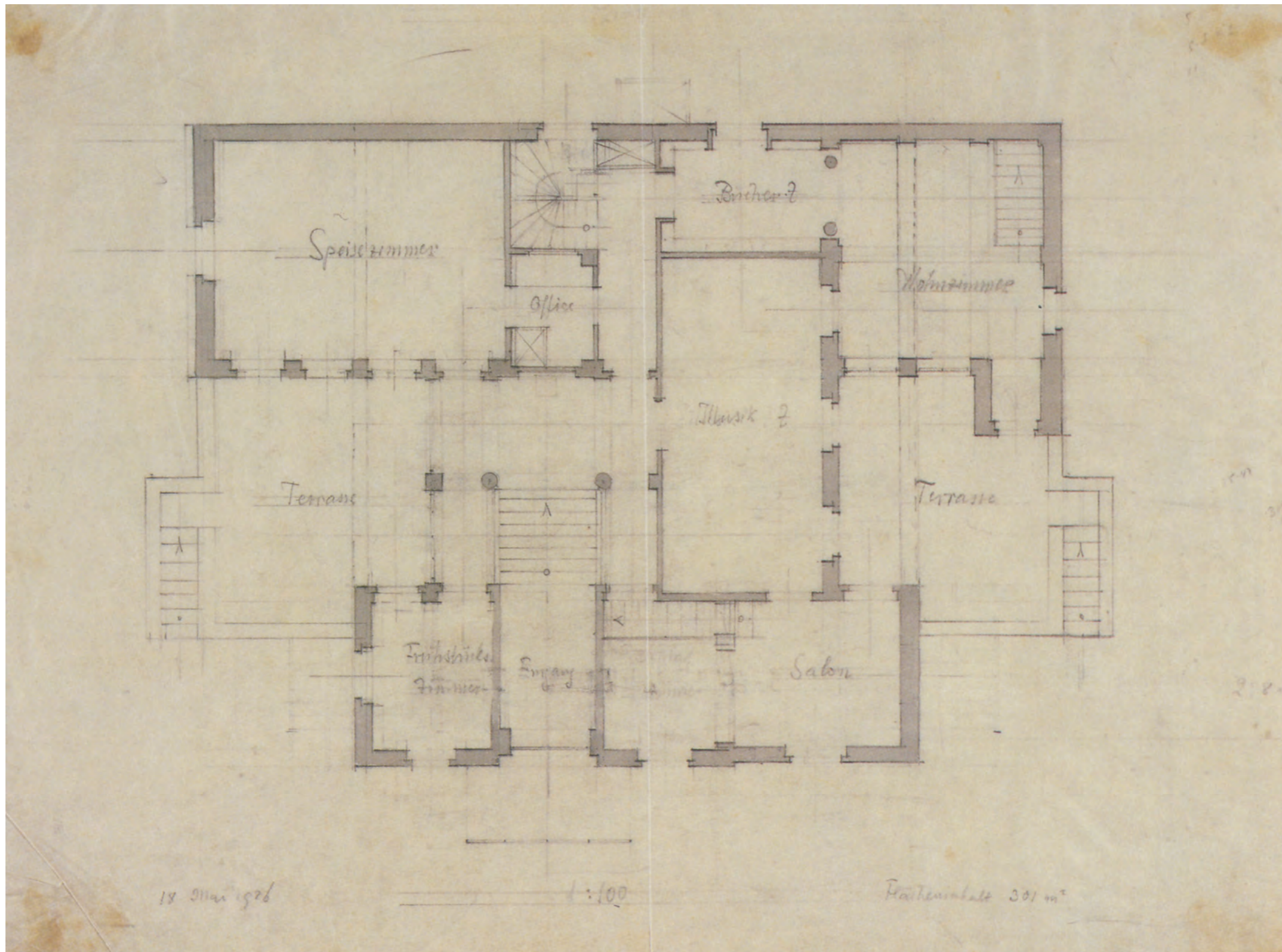


図 34) エンゲルマンのスケッチプラン(68 頁参照)

1926 年 5 月 18 日の日付が図面左下に記載されている。縮尺は 1:100 で描かれている。このプランに表記されている各部屋名を下記に示す。

- Eingang 玄関
- Frühstückszimmer 朝食室
- Salon サロン
- Musik Z. 音楽室
- Wohnzimmer 居間
- office オフィス
- Speisezimmer 食堂
- Terrasse テラス

第3章 ドアを主題とした建築

3-1 論理哲学論考について

3-2 ストンボロー邸の空間に内在する秩序

3-3 ドアと寸法体系に関する仮説

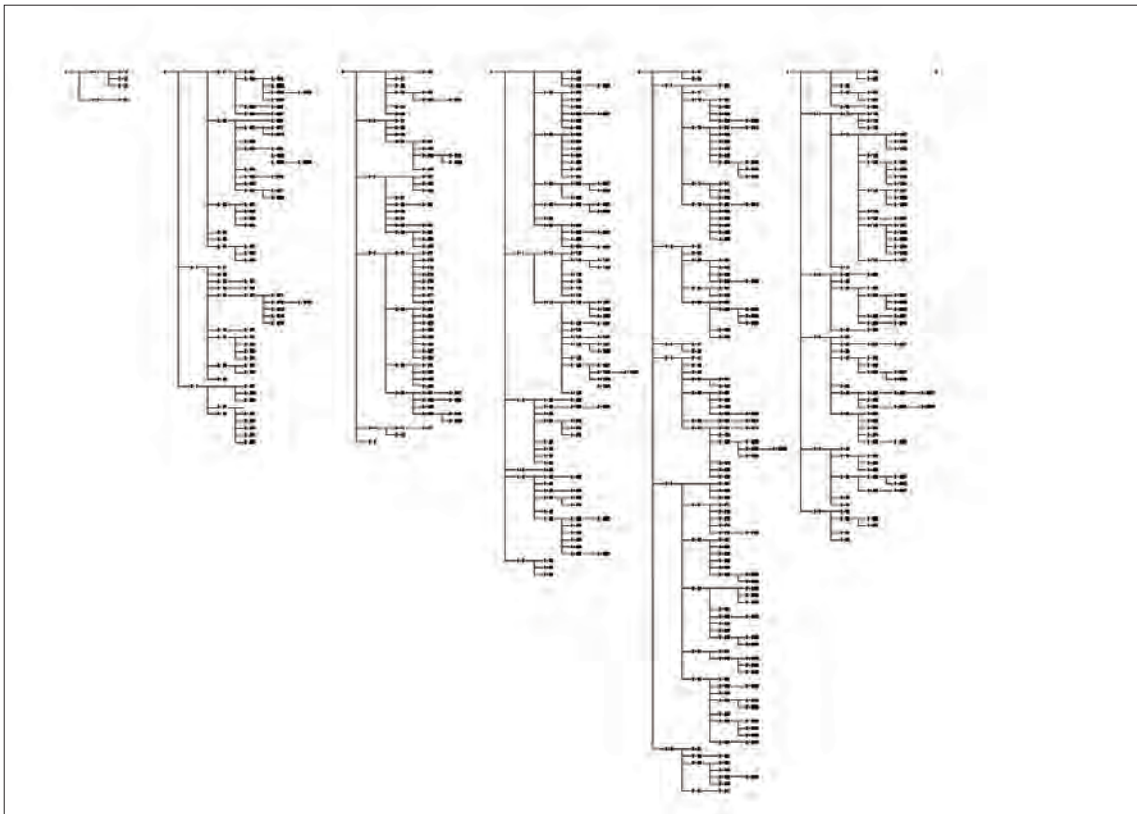


図1)『論理哲学論考』の全ての命題番号。(107
頁参照) 命題の数はわずか7つであるが、それへ
のコメント、そのコメントに対するコメントが加
えられていく。(石田作成 Yu Ishida)

第3章 | ドアを主題とした建築

3-1 | 『論理哲学論考』について

『論理哲学論考』は哲学の領域においては20世紀の哲学の方向性を大きく変えた転換点となる書物として捉えられている。

『論理哲学論考』はヴィトゲンシュタインのもうひとつの著書『哲学探究』と対になるような内容であるにも関わらず、記述の形式は全く異なっていることにその特徴がある。前者は数学の記述のように簡潔な命題とそれに対する短いコメントで成り立つような記述方式を持つものであるのに対して、後者はそれと比較するとはるかに長く饒舌な節の連続によって書籍が構成されている。

『論理哲学論考』はわずか7つの命題から構成されており、たとえば1番の命題が数行記述されると、それに対するコメントが1-1番として次に記述される。そして1-1番のコメントに対しては1-1-1番というコメントが記述されていく。こうしてわずか7つの命題は膨大な思想の空間を構築して行くことになる(図1)。

『論理哲学論考』の読者は命題と命題との論理的な関係というひとつの大きな物語を一方では頭の中に描きながら大きな宇宙を構築しつつ、一方ではこの番号によって深まって行く小宇宙の構築をおこない、その小宇宙と大きな命題によって作り出される大宇宙との様々な組み合わせのなかに自分自身の知的なアイデア(思考)を発見していくのである。

その意味では『論理哲学論考』は、ある一定の世界の真理や、あるいは哲学者からのメッセージがその中に書かれているというような種類の哲学書ではなく、読者が自分自身で思考を構築するための「装置」のような性格を持つものであるということも可能である。

実際に、『論理哲学論考』は「世界は論理的空間における事実の総和である」という言葉に始まり、以下のような

非常に短い命題とそれに対する短いコメント、そしてその短いコメントに対する短いコメントが記述されてゆき、読者が順に読み進んで行く記述形式となっている。

1

世界は成立していることがらの全体である。

2-1

われわれは事実の映像をこしらえる。

2-1512

映像は実在に与えられた物差しのようなものだ。

3

事実の論理的映像が思考である。

3-262

記号の中では表現されないものが、記号を適用するさいに現れる。

4-01

命題は実在の映像である。

6-432

世界がいかにあるか、ということは、より高次の存在にとっては、全くどうでも良いことだ。
神は世界の中には顕われない。

6-44

世界がいかにあるかが神秘的なのではない、世界があるという、その事実が神秘的なのだ。

6-53

哲学の正しい方法とは本来、次のごときものであろう。語られうるもの以外なにも語らぬこと。
ゆえに、自然科学の命題以外なにも語らぬこと。
ゆえに哲学となんのかかわりももたぬものしか語らぬこと。

そして最後は、「語りえぬものについては、沈黙しなければならない」という言葉でこの書籍が締めくくられる。

『論理哲学論考』はこのようにそれまでおよそ哲学の領

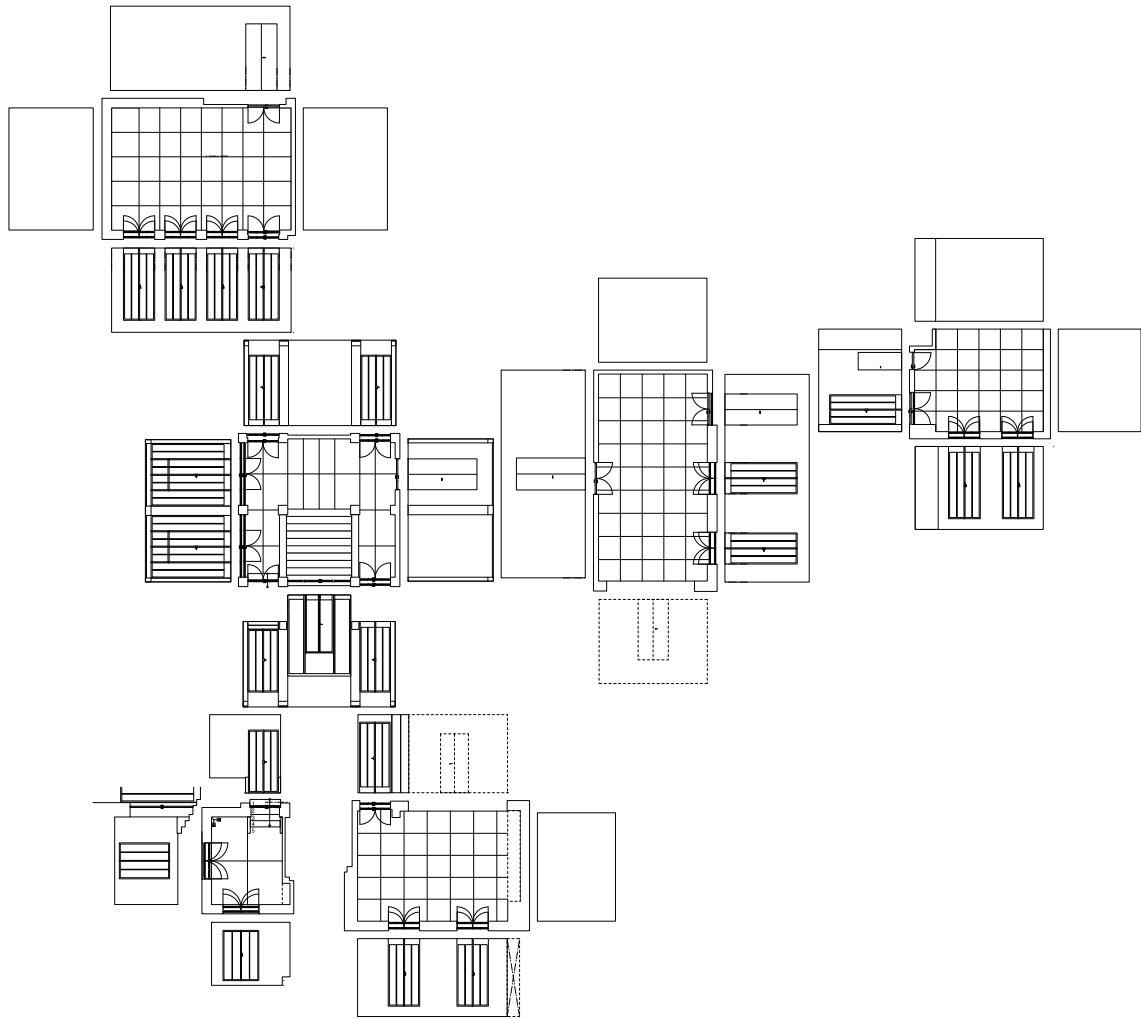


図2) ストンボロー邸主階展開図。(石田作成 Yu Ishida)

域においては使われることのなかった記述形式を使用し、それまでの哲学のあり方を否定し、新しい哲学の方法論を示すという、壮大な試みをおこなったものであるということができる。

すなわち哲学書の、その中に書かれたひとつひとつの命題やそれに対するコメントだけではなく、記述の形式そのものがここでは注目すべきであると思われる。

この書籍の重要な特徴のひとつは、全体を構成する命題が非常に簡潔であり、なおかつその数が少ないということ。最小限の言語的な構成要素から最大限の物語が構築されるという構成要素と全体を結ぶ明快なメカニズムがそこにはあるということである。

次に、小さな思考空間の任意の組み合わせによって大きな思考空間が組み立てられ、それそのものがヴィトゲンシュタインのメッセージではなく、そこに読者は自分自身の思考を構築するという、「装置」としてのメカニズムが機能しているという点が特徴としてとらえられる。

3-2 | ストンボロー邸の空間に内在する秩序

ストンボロー邸の空間構成は、ヴィトゲンシュタインの著書『論理哲学論考』の構成のように、様々な秩序の集合によって成立していると考えられることも可能である。

ヴィトゲンシュタインがこの建築について、自らその構成や設計の趣旨などの説明をおこなうことはなかったにも関わらず、このような空間の性質を想起させる要因は、『論理哲学論考』を執筆したヴィトゲンシュタインが設計に強く関与したこと、長姉ヘルミーネがその回想でこの建築に対して「住宅のかたちをした論理」^[註1]という表現を使用し、あるいは「神のための住まい」^[註2]とこの建築を表していることにある。

ストンボロー邸の主階の配置 (図2) には、たしかに主

註 1、2) Bernhard Leitner, The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, New York University, 1976, p.23



図3 左) ホール内部。ホールの中央に2本の柱が配置されている。その柱頭部分は、柱身より細くなっている。

図4 右) ホールの鉄製ドア。ホールに設置されたドアは、この鉄製のドアを除く全てのドアがガラス製である。

人であるマルガレーテの寝室や居間などの個人的な空間が配置されてはいるが、この建築が彼女の「生活の場」としてよりも、ホールやサロンなどの公的な用途で使用されていた部屋が主階の大半を占めており、これ以前に居住していた「ヴィトゲンシュタイン宮殿」と同様に「客人を招くための場」であったと推測することができる。

そうした主階の部屋の床面は「暗い黒色の大理石」が敷きつめられ、部屋の壁面は「クリーム色の塗料」が塗られ、部屋は「クリーム色」と「黒色」のふたつの色で内部空間が構成されていた。またその他の空間を構成するエレメントとしては「裸電球」「ラジエータ」「二重ドア」の構成要素がある。全ての部屋において、内部を照らす照明としては単なる「裸電球」が取り付けられており、サロンの部屋にはこの主階で最も多い3つの200W電球が取り付けられていた。ヴィトゲンシュタインが設計した「ラジエータ」の暖房器具以外にも、地下には強大な環境制御装置が組み込まれている。主階には最低限度に必要な照明と暖房器具、一方で大掛かりな装置は地下に計画することにより、内部空間の装飾的な要素は一切排除された「無装飾な空間」で主階全体が構成されている。また、その精度の高さと製作費用の高額であったことでよく知られるラジエータも、こうしたサロンや居間、食堂には配置されていない。すなわち、部屋内部には、視覚的なエレメントとしては壁とドアだけが存在するようになる。

そうした無装飾な空間が主階全体を構成している中で、特に巨大な「二重ドア」の素材は全て鉄であり、同じ塗料で塗られ、この建築全体の印象を決定している。各部屋の内部壁面あるドアは、1から4つの左右に並んだドアが同一壁面上のなかで「左右対称形」の秩序の上に配置されている。すなわち、この建築の主階の内部空間は、

- ① 無装飾な空間
- ② 巨大なドア

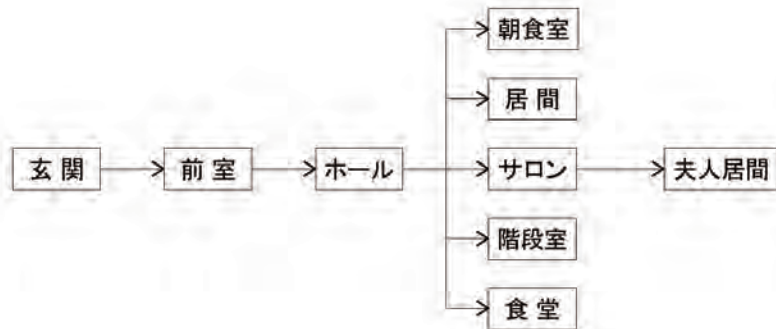


図5) ストンボロー邸の導線を示す図。



図6) ストンボロー邸平面図。

の二つの主要な建築言語によって成り立っている（図3、4）。またその中には、様々なレベルでの細部の秩序が存在していると考えられる。

前述のように、小山明は「朝食室」「居間」「サロン」「食堂」にみられる左右対称形な壁面に属するドアの数が順に「1・2・3・4」という単純な「数列」の関係にあること、またホールに設置されているドアに組付けられた「ドアハンドルの方向性」による秩序の存在を指摘している。

このドアみられる秩序は、

- ① 壁面上の左右対称形な配置
- ② 数列
- ③ ドアハンドルの方向性

が挙げることができる。

そうした秩序の中にも、『論理哲学論考』と同様の厳密なヒエラルキーがこの建築には内在していると考えられる。また、個々の秩序を考察することで、ストンボロー邸に内在する全体の秩序を導き出すことが可能であると考えられる。

3-3 | ドアと寸法体系に関する仮説

『論理哲学論考』における命題の記述の方法とストンボロー邸の空間構成との間には強い類似性が指摘されている。多木浩二は前述の『ウィトゲンシュタインの建築』(The Architecture of Ludwig Wittgenstein の和訳)の解説文において、「その内容の異様なまでの論理の厳密さと断片化、その断片の序列の仕方（つまりひとつの命題は次第に増えていく番号によって註釈され細分化されていく）」に両者に共通するものがあること、すなわち『論理哲学論考』において論じられた命題の内容そのものではなく、その記述



図7) ストンボロー邸のホールより玄関入口を見る。左手の両開き二重ドアは居間に続き、右手のドアは朝食室に続くドアである。居間に続くドアには右手用のドアハンドル、朝食室に続くドアには左手用のドアハンドルが設置され、ドアハンドルそのものがシンメトリカルに配置されていることが確認される。

の方法、正確に番号によって各行ごとにその位置づけを規定された命題と命題との関係性の表現方法に、ストーンボロー邸のヒエラルキーが厳密に表現された空間構成のあり方との強い類似性が存在していると指摘している^{〔註3〕}。

ストーンボロー邸の玄関からまっすぐに前室を抜けてホールに至ると、その空間には多くのドアがあり、これらのドアからこの建築の全ての部屋へと続く導線が始まっている(図5)。このホールを経由しない限り、どの部屋に到達することも不可能であり、ホールは機能的にもまたトポロジカルにもこの建築の中心となっている(図6)。

また、ホールを中心として朝食室・居間・サロン・食堂の4部屋が順に左回りに配置されており、それらの部屋のそれぞれの1壁面の開口部の最大数は「1・2・3・4」の数列を構成している。これらの開口部はそれぞれの部屋の内部壁面のひとつに等間隔かつシンメトリカルに配置されている。

ホールの内部空間は玄関からの導線に対して厳密に左右対称形であり、南側(玄関側)壁面の両端の左右のドア、北側の壁面の両端左右のドアには全く同形状の4つのドアが配置されている(図7)。

これらのドアにはそれぞれドアハンドルが設置されているが、ホールから玄関に向かって左側の居間に続くドアには右手用のドアハンドルが、右側の朝食室に続くドアには左手用のドアハンドルが組つけられている。すなわち、ホールのシンメトリー軸に対して「内側(軸)」にむかって両者が組みつけられていることがわかる。

一方これらと反対側の壁面にある二つの同じ形状のドア、すなわち食堂に続くドアと階段室に続くドアには、シンメトリー軸に対して「外側」に向かってドアハンドルが組みつけられている。このように、ホールのドアハンドルは、通常の建築における機能や使い勝手とは全く異なる論理で右手用・左手用の配置がなされているということができる^{〔註4〕}。

ホールおよびそれを取りまくそれぞれの部屋には、壁面

註3) 多木浩二、「ワイトゲンシュタインの家について」、『ワイトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996、pp.177-178

註4) 小山明、「ワイトゲンシュタインの建築問題」『ワイトゲンシュタイン』、河出書房新社、2011、pp.132-140

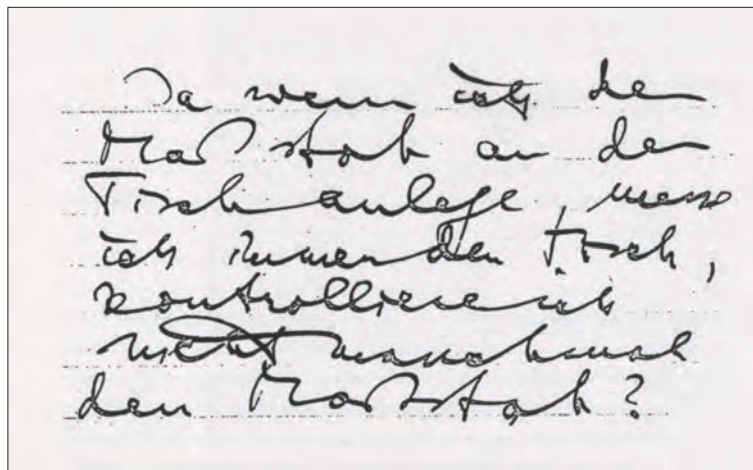


図 8) ヴィトゲンシュタインの手書きノート。

「And When I hold the ruler against the table, do I always measure the table, might I not something be checking the ruler?」

「私はテーブルに物差しをあてているが、テーブルをはかっているのだろうか、物差しをはかっているのだろうかということを考える」

上の「ドア」の配置に基づく独立した内部空間の構成秩序が存在する。一方でこれらの部屋と部屋とを接続することになる「ドア」はストーンボロー邸においては主階平面全体のホールを中心とする平面構成論理を作り出す重要な役割を担っていると考えられる。またドアそれ自体に付属するドアハンドルの組み付け方法にもその部屋の属性に従った方向性のシステムが存在している。

このように、ストーンボロー邸においては、その空間構成におけるドアの受け持つ役割が非常に大きいものであると考えられる。その意味でストーンボロー邸を建築学的にとらえる場合、ドアを手がかりに、それらの種類、配置方法、ディテールなどを比較することで、部屋と部屋との関係および全体の空間構成を把握する方法が有効であると考えられる。

本論では以下の仮説(仮の概念設定)を置き、ストーンボロー邸の中に存在するであろうドアの寸法体系を考察する。

仮説は以下のような内容とする。

1. ストンボロー邸はドアを主題とした建築である。
2. ストンボロー邸には寸法体系が存在する。

上記の「ドアを主題とした建築」「寸法体系の存在」は、以下の事実にもとづく仮説である。

1. 各部屋の壁面には少なくともひとつの左右対称性を有する壁面が存在する。
2. この壁面の左右対称性はドアの配置によって作り出されている。
3. ドアの開口部寸法と部屋の内部の寸法が各部屋においてそれぞれの自律的な空間秩序をつくりだす。
4. ドア以外の部屋内部の空間構成要素が視覚的に消去されている。
5. 部屋と部屋とをつなぐものはドアである。

註

- 1) Bernhard Leitner, The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, New York University, 1976, p.23
- 2) ibid.
- 3) 多木浩二 (Koji Taki)、「ウィトゲンシュタインの家について」、『ウィトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996, pp.177-178
- 4) 小山明 (Akira Koyama)、「ウィトゲンシュタインの建築問題」『ウィトゲンシュタイン』、河出書房新社、2011, pp.132-140

図版出典

- 1) 石田優 (Yu Ishida) 作成
- 2) ibid.
- 3) August Sarnitz, Die Architektur Wittgensteins, Böhlau, 2011, p.179
- 4) Bernhard Leitner, Das Wittgenstein Haus, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.82
- 5) ibid.1
- 6) ibid.1
- 7) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.117
- 8) ibid.4, p.16

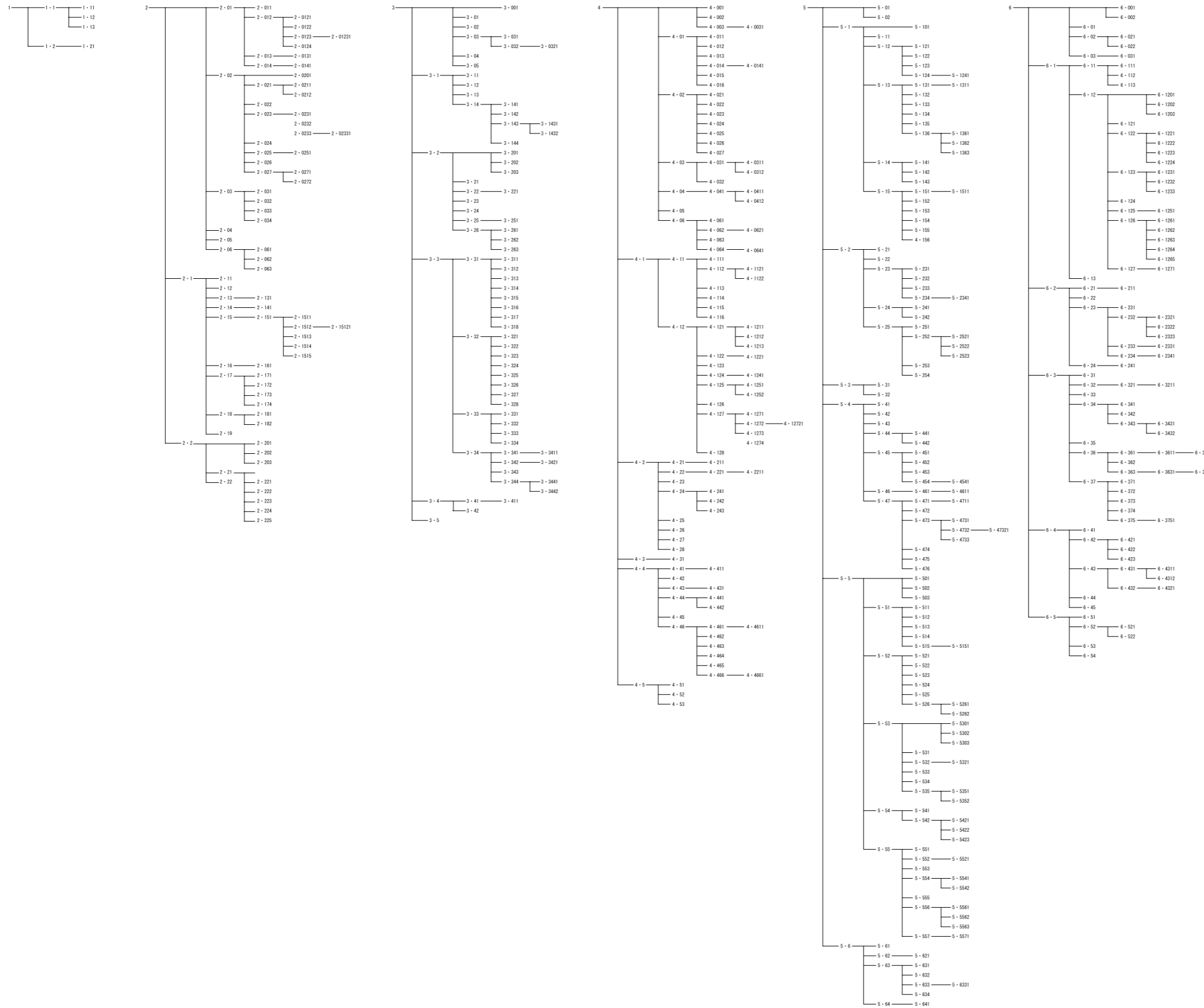


図)『論理哲学論考』のすべての命題番号 (90 頁参照)

『論理哲学論考』の命題につけられた命題番号をツリー構造の形式で表記している。『論理哲学論考』は「7」つの整数値および「519」の小数値で構成されている。例えば 3、3.1、3.14、3.143、3.1431 のように、入れ子の構造によって組み立てられている。『論理哲学論考』には全部で「526」の番号が割り当てられて構成されている。なお、そのなかで唯一「7」の命のみが単独で成立している。

「7. 語りえぬものについては、沈黙せねばならない。」

第4章 実測調査

- 4-1 実測調査について
- 4-2 既存図面
- 4-3 内部寸法表
- 4-4 内部寸法表における既存図面との比較
- 4-5 開口部寸法表および建具表
- 4-6 開口部寸法表における既存図面との比較
- 4-7 部屋の容積の比較
- 4-8 実測調査まとめ
- 4-9 図面資料

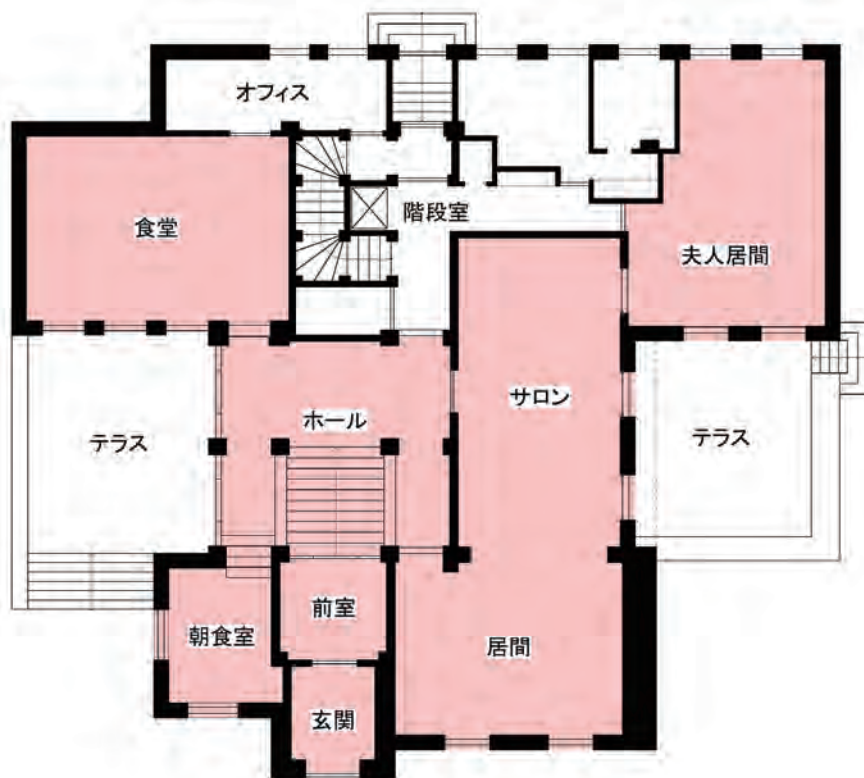


図1) 実測調査範囲を示した図。赤色で示した部屋の内および開口部に関して、2013年と2015年に実測調査をおこなった。

第4章 | 実測調査

4-1 | 実測調査について

論文執筆者はストンボロー邸の実測調査を2013年および2015年に、2回にわたりおこなった。新たに実測をおこなった理由は以下の3点にもとづくものである(図1)。

- ① ストンボロー邸はヴィトゲンシュタイン自身により、竣工後に天井高の変更がおこなわれているため、残された図面からのみでは最終的な構想の確認が不可能であること。
- ② 現在確認が可能な実施図、施工図、実測調査図(1976年)などの資料図面においては、多くの寸法情報が欠落している、もしくは互いに不一致な部分が多く存在すること。
- ③ 戦後に所有者が変わったことにより、一壁面が完全に削除されるなどの改造工事が行なわれていること。

ストンボロー邸は、ヴィトゲンシュタインによって設計され、またヴィトゲンシュタインの管理のもとに、その建設現場においても非常に精密な施工精度を要求され、建設されている。

磯崎新はそうしたオリジナルであるところの「設計図」と建設された実際の「建築」との関係は、ヴィトゲンシュタインが『論理哲学論考』において考えていた「写像理論」そのものであることを指摘し、次のように述べている。「建築物が設計図の正確な写像であるためには全てが完璧な精度で制作されねばならない」^[註1]

しかし、ヴィトゲンシュタインによって描かれた設計図面と実際の建築との間には、明らかにいくつかの差異が見られる。設計図面においては図面上に描かれている朝食室の壁面の化粧壁が実際には施工されていないこと、また逆に、ストンボロー夫人の居間のテラスに面する壁面には設計図面上は記載されていない化粧壁が施工されていること

註1) 磯崎新、「建築ヴィトゲンシュタイン」、『現代思想3月号』、青土社、1975、p.13



図2) ウィーンの不動態業者に売却され、ストンボロー邸の敷地内に高層建築が建設されている。写真は、1977年7月にゲバウアーらの実測グループによって北東より撮影されたものである。



図3) 高層建築からストンボロー邸の屋上を見る。右の通りはパークガッセ、左の通りがクントマンガッセ。



図4) BOSCH GML-50 レーザー測距器。性能は測定可能範囲：0.05 ~ 50m。

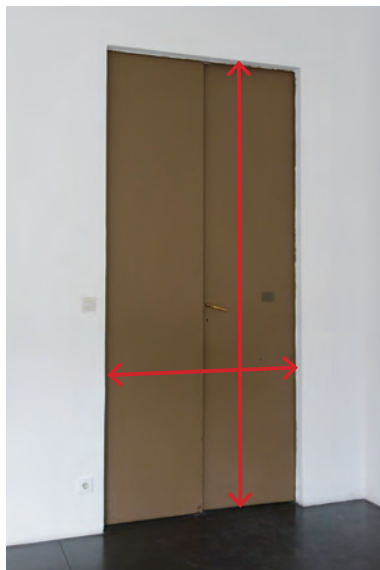


図5) 開口部寸法の測定箇所。

などである。

ヴィトゲンシュタインは竣工直後にサロンの天井高を30mm高くすることを指示し、施工業者によりその高さが実際に変更されている。

すなわち、ヴィトゲンシュタインのストーンロー邸に対する構想を正確に把握するためには、建設された実際の建築物から「寸法」を読み取る方法を選択することなくして、この建築の全容を明らかにすることは不可能であると考えられる。

また、建設時に作成された申請のための図面、施工業者によって描かれた様々な図面類には、各部屋の高さ方向の寸法の記載がないものが多く、特に朝食室に関しては、全ての情報が欠落している。本論文では、ホールとそれを取り囲む朝食室を含む5部屋の関係を問題としているため、不明な朝食室の寸法を計測することは研究にとって必要不可欠な条件となる。すなわち残された図面類からのみでは、本論で求める主階にあるドア全ての寸法体系を考察することは不可能であり、実測による正確な寸法の補完が必要とされる。

また、前述のように、ストーンロー邸は戦後になって建物の荒廃が進み、その保存運動と同時に70年代には実測調査が行なわれている。保存のためのリノベーションの直後(図2、3)には、グンター・ゲバウアーと学生等によって実測調査を記録した図面が残されている。その図面によって、はじめてストーンロー邸の戦後に変更された部分が明らかにされているが、その調査記録図面には本論が必要とする部屋の内部寸法や特に二重ドアの寸法の情報が正確には表記されていない。

本論文は、特にストーンロー邸のドアに注目している。

研究には、部屋と部屋とを接続するドアの一重ドアと二重ドアの詳細な寸法においても、二重ドアの前後両側の寸法が必要とされる。主階に存在する全てのドアの寸法を把握し、そうしたドアの寸法体系に捉えることは、この1976年の実測調査結果からは困難である。そうした既存

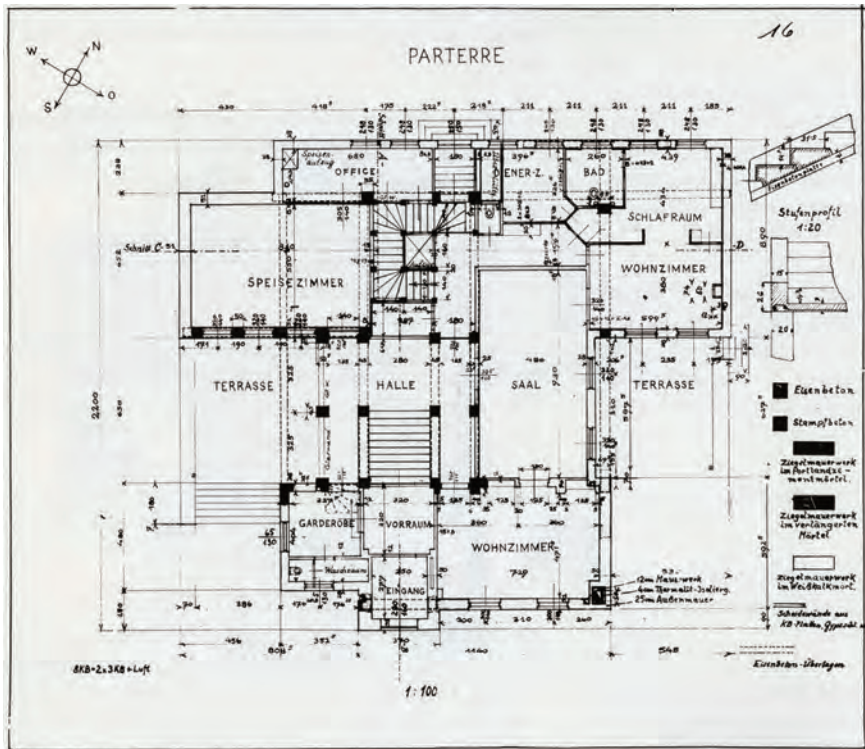


図6) 基本図面 (主階平面図)。(147 頁参照)

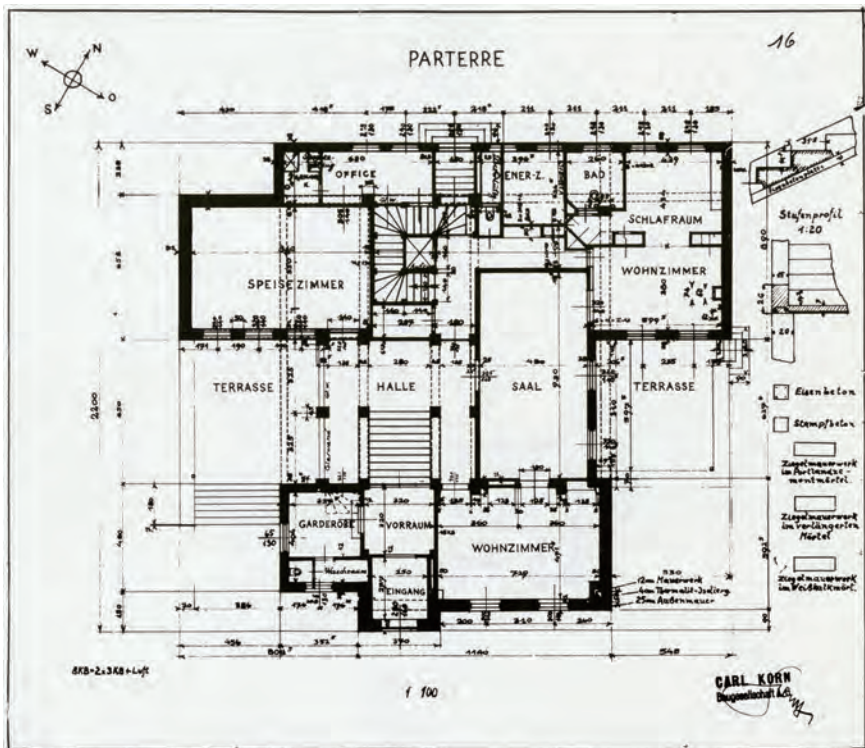


図7) 施工図面 (主階平面図)。施工業者カール・コーンが作成。(148 頁参照)

図面における現在の状況を踏まえた上で、論文執筆者は実測調査をおこなった^[註2]。

実測調査は、ストンボロー邸の現在の所有者である「ブルガリア文化研究所」の職員であるアレクサンドラ・ジダロヴァ (Alexandra Zidarova) 氏、ベラ・ガネヴァ (Vera Ganeva) 氏らの協力のもとに、一回目は2013年の冬季の11月28日、12月2日の二日間おこない、二回目は2015年の夏季の7月23日、24日、27日、28日の四日間おこなった。

測定にはボッシュ (BOSCH) 製のレーザー距離測定器 GML-50 を使用し、ミリメートルの単位で記録を行なっている (図4)。測定の対象としたのは「ホール」「朝食室」「居間」「サロン」「食堂」の5つの部屋に加えて、「玄関」「前室」「クロークルーム」「ストンボロー夫人居間」の9つの部屋、およびそれらの部屋と部屋の間にあるドアの寸法の実測を行なっている。また本論で実測をおこなった開口部寸法は、各図面に記載されている寸法表記と同じ対象を計測している。計測結果として、ドアについては、開口部寸法 (ドア枠を含んだ数値) を表記している (図5)。

註2) 研究の基盤となるストンボロー邸主階平面図は、研究者レイトナーの『The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, 1976』45頁に掲載の施工図面と、『Das Wittgenstein Haus, 2000』49頁に掲載の建築申請図面、研究者ゲバウアー『Wien・Kundmannngasse 19, 1982』の40頁に掲載の実測図面を示している。

4-2 | 既存図面

寸法を把握することが可能な、資料となる図面類としては「エンゲルマンのスケッチ」「基本図面」「施工図面」「建築申請図面」「1976年実測調査図面」の5種類の図面が存在する。そのうちストンボロー邸主階平面に関して、部屋の内部寸法とドアの寸法が確認できるのは4種類の図面である。これに論文執筆者の実測寸法を含め、下記で示した5種類の図面の寸法一覧表を作成した。

① 基本図面 (図6)

平面図の他に配置図、立面図、断面図、設備図、構造図

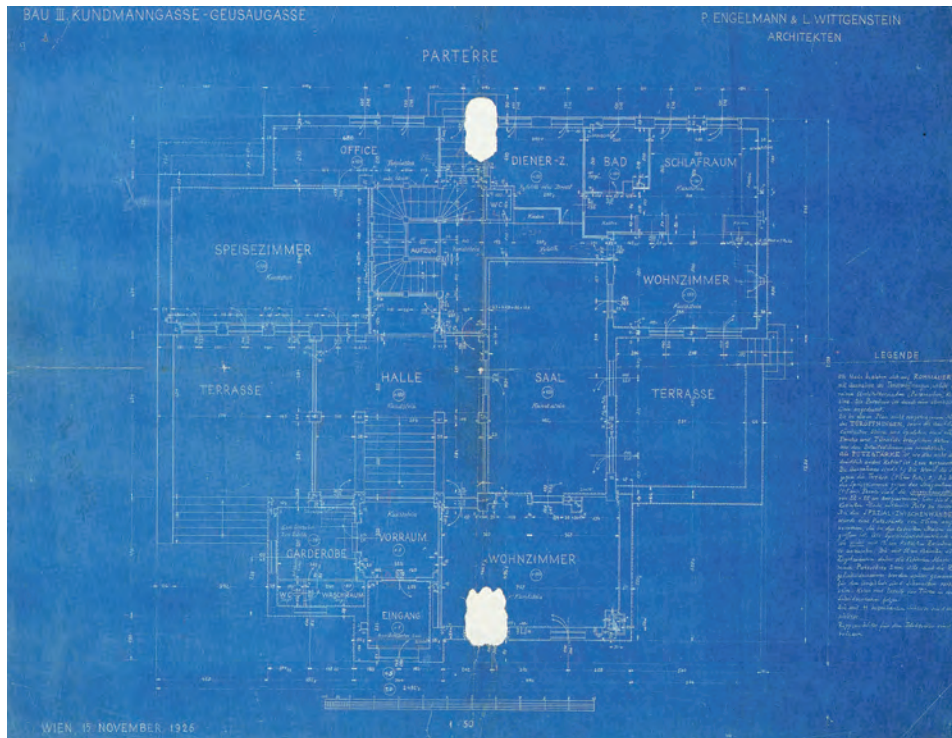


図8) 建築申請図面 (主階平面図)。(149 頁参照)

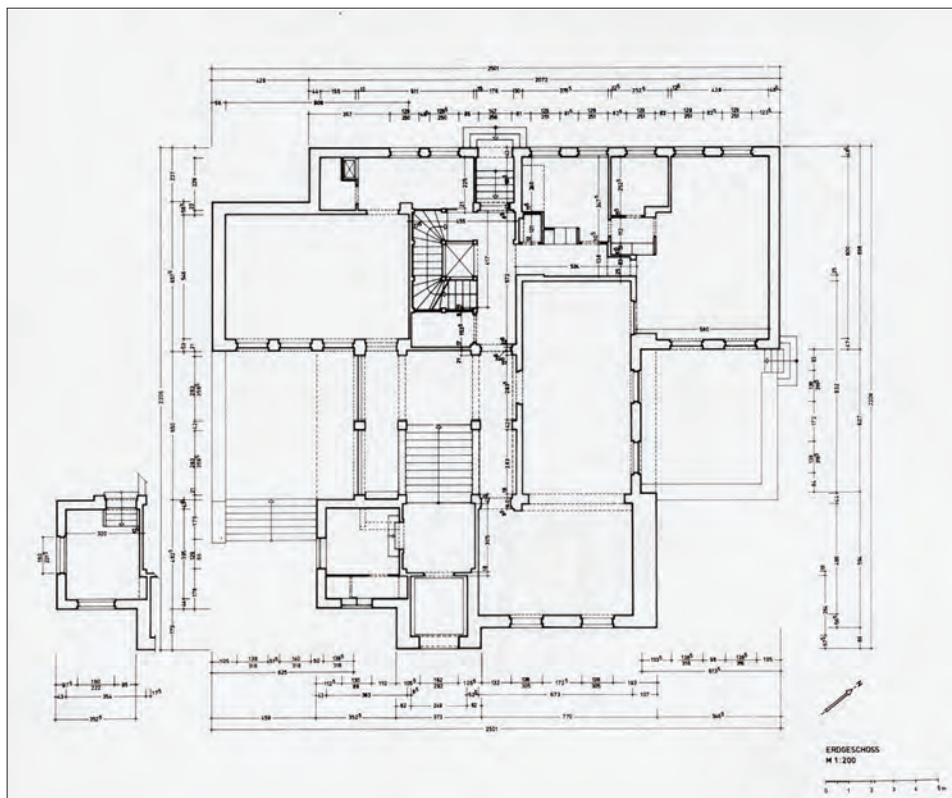


図9) ゲバウアーによる 1976 年の実測調査図面 (主階平面図)。(150 頁参照)

がある。下記の施工図面にある CARL KORN の押印はないが、申請用に初期段階に作成したものと考えられる。夫人居間の平面計画などが最終案とは異なっている。

② 施工図面（図7）

上記の基本図面の一部修正が加えられているが、図面上に記載されている寸法は同じである。建設施工会社名「CARL KORN Baugesellschaft A.G.」の押印がある。

③ 建築申請図面（以下申請図面）（図8）

図面右上には二名の設計者名「P.ENGELMANN & L.WITTGENSTEIN ARCHITEKTEN」が記され、図面上に1926年11月15日の日付が記載されている。最終的な案であり、建設されたものに近いが、細部において施工段階で変更が加えられている。

④ 1976年実測調査図面（以下76年実測図面）（図9）

リノベーション後にグンター・ゲバウアー（Gunter Gebauer）、トーマス・スペリング（Thomas Sperling）の指導学生が調査をおこなった実測調査の図面である。非常に詳細な実測をおこない、外観立面図、各階平面図、断面図などが記載されているが、寸法の記述は少なく、また朝食室を含めて高さの情報が与えられていない。二重ドアの開閉メカニズム、食堂のテラス側立面、暖房ラジエータなどの部分的な詳細図が記載されている。

⑤ 2013年・2015年実測調査図面（以下石田実測図面）

論文執筆者が実測をおこなった数値を記載している。

「基本図面」と「施工図面」においては下記の箇所の変更がみられる。

- ・ ホールから朝食室へ接続する階段形状
- ・ 居間とサロンとの間の壁面

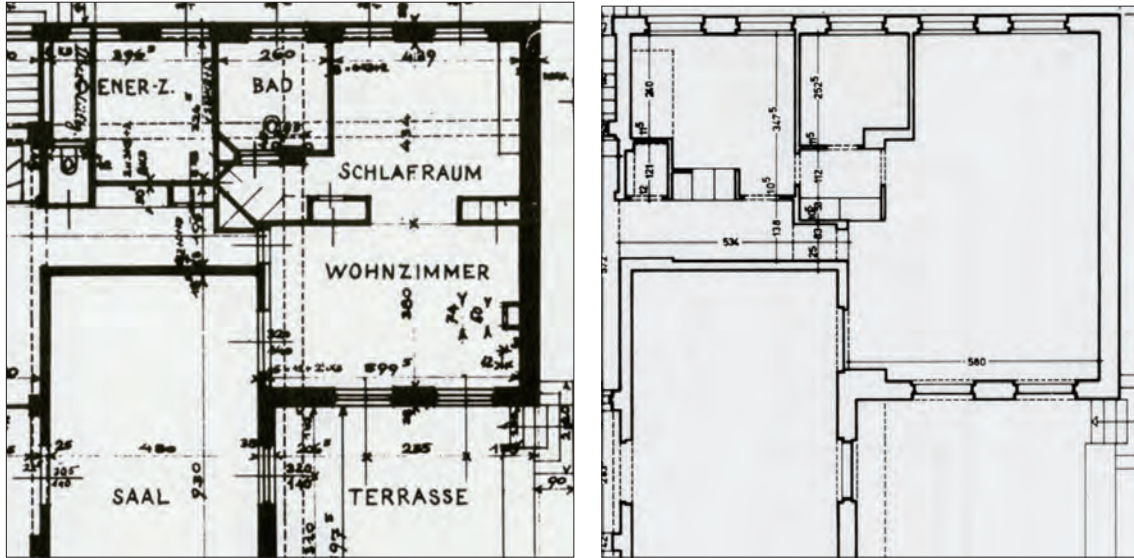


図10) 左が「施工図面」、右が「ゲバウアーの実測図面」。

	玄関 (EINGANG)			前室 (VORRAUM)			クローゼット (GARDEROBE)		
	X	Z	Y	X	Z	Y	X	Z	Y
① 基本図面	2,500	2,770	3,800	3,200	3,200	3,800	3,275	-	-
② 施工図面	2,500	2,770	3,800	3,200	3,200	3,800	3,275	-	-
③ 申請図面	2,550	2,730	-	3,220	3,220	-	3,235	2,910	-
④ 実測調査図面 (1976年)	2,490	2,640	-	-	3,050	-	-	-	-
⑤ 実測調査図面 (2013, 2015年)	2,490	2,610	3,880	3,180	3,180	3,820	3,180	2,900	2,600

	ホール (HALLE)			朝食室 (FRÜHSTÜCKSZIMMER)			居間 (WOHNZIMMER)		
	X	Z	Y	X	Z	Y	X	Z	Y
① 基本図面	▶ 8,850	▶ 6,500	3,800	3,275	4,040	-	7,290	4,710	-
② 施工図面	▶ 8,850	▶ 6,500	3,800	3,275	4,040	-	7,290	4,710	-
③ 申請図面	▶ 6,850	▶ 6,500	-	-	-	-	7,270	4,965	-
④ 実測調査図面 (1976年)	-	6,500	-	3,200	3,950	-	6,730	4,890	-
⑤ 実測調査図面 (2013, 2015年)	6,840	6,400	3,840	3,190	3,920	2,840	6,730	4,880	3,520

	サロン (SAAL)			食堂 (SPEISEZIMMER)			夫人居間 (WOHNZIMMER)		
	X	Z	Y	X	Z	Y	X	Z	Y
① 基本図面	4,800	9,300	-	8,100	5,500	3,800	5,995	3,800	3,800
② 施工図面	4,800	9,300	-	8,100	5,500	3,800	5,995	3,800	3,800
③ 申請図面	4,825	9,340	-	8,115	5,480	-	5,880	3,800	-
④ 実測調査図面 (1976年)	▶ 4,780	9,320	-	8,080	5,460	-	5,800	-	-
⑤ 実測調査図面 (2013, 2015年)	4,780	9,340	3,790	8,080	5,460	3,790	5,790	4,620	3,730

表1) 内部寸法表。(151頁参照)

- ・ 夫人寝室と夫人居間の中の壁面
- ・ 廊下から夫人居間に入る廊下側の壁面
- ・ オフィスを二つに分け隔てる壁面

次に「基本図面」と「申請図面」においては、下記の箇所に変更がみられる。

- ・ ホールから朝食室へ接続する階段形状
- ・ 廊下から夫人居間に入る廊下側の壁面

これら各図面においては、微小な変更がおこなわれた箇所がみられる。一方、70年代の実測図「ゲバウアー実測図面」と最も類似しているのは「施工図面」であり、下記の箇所において図面上で一致している。

- ・ ホールから朝食室へ接続する階段形状
- ・ オフィスを二つに分け隔てる壁面
- ・ 廊下から夫人居間に入る廊下側の壁面

しかし、「施工図面」と「ゲバウアーの実測図面」とでは、夫人居間の間仕切りとなっている壁面の有無、朝食室の内部壁面の化粧壁の有無など、ふたつの部分が特に異なっていることが確認される（図 10）。

4-3 | 内部寸法表

内部寸法表は、上記の図面「基本図面」「施工図面」「申請図面」「76年実測図面」「石田実測図面」において表記されている内部寸法および開口部寸法の数値を抽出し表にすることで、既存の図面において記載されていた寸法を整理するとともに、それぞれの図面において欠落していた寸法の部分を明らかにしている。

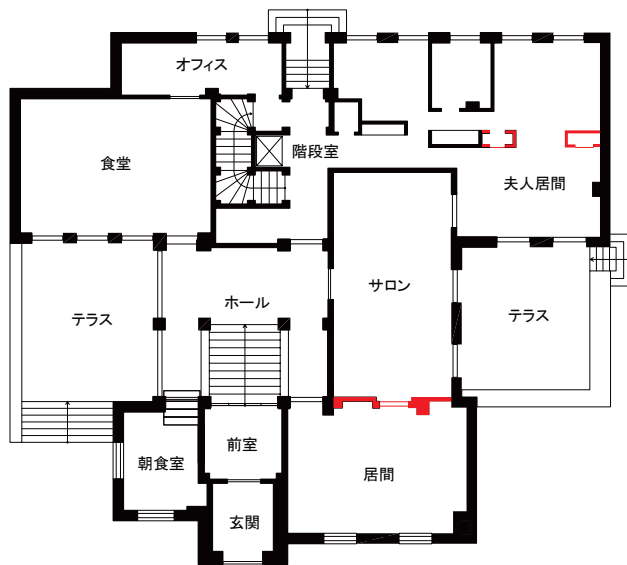


図 11) ストンボロー邸の主階。1970年代の改造で取り壊された壁面を赤色で示している。



図 12) 改造によって取り除かれた居間とサロンを接続するドアが設置されていた壁面。現在は、床のタイルの目地の差異において、2つの部屋であったことが確認することができる。



図 13) 壁面の色。改造で内部空間の壁面の塗装が変更されてしまったが、ホールとサロンを隔てる壁面のサロン側には、改造で塗装が変更される以前のクリーム色の壁面を現在も確認することができる。

「内部寸法表」は、それぞれの部屋の下記部分の寸法を示したものである（表1）。

左側の欄に各図面の名称、上部の左右方向には各部屋の名前を示している。また平面図の横軸方向を「X」、縦軸方向を「Z」、高さを「Y」として示している。寸法の数値の前の「▶」の記号は、図面にはその箇所についての寸法に関して記載はなかったが、周囲の数値から算出することが可能であった寸法を示している。また「-」は図面に寸法の記載のないものを示している。

ストンボロー邸は、ブルガリア文化研究所が購入し現存しているが、1970年代後半にリノベーションが行なわれている（図11）。この際に本来の住宅の用途からの変更がおこなわれている。地下および主階は展示空間となり、2階および3階は事務室に変更され、2階の正面ファサードに並ぶ3部屋を隔てる壁面は全て取り除かれて一室となり会議室として使用されている。

またもっとも大きな変更は主階のサロンと居間を隔てていた壁面が取り除かれたことであり、これにより二つの部屋を接続していたドアそのものがなくなっている（図12）。

なお、居間の南東にあった煙突および東側壁面の書棚全体を壁の向こう側に埋めるために厚い化粧壁を設けたことにより、内部寸法表の「基本図面」「施工図面」「申請図面」と「76年実測図面」「石田実測図面」の（X）の寸法は560ミリメートル程度異なっている。

またそうした図面の寸法によるもの以外に、リノベーションにより最も変更されたのは、壁面の色とヴィトゲンシュタインが意図的に塗装をおこなわなかったラジエータの色である。それらは、ウィーンの建設会社によって現在はクリーム色から「白色」に塗り替えられている（図13）。

	玄関 (EINGANG)			前室 (VORRAUM)			クローゼット (GARDEROBE)		
	X	Z	Y	X	Z	Y	X	Z	Y
① 基本図面	2,500	2,770	3,800	3,200	3,200	3,800	3,275	-	-
② 施工図面	2,500	2,770	3,800	3,200	3,200	3,800	3,275	-	-
③ 申請図面	2,550	2,730	-	3,220	3,220	-	3,235	2,910	-
④ 実測調査図面 (1976年)	2,490	2,640	-	-	3,050	-	-	-	-
⑤ 実測調査図面 (2013, 2015年)	2,490	2,610	3,860	3,180	3,180	3,820	3,160	2,900	2,600

	ホール (HALLE)			朝食室 (FRÜHSTÜCKSZIMMER)			居間 (WOHNZIMMER)		
	X	Z	Y	X	Z	Y	X	Z	Y
① 基本図面	▶ 6,850	▶ 6,500	3,800	3,275	4,040	-	7,290	4,710	-
② 施工図面	▶ 6,850	▶ 6,500	3,800	3,275	4,040	-	7,290	4,710	-
③ 申請図面	▶ 6,850	▶ 6,500	-	-	-	-	7,270	4,965	-
④ 実測調査図面 (1976年)	-	6,500	-	3,200	3,950	-	6,730	4,890	-
⑤ 実測調査図面 (2013, 2015年)	6,840	6,400	3,840	3,190	3,920	2,840	6,730	4,880	3,520

	サロン (SAAL)			食堂 (SPEISEZIMMER)			夫人居間 (WOHNZIMMER)		
	X	Z	Y	X	Z	Y	X	Z	Y
① 基本図面	4,800	9,300	-	8,100	5,500	3,800	5,995	3,800	3,800
② 施工図面	4,800	9,300	-	8,100	5,500	3,800	5,995	3,800	3,800
③ 申請図面	4,825	9,340	-	8,115	5,480	-	5,880	3,800	-
④ 実測調査図面 (1976年)	▶ 4,790	9,320	-	8,080	5,460	-	5,800	-	-
⑤ 実測調査図面 (2013, 2015年)	4,780	9,340	3,790	8,080	5,460	3,790	5,790	4,620	3,730

表2) 内部寸法表。上から「基本図面」「施工図面」「申請図面」「76年の実測図面」「石田実測図面」。それぞれの図面において、各部屋の欠落した箇所の寸法を赤色で示している。



図14) ストンボロー邸平面図。竣工当時の状態を再現している。

4-4 | 内部寸法表における既存図面との比較

内部寸法表において、既存の図面において寸法の記載が欠落していた箇所は下記の通りであることがわかった（表2、図14）。

① 基本図面、② 施工図面

「X」：全てにおいて記載有り

「Z」：クロークルーム

「Y」：クロークルーム、朝食室、居間、サロン

③ 建築申請図面

「X」：朝食室

「Z」：朝食室

「Y」：玄関、全室、クロークルーム、ホール、朝食室、居間、サロン、食堂、夫人居間

④ 76年実測図面

「X」：前室、クロークルーム、ホール、

「Z」：クロークルーム

「Y」：玄関、全室、クロークルーム、ホール、朝食室、居間、サロン、食堂、夫人居間

「基本図面」「施工図面」に記載されている寸法は等しいが、「申請図面」と比較すると15mmから100mm程度の差異があることが確認できる。すなわち、ヴィトゲンシュタインによって書かれた設計図面においても微小ではあるが寸法の差異があることがわかる。また「76年実測図面」と「石田実測図面」においては、10mmから130mm程度の差異があることが確認される。ストーンボロー邸の施工現場において用いられたと考えられる「施工図面」と、実際の建築から今回実測をおこなった「石田実測図面」とでは、最大で、夫人居間の「X」が205mm異なり、この箇所以外においても10mmから170mm程度の差異が見出された。しかし、それは施工現場での施工精度によるもので

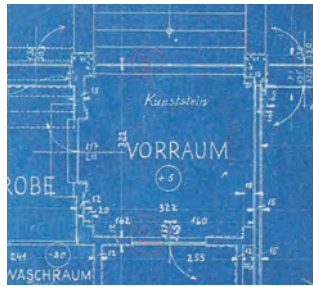


図15) 建築申請図面。前室の寸法「X」および「Y」はともに 3,220mm の正方形である。

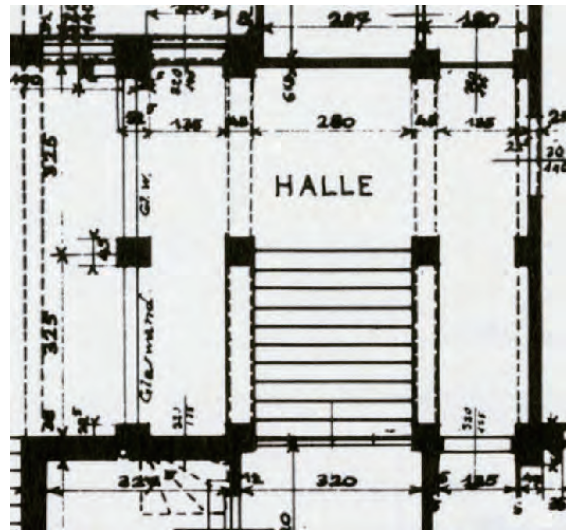
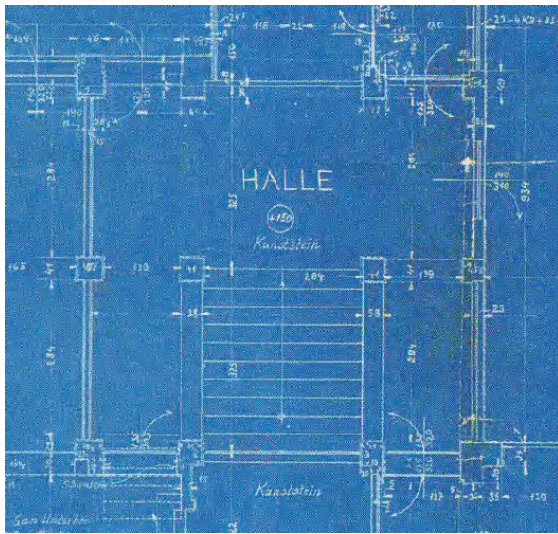


図16左)「申請図面」のホール部分の寸法表記。
 図17右)「施工図面」のホール部分の寸法表記。
 「申請図面」と同様に寸法の表記方法は「X」「Y」ともに同じである。



図18左)「基本図面」の寸法表記。玄関のドアは (W:1,600、H:2,900) である。
 図19右)「施工図面」の寸法表記。玄関のドアは (W:1,600、H:2,900) である。

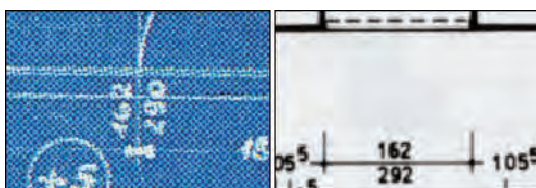


図20左)「申請図面」の寸法表記。玄関のドアは (W:1,620、H:2,900) である。
 図21右)「76年実測図面」の寸法表記。玄関のドアは (W:1,620、H:2,920) である。

あると考えられる。また、どちらも実測調査の結果である「76年実測図面」と「石田年実測図面」寸法の数値が異なるのは、実測調査に使用した器具の精度などによるものであると考えられる。

そうしたなかで、「前室」の内部寸法「X」「Y」の寸法は「基本図面」「施工図面」「申請図面」「石田実測図面」各図面では40mm程度の誤差はあるが、個々の図面では寸法は等しいことが確認される。すなわち「前室」の内部空間は、比率において「1:1」であり、主階にある部屋で唯一正方形の部屋であることがわかる（図15）。

「基本図面」「施工図面」「申請図面」のホールの寸法は共通して「X」は6,850mm、「Z」は6,500mmであることが確認される。しかし、全長はいずれも同じであるにも関わらず、柱の寸法と柱間の寸法が調整されており、すなわち全長の分割の方法が異なっていることが確認された。

「申請図面」は、ホールとテラスの二重のドアのホール側に設置されているドアから柱の隅までが205mm、柱と柱の間が1,390mm、柱の径が410mm、ホール中央にある二つの柱間は2,840mmとなり、左右対称になるように右側も左側と同様に410mmの柱、1,390mm、205mmとなっている（図16）。

一方、「基本図面」「施工図面」では、ホール側のドアから柱の隅までは225mm、柱と柱が1,350mm、柱の径は450mm、ホール中央にある二つの柱間は2,800mmであり、450mm、1,350mm、1,225mmの順序で寸法が構成されている（図17）。すなわち、ホールの「X」軸の寸法においては、内部空間を構成する柱の大きさ、柱の間隔、ドアと壁の関係は異なっているが、どちらの図面においても左右対称形に構成された寸法で計画されていることが確認された。また、「石田実測図面」の「X」の寸法は、6,840mmであるが、「基本図面」「施工図面」「申請図面」と同様に見られた左右対称形を整えるための寸法の配列に変更はないことが確認された。

	外部→玄関		玄関→前室		前室→クローゼット		クローゼット→外部		前室→ホール		ホール→新食堂		ホール→居間		居間→ホール	
	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H
① 基本図面	1,800	2,800	-	-	-	-	-	-	-	-	1,350	3,200	1,250	3,200	-	-
② 施工図面	1,800	2,800	-	-	-	-	-	-	-	-	1,350	3,200	1,250	3,200	-	-
③ 申請図面	1,820	2,900	1,370	2,850	1,170	2,110	1,300	850	-	-	1,350	3,050	1,350	3,200	-	-
④ 実測調査図面, 1976年	1,820	2,920	-	-	-	-	1,290	860	-	-	-	-	-	-	-	-
⑤ 実測調査図面, 2013, 2015年	1,810	2,930	1,350	2,790	1,180	2,210	1,300	870	1,330	2,670	1,380	2,860	1,380	3,200	1,380	3,200

	ホール→サロン		ホール→階段室		階段室→ホール		ホール→食堂		食堂→ホール		ホール→テラス		テラス→ホール		新食堂→外部	
	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H
① 基本図面	1,400	3,050	1,350	3,200	-	-	1,350	3,200	-	-	-	-	-	-	1,600	2,220
② 施工図面	1,400	3,050	1,350	3,200	-	-	1,350	3,200	-	-	-	-	-	-	1,600	2,220
③ 申請図面	1,400	3,100	1,350	3,200	-	-	1,350	3,200	-	-	-	-	-	-	-	-
④ 実測調査図面, 1976年	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1,600	2,215
⑤ 実測調査図面, 2013, 2015年	1,440	3,100	1,380	3,200	1,380	3,200	1,360	3,200	1,410	3,250	1,420	2,820	1,420	2,820	1,620	2,280

	居間→外部		外部→居間		サロン→テラス		テラス→サロン		サロン→夫人居間		夫人居間→サロン		夫人居間→テラス		テラス→夫人居間	
	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H
① 基本図面	1,400	3,000	-	-	-	-	1,400	3,200	-	-	1,400	3,200	-	-	-	-
② 施工図面	1,400	3,000	-	-	-	-	1,400	3,200	-	-	1,400	3,200	-	-	-	-
③ 申請図面	1,400	3,050	-	-	-	-	1,400	3,200	-	-	1,400	3,200	-	-	1,420	3,200
④ 実測調査図面, 1976年	1,380	3,050	1,380	3,050	-	-	1,380	3,165	-	-	-	-	-	-	1,385	3,160
⑤ 実測調査図面, 2013, 2015年	1,410	3,040	1,370	3,000	1,430	3,250	1,380	3,160	1,430	3,250	1,340	3,240	1,430	3,250	1,370	3,200

	夫人居間→階段室		夫人居間→外部		食堂→テラス		テラス→食堂		食堂→オフィス		居間→サロン		サロン→居間	
	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H
① 基本図面	-	-	1,300	2,480	1,400	3,200	-	-	1,400	3,050	1,250	-	1,300	-
② 施工図面	-	-	1,300	2,480	1,400	3,200	-	-	1,400	3,050	1,250	-	1,300	-
③ 申請図面	720	1,850	1,300	2,480	-	-	1,400	3,200	1,370	3,000	1,250	2,850	1,330	2,720
④ 実測調査図面, 1976年	-	-	1,290	2,510	-	-	1,385	3,180	-	-	x	x	x	x
⑤ 実測調査図面, 2013, 2015年	785	1,890	1,320	2,540	1,410	3,280	1,380	3,170	1,410	3,000	x	x	x	x

表3) 開口部寸法表。(152頁参照)

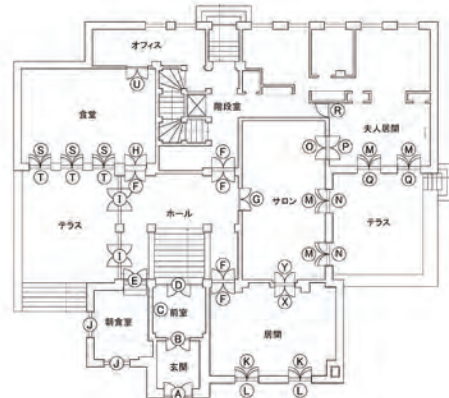
番号	A	B	C	D	E	F	G	H	I
設置箇所	外部→玄関	玄関→前室	前室→クローゼット	前室→ホール	ホール→新食堂	ホール→居間・サロン階段室 新食堂→外部	ホール→サロン	食堂→ホール	テラス→ホール・ホール→テラス
形状	ガラス製ドア	ガラス製ドア	鉄製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア	ガラス製・磨りガラス製ドア	ガラス製ドア	磨りガラス製ドア	ガラス製ドア
サッシ	W 1,610	1,350	1,160	1,330	1,380	1,380	1,440	1,410	1,420
寸法	H 2,930	2,790	2,210	2,670	2,860	3,200	3,100	2,820	2,820

番号	J	K	L	M	N	O	P	Q	R
設置箇所	新食堂→外部	居間→外部	外部→居間	サロン・夫人居間→テラス	テラス→サロン	サロン→夫人居間	夫人居間→サロン	テラス→夫人居間	夫人居間→階段室
形状	ガラス製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア	鉄製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア
サッシ	W 1,620	1,410	1,370	1,430	1,380	1,430	1,340	1,370	785
寸法	H 2,260	3,040	3,000	3,250	3,160	3,250	3,240	3,200	1,950

番号	S	T	U	X	Y
設置箇所	食堂→テラス	テラス→食堂	食堂→オフィス	居間→サロン	サロン→居間
形状	ガラス製ドア	ガラス製ドア	鉄製ドア	鉄製ドア	鉄製ドア
サッシ	W 1,410	1,380	1,410	1,250	1,330
寸法	H 3,250	3,170	3,000	2,650	2,720

表4) 建具表。(153頁参照)

図22右) ストンボロー邸ドアの配置図。



4-5 | 開口部寸法表および建具表

開口部寸法表は、「玄関」「前室」「クロークルーム」「ホール」「朝食室」「居間」「サロン」「食堂」「夫人居間」の全てのドアについて、二重ドアに関しては前後をそれぞれ分けることで全ての開口部寸法の表記をおこなっている。

図面「基本図面」「施工図面」「申請図面」「76年実測図面」のドア寸法に関する記載方法であるが、ドアの幅とドアの高さは下記のように上下に並べて表記をおこなう表現方法が使用されている。

① 基本図面の表記（図 18）

上がドアの高さ、下がドアの幅

② 施工図面の表記（図 19）

上がドアの高さ、下がドアの幅

③ 建築申請図面の表記（図 20）

上がドアの幅、下がドアの高さ

④ 1976年実測調査図面の表記（図 21）

上がドアの幅、下がドアの高さ

「石田実測図面」では、「基本図面」「施工図面」「申請図面」と同じ部分の実測をおこなっている。その為、ドアの枠を含む開口部寸法の実測をおこなっている。

開口部寸法表（表 3）の表中の室名と室名の間にある矢印記号「→」については、例えば「ホール」と「居間」は同じ位置にある二重ドアの前後の寸法と形状を示しているが、開口部の大きさが異なるため、矢印の手前から奥にある部屋に向かって手前側の寸法を記述していること示している。「-」は図面に寸法の記載ないもの、あるいは寸法の割り出しが不可能であったものを示している。

開口部寸法表に基づき、一重のドアおよび二重ドアの寸法（幅・高さ）、ドアハンドル（方向・高さ）につい

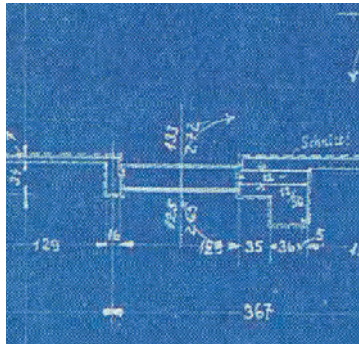


図 23) 居間とサロンをつなぐ二重ドア平面図。上側がサロン、下側が居間。居間側のドアの寸法は (W:1,250、H:2,450)、サロン側のドアは (W:1,330、H:2,720) であり、居間側に設置しているドアの方が小さいことがわかる。

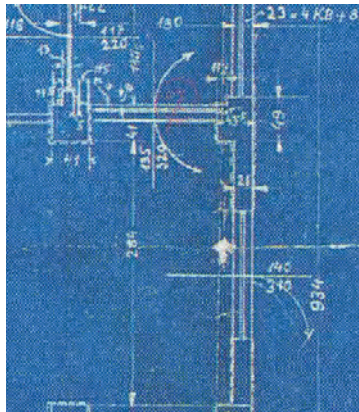


図 24) ドアの開閉記号および寸法。「基本図面」、「施工図面」にはドアの開き方の記載がみられなかったが、「申請図面」にはドアの開き方の記載がある。図面では、ホールの四隅に配置された右上のホールから階段室へ続く二重ドアの箇所である。そのドアは両側に開くことが表示されている。また、ホールからサロンへ続く一重のドアは、サロンに向かって押して入るドアであることがわかる。

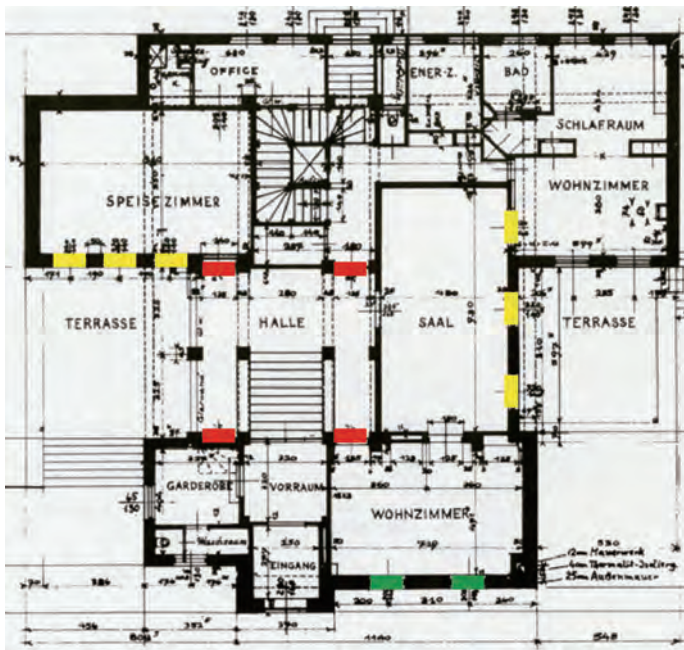


図 25) 「施工図面」のドア寸法 (幅・高さ) が同寸のドアを示した図。赤は W: 1,350、H: 3,200、緑色は W: 1,400、H: 3,000、黄色は W: 1,400、H: 3,200 の寸法。

て記載したものを建具表に示す(表4、図22)。これにより、二重ドアの前後で寸法が異なる場合においても、両側のドアを分けて記載していることにより、主階にある全てのドアの寸法および形状の把握が可能となっている。建具表に対応するドアの配置を図19)に示している。それらの二つの図ではドアの設置場所を示すために、共通記号「A」から「U」を使用している。なお、前述のように現在はサロンと居間との間を隔てる壁面は現存しないため、この壁面および、壁面内に設置されていた二重ドアは「申請図面」より寸法を読み取り記入している。このため、「X」および「Y」の寸法は「申請図面」より転載した寸法となっている。これにより、全てのドアの寸法が整理・確認された。

4-6 | 開口部寸法表における既存図面との比較

「基本図面」「施工図面」「申請図面」の二重ドアが設置されている箇所の壁面は、その平面図上においても同じ長さの線で描かれるなど、その二重ドアの前後が同じディテールで書かれているため、寸法は前後で統一してひとつの寸法で表記していたことが推測できる。

しかし例外は、「申請図面」において居間とサロンを接続する二重ドアのみは、前後で異なる寸法を個別に記載していることである(図23)。そのことから、「基本図面」「施工図面」「申請図面」の二重ドアの寸法表記においては、数値が表記されている側の部屋のドアの寸法を指しているものと考えられる。

また、この「申請図面」においてのみドアの開き方が円弧の矢印を使用して表記されている。その開き方は、実際に設置されているドアと同じであることが確認された(図24)。

「76年実測図面」に記載されているドア寸法は、部屋と部屋を接続するドアの寸法が記載されていない。また部屋

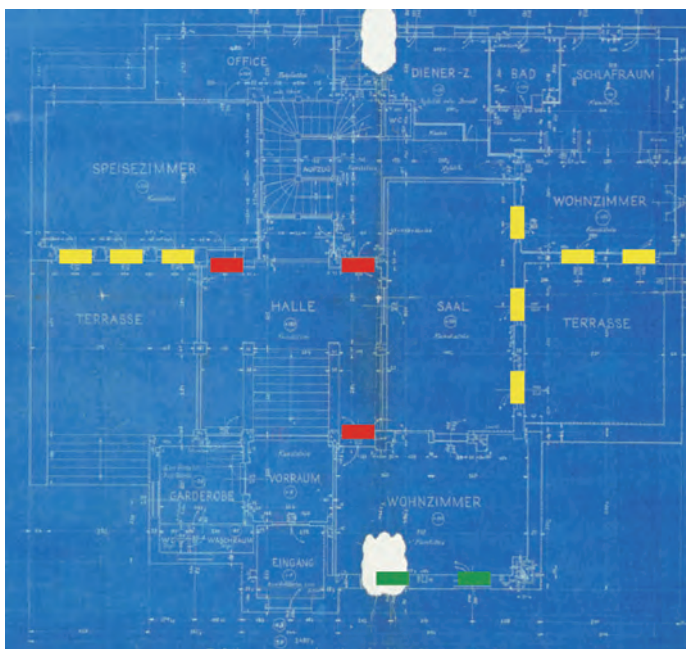


図26)「申請図面」のドア寸法(幅・高さ)において同寸のドアを示した図。赤は W: 1,350、H: 3,200、緑は W: 1,400、H: 3,000、黄は W: 1,400、H: 3,200 の寸法。「施工図面」では夫人居間とテラスをつなぐドア寸法の記載がみられないが、この図面には記載されている。また、そのドアは、食堂の4つに並ぶドアと同じ寸法で計画されていることがわかる。

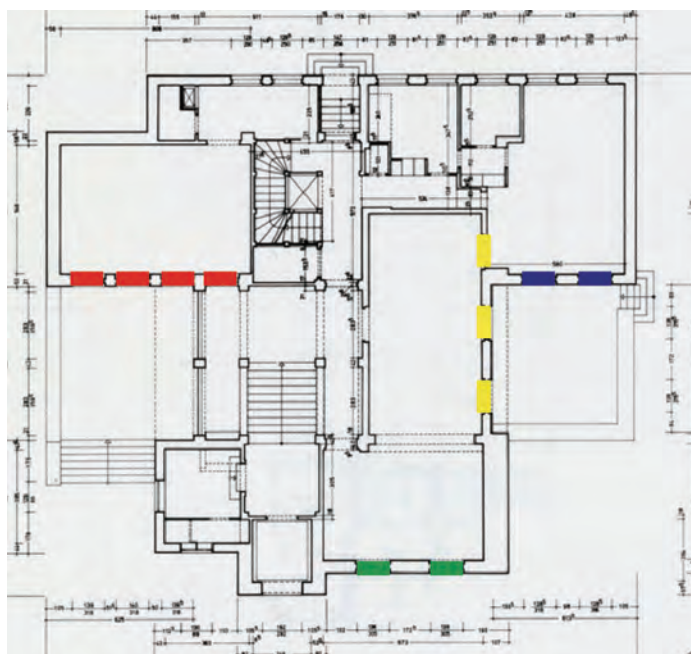


図27)「76年実測図面」のドア寸法(幅・高さ)の同寸のドアを示した図。赤は W: 1,395、H: 3,180、緑色は W: 1,380、H: 3,050、黄色は W: 1,380、H: 3,165、青色は W: 1,385、H: 3,160 の寸法。

と外部を接続するドアにおけるドア寸法は全て外側のドア寸法が記載されていることがわかる。

次に、「基本図面」「施工図面」にはドアの寸法の記載はないが「申請図面」に記載されているのは以下の場所である。

玄関→前室
前室→クロークルーム
夫人居間→テラス
居間→サロン

各図面において時間が経つに従って、ドアの寸法が書き加えられていることがこれにより確認される。

「基本図面」「施工図面」「申請図面」の全ての図面においてドア寸法の記載がないものは下記の通りである。

前室 → ホール
ホール → テラス

次に「基本図面」「施工図面」「申請図面」「76年実測図面」において、それぞれの部屋の左右対称性を構成するエレメントとなる、同一寸法のドアを下記に示す。

① 基本図面、② 施工図面 (図 25)

ホール → 食堂・階段室 (W: 1,350、H: 3,200)
ホール → 朝食室・居間 (W: 1,350、H: 3,200)
居間 → 外部 (W: 1,400、H: 3,000)
サロン → テラス・夫人居間 (W: 1,400、H: 3,200)
食堂 → テラス (W: 1,400、H: 3,200)

③ 建築申請図面 (図 26)

ホール → 食堂・階段室 (W: 1,350、H: 3,200)
居間 → 外部 (W: 1,400、H: 3,000)
サロン → テラス・夫人居間 (W: 1,400、H: 3,200)
食堂 → テラス (W: 1,400、H: 3,200)

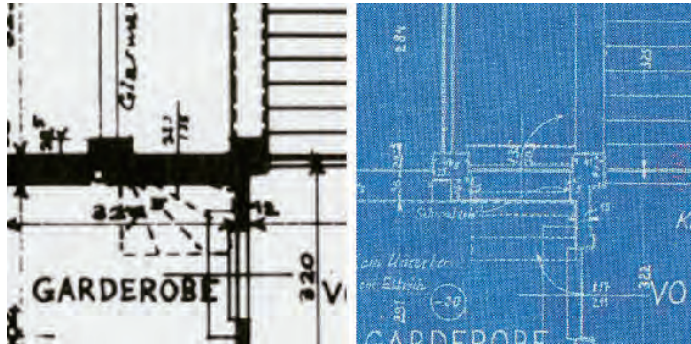


図 28) 左の図面は「施工図面」、右は「申請図面」である。「申請図面」では、朝食室に上がる階段がホール側に飛び出しているため、図面上においてドアの表記は階段の踏み面に記載されている。「施工図面」では、ドアの表記はホールの床面に記載されている。

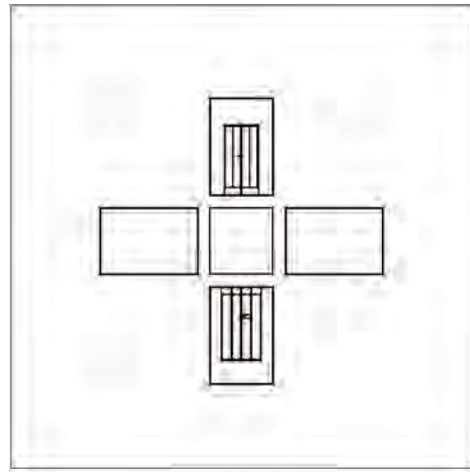


図 29) 玄関展開図。

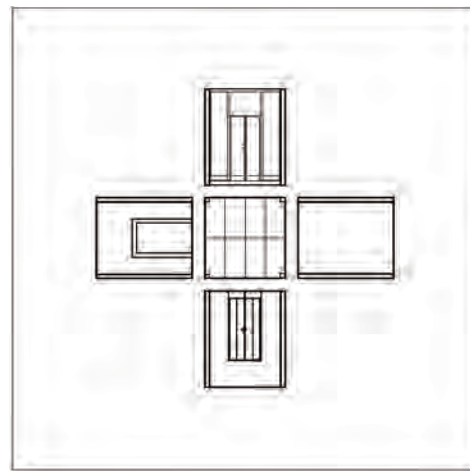


図 30) 前室展開図。

夫人居間 → テラス (W: 1,400、H: 3,200)

④ 「76年実測図面」(図27)

居間 → 外部 (W: 1,380、H: 3,050)

サロン → テラス (W: 1,380、H: 3,165)

食堂 → テラス (W: 1,395、H: 3,180)

夫人居間 → テラス (W: 1,385、H: 3,160)

「基本図面」「施工図面」「申請図面」におけるホールの四隅に配置されているドアの居間・階段室・食堂に接続するドアは同じ寸法のドアであることが確認される。そうしたなかで、ホールから朝食室に接続するドアにおいては、「基本図面」「施工図面」と「申請図面」でドアの高さ寸法が異なるのは、ホールから朝食室へ入る階段の変更がこなわれたためである。「基本図面」「施工図面」では、階段が小さなスケールで右に曲がる階段が計画されていたが、「申請図面」では、階段が直階段に変更され、図面上では、ホールと朝食室のドアは階段の二段目の踏面に計画されている。なお実際に建設されているのは直階段であり「申請図面」と同様にドアは二段目の踏面に設置されている(図28)。

これら「基本図面」「施工図面」「申請図面」「76実測図面」「石田実測図面」における寸法の差異は、30mmから100mmの間であるが、内部寸法と同様に「施工図面」と実際に建設された建築とでは寸法が異なる可能性がある。一方で、「石田実測図面」は、実際にヴィトゲンシュタインの監督のもとに施工され完成したドアの開口部寸法である。すなわちヴィトゲンシュタインが設計図面から現実の世界に落とし込んだ最終的な寸法であるということが可能である。

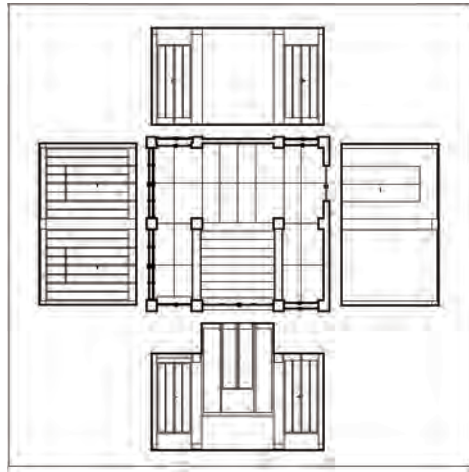


図 31) ホール展開図。(154 頁参照)

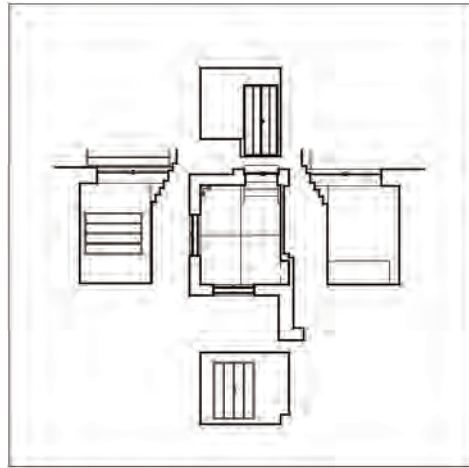


図 32) 朝食室展開図。(155 頁参照)

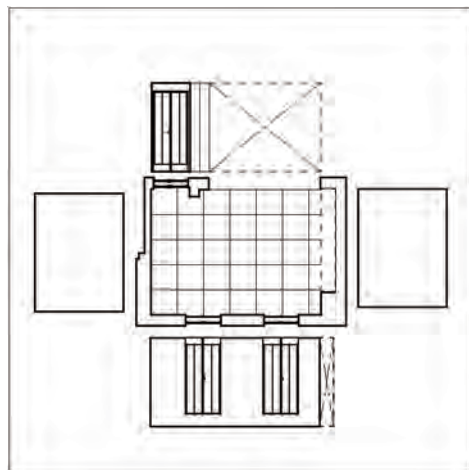


図 33) 居間展開図。(156 頁参照)

4-7 | 部屋の容積の比較

ホールを中心とするストンボロー邸の空間構成を捉えようとする場合、ホールに接続した「朝食室」は非常に重要な役割を持つにも関わらず、これまでその空間を正確に把握することは困難であった。また前述のように、各部屋の天井の高さの寸法も不明であった。今回の実測調査によって得られた数値をもとに、朝食室を含むストンボロー邸主階の平面構成における部屋と部屋の関係性の寸法上の比較と正確な展開図の作図が可能となった。各部屋の展開図を図 29 から 36 に示している。

各部屋床面の「内部平面寸法」の比率（短辺:長辺）は、

玄関	1 : 1.05
前室	1 : 1
クロークルーム	1 : 1.09
ホール	1 : 1.07
朝食室	1 : 1.23
居間	1 : 1.49
サロン	1 : 1.95
食堂	1 : 1.48
夫人居間	1 : 1.52

であり、内部寸法の平面的な比率は各部屋で異なっていることがわかる。前室は 1 : 1 のプロポーションであり主階の中で唯一正方形の内部寸法であることがわかる。また比率において玄関、クロークルーム、ホールは正方形ではないが、実際にその部屋に入るとあたかも正方形で計画されているように認識させられる空間である。サロンは 1 : 2 のプロポーションの部屋であり、居間、食堂、夫人居間の 3 つの部屋は、2 : 3 のプロポーションであることがわかる。

次に各部屋の「内部壁面寸法」の比率（天井の高さ : 長辺方向）は、以下のとおりである。

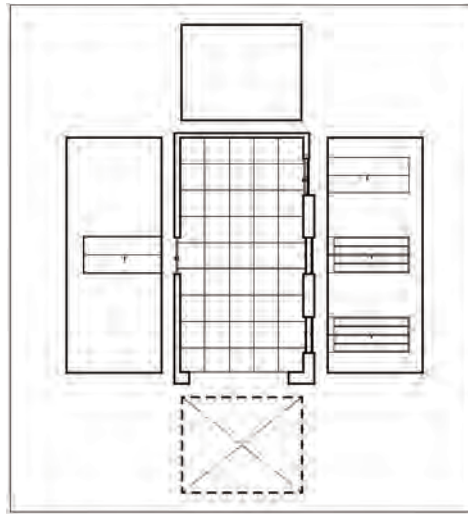


図 34) サロン展開図。(157 頁参照)

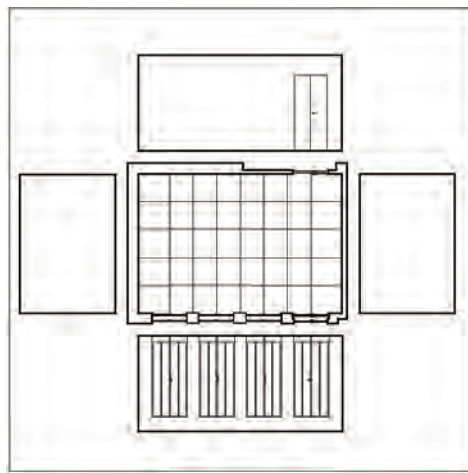


図 35) 食堂展開図。(158 頁参照)

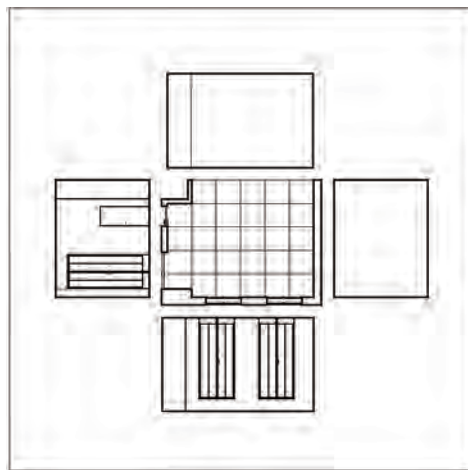


図 36) 夫人居間展開図。(159 頁参照)

玄関	1 : 0.68
前室	1 : 0.83
クロークルーム	1 : 1.22
ホール	1 : 1.78
朝食室	1 : 1.38
居間	1 : 2.07
サロン	1 : 2.46
食堂	1 : 2.13
夫人居間	1 : 1.55

これらの各部屋の壁面のプロポーションは居間の2つのドアが並ぶ壁面のプロポーションが1:2であり、整数比を持つ壁面である。また、夫人居間は、内部平面寸法を同じ、2:3のプロポーションであることから、上記の「内部壁面寸法」の比率2:3と等しく、床平面と壁率面の比率が等しいことがわかる。

またリノベーション前の居間の二つ並ぶドアの壁面は1:2の比率であったことがわかる。

また、各部屋の「内部壁面寸法」の比率（天井の高さ：短辺方向）は以下の通りである。

玄関	1 : 0.65
前室	1 : 0.83
クロークルーム	1 : 1.12
ホール	1 : 1.67
朝食室	1 : 1.12
居間	1 : 1.39
サロン	1 : 1.26
食堂	1 : 1.44
夫人居間	1 : 1.02

これから、朝食室とクロークルームの2つの部屋においては、同じ1:1.12のプロポーションの壁面が存在していることがわかる。夫人居間は、ほぼ1:1の壁面であるこ

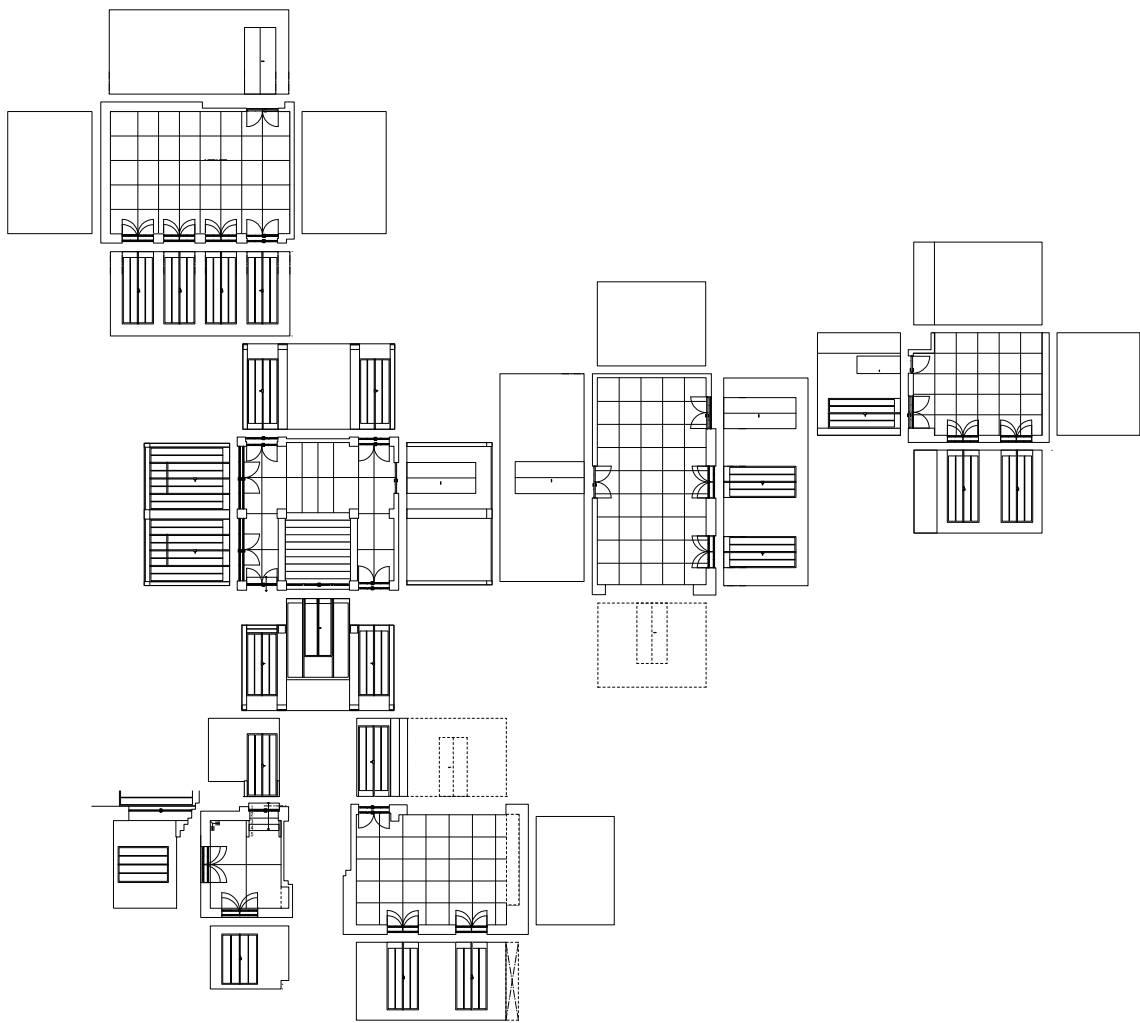


図 37) ストンボロー邸主階展開図。ホールに設置されたドアを基準に各部屋を配置している。

とから、内部空間においてプロポーションは整数比の空間を有していることがわかった。

次に「床面積」(㎡) は以下の通りである。

玄関	6.5㎡
前室	10.1㎡
クロークルーム	9.2㎡
ホール	43.8㎡
朝食室	12.5㎡
居間	34.0㎡
サロン	44.6㎡
食堂	44.4㎡
夫人居間	22.0㎡

上記の面積比較より、ホール、サロン、食堂の床面積がほぼ等しいことがわかる。

部屋の容積 (㎡) については、以下の通り。

玄関	25.1㎡
前室	38.6㎡
クロークルーム	23.8㎡
ホール	168.2㎡
朝食室	35.5㎡
居間	119.5㎡
サロン	169.0㎡
食堂	168.3㎡
夫人居間	82.1㎡

これらの比較を通してサロン、食堂は同じ天井高さであるため、床面同様体積においても等しいことがわかる。一方でホールの天井高さは、それら2つの部屋とは異なるが、床面と同様に、ホール、サロン、食堂は、ほぼ等しい体積であることがわかる (図 37)。

これにより、部屋と部屋との関係について床面積では、

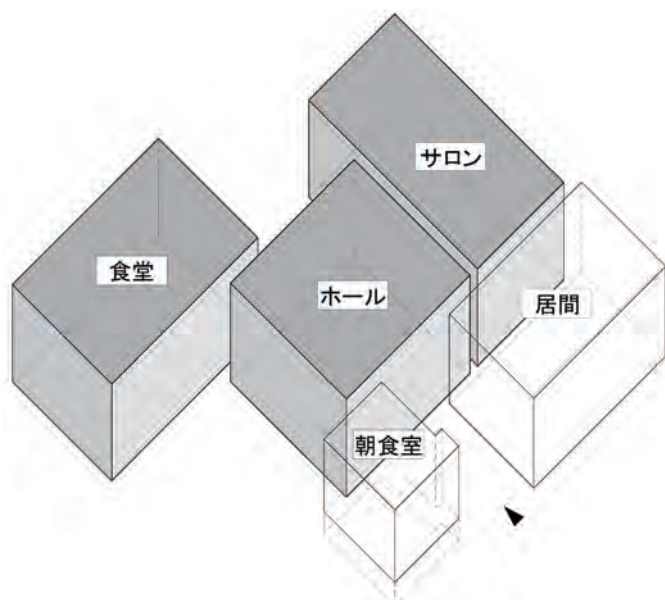


図 38) ホールを中心とする朝食室、居間、サロン、食堂の容積を比較すると、ホール、サロン、食堂の比率は「1:1:1」である。

玄関、クロークルーム、前室、朝食室、夫人居間、居間、ホール、サロン、食堂の順序で大きくなっていることがわかる。なお体積は、玄関、クロークルーム、朝食室、前室、夫人居間、居間、ホール、食堂、サロンの順序で大きいことがわかった。

ホールを中心とする各部屋のそれらの空間を一つのボリュームとして見たときに、互いに独立した部屋であると思われたが、ホール、食堂、サロンの3つの部屋の平面寸法の比率はそれぞれ異なっているが、それらの床面積と体積においては「1:1:1」のほぼ等しい関係をもった空間であることが確認された。

4-8 | 実測調査 まとめ

これまでの既往研究で用いられてきた「基本図面」「施工図面」「申請図面」「ゲバウアー実測図面」より、ストーンボロー邸主階平面に記載された各部屋の内部および開口部の寸法の整理をおこなうことで、各図面に記載されている寸法の比較をおこなった。

また、新たに実測調査をおこなうことで、これまで不明であった各部屋の高さ方向の寸法および朝食室の内部寸法の情報を得たことにより、「ホール」を取り囲む「朝食室」「居間」「サロン」「食堂」の主要な5部屋、さらに「玄関」「前室」「クロークルーム」「夫人居間」の4部屋を加えて、9部屋の内部寸法およびそれらの間の比率に関する比較をおこなうことが可能となった。

実測調査の結果を「内部寸法表」「開口部寸法表」「建具表」として整理をおこなった。また、朝食室を含む主階の各部屋の展開図を作成することにより、数値を視覚化した。部屋を「床面」「壁面」に区別して分析をおこなうことにより次のことが明らかになった(図38)。

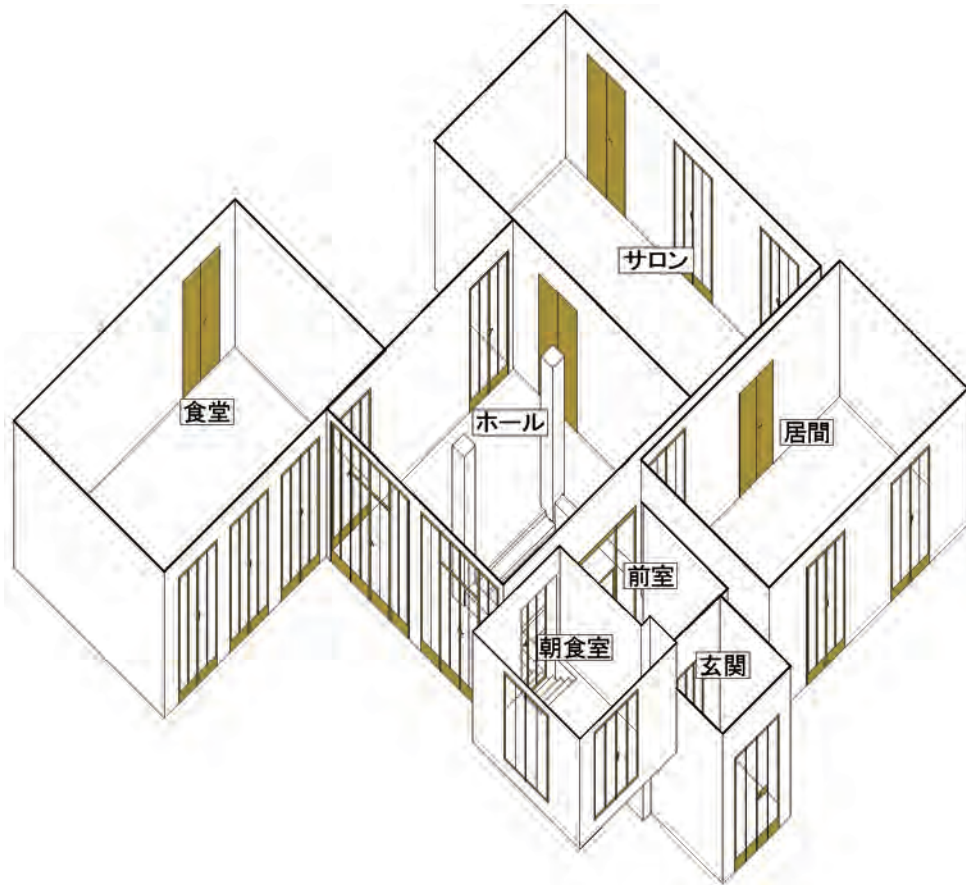


図 39) ホールを中心とする部屋のドアの配置。
ホールは玄関・前室を通る軸線上にある。ホールの四隅には同形状のガラスドアがあり、左右対称に配置されている。ホールのテラス側壁面は透明なガラス壁面であり、一方のサロン側の壁面は不透明な壁面に鉄製のドアが組み合わされている。

- ① 9部屋の「内部平面寸法」の比率および「内部壁面寸法」の比率は、互いに異なる寸法比である。
- ② サロンと食堂の「天井高さ」は両部屋ともに3,790mmと同じ高さに計画されている。

また、それらを統合して部屋をひとつのボリュームとして捉えると下記のことが明らかになった。

- ① 各部屋を容積でみると「ホール」「食堂」「サロン」の3つの部屋がほぼ等しい。

註

- 1) 磯崎新、「建築ヴィトゲンシュタイン」、『現代思想 3月号』、青土社、1975、p.13
- 2) 研究の基盤となるストンボロー邸主階平面図は、研究者レイトナーの『The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, 1976』45頁に掲載の施工図面と、『Das Wittgenstein Haus, 2000』49頁に掲載の建築申請図面、研究者ゲバウアー『Wien・Kundmannngasse 19, 1982』の40頁に掲載の実測図面を示している。

図版出典

- 1) 石田優 (Yu Ishida) 作成
- 2) Gunter Gebauer, Wien・Kundmannngasse 19, Fink, 1982, p.5
- 3) ibid.
- 4) ibid.1
- 5) ibid.
- 6) ibid.2, p.36
- 7) ibid., p.37
- 8) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.112
- 9) ibid., p.40
- 10) ibid.1
- 11) ibid.
- 12) 石田優 (Yu Ishida) 撮影
- 13) ibid.
- 14) ibid.1
- 15) ibid.
- 16) ibid.
- 17) ibid.
- 18) ibid.
- 19) ibid.
- 20) ibid.
- 21) ibid.
- 22) ibid.

23) ibid.

24) ibid.

25) ibid.

26) ibid.

27) ibid.

28) ibid.

29) ibid.

30) ibid.

31) ibid.

32) ibid.

33) ibid.

34) ibid.

35) ibid.

36) ibid.

37) ibid.

38) ibid.

39) ibid.

表 1) ibid.1

表 2) ibid.

表 3) ibid.

表 4) ibid.

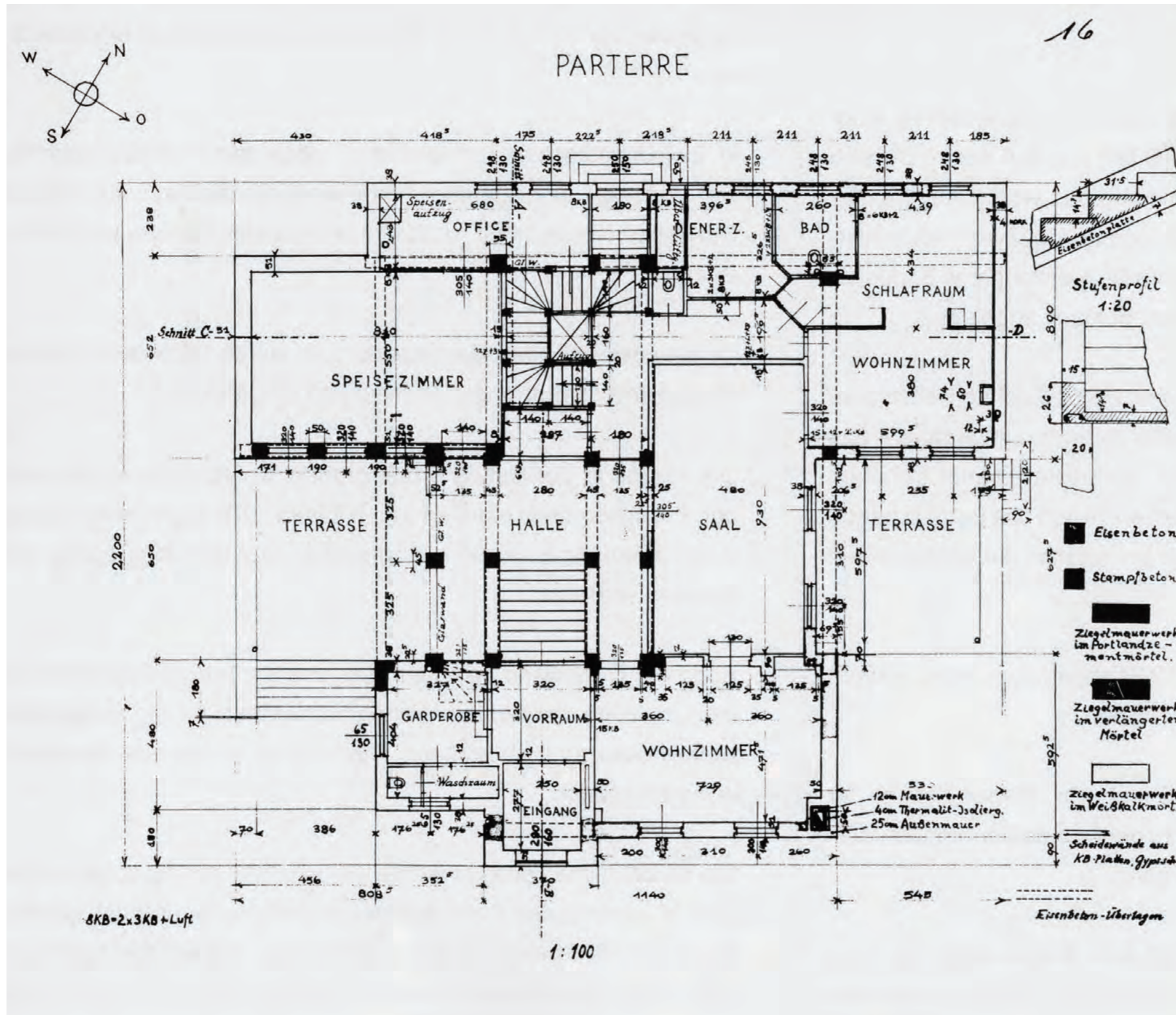


図6 基本図面（主階平面図）。（114頁参照）

図面に表記されている各部屋名を下記に示す。

- ・ EINGANG 玄関
- ・ VORRAUM 前室
- ・ HALLE ホール
- ・ WOHNZIMMER 居間
- ・ SAAL サロン
- ・ SPEISEZIMMER 食堂
- ・ SCHLAFRAUM 寝室
- ・ TERRASSE テラス

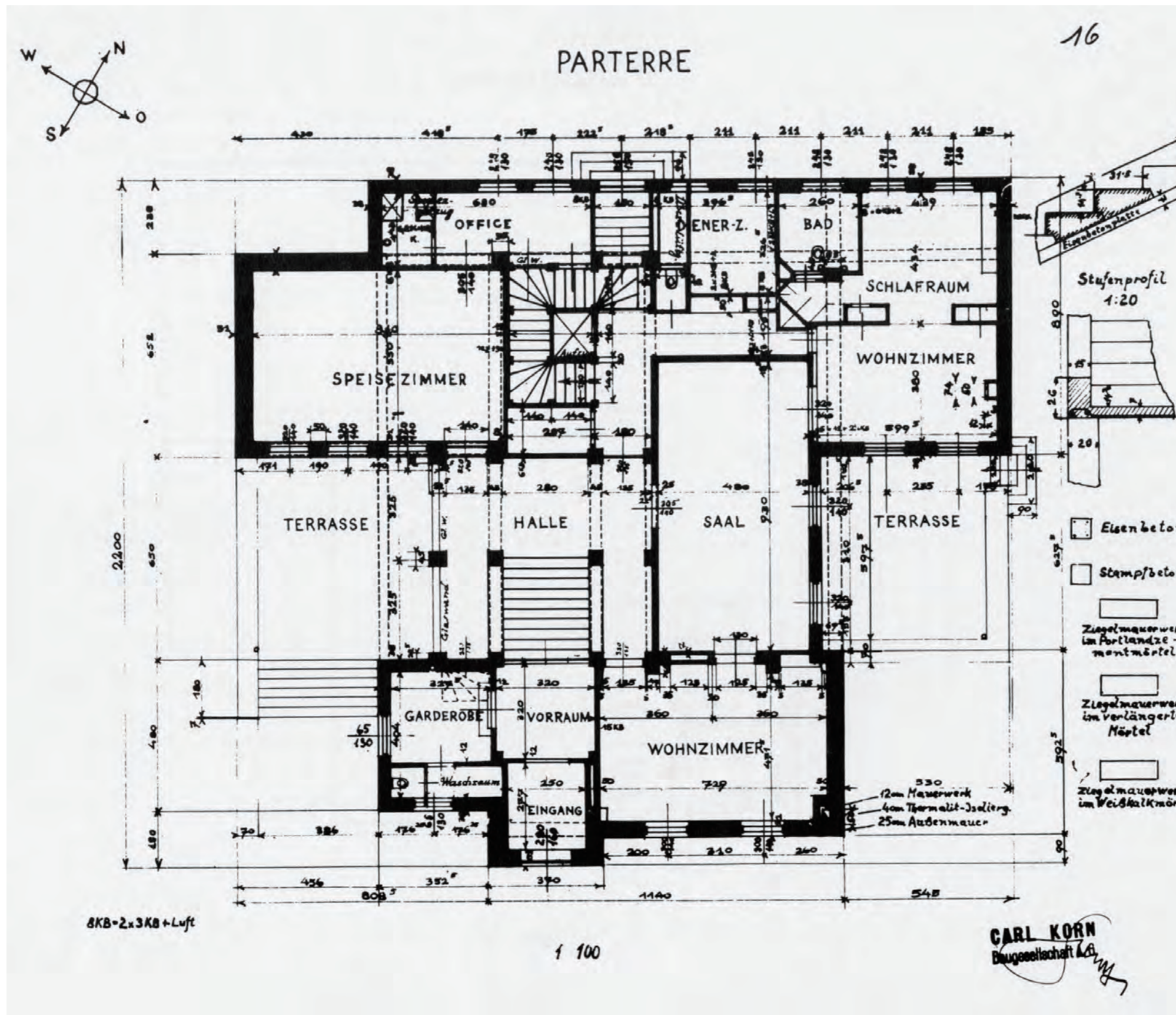


図7) 施工図面 (主階平面図)。(114頁参照)

図面の右下に施工会社 (CARL KORN) の押印があり、図面に表記されている全ての壁が黒色で塗られている。また、基本図面と比較すると、表記されている寸法は同じであるが、壁が追加されている。縮尺は基本図面と同様に 1:100 である。

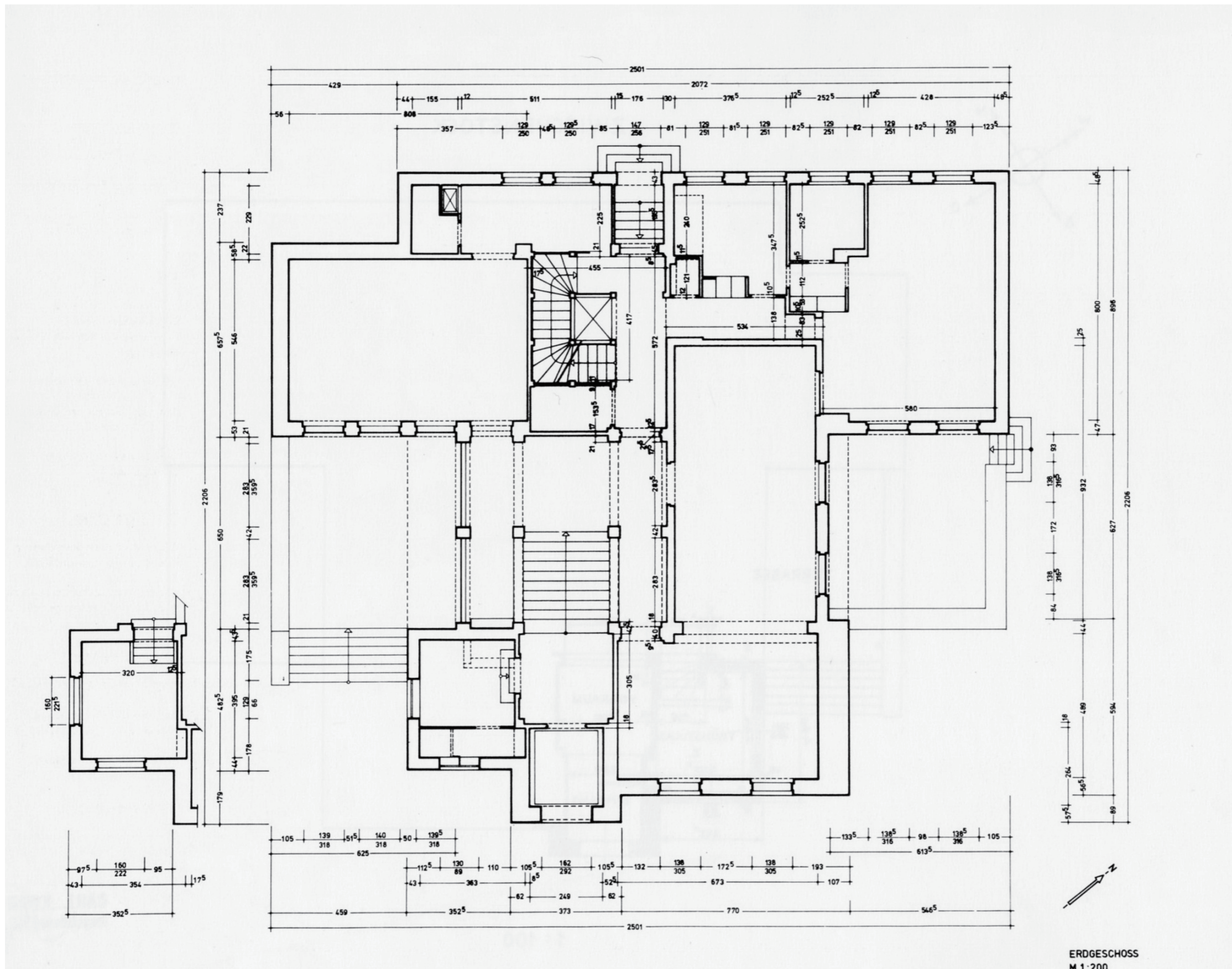


図9) ゲバウアーによる1976年の実測調査図面
(主階平面図)。(116頁参照)

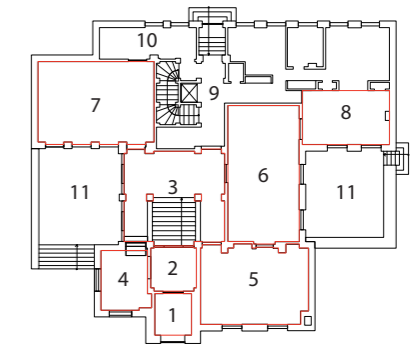
グンター・ゲバウアー等のグループによってリノベーション後に初めて実測調査された図面。縮尺は1:200で描かれている。

(mm)

	玄関 (EINGANG)			前室 (VORRAUM)			クロークルーム (GARDEROBE)		
	X	Z	Y	X	Z	Y	X	Z	Y
① 基本図面	2,500	2,770	3,800	3,200	3,200	3,800	3,275	-	-
② 施工図面	2,500	2,770	3,800	3,200	3,200	3,800	3,275	-	-
③ 申請図面	2,550	2,730	-	3,220	3,220	-	3,235	2,910	-
④ 実測調査図面 (1976年)	2,490	2,640	-	-	3,050	-	-	-	-
⑤ 実測調査図面 (2013、2015年)	2,490	2,610	3,860	3,180	3,180	3,820	3,160	2,900	2,600

	ホール (HALLE)			朝食室 (FRÜHSTÜCKSZIMMER)			居間 (WOHNZIMMER)		
	X	Z	Y	X	Z	Y	X	Z	Y
① 基本図面	▶ 6,850	▶ 6,500	3,800	3,275	4,040	-	7,290	4,710	-
② 施工図面	▶ 6,850	▶ 6,500	3,800	3,275	4,040	-	7,290	4,710	-
③ 申請図面	▶ 6,850	▶ 6,500	-	-	-	-	7,270	4,965	-
④ 実測調査図面 (1976年)	-	6,500	-	3,200	3,950	-	6,730	4,890	-
⑤ 実測調査図面 (2013、2015年)	6,840	6,400	3,840	3,190	3,920	2,840	6,730	4,880	3,520

	サロン (SAAL)			食堂 (SPEISEZIMMER)			夫人居間 (WOHNZIMMER)		
	X	Z	Y	X	Z	Y	X	Z	Y
① 基本図面	4,800	9,300	-	8,100	5,500	3,800	5,995	3,800	3,800
② 施工図面	4,800	9,300	-	8,100	5,500	3,800	5,995	3,800	3,800
③ 申請図面	4,825	9,340	-	8,115	5,480	-	5,880	3,800	-
④ 実測調査図面 (1976年)	▶ 4,790	9,320	-	8,080	5,460	-	5,800	-	-
⑤ 実測調査図面 (2013、2015年)	4,780	9,340	3,790	8,080	5,460	3,790	5,790	4,620	3,730



- 1 玄関
- 2 前室
- 3 ホール
- 4 朝食室
- 5 居間
- 6 食堂
- 7 サロン
- 8 夫人居間
- 9 階段室
- 10 オフィス
- 11 テラス

図面①②④のクロークルームのZ方向の寸法については、図面にクロークルームと隣接するトイレを含んだ寸法が記載されている。しかしクロークルームだけの寸法の算出は困難であるため「-」で記している。

図面①②のホールのX方向の寸法6,850mmは、225+1,350+450+2,800+450+1,350+225の記載された寸法の和によって算出している。

図面③のホールのX方向の寸法6,850mmは、205+1,390+410+2,840+410+1,390+205の記載された寸法の和によって算出している。

図面①②③のホールのZ方向の寸法6,500mmは、3,250+3,250の記載された寸法の和によって算出している。

図面①②③と④⑤の居間のX方向の寸法の差異については、改造時に居間の右下に配置されていた煙突を壁で埋めたことによるものである。よって、図面③④の寸法は、改造後の寸法である。

図面①②③④の居間のZ方向の寸法については、居間の南面にある2つ並ぶドアが属する壁面からホールと居間をつなぐドアの横に配置された柱までの寸法を表記している。

図面④のサロンのX方向の寸法4,790mmは、サロンの壁厚を含んだ全体の寸法5,340mmが記載から両壁の壁厚の寸法300mmと250mmを差し引くことで算出している。

表 1) 内部寸法表。(118頁参照)

内部寸法表では、既存の図面として確認される「基本図面」「施工図面」「申請図面」「76年実測図面」からストーンボロー邸の主階を構成する「玄関」「前室」「クロークルーム」「ホール」「朝食室」「居間」「サロン」「食堂」「夫人居間」の9つの部屋の内部寸法を読み取り、新たに論文執筆者が実測をおこなった数値と比較をおこなっている。

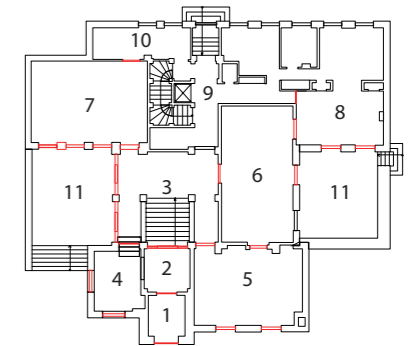
(mm)

	外部 → 玄関		玄関 → 前室		前室 → クロークルーム		クロークルーム → 外部		前室 → ホール		ホール → 朝食室		ホール → 居間		居間 → ホール	
	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H
① 基本図面	1,600	2,800	-	-	-	-	-	-	-	-	1,350	3,200	1,350	3,200	-	-
② 施工図面	1,600	2,800	-	-	-	-	-	-	-	-	1,350	3,200	1,350	3,200	-	-
③ 申請図面	1,620	2,900	1,370	2,650	1,170	2,110	1,300	650	-	-	1,350	▶3,050	1,350	3,200	-	-
④ 実測調査図面、1976年	1,620	2,920	-	-	-	-	1,290	660	-	-	-	-	-	-	-	-
⑤ 実測調査図面、2013、2015年	1,610	2,930	1,350	2,790	1,160	2,210	1,300	670	1,330	2,670	1,380	2,860	1,380	3,200	1,380	3,200

	ホール → サロン		ホール → 階段室		階段室 → ホール		ホール → 食堂		食堂 → ホール		ホール → テラス		テラス → ホール		朝食室 → 外部	
	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H
① 基本図面	1,400	3,050	1,350	3,200	-	-	1,350	3,200	-	-	-	-	-	-	1,600	2,220
② 施工図面	1,400	3,050	1,350	3,200	-	-	1,350	3,200	-	-	-	-	-	-	1,600	2,220
③ 申請図面	1,400	3,100	1,350	3,200	-	-	1,350	3,200	-	-	-	-	-	-	-	-
④ 実測調査図面、1976年	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1,600	2,215
⑤ 実測調査図面、2013、2015年	1,440	3,100	1,380	3,200	1,380	3,200	1,380	3,200	1,410	3,250	1,420	2,820	1,420	2,820	1,620	2,260

	居間 → 外部		外部 → 居間		サロン → テラス		テラス → サロン		サロン → 夫人居間		夫人居間 → サロン		夫人居間 → テラス		テラス → 夫人居間	
	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H
① 基本図面	1,400	3,000	-	-	-	-	1,400	3,200	-	-	1,400	3,200	-	-	-	-
② 施工図面	1,400	3,000	-	-	-	-	1,400	3,200	-	-	1,400	3,200	-	-	-	-
③ 申請図面	1,400	3,000	-	-	-	-	1,400	3,200	-	-	1,400	3,200	-	-	1,400	3,200
④ 実測調査図面、1976年	1,380	3,050	1,380	3,050	-	-	1,380	3,165	-	-	-	-	-	-	1,385	3,160
⑤ 実測調査図面、2013、2015年	1,410	3,040	1,370	3,000	1,430	3,250	1,380	3,160	1,430	3,250	1,340	3,240	1,430	3,250	1,370	3,200

	夫人居間 → 階段室		夫人居間 → 外部		食堂 → テラス		テラス → 食堂		食堂 → オフィス		居間 → サロン		サロン → 居間	
	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H	W	H
① 基本図面	-	-	1,300	2,480	1,400	3,200	-	-	1,400	3,050	1,250	-	1,300	-
② 施工図面	-	-	1,300	2,480	1,400	3,200	-	-	1,400	3,050	1,250	-	1,300	-
③ 申請図面	720	1,850	1,300	2,480	-	-	1,400	3,200	1,370	3,000	1,250	2,650	1,330	2,720
④ 実測調査図面、1976年	-	-	1,290	2,510	-	-	1,395	3,180	-	-	×	×	×	×
⑤ 実測調査図面、2013、2015年	785	1,950	1,320	2,540	1,410	3,250	1,380	3,170	1,410	3,000	×	×	×	×



- 1 玄関
- 2 前室
- 3 ホール
- 4 朝食室
- 5 居間
- 6 食堂
- 7 サロン
- 8 夫人居間
- 9 階段室
- 10 オフィス
- 11 テラス

表3) 開口部寸法表。(126頁参照)

開口部寸法表では、主階に配置された9つの部屋をつなぐ「一重のドア」および「二重ドア」の実測をおこなった数値を既存の図面の数値と比較をしている。これにより、ストーンボロー邸の主階の設置されている全てのドアの体系的な把握が可能となる。

番号	A	B	C	D	E	F	G	H	I	
設置箇所	外部 → 玄関	玄関 → 前室	前室 → クロークルーム	前室 → ホール	ホール → 朝食室	ホール → 居間・サロン・階段室 居間・階段室 → ホール	ホール → サロン	食堂 → ホール	テラス → ホール、ホール → テラス	
形状	ガラス製ドア	ガラス製ドア	鉄製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア	ガラス製・磨りガラス製ドア	ガラス製ドア	磨りガラス製ドア	ガラス製ドア	
サッシ 寸法	W	1,610	1,350	1,160	1,330	1,380	1,380	1,440	1,410	1,420
	H	2,930	2,790	2,210	2,670	2,860	3,200	3,100	3,250	2,820

番号	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	
設置箇所	朝食室 → 外部	居間 → 外部	外部 → 居間	サロン・夫人居間 → テラス	テラス → サロン	サロン → 夫人居間	夫人居間 → サロン	テラス → 夫人居間	夫人居間 → 階段室	
形状	ガラス製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア	鉄製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア	ガラス製ドア	
サッシ 寸法	W	1,620	1,410	1,370	1,430	1,380	1,430	1,340	1,370	785
	H	2,260	3,040	3,000	3,250	3,160	3,250	3,240	3,200	1,950

番号	S	T	U	X	Y
設置箇所	食堂 → テラス	テラス → 食堂	食堂 → オフィス	居間 → サロン	サロン → 居間
形状	ガラス製ドア	ガラス製ドア	鉄製ドア	鉄製ドア	鉄製ドア
サッシ 寸法	W	1,410	1,380	1,250	1,330
	H	3,250	3,170	2,650	2,720

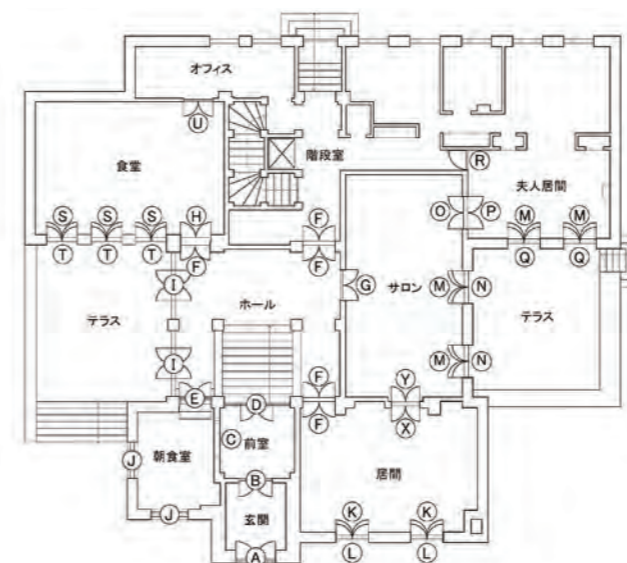


表4) 建具表。(126頁参照)

ストーンボロー邸の主階に設置されている全ての「一重のドア」と「二重ドア」を建具表として整理をしている。番号(AからY)は、ドアの配置図と対応する。二重ドアは、前後両側でそれぞれ別の立面を有しているため、二つに分けて表示されている。

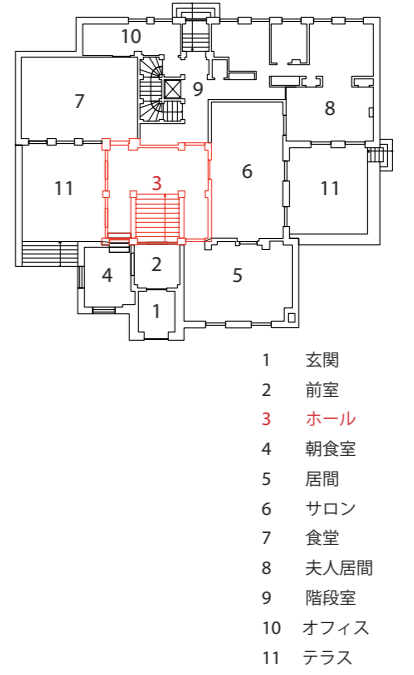
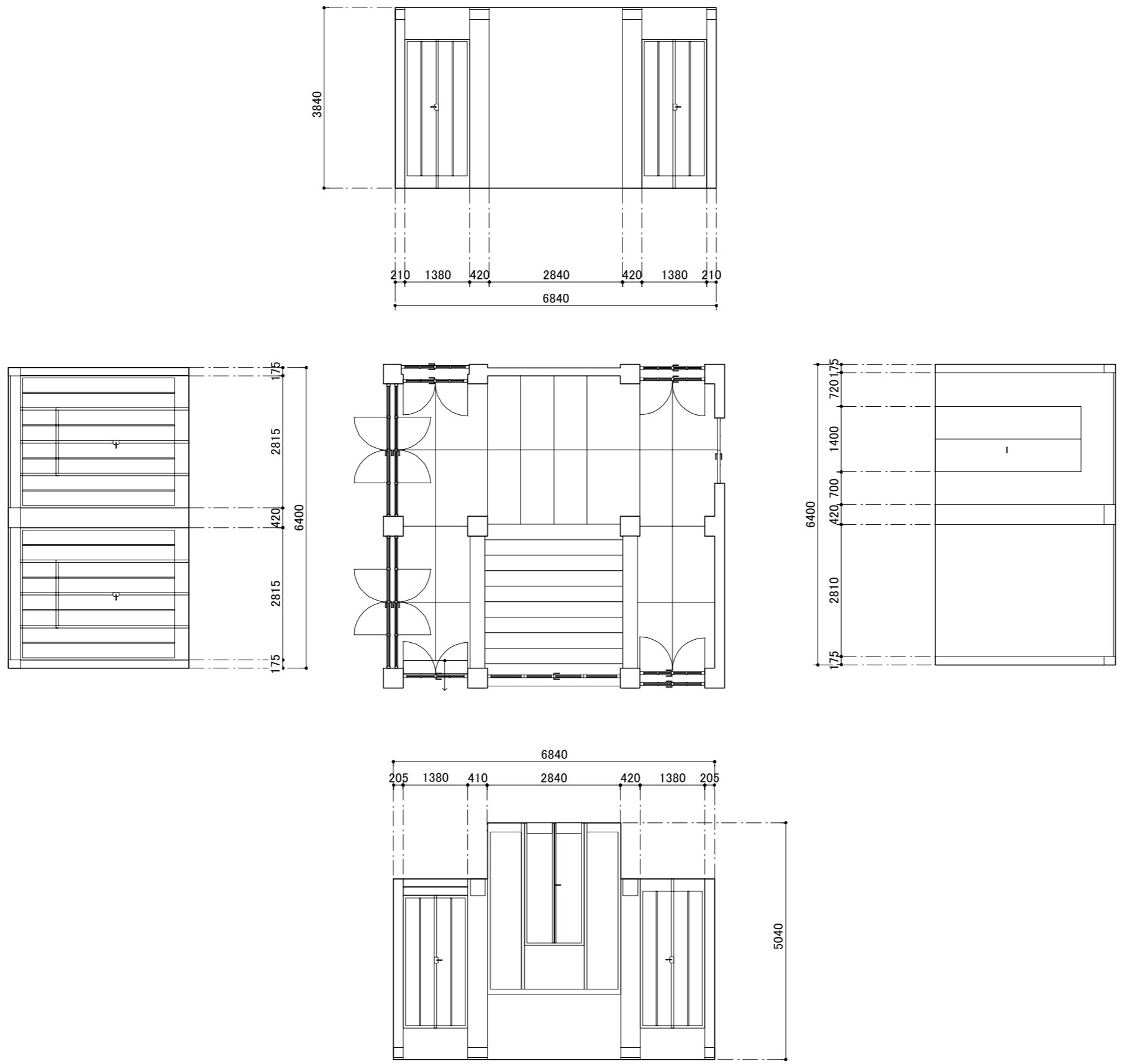


図 31) ホール展開図 (1:100)。(134 頁参照)

ホールの内部壁面には、主階を構成する部屋のなかで最も多くのドアが設置されている。ドアの配置は、そのドアが属する壁面の左右対称性をつくりだしている。

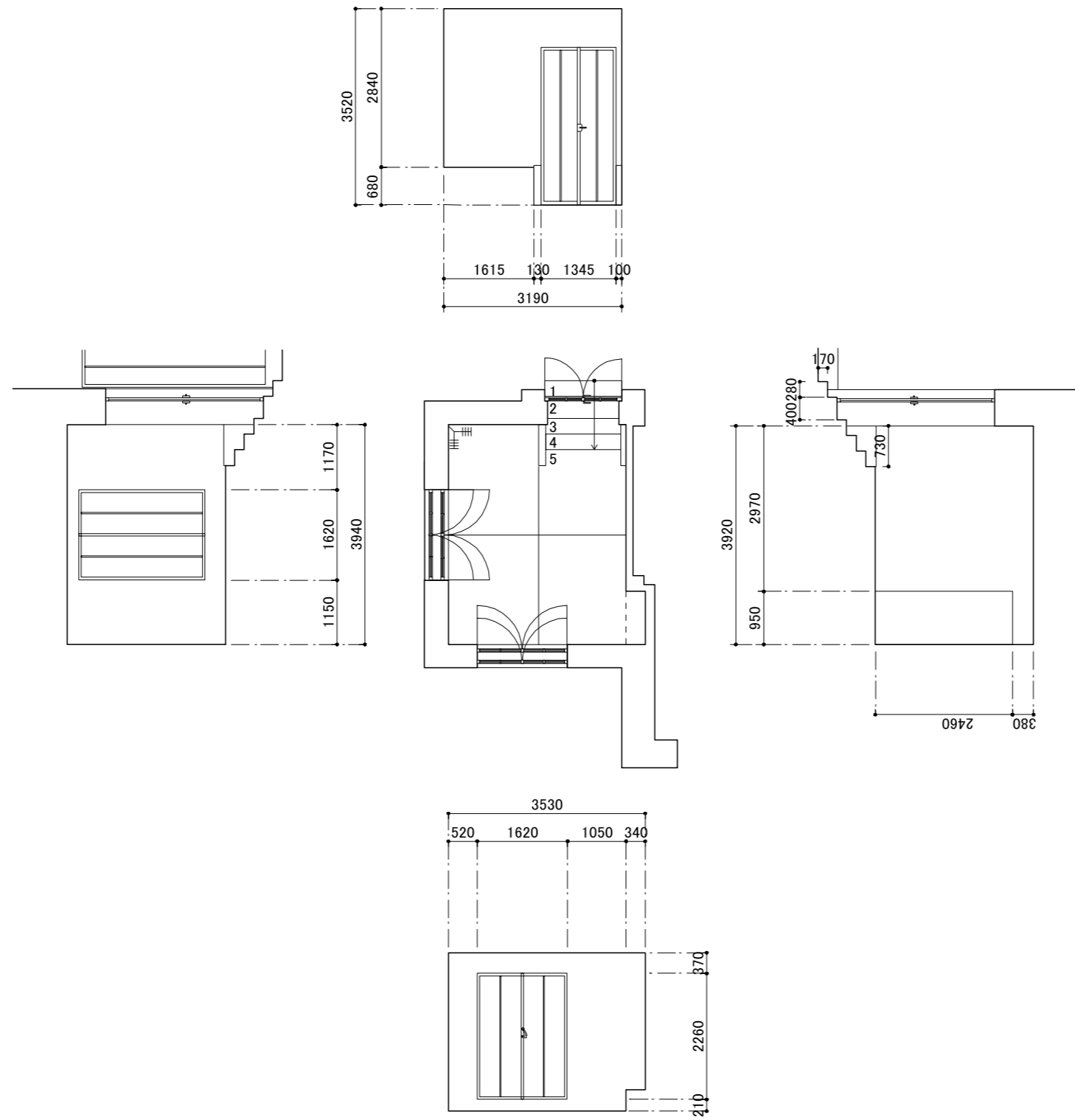


図 32) 朝食室展開図 (1:100)。 (134 頁参照)

平面図ではホールの四隅に設置されている左下の一重のドアから朝食室に入る。朝食室の内部壁面には、床面から離れた位置に開口部が配置されている。

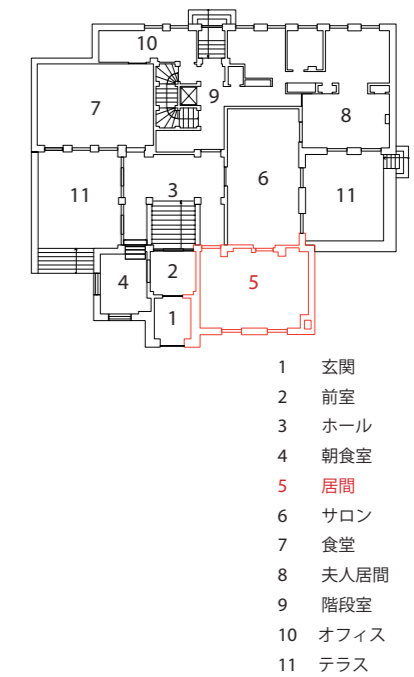
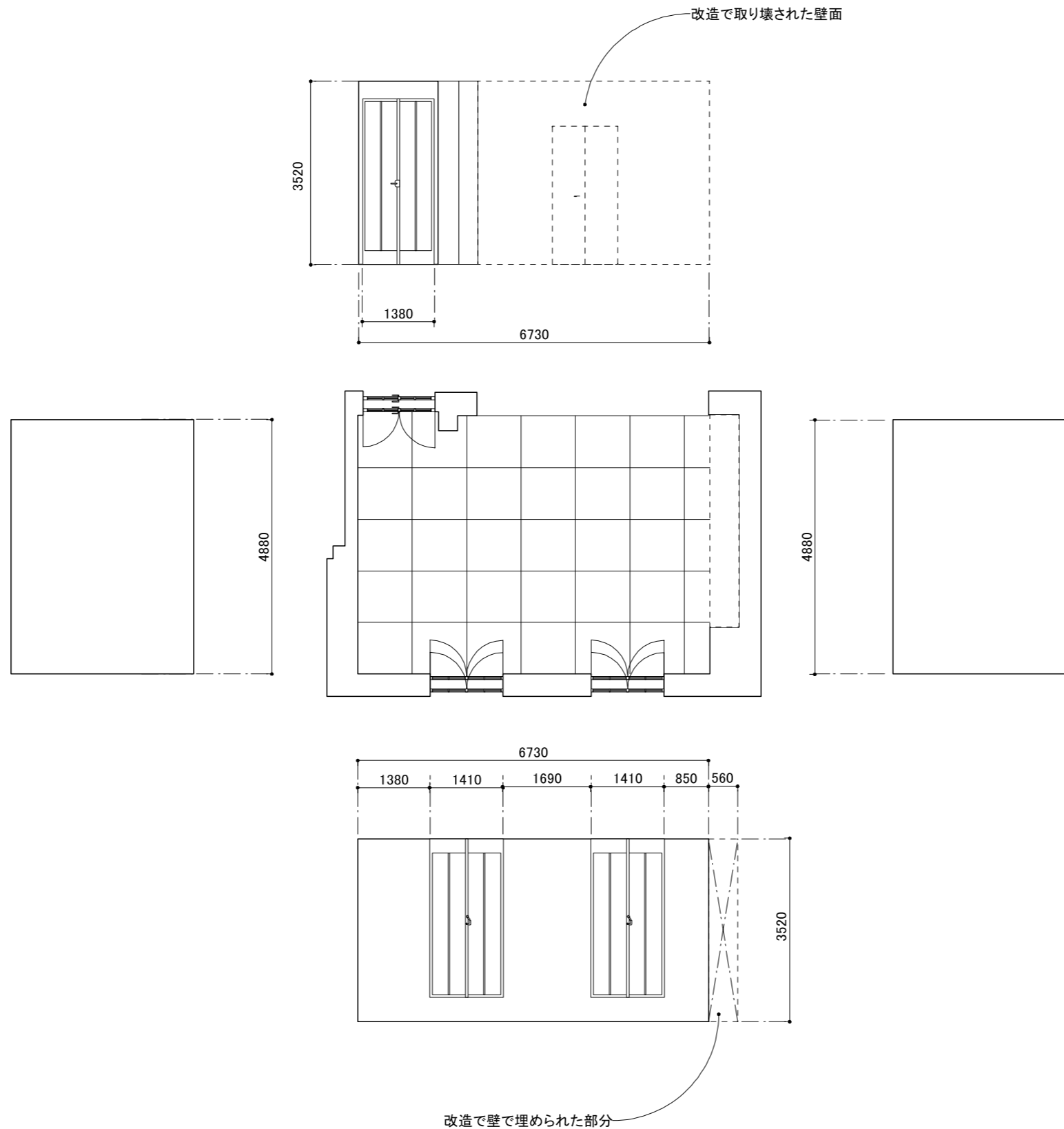


図 33) 居間展開図 (1:100)。 (134 頁参照)

平面図ではホールの四隅に設置されているドアの右下の二重ドアから居間に入る。居間の右隅には、屋上まで立ち上がる煙突が配置されていたが、改造によりその壁面は化粧壁により埋められている。また、居間とサロンを隔てていた壁面は取り除かれている。

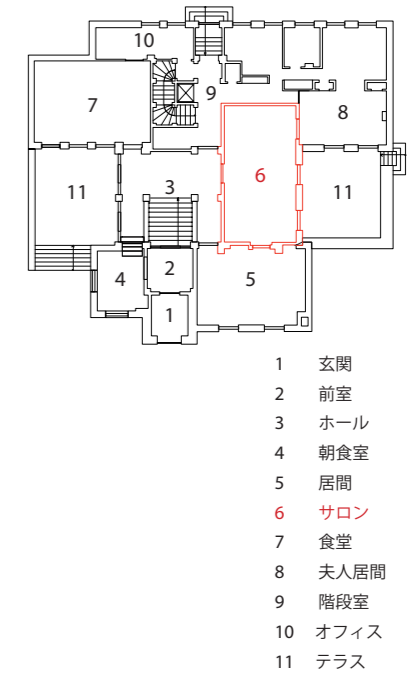
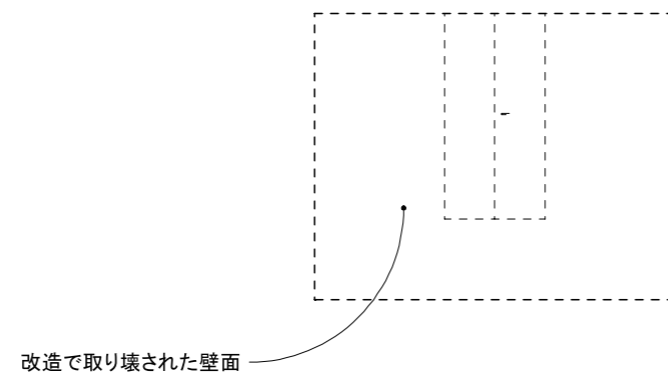
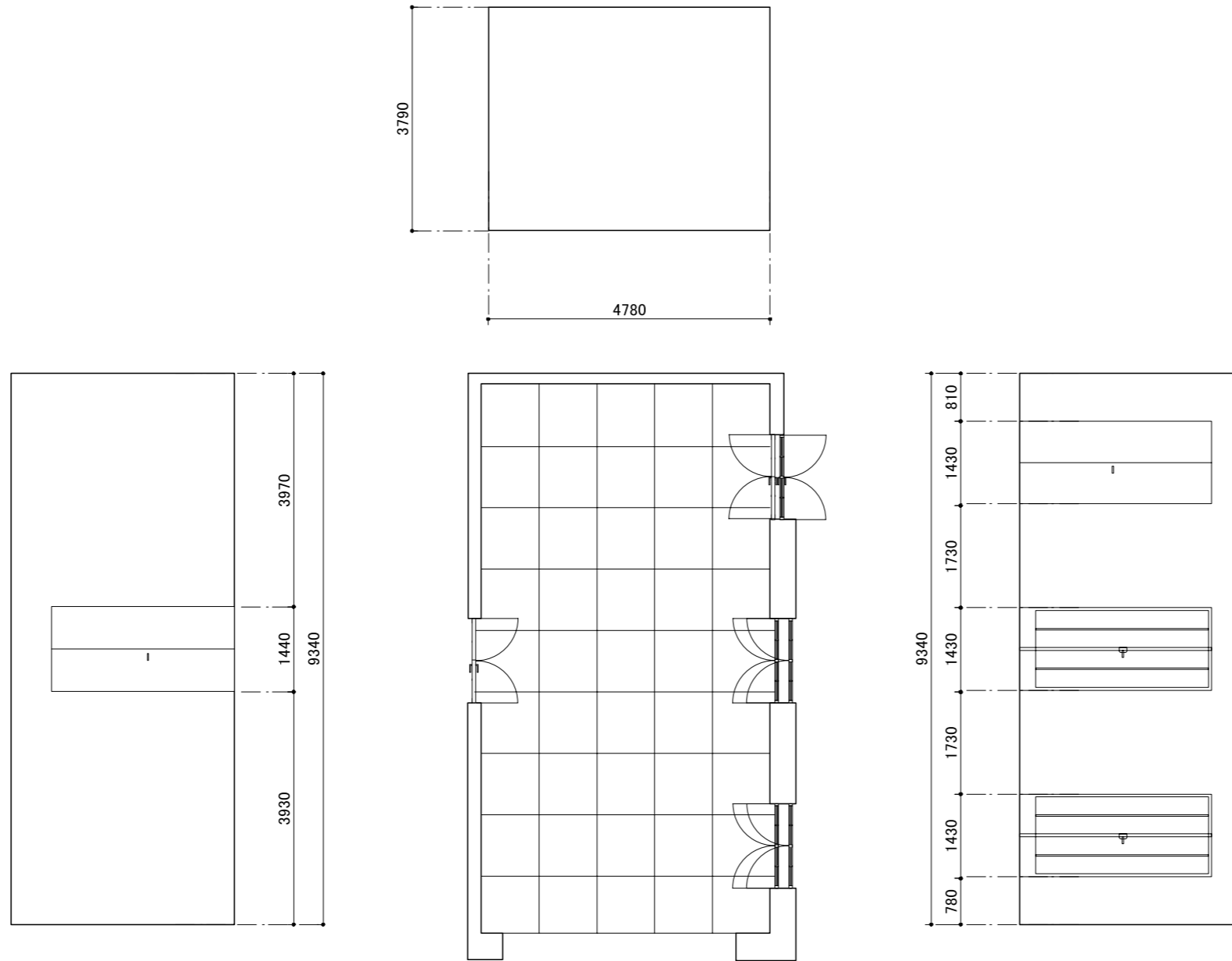


図 34) サロン展開図 (1:100)。(136 頁参照)

ホールからサロンへは、ホールでただひとつ設置された鉄製のドアから入る。またサロンは、居間および夫人居間と接続している。そこには鉄製二重ドアもしくは鉄とガラス製の二重ドアが設置されている。テラス側の右ふたつのドアには地下からせり上がる鉄製シャッターが組み込まれており、サロンと各部屋を接続する開口部には、全て鉄製の開口部を閉じる装置が設置されていることになる。改造によって、サロンと居間を接続する鉄製二重ドアは取り除かれている。

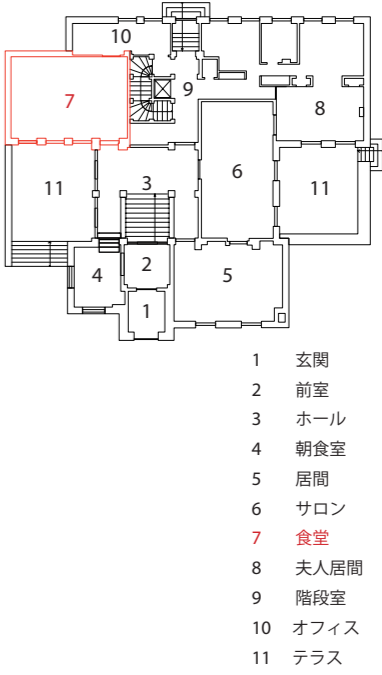
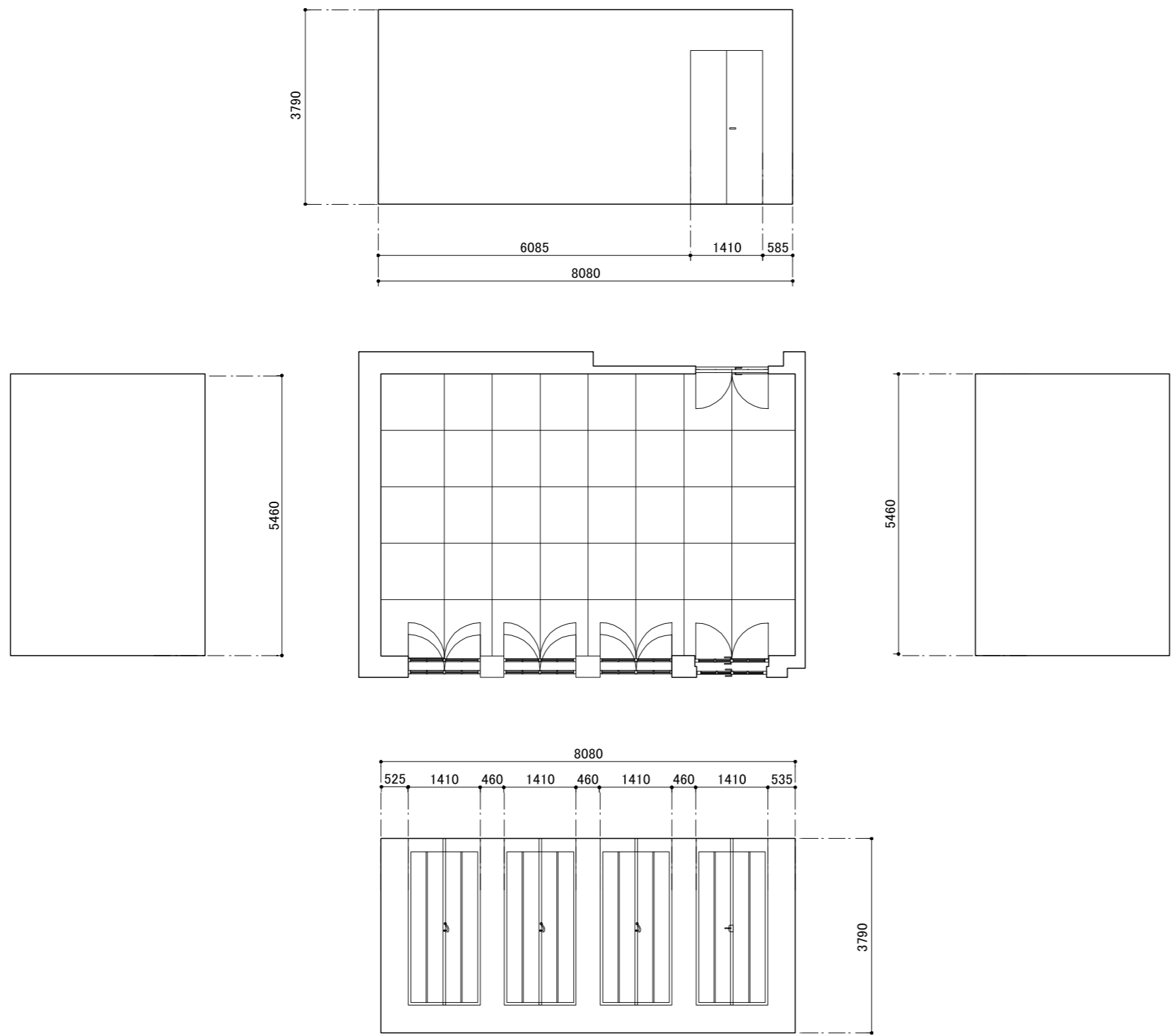


図 35) 食堂展開図 (1:100)。 (136 頁参照)

平面図ではホールの四隅に配置されたドアの左上の二重ドアから食堂に入る。その二重ドアは食堂に4つ並ぶドアのシンメトリカルな壁面に配置されたドアのひとつであり、残りの3つはテラスに面している。向かい側の壁面にはサービスに続く鉄製のドアが設置されている。その鉄製のドアとホールと食堂を接続する二重ドアは同一直線上に配置されている。

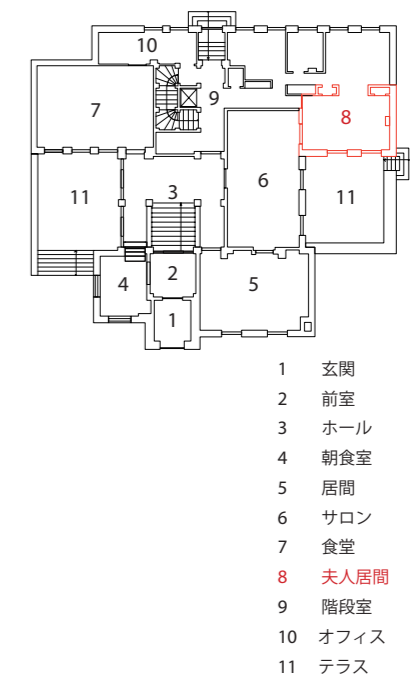
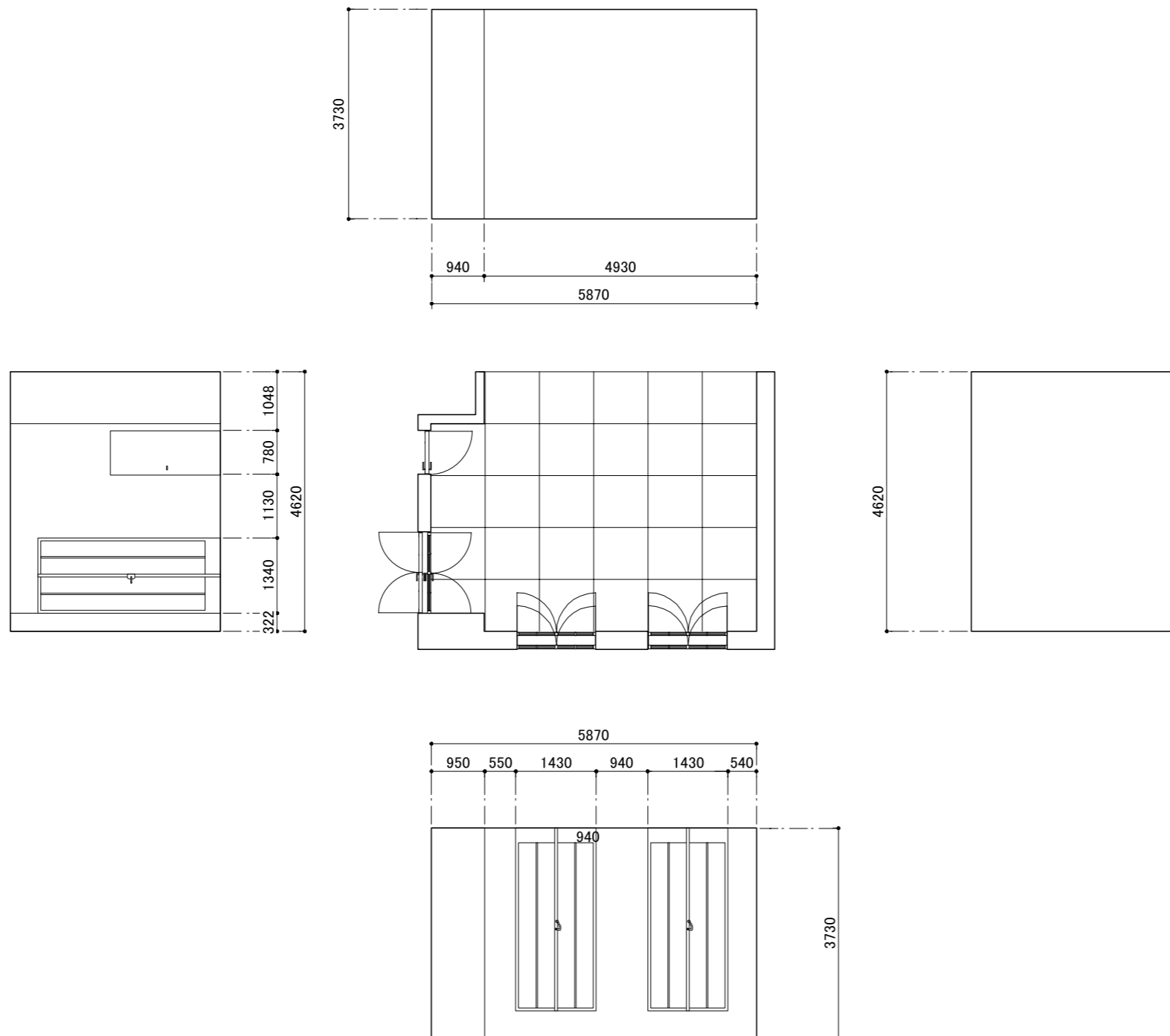


図 36) 夫人居間 (1:100)。(136 頁参照)

ホールから夫人居間へは、サロンを経由する場合 2つの鉄製のドアを開けなくてはならない。夫人居間のテラス側に 2つ並ぶドアの壁面は他の部屋と同様に左右対称に配置されている。改造により、夫人居間につくられていた暖炉は取り除かれている。

第 5 章 化粧壁の役割

5-1 朝食室

5-2 夫人居間



図1) 朝食室内部。現在この部屋は、事務室として使用されている。

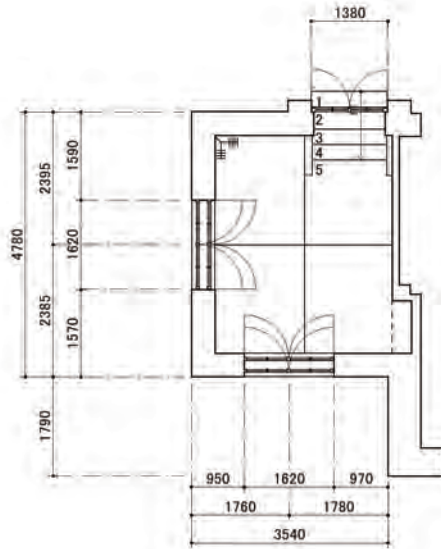


図2) 朝食室平面図。

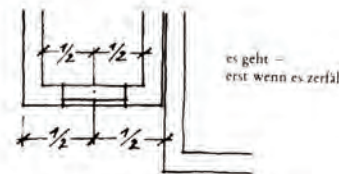
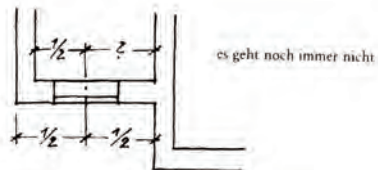
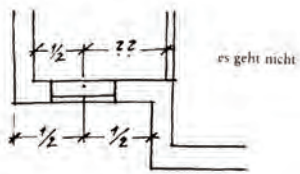


図3) トウルノフスキーによる内外の左右対称な壁面についての分析。

第5章 | 化粧壁の役割

5-1 | 朝食室

前章の内部寸法表および開口部寸法表において、最も寸法の欠落した部分の多い部屋のひとつである「朝食室」は、既往研究で用いられてきた写真資料等からはその内部の状況を把握することは困難であった。また、主階に配置されている他の部屋と比較しても、内部の詳細な寸法および内部写真資料などが最も欠落していた（図1）。

朝食室は、ホールの隅に配置された5段の階段を上がる2段目の踏面にガラス製の一重のドアが設置されている。実測調査より朝食室の内部寸法は、長辺3,920mm、短辺3,190mm、天井高2,840mmとなっており、主階を構成するホール、居間、サロン、食堂の5つの部屋の中では最も小さな部屋であることがわかる（図2）。他の各部屋には、温水床暖房設備が備えられているが、この部屋にそれはなく、部屋に入って右手前隅の壁に、ヴィトゲンシュタインによって設計されたL型のラジエーターが一つ設置されている。

この部屋にある二つの開口部の寸法は共に幅1,620mm、高さが2,260mmで、どちらの開口部も床面から370mmの高さに配置され、他の部屋の外部に面するドアと同様に二重の構造となっている。この部屋の南面に設置されている開口部は、ストーンボロー邸の正面ファサードを構成する開口部の中でも最も背が低く設計されており、その立ち上がりの位置も異なっていることがわかる。また二つの開口部は、南および西に面した壁面に計画されていることによって、効率よく自然光を取り込むことが可能である。そうした二つの二重の開口部は、全て内側に開くため開閉にともない内部空間の人の活動範囲に影響することになる。

朝食室の南に面した開口部と壁面の関係について、研究者ヤン・トゥルノフスキー（Jan Turnovský）は、この壁面の隅に計画されている「化粧壁（Mauervorsprung）」の解

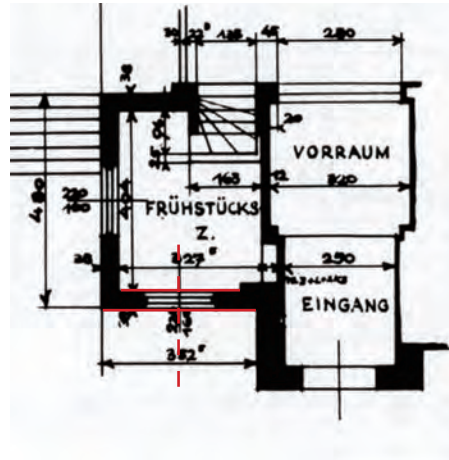
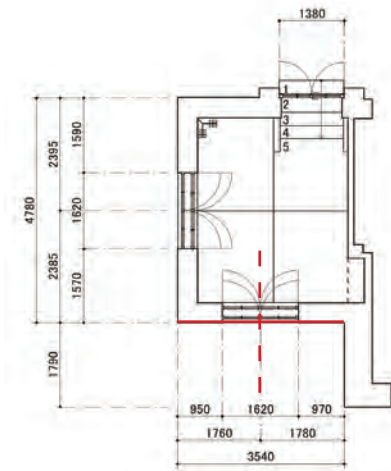


図4) ストンボロー邸朝食室の化粧壁の有無。左が実測調査、右が施工図面。

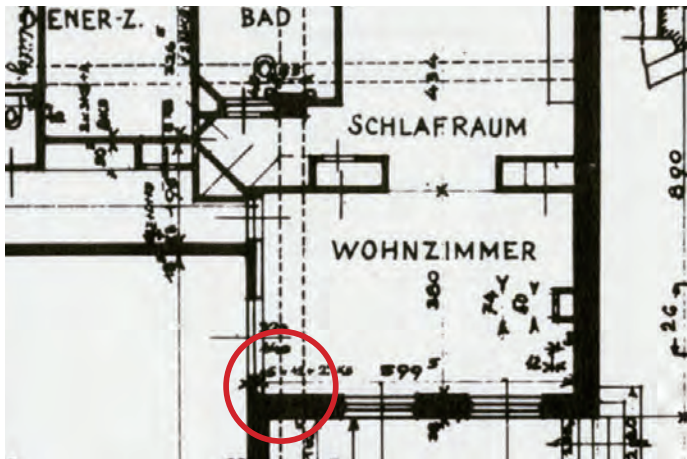


図5) 夫人居間の化粧壁(施工図面)。施工図面には、実施に施工された化粧壁はみられない。

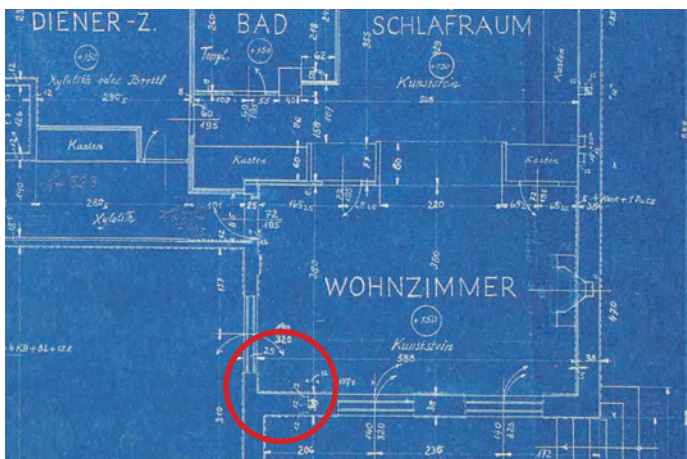


図6) 夫人居間の化粧壁(建築申請図面)。施工図面には、実施に施工された化粧壁はみられない。

積および分析をおこなっている（図3）。

トゥルノフスキーは「施工図面」を参照しており、朝食室に入って正面のクレセント錠が取り付けられている開口部の左側にある凹みの箇所に、壁の厚みを厚くしてつくられた化粧壁が計画されていることを指摘している。これによりこの開口部が属する内部壁面においては、壁面の右隅から化粧壁までの壁面（W：2,895mm）を正面の壁面として捉えている。従って内部壁面の中心軸と開口部の中心軸位置の一致により、この内部壁面は化粧壁の計画により左右対称形な壁面構成となっていることを指摘している。またこの内部軸線の位置は、外部壁面（W：3,525mm）の中心軸の位置とも一致し、この壁は内部壁面の化粧壁の計画により、内外の両側の壁面において左右対称形な壁面構成が成立していることを指摘している。

しかし、トゥルノフスキーが指摘している「施工図面」で計画されていた朝食室の化粧壁は、実際には当初から施工されていないことが実測調査により明らかになった。すなわち、この壁面の左右対称性については、化粧壁がなくなることにより内部壁面の均衡が失われ、外部壁面の左右対称性のみが残されていることが明らかになった（図4）。

5-2 | 夫人居間

ストーンボロー邸主階の部屋に計画されている化粧壁は、朝食室の他に夫人居間のテラスに面する内部壁面において同様に存在している。

朝食室の化粧壁は、既存図面で計画されていたにも関わらず、実際には施工はされていなかった。一方で、夫人居間の2つ並ぶドアの壁面の右端に施工されている化粧壁は、既存図面に計画はなされていないにも関わらず、実際に施工されていることが明らかになった（図5、6）。

夫人居間は、ホールを中心に各部屋が配置されているな



図7) 夫人居間内部。右の二重ドアよりサロンと接続する。竣工直後は、マルガレーテの居間と寝室の機能を併せ持っていたが、リノベーション後に、それらの部屋の間の間仕切り壁面が取り除かれ、現在は一室となっている。なお、左手の壁面には暖炉が設置されていたが、同様に取り除かれている。

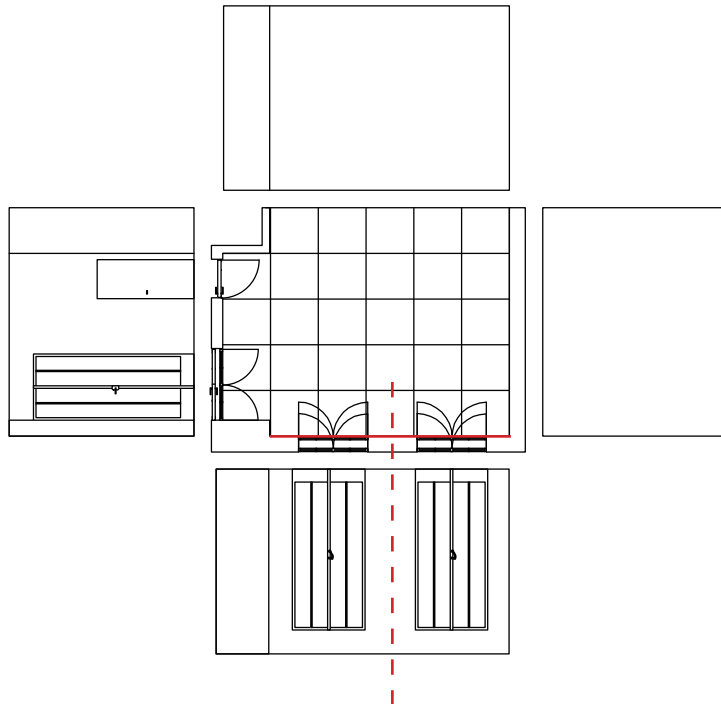


図8) 夫人居間の化粧壁。この2つ並ぶドアが属する壁面の赤で示した箇所が左右対称的な壁面として捉えることができる。

かで、この建築の入り口から最も離れた位置に計画されている。夫人居間への動線は、ホールからサロンを通ること
でたどり着く方法と、ホールから階段室を通り抜けてたど
り着く2つの方法がある。なお、この部屋へ接続するド
アは、前者の動線においては「鉄製・ガラス製の二重ド
ア」設置されており、サロン側が鉄製のドアで、夫人居間
側がガラス製のドアが配置されている。また後者の動線に
おいても鉄製のドアが設置されている。すなわち、夫人居
間は最も長い動線上に配置されていること、この部屋の2
つの入り口はどちらも不透明な「鉄製のドア」が設置され、
主階に配置された他の部屋とは異なり、マルガレーテのた
めのプライベートな空間として計画されている。一方、当
時のこの部屋には、マルガレーテの近しい友人が招かれて
いる。

そうしたこの部屋には、既存図面において主階に配置さ
れた主要な部屋（ホール、朝食室、居間、サロン、食堂）
のなかで唯一、左右対称形な壁面構成を読み取ることがで
きない。それらの主要な部屋の壁面の左右対称形は、外部
に面する内部壁面において見られるが、夫人居間の外部に
面する壁面に設置された2つのドア配置は、左右対称形
な構成要素として扱われていない。

申請図面では、この内部壁面の幅は5,995mmであり、
その壁面の中心軸より内部立面でみた時に、左にずれてド
アが配置されていることがわかる。また、外壁面における
このドアの配置においても同様に、壁の中心にとした配置
が見ることができない。施工図面においても、左右対称形
な壁面構成を読み取ることができない。

しかし、実際に完成した夫人居間の壁面には、化粧壁が
施工されることにより、朝食室の内部壁面にみられたのと
同様の左右対称性の軸線を一致させる秩序が見られること
になる（図7、8）。

実測調査より、この壁面の幅は6,110mmであるが、化
粧壁の幅は950mmを除いた5,160mmの壁面上に2つの
ドアが左右対称形になるように設置されていることが明ら

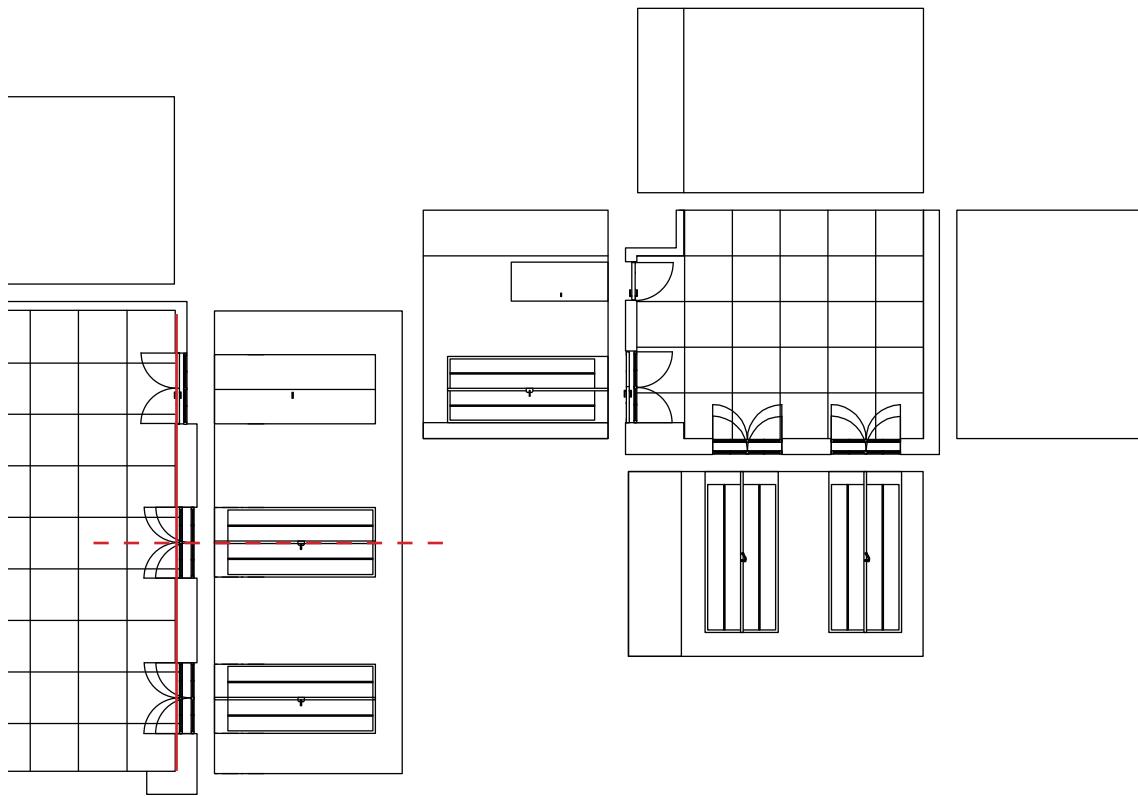


図9) 夫人居間とサロンのドアの関係。



図10) サロンと夫人居間を接続する鉄製・ガラス製の二重ドア。夫人居間側のドアは左手用のハンドルがくみ付けられている。ドアハンドルおよびドアストッパーによって、より90度以上開くことは物理的に困難である。

かになった。

またそれらのことは、施工現場でのヴィトゲンシュタインの厳格な指示があったことから、彼による監修のもと施工されたのではないかと推測することができる。

化粧壁の施工により、夫人居間の内部壁面においても、他の主要な部屋と同様に左右対称形な壁面構成がみられることとなった。一方、壁の厚みを厚くふかしたことにより、サロンと夫人居間をつなぐドアの夫人居間の側に設置されたガラス製のドアがこの化粧壁と干渉するために、90度以上は開くことができなくなっている。

そうした問題は、サロンと夫人居間の鉄製・ガラス製の二重ドアの位置を少し移動することで解決できることであり、ヴィトゲンシュタインが竣工直後の天井高さを変更させたことを考慮しても、そうしたことは容易なことであると考えられる。しかし、この二重ドアを移動させることは、サロン側の3つに並ぶドアが属する左右対称形な壁面の秩序が壊れてしまう(図9)。そのため、ドアの開閉の機能的な側面よりも、壁面にみられる左右対称形の秩序を優先したのではないかと考えられる(図10)。

図版出典

- 1) 石田優 (Yu Ishida) 撮影
- 2) 石田優 (Yu Ishida) 作成
- 3) Jan Turnovský, Die Poetik Eines Mauervorsprungs, Birkhäuser Verlag, 1987, p.33
- 4) ibid.2
- 5) ibid.
- 6) ibid.2
- 7) ibid.1
- 8) ibid.2
- 9) ibid.
- 10) ibid.1

第6章 ドアの寸法体系

- 6-1 ドアの種類
- 6-2 ドアの開閉パターン
- 6-3 二重ドアの開閉機構
- 6-4 ドアの配置
- 6-5 部屋の内的な秩序
- 6-6 二重ドアの役割
- 6-7 図面資料

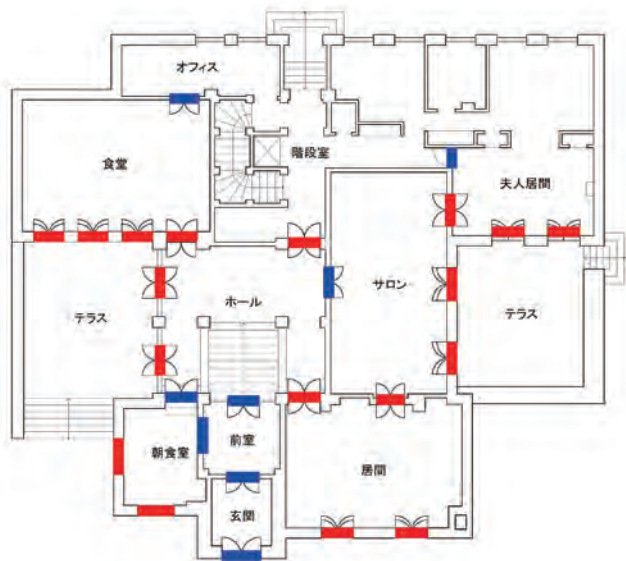


図1) 主階に配置された26のドア。赤で示したドアが二重ドア、青で示したドアが一重のドア。外部に面するドアは、外部と玄関をつなぐドアを除いて全て二重ドアが設置されている。

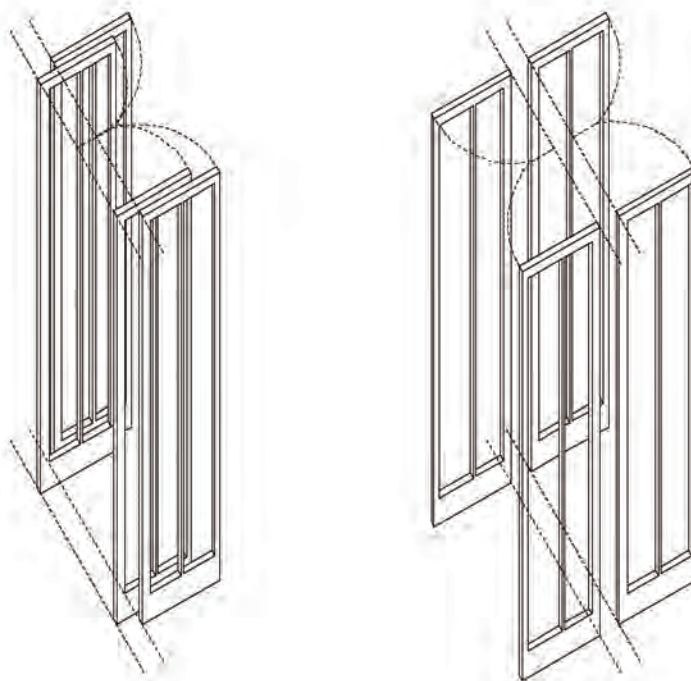


図2) 二重ドアの二種類の開閉方式。左のドアは全てが部屋の内側に開くタイプ。右の二重ドアは前後に開く方式であり、全開の状態では空間的に強い方向性をつくりだす。

第6章 | ドアの寸法体系

6-1 | ドアの種類

ストンボロー邸の玄関、前室、クロークルーム、ホール、朝食室、居間、サロン、食堂、夫人居間に設置されているドアは、「一重のドア」と「二重ドア」の二つの異なる種類の組み合わせによって構成されている（図1）。一重のドアおよび二重ドアをそれぞれひとつとして数えると、主階には合わせて26のドアが配置されている。そのうち、部屋と部屋とを接続するドアは12あり、外部に接続するドアは14あることになる。一方、二重ドアの前後に設置されたドアを別々に数えると44のドアが配置されている。数の多さにおいても、この建築の空間を構成する要素としてドアが主要な役割を担っていることが考えられる。

主階に設置されている「一重のドア」および「二重ドア」は、夫人居間と階段室の鉄製の片開きドアを除くと、全て左右に開く「観音開き」の形式を有している。また、ストンボロー邸の上層階の部屋と部屋を接続するドアは全て片開きドアであり、観音開きのドアは主階のみに設置されていることが確認できる。

さらに「二重ドア」の開閉メカニズムは二種類あり、「一方向に開く方式」と「双方向に開く方式」がある（図2）。後者の双方向に開くタイプは、それぞれドアがその属する部屋に向かって開くため、ドアが互いに干渉することはない。また、内側に開くタイプのドアも、二重ドアの前後でドアの回転中心位置となるヒンジの取り付け箇所の設定と取り付け金具の精巧な設計により、前後のドアが全く干渉することなく、一方向（部屋側）に重なり合って開くメカニズムとなっている。

透明な二重ドアには、鉄製の細い棧の中にガラス板が割り付けられている。また、二重に重なり合うドアの見えがかりは、ドアの正面から見ると一重のドアであるかのように見えるように正確に立面が設計されている。二重ドアは、

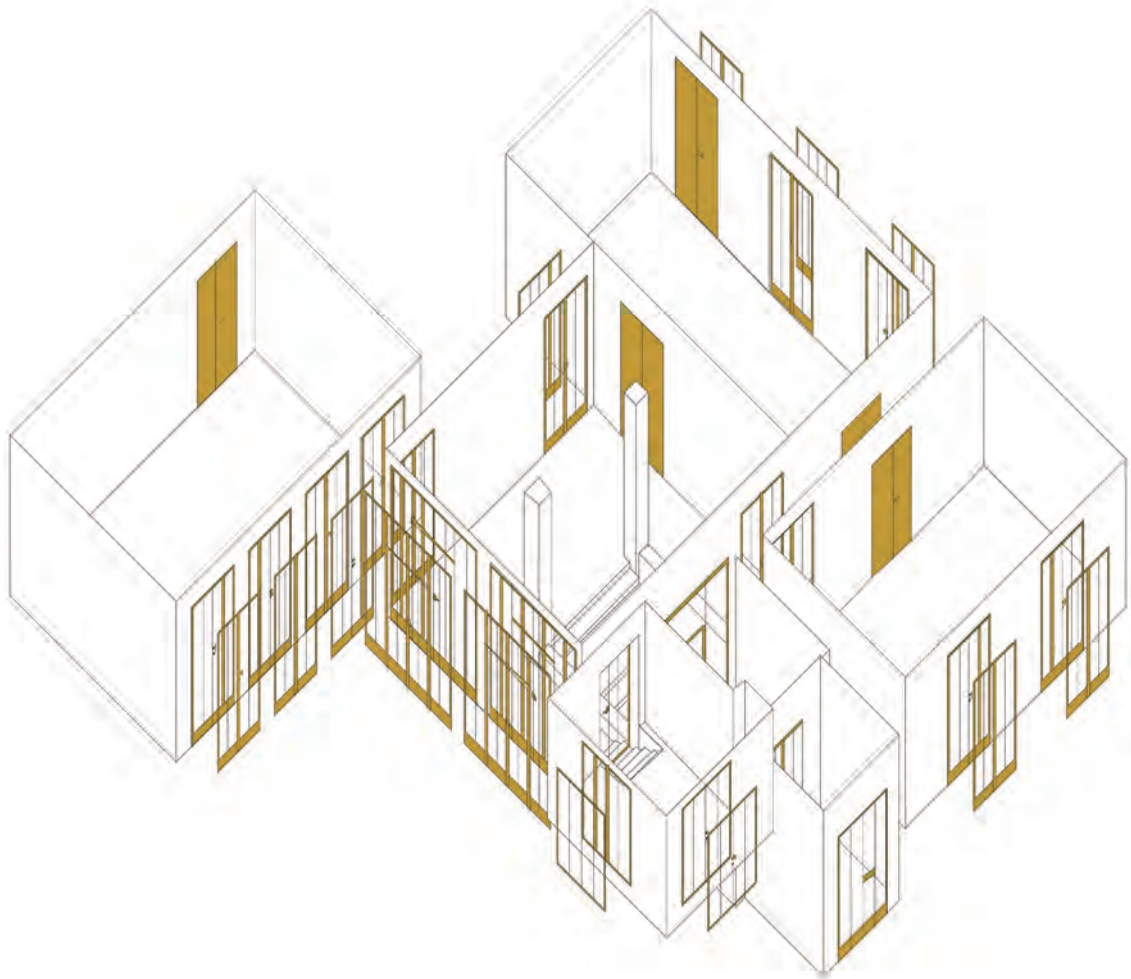


図3) ホールを中心とする部屋の二重ドアの配置を示すアクソメトリック図。

ヴィトゲンシュタインの厳密な設計に基づき、ドアの製作会社によって工作機械の精度で製作されている。

ドアに取り付けられているガラス板には「透明なガラス」と「半透明なガラス」のふたつの異なる素材が使用されている。ドアの素材に関しては、「透明なガラス製のドア」「半透明なガラス製ドア」「不透明な鉄製のドア」の三種類の素材の異なるドアに分類されることになる（図3）。また、二重ドアの手前側がガラス製で、もう一方が鉄製という、二重ドアの前後で素材が異なるドアも存在する。

これらの三種類の素材と、ドアのタイプ（一重のドアおよび二重ドア）が組み合わせられて、主階においては下記の六種類のドアが各所に設置されている。

- ・一重のドア

- ガラス製ドア（透明）

- 鉄製ドア（不透明）

- ・二重ドア

- ガラス製二重ドア（透明）

- 鉄製二重ドア（不透明）

- ガラス製・鉄製二重ドア（透明・不透明）

- ガラス製・磨りガラス製二重ドア（透明・半透明）

これにより、磨りガラス製・鉄製（半透明・不透明）を除いたガラス製（透明）と鉄製（不透明）の全ての組み合わせがあることがわかる。六種類のドアとその設置箇所について下記に整理する。

- ① ガラス製ドア（一重のもの）

- 外部 → 玄関

- 玄関 → 前室

- 前室 → ホール

- ホール → 朝食室

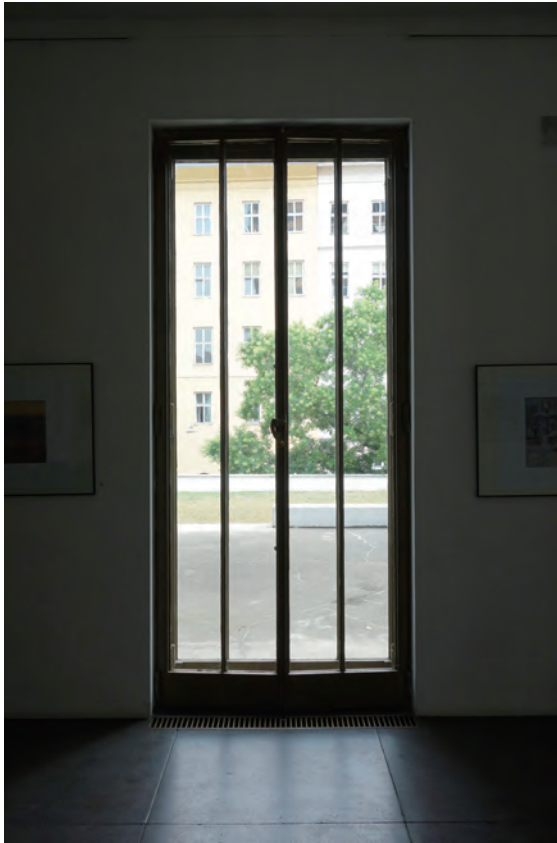


図4) サロンとテラスをつなぐガラス製二重ドア。外部に面するドアにはクレセント錠が組みつけられている。クレント錠は、真上に上げて手前に引くと開閉することができる。すなわち錠そのものがドアハンドルとして機能する。



図5) サロンの3つ並ぶドア。

ガラス製の一重のドアは、4箇所に設置されており、動線の密な玄関からホールへ続く動線上に設置されていることがわかる。なお、それらのドアは全て同一直線上に並んで設置されているため、玄関から前室を通してホール内部までを眺めることができる。

② 鉄製ドア

前室	→	クロークルーム
ホール	→	サロン
食堂	→	オフィス

上記の3カ所に設置されているドアは、どれもそのドアが属する壁面にはこの鉄製のドアのみが設置されている。また不透明な鉄製であるため、他の透明なドアと異なり、閉じた状況では壁面の一部となる。

③ ガラス製二重ドア

ホール	→	テラス
ホール	→	居間
居間	→	外部
サロン	→	テラス (図4、図5)
食堂	→	テラス
夫人居間	→	テラス

ガラス製二重ドアは、主階に設置されている二重ドアのなかで最も多く配置されている。特に、内部と外部を接続する箇所は、全てこのドアが設置されていることがわかる。

④ 鉄製二重ドア

居間	→	サロン
----	---	-----

⑤ ガラス製・鉄製二重ドア

サロン	→	夫人居間
-----	---	------

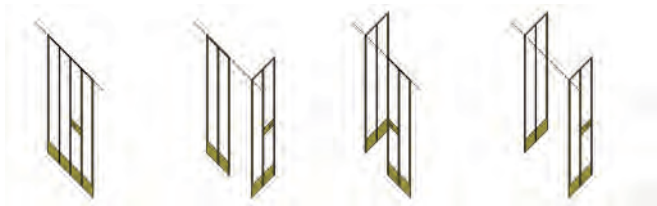


図6) 玄関のガラス製の一重のドア



図7) 玄関と前室を接続するガラス製の一重のドア

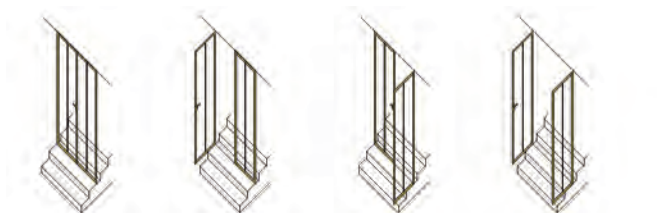


図8) ホールと朝食室を接続するガラス製の一重のドア。

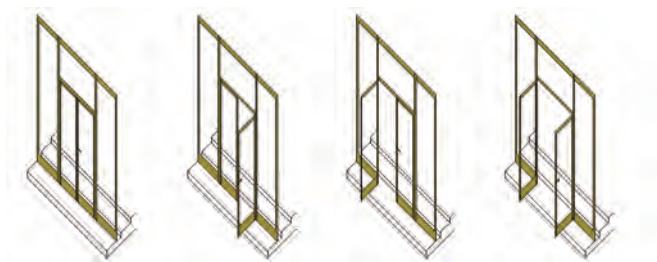


図9) 前室とホールを接続するガラス壁面に設置されたガラス製の一重のドア。

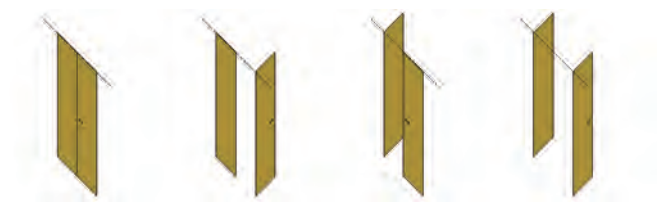


図10) ホールとサロンを接続する鉄製の一重ドア。



図11) ホールと居間・食堂・階段室を接続する二重ドア。(201頁参照)

上記で示した鉄製の二重ドアとガラス製・鉄製の二重ドアは、ともにサロン一部屋に設置されている。またそれらの二重ドアの鉄製の素材は全てサロン側に設置されている。

⑥ ガラス製・磨りガラス製二重ドア

ホール	→	階段室
ホール	→	食堂

ガラス製・磨りガラス製二重ドアは、ホールへ入って正面の壁面に設置されている。ガラス製ドアはホール側、磨りガラス製ドアは階段室・食堂側に設置されている。

6-2 | ドアの開閉パターン

上記のようにドアのメカニズムとしては、まず、「一重のドア」と「二重ドア」に分類される。二重ドアは、一重のドアと同様に左右に開くことのできる観音開きであるが、「一方向に開くドア」と「双方向に開くドア」に分類される。またそれらのドアは、三種類（ガラス製、鉄製、磨りガラス製）の異なる素材に分類されている。アクソノメトリックで描画した一重ドアと二重ドアの全ての開閉パターンを図6から図15に示す。

これらの図から把握できるように、ドアの開閉パターンは閉じた状態と開いた状態を合わせると一重のドアの開閉パターンは4通りあり、二重ドアの開閉パターンは16通りあることになる。これをさらに例えば4つのドアが並ぶ食堂の全てのドアの開閉パターンを考えると、パターンはさらに複雑になることが考えられる。

また、両開きドアは幅が大きく、片側を開くだけでも十分に人が通ることが可能である。このため、両方のドアを閉め切った状態とまた全開にした状態以外にも、片側だけ

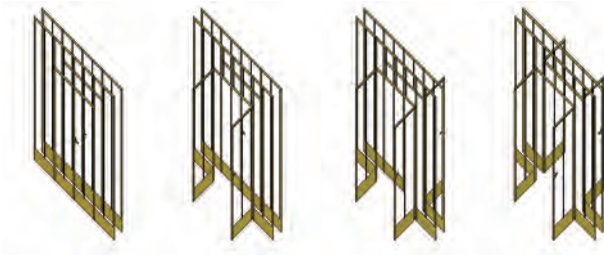


図 12) ホールとテラスを接続するガラス製二重ドア。(202 頁参照)



図 13) 居間と外部、サロンとテラス、食堂とテラスを接続するガラス製二重ドア (203 頁参照)

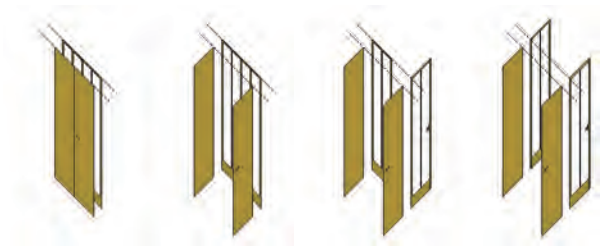


図 14) サロンと夫人居間を接続する鉄製・ガラス製二重ドア。(204 頁参照)

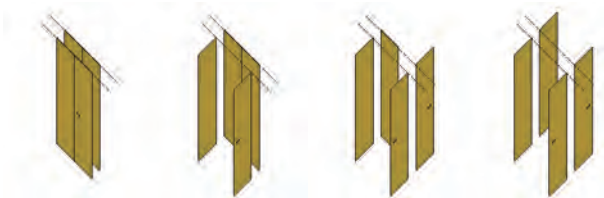


図 15) 居間とサロンを接続する鉄製二重ドア (205 頁参照)

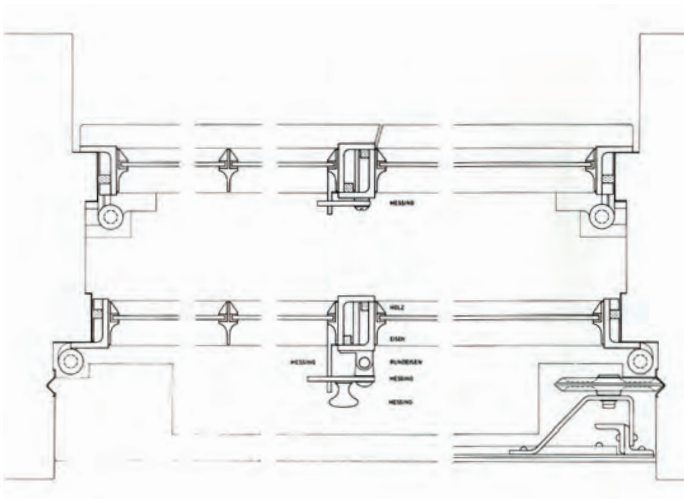


図 16) 食堂とテラスのガラス製の二重ドアの詳細図 (G. Gebauer)。

を開けて使用することができる。

二重ドアは4枚を前後に全開にした場合には、立体的な造形として立ち現れ、前後方向の強い方向性を表現するものとなることがわかる。前後のドア4枚は全閉および全開の状態以外にも片側のみを開く半開状態があり、それを含めると複雑かつ造形的な開閉パターンが作り出されることが理解される。

このような、「開」状態と「閉」状態のふたつの動作を組み合わせて複雑なパターンを作り出すことのできる二重ドアの仕組みは、電気回路のスイッチ動作「ON」・「OFF」と等価であり、それは演算回路の二進法におけるふたつの状態を示す「1」・「0」にも共通するある論理的な仕組みであるということができる。

ヴォイトゲンシュタインによって設計されたドアのメカニズムは、彼がベルリンのシャルロッテンブルク大学（現ベルリン工科大学）およびマンチェスター大学においてメカニカルエンジニアリング（航空精密工学）を学び、ケンブリッジ大学時代にラッセルのもとで数学および論理学を学んだことと無縁ではないと思われる。

6-3 | 二重ドアの開閉機構

壁面の開口部に取り付けられたドアは、壁に切り抜かれた空洞部分に深く収まるようにドア枠が設置されている。その枠にはドアの開閉メカニズム部分が組み込まれている。ドアの両側の枠には、上から見るとL型に成形された金具がヒンジの部品として取り付けられている。しかしそのヒンジは、ドアを立面で見た時には、その枠によりヒンジが隠れてしまうように設計されている（図16）。

巨大なドアの回転動作は、ドアに備え付けられている3つのヒンジ以外にはこの回転を補助する部品は一切取り付けられていない。ヴェイデフルトによれば、その中央のヒ

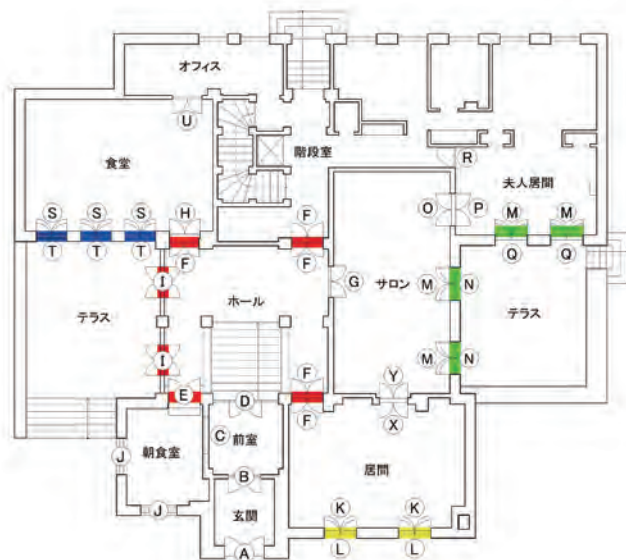


図17) ドアに取り付けられたドアハンドルの高さ。同じ高さのドアについて示した図。
赤は、1,535mm、緑は、1,580mm 黄は、1,405mm、色は、1,590mmである。

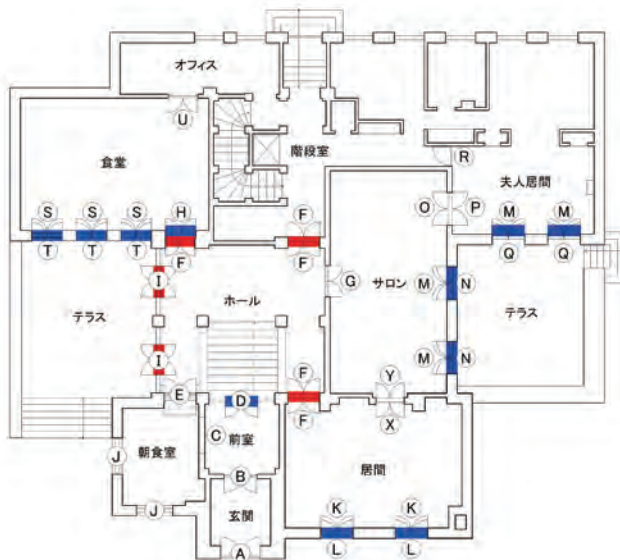


図18) ドアの下枠の高さを示した図。ホールの壁面に設置しているドアの下枠は、朝食室を除いて260mmで同じである(赤色)。青のドアは200mmで統一されている。

ンジの位置はドアが回転時において、最も負荷がかかる位置に設置されているとされる。また、その中央のヒンジの位置から同じ間隔で上下のヒンジの位置が割り出されていることが指摘されている^{〔註1〕}。

全てのヒンジは、ドアが開く側に付けられている。また、全てのドアが内側に開くドアも同様にヒンジは内側に付けられ、ドアの回転軸の位置が設定されている。

ヴィトゲンシュタインによってドアの棧は非常に細く仕上げられている。棧に組み込まれたガラスの幅と高さの比率は「1:10」となっているので、この細い鉄製の棧の強度の高さが伺える。しかし、ハインリッヒ・ポステル(Heinrich Postel)によれば、ドライバーひとつでドアとガラス板を簡単に取り外すことができるとされる^{〔註2〕}。

ドアに付けられたドアハンドルは、レバーハンドルとクレセント錠のタイプの二種類に分けられる。レバーハンドルは、部屋と部屋を接続する場所に設置されたドアに組み付けられ、さらにドアの表と裏ではハンドルの形状が異なっている。一方、クレセント錠は、テラスなど外部に面するペリメーターゾーンのドアに組付けられている。

ドアハンドルの床面からの高さは各ドアによって異なる(図17)。例えば、ホールの四隅のドアとホールからテラスへ続くドアの場合、ホールの床面からドアハンドルの高さは、およそ1,535mmの位置に設置されている。しかし、ホールからサロンへ接続するドアでは、およそ1,420mmの位置に設置され、ホールの内部に面するドアハンドルのなかで、最も低い位置に設置されていることがわかった。

また、ガラス製のドアの下棧の高さに関しても、各ドアによってそれらが異なっていることが実測によって明らかになった(図18)。ホールから居間・階段室・食堂・テラスに接続するドアの下棧は260mmであるが、朝食室は65mm、ホールと前室へ続くドアは200mmであり、それぞれ異なっていることがわかる。一方で、外部に面する居間・サロン・食堂・夫人居間のドアの下棧は200mmと同じ寸法であることがわかった。

註1) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein
Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.130

註2) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein
Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, pp.130-133

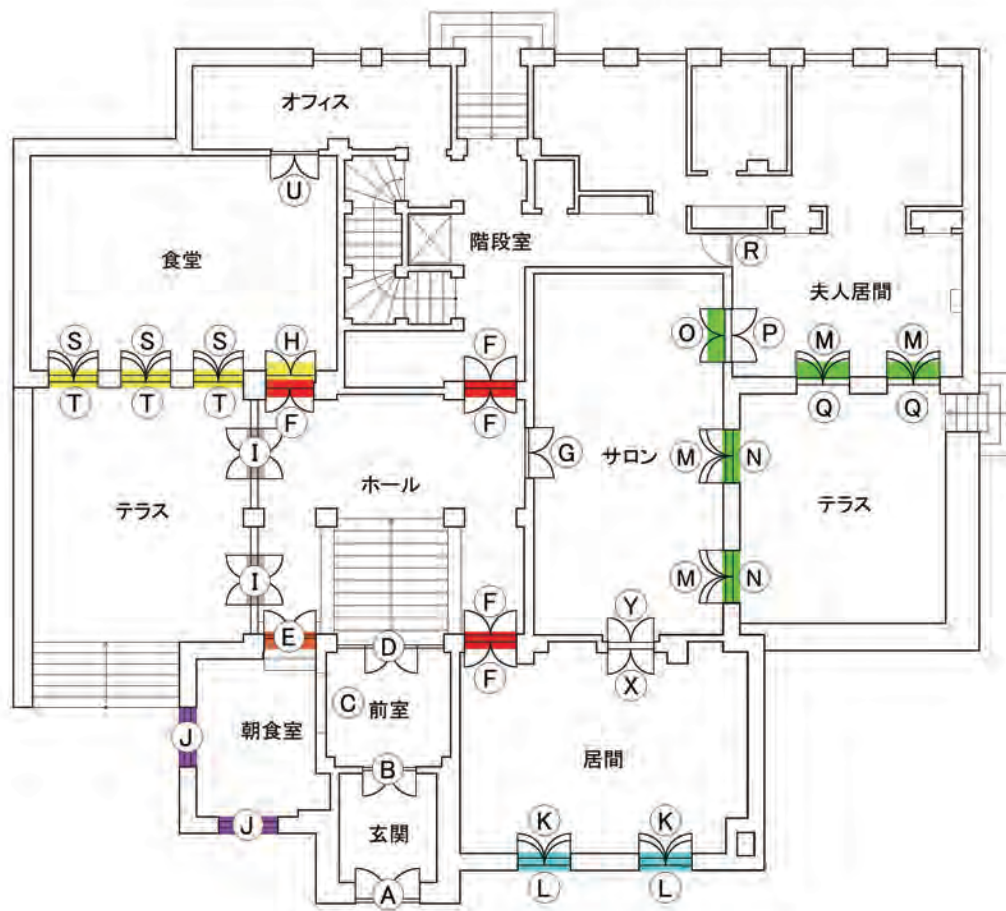


図 19) ドアの寸法体系。幅および高さがともに等しいドアを同色で示している。記号は建具表と対応。同一壁面上に設置されている開口部は、同寸であることがわかる。

6-4 | ドアの配置

ストーンボロー邸主階の全てのドアの配置を図に示す（図19）。ドアに記されたアルファベットはドアの種類であり、同じ記号は同じ形状・同じ寸法のドアである。

幅及び高さともに同寸法かつ同形状のドアを以下に記す。

- ・ホールと居間・階段室・食堂をつなぐドア「F」
- ・ホールとテラスをつなぐドア「I」
- ・朝食室の窓「J」
- ・居間の2つ並ぶドア「K」
- ・サロンの3つ並ぶドア「M」「O」
- ・食堂の4つ並ぶドア「H」「S」
- ・夫人居間の2つ並ぶドア「M」

ドアの寸法が幅と高さともに、全く同じであるドアは、ホールの四隅に設置されているドアのうち、ホールと居間・階段室・食堂をつなぐ「F」のドアは全て同じ寸法（W：1,380mm、H：3,200mm）である。一方で、ホールと朝食室をつなぐ「E」のドアは幅は同じであるが（W：1,380mm、H：2,860mm）であるが、高さは340mm低く設定されている。

それらのドアが属する内部壁面では、ホールを入れて正面の壁面に設置されているホールと食堂・階段室をつなぐふたつのドア「F」は、同じ寸法（幅・高さ）のガラス製のドアを配置することで、左右対称的な壁面構成となっている。一方、その壁面に対して反対側の、ホールと朝食室・居間をつなぐガラス製のドア「E」および「F」はホール内部立面では、ホールから朝食室を接続するドア「E」は、ホールの床面から340mm高い階段の2段目の踏み面に設置されている。すなわち、この壁面を構成する「E」および「F」の高さ寸法が異なるドアは、内部立面において左右対称的な壁面で構成する為に「E」のドア

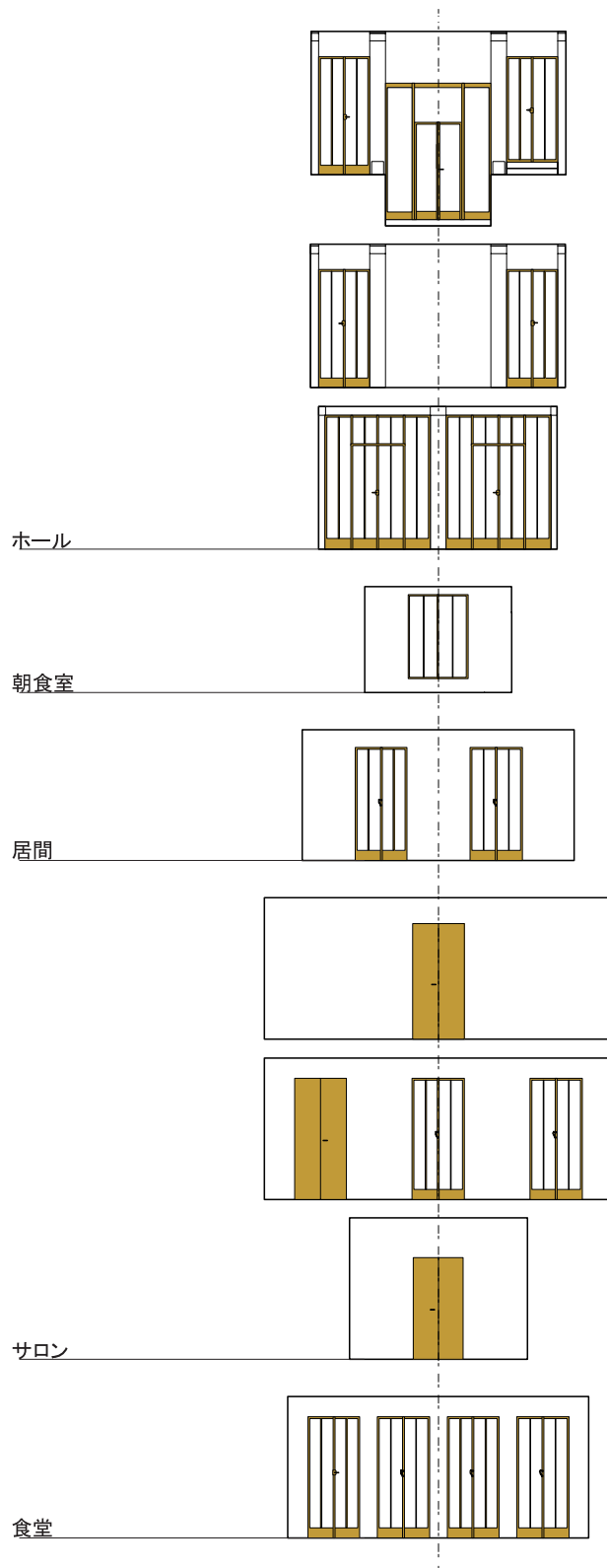


図 20) 各部屋の左右対称性を構成する壁面。

の高さを階段の2段分低くすることにより調整していることが明らかになった。よって、ホールの四隅に設置された「E」および「F」のドアが属する壁面は左右対称形な壁面構成となっている。

サロンの内部壁面に3つ並ぶドアは、左の夫人寝室へ続く「O」が鉄製のドアで、中央と右のテラスに続く「M」のドアがガラス製のドアとなっている。それらは互いに異なる素材のものであるが、3つドアは同じ寸法(幅・高さ)である。壁面の中心軸上に中央のドアを配置し、左右のドアを等間隔に配置することで左右対称形な壁面が計画されている。すなわち、サロンの3つ並ぶドアが属する壁面は、鉄製のドアとガラス製のドアの異なる素材からなるドアであるにも関わらず、同寸のドアが計画されることにより、左右対称な壁面構成となっていることがわかる。

食堂の内部壁面に4つ並ぶドアの内、右の3つの食堂からテラスへ続く「S」はガラス製ドアであり、左端の食堂からホールへ続く部分には「H」の磨りガラス製ドアが設置されている。それらのドアは、サロンの「M」および「O」のドアと同様に、ドアの素材は異なるが同寸のドアである。すなわち、この壁面においてもドアとドアの間隔を等間隔にすることで、左右対称形による壁面の構成がみられる。

また、それらの壁面以外においても、居間に2つ並ぶ「K」のガラス製ドア、夫人居間の2つ並ぶ「M」のガラス製ドアも、そのドアが属する壁面が左右対称形の構成になっていることがわかる。

なお、朝食室を入れて右手側のガラス製の窓「J」、そしてホールとサロンを結ぶ鉄製のドア「G」のサロン側壁面、玄関および前室に設置されているガラス製ドア「A」「B」「D」、鉄製ドア「C」は、壁面に対してただ1つのドアおよび窓が設置されている箇所である。それらのドアにおいても、壁面の中心軸上にドアを配置することにより左右対称形な壁面を構成していることがわかる。

ドアの寸法の体系的な把握をおこなうことで、主階にみ

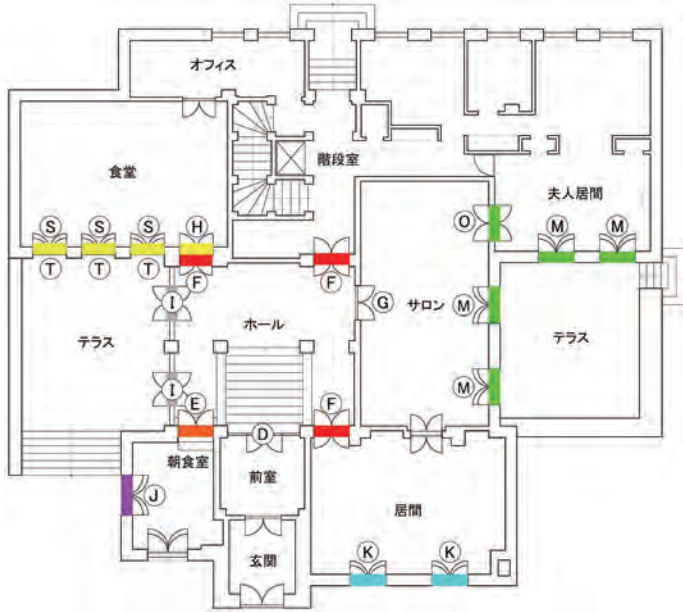


図 21) 各部屋の左右対称形を作り出すドアの配置。ホール、朝食室、居間、サロン、食堂の各部屋の同壁面上に設置された同色のドアは全て同寸である。

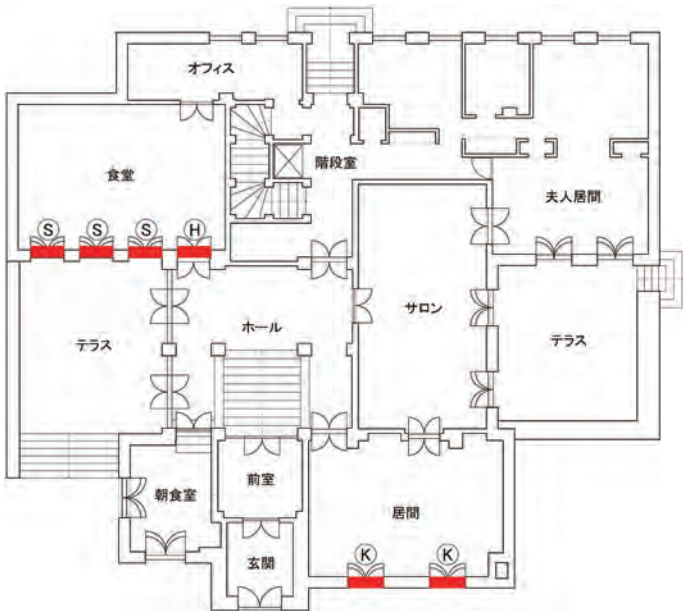


図 22) ドアの幅寸法が同寸である居間の 2つ並ぶドア「K」と食堂の 4つ並ぶドア「H」「S」。

られるドアの寸法は19の異なるドアの寸法があることを明らかにした。ドアの配置は、壁面上の中心軸上にドアを配置、また同寸法のドアを同一壁面上に等間隔に配置することにより、左右対称形に壁面を構成するという「内的な秩序」に基づいて計画されていることが明らかになった(図20、21)。

6-5 | 部屋の内的な秩序

前述で記述したように、開口部寸法の比較により、各部屋の内的な秩序に基づきドアの配置が計画されていることが明らかになった。次に、ドアの高さ寸法とそのドアが属する壁面の高さ(部屋の天井高さ)の寸法の比率にみられる共通する特徴について記述する(図22)。

居間に2つ並ぶ「K」のドアとサロンに3つ並ぶ「M」「O」のドアと食堂に4つ並ぶ「H」「S」のドアの幅は、

- ・居間の2つ並ぶドア「K」は1,410mm
- ・サロンに3つ並ぶ「M」「O」は1,430mm
- ・食堂の4つ並ぶドア「H」「S」は1,410mm

であり、居間と食堂のドアの幅が同寸法であり、サロンのドアは20mm大きいことがわかる。

一方、ドアの高さについては、下記のように異なっていることがわかる。

- ・居間に2つ並ぶドア「K」が3,040mm
- ・サロンに3つ並ぶ「M」「O」は3,250mm
- ・食堂に4つ並ぶドア「H」「S」が3,250mm

居間と食堂のドアの幅は同寸法であるが、高さに関しては、居間のドアは食堂のドアより210mm低いことがわ

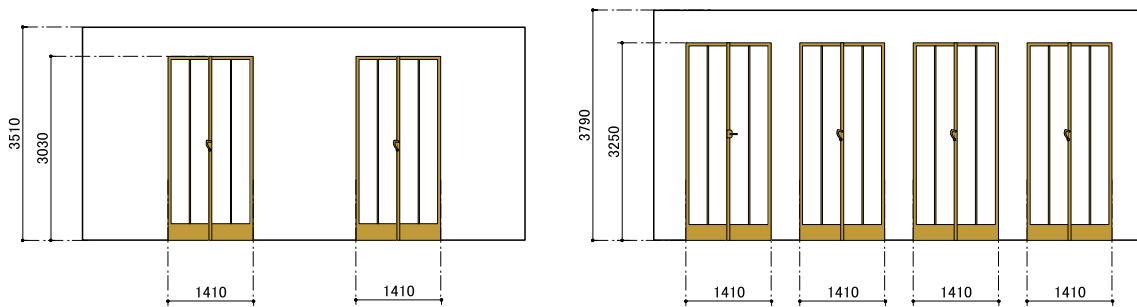


図 23) 居間(左)と食堂(右)のドアの高さと天井高の比率は等しい。居間のドアは低い天井高に合わせて低く設定されている。

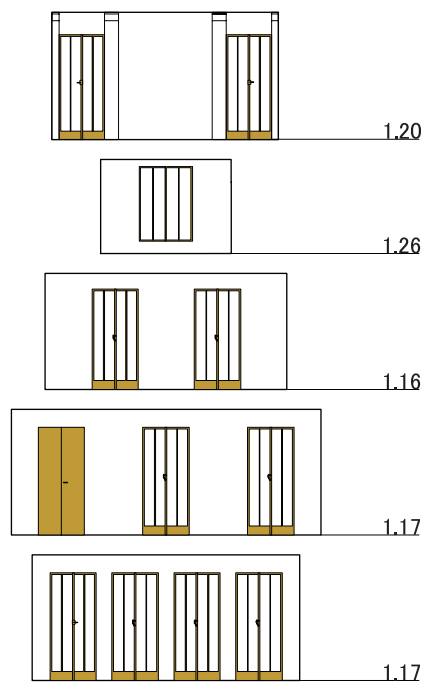


図 24) 上からホール、朝食室、居間、サロン、食堂の部屋の左右対称形な内部壁面の比較。
比率: 部屋の天井高さ / ドアの高さ

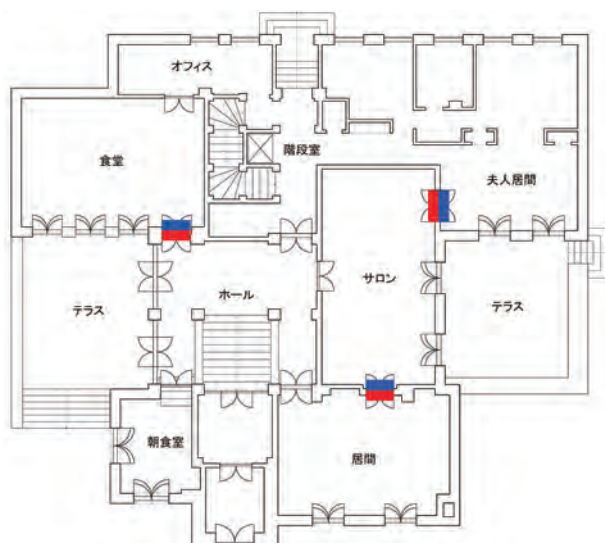


図 25) 二重ドアの前後で寸法が異なるドアを示した図。ホールと食堂をつなぐガラスと磨りガラス製の二重ドア、居間とサロンをつなぐ鉄製の二重ドア、サロンと夫人居間をつなぐ鉄とガラス製の二重ドアの前後で微小であるが寸法が異なっている。

かる。この差異が作り出された理由は、食堂の天井高さ（CH: 3,790mm）と居間の天井高さ（CH: 3,520mm）が270mm異なる為、互いの部屋の天井高に対応してドアの高さも調整したものであると考えられる。実際に、天井高さとドアの高さの比率は、食堂が「1.17」であり、居間が「1.16」でほぼ等しい比率となっていることが明らかになった（図23）。なお、サロンは食堂の天井高さとドアの高さの寸法は同じであるため、食堂と同様に「1.17」の比率である（図24）。

このように、ストンボロー邸においては、同一壁面上においてドアの寸法を等しくすることで、左右対称形な壁面の構成をつくりだしていることが確認された。一方で、居間・サロン・食堂の各部屋は、異なる天井高となっており、ドアの高さも天井高さに応じて低く調整され、それらの間の比率が等しいという、共通する特徴があることが明らかになった。

6-6 | 二重ドアの役割

ストンボロー邸においてはこのように、各部屋の空間的な左右対称性、そして壁面上のドア配置の左右対称性は非常に重要な形態言語となっている（図25）。

各部屋それぞれが左右対称形にドアが配置された壁面を有しているが、なかでもサロンには3つの左右対称な壁面があり、部屋そのものに非常に強い緊張感のある空間特性を与えていることがわかる。また、ホールは入り口からの軸線上にあり、最も強い左右対称性を有しており、ここにも3つの左右対称形にドアが配置された壁面があることがわかる。ストンボロー邸は、それぞれに独自の左右対称性をもった部屋が互いに接続され、全体の空間構成を作り出しているということが出来る。

前項で示したようにストンボロー邸に設置されたドアの

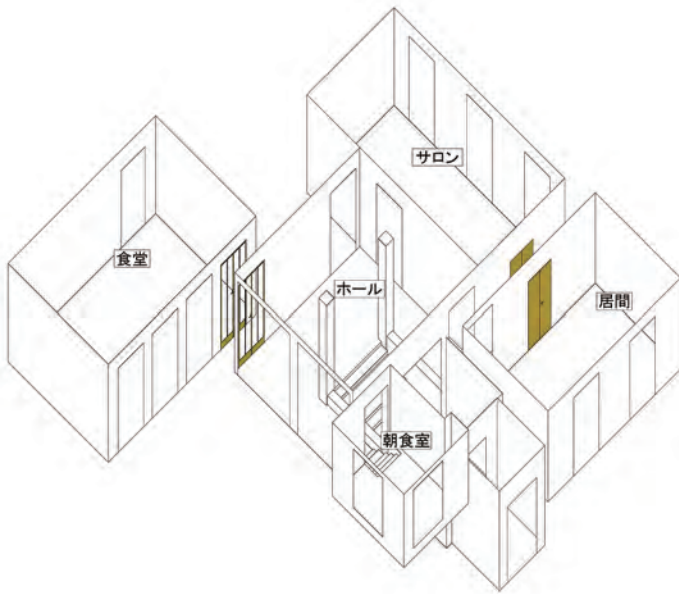


図26) 前後で寸法の異なる二重ドアの位置を示す。食堂に属する面とホールに属する面では寸法が異なる。サロンと居間との間の鉄製のドアも同様である。二重ドアは、それぞれの部屋の内部の左右対称性をはじめとする内的な空間構成論理に従属し、また一方では部屋と部屋とを接続する役割を有している。

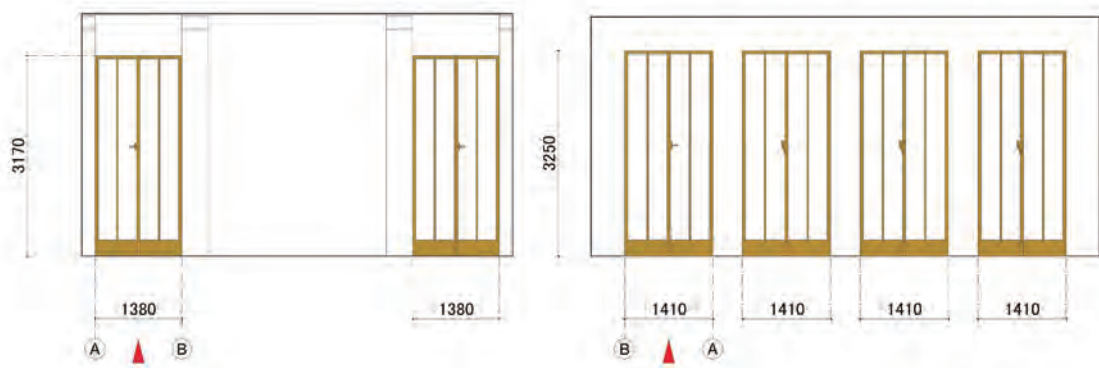


図27) 上はホール側から見た食堂へ続くドア。「A」「B」で左右を示す。下は食堂から見たホールへ続くドア。同じ二重ドアを両側から見ている。

種類は、まずそれぞれのドアが属する部屋の壁面構成に従ってその数、そして種類が選択され、寸法と位置が決定されていると考えられる。

すなわち、各部屋の内部の秩序によりドアの形状と種類が選択され、各部屋のドアの寸法体系は、これにより決定されていることがわかる。前項のサロンと居間の比較からも、まずペリメーター部分のドアの幅が全体で共通の寸法に統一されているが、ドアの高さはそれぞれの天井高に合わせて調整されている。

一方で、各部屋は「ホール」および他の部屋との関係の中に置かれている。各部屋はそれぞれ部屋の一箇所のドアにより「ホール」の空間と結ばれている（図26）。

すなわち、全てのドアは

- 1) 左右対称性という各部屋における非常に強い内的な秩序
- 2) 他の部屋との関係という外部との関係

の両方の領域に属し、またそれらを接続する役割を担っているといえることができる。

前述のように各部屋にはそれぞれの壁面を構成する寸法の秩序があり、それに基づきドアの位置及び形状と寸法が決定されている。たとえば、食堂に並ぶ同形状の4つのドアは同一壁面上に左右対称形に配置されているが、それらの食堂側の寸法は同一である。その開閉メカニズムには二種類あり、ホールと接続する左端の二重ドアはホール側と食堂側へと前後に開くが、右の3つの二重ドアは全て食堂方向の内側に開く。

一方で、食堂が接続するホールの四隅には互いに同形状のドアが配置されており、これも厳密なホールの内部の秩序を満たすべくそれらの形状と寸法と位置が決定されている。ドアハンドルの方向性もこうしたホール内部の秩序に従って組みつけられている。このホールの4つのドアのうち前述の食堂へと続くドアは二重ドアであり、一方はホー



図 28) ホール側立面。この壁面は、ドアが左右対称形に配置され、右側のドアより階段室、左側のドアより食堂に接続する。



図 29) 食堂側の4つ並ぶドア。この壁面の4つ並ぶドアの配置は、左右対称形に構成されている。



図 30) ホールと食堂をつなぐ二重ドア詳細。上記の二重ドアは前後で寸法が異なる。寸法の差異は二重ドアの間で調整されている。手前ホール側のドア寸法は(幅 1,380mm、高さ 3,200mm)奥食堂側のドア寸法が(幅 1,410mm / 高さ 3,250mm)となっている。

ルに開き、一方は食堂側に開く。

実測調査の結果、このホール側のドアは（幅 1,380mm / 高さ 3,200mm）、食堂側のドアは（幅 1,410mm / 高さ 3,250mm）であることが確認され、同形状であるにも関わらず、寸法が異なっていることがわかった（図 27、28、29）。こうしたドア寸法の差異は、二重ドアの間で壁面で調整されていることが明らかになった（図 30）。

サロンと居間とを接続する二重ドアにも同様に存在する。こうしたことから、ストンボロー邸における二重ドアは、各部屋の内部の寸法の秩序を調整する役割も担っていたことが考えられる。

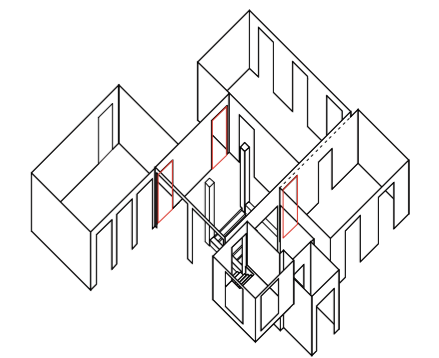
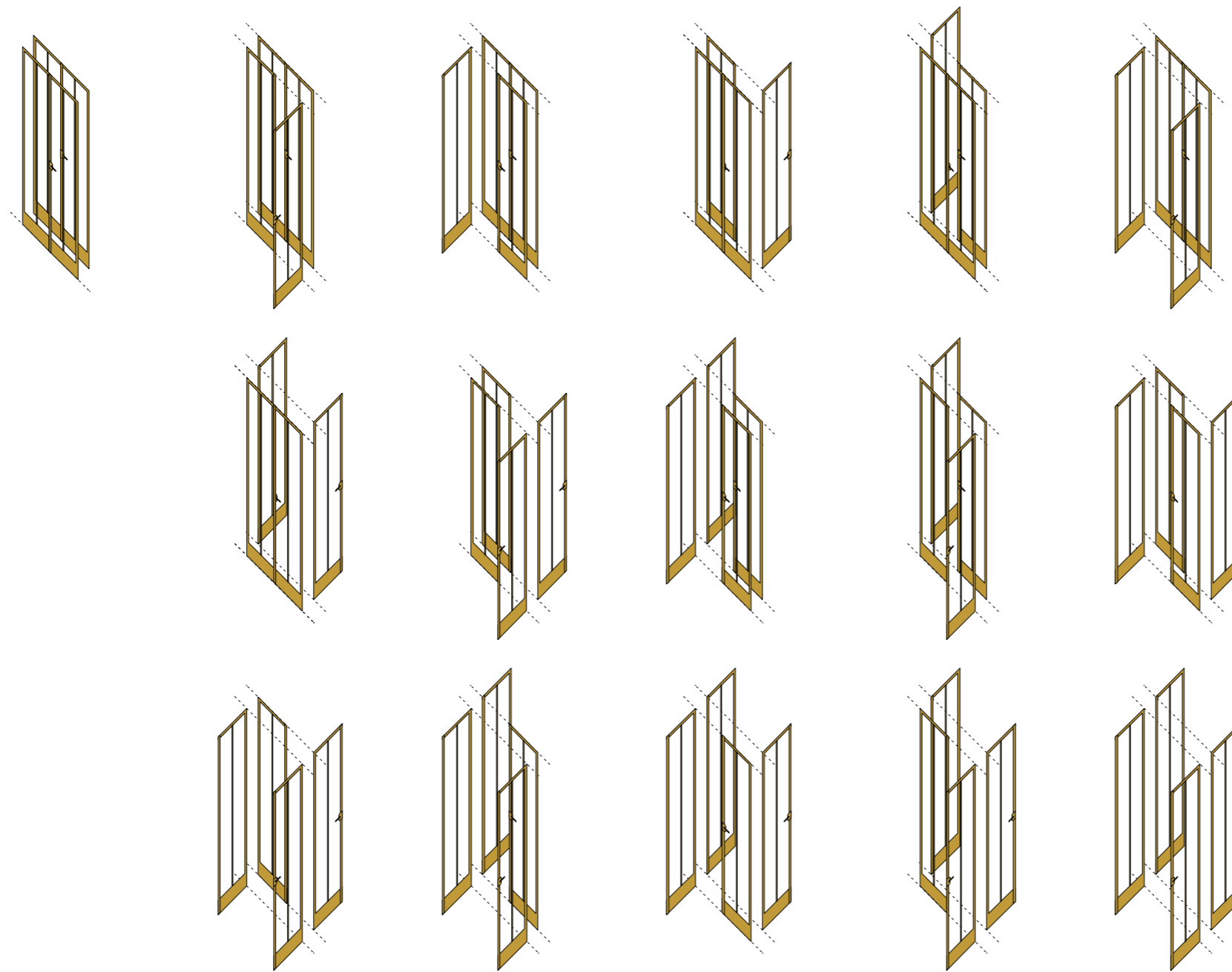
註

- 1) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.130
- 2) *ibid.*, p.133

図版出典

- 1) 石田優 (Yu Ishida) 作成
- 2) *ibid.*
- 3) *ibid.*
- 4) 石田優 (Yu Ishida) 撮影
- 5) *ibid.*
- 6) *ibid.*1
- 7) *ibid.*
- 8) *ibid.*
- 9) *ibid.*
- 10) *ibid.*
- 11) *ibid.*
- 12) *ibid.*
- 13) *ibid.*
- 14) *ibid.*
- 15) *ibid.*
- 16) Gunter Gebauer, Wien • Kundmangasse 19, Fink, 1982, p.72
- 17) *ibid.*1
- 18) *ibid.*
- 19) *ibid.*
- 20) *ibid.*
- 21) *ibid.*
- 22) *ibid.*
- 23) *ibid.*
- 24) *ibid.*
- 25) *ibid.*

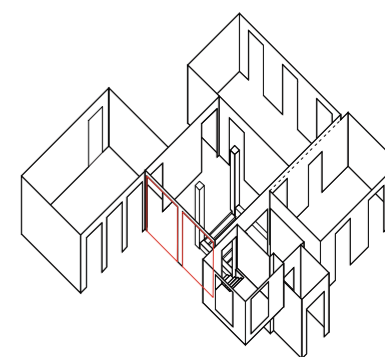
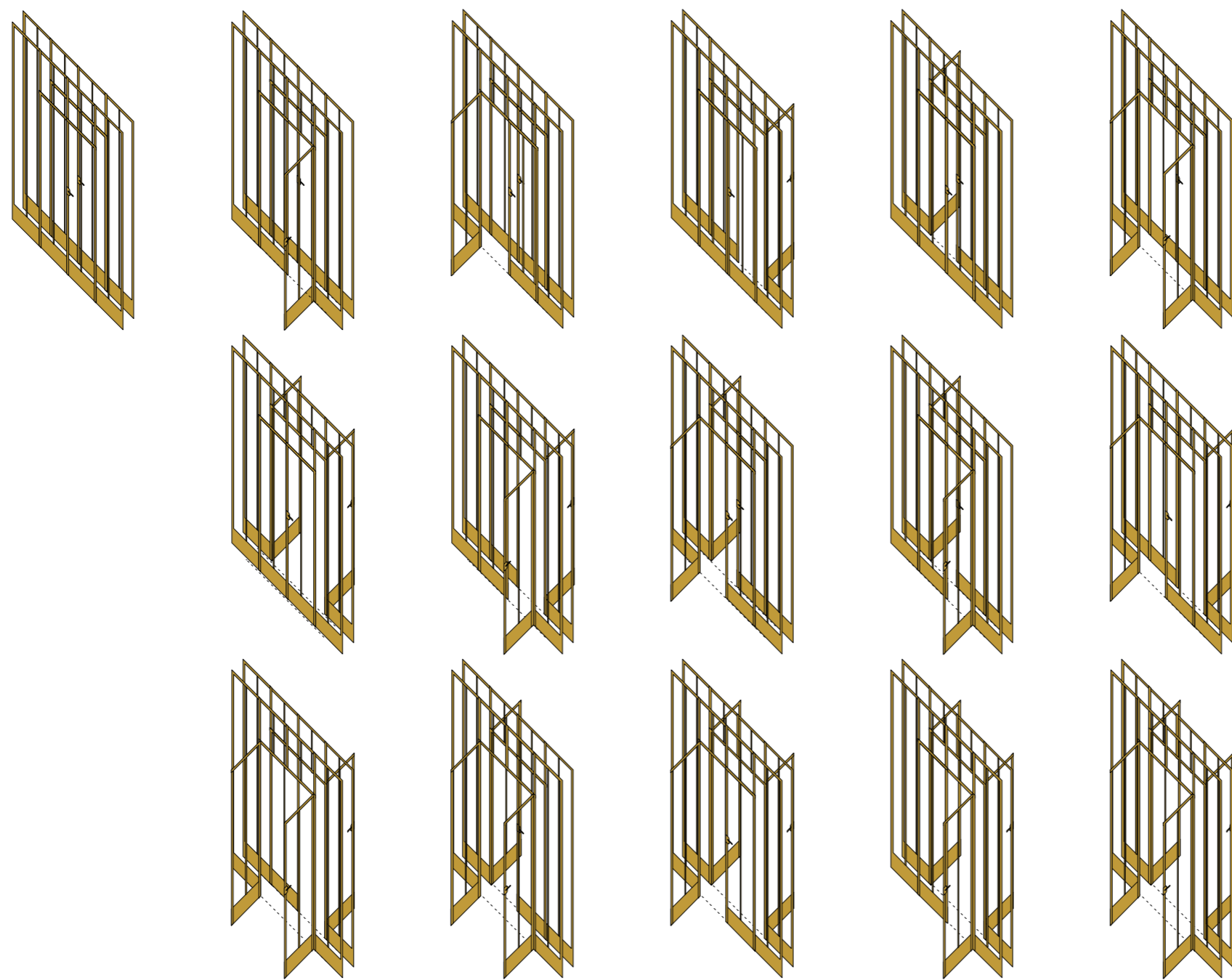
- 26) *ibid.*
- 27) *ibid.*
- 28) *ibid.*4
- 29) *ibid.*
- 30) *ibid.*



二重ドアの開閉パターン

図 11) ホールと居間・食堂・階段室を接続する二重ドア。(180 頁参照)

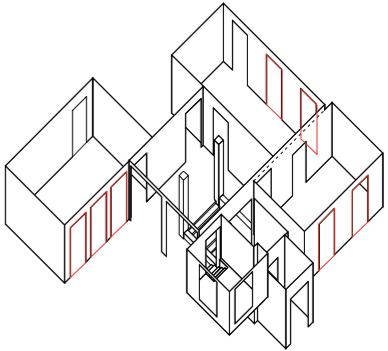
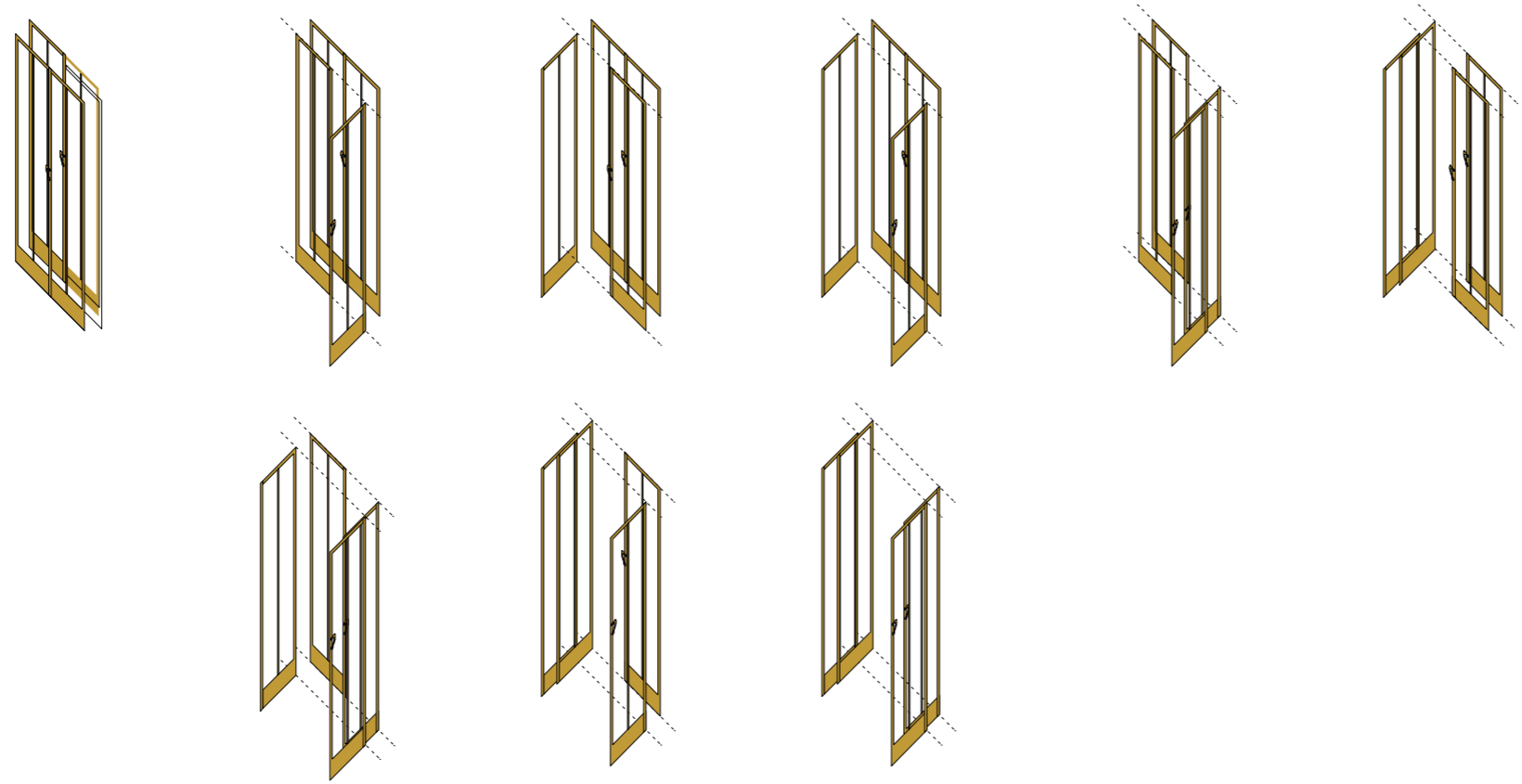
二重ドアの開閉パターンは全て閉じ状態を含めると 16 通り存在する。その様々な状況に応じて開閉することが可能であるため、多くの表情を創りだしている。



二重ドアの開閉パターン

図 12) ホールとテラスを接続するガラス製二重ドア。(182 頁参照)

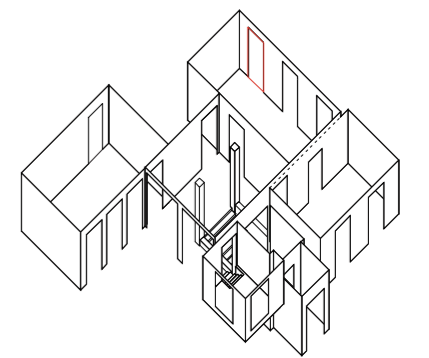
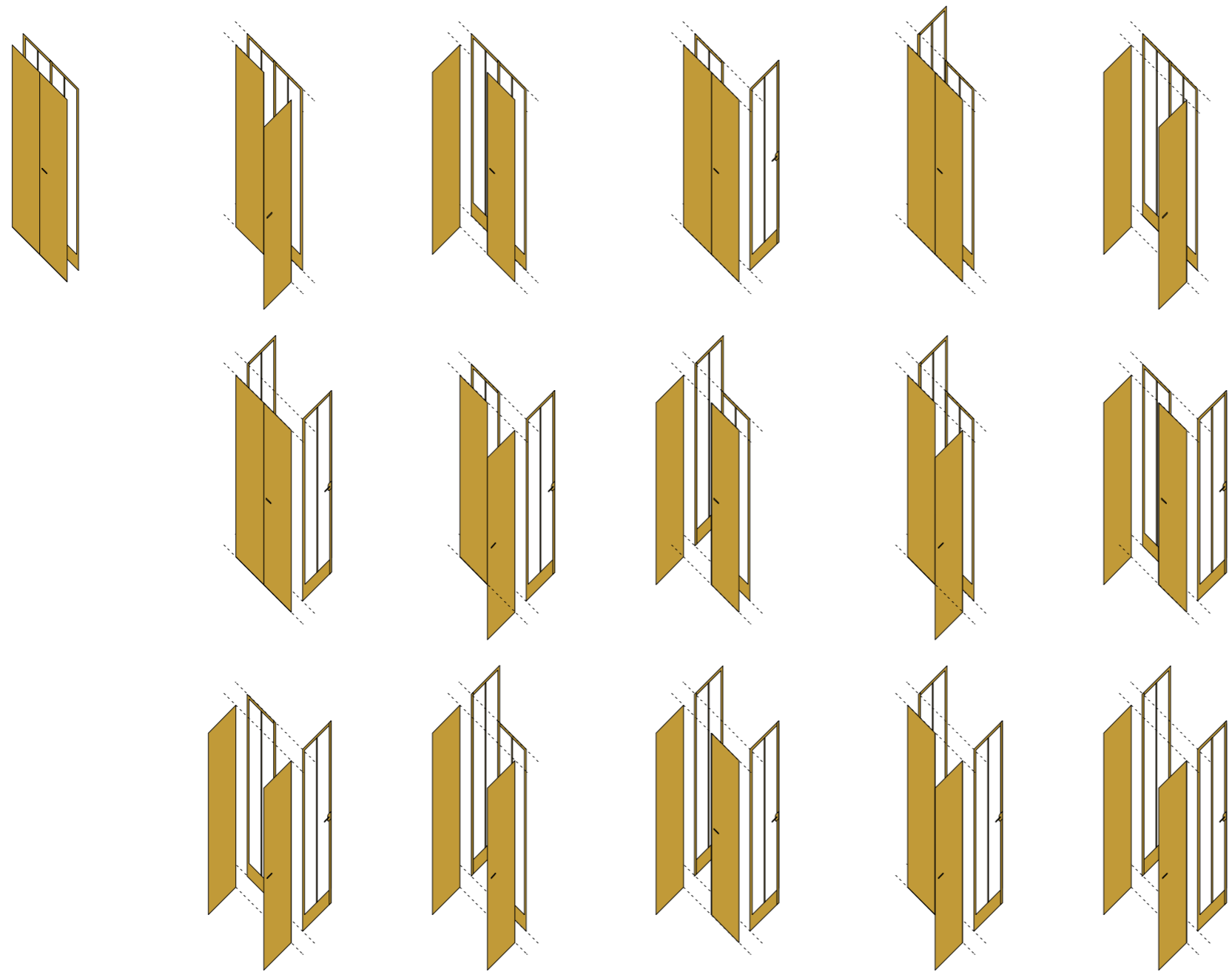
ホールとテラスの間のガラス壁面に設置されている。この二重ドアは前後で全く同じ寸法のドアである。また、テラス側に面するドアには内部側のドアと同様に、ドアハンドルが組みつけられているため、テラスから開けることが可能である。



二重ドアの開閉パターン

図 13) 居間と外部、サロンとテラス、食堂とテラスを接続するガラス製二重ドア (182 頁参照)

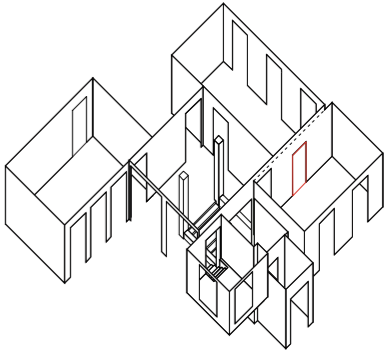
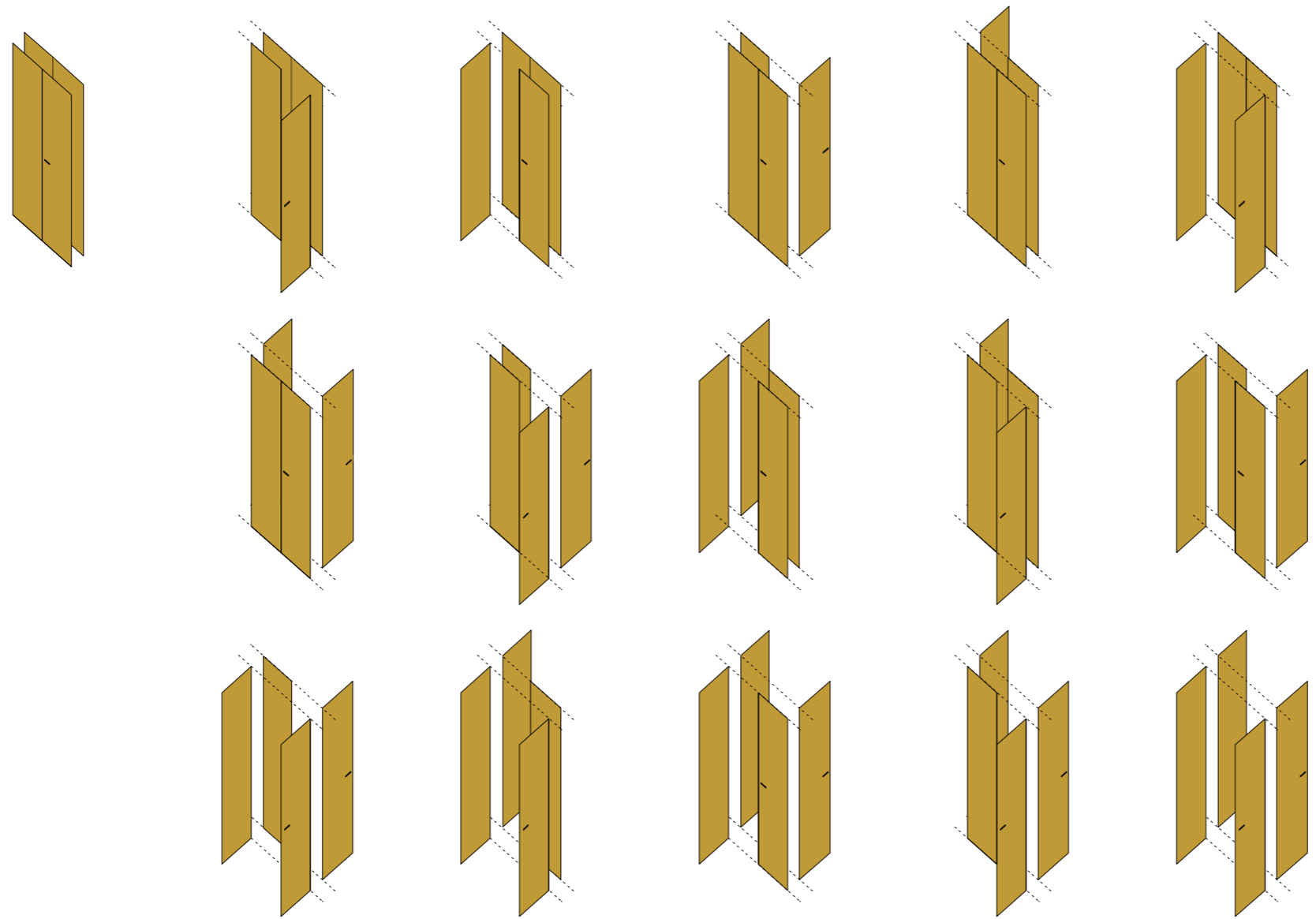
これらの部屋と外部の間に設置している二重ドアは、全て部屋の内部側向かってに開く形式のメカニズムを有している。これらの外部に面する二重ドアには、クレセント錠が組みつけられている。



二重ドアの開閉パターン

図 14) サロンと夫人居間を接続する鉄製・ガラス製二重ドア。(182 頁参照)

主階に設置された二重ドアのなかで、唯一不透明な鉄とそれと対なる透明なガラスの全く異なる素材の組み合わせで構成されている。



二重ドアの開閉パターン

図 15) 居間とサロンを接続する鉄製二重ドア (182 頁参照)

居間とサロンとの間に設置されていた鉄製の二重ドアは、1970年代のリノベーションによって、取り壊されてしまっているため、現在確認することのできないドアである。

第 7 章 結論

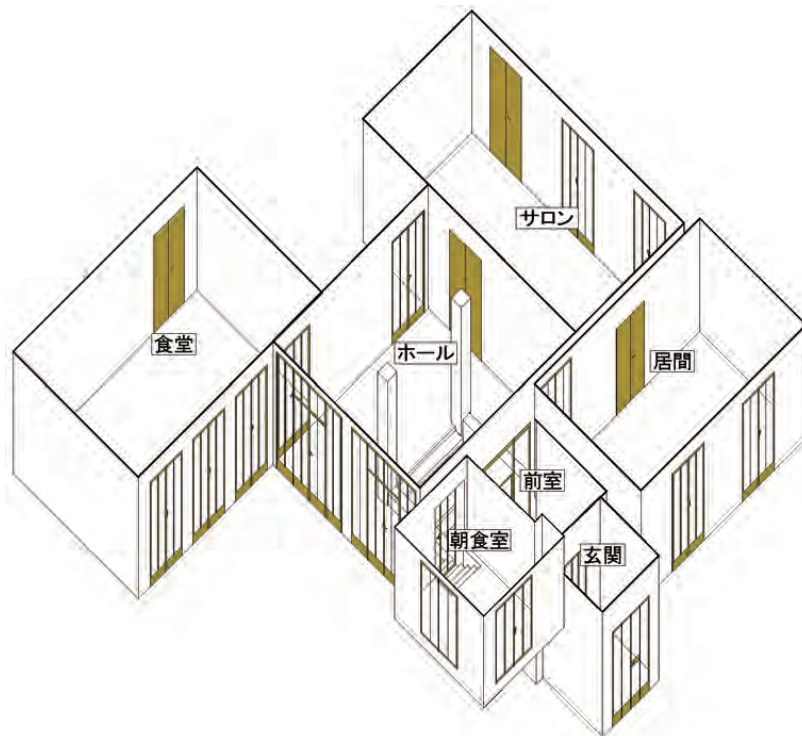


図1) ストンボロー邸主階のアクソノメトリック図。

7章 | 結論

哲学者ヴィトゲンシュタインは、「機械工学、数学、論理学」を学んでいる。ストンボロー邸はヴィトゲンシュタインの哲学を記述した著書『論理哲学論考』と『哲学探求』のふたつの執筆活動の中間の時期に設計・建設のおこなわれた建築であり、この建築に関する研究は建築の領域のみならずヴィトゲンシュタインの哲学の全体像を把握するためにも役立つものであると考えられる。

ストンボロー邸は全くの無装飾な空間によって構成されているが、各部屋壁面のドア配置の左右対称性に強い空間的な特徴がある。「ホール」とそれを取りまく「朝食室」「居間」「サロン」「食堂」の5つの部屋には、通常の建築にはない数学的な特徴があり、部屋に与えられたドアの数による数列、ドアハンドルの配置に関する二項対比的な論理、ドアの壁面上の左右対称形な配置など、この建築では、「ドア」に非常に強い特徴があると考えられる。

むしろ、この建築の内部が無装飾であることは「ドア」を表現するための手段のひとつであるともとらえることが可能である。

本研究では、『論理哲学論考』におけるヴィトゲンシュタインによる論文の記述方式との関係性を視野に、以下の仮の説明概念を置いた。

1. ストンボロー邸はドアを主題とした建築である。
2. 建築に寸法体系が存在する。

これに基づき、部屋の壁面の左右対称形な構成要素としての「ドア」に注目し、その開口部寸法の実測調査をおこない、寸法の比較を行うことを通して、それらの配置の中にあるドアの寸法体系およびドアの役割に関する考察をおこなった。

実測調査は部屋の寸法および開口部の寸法、ドア可動部分の寸法を高精度な機器を使用して計測した。部屋の寸法

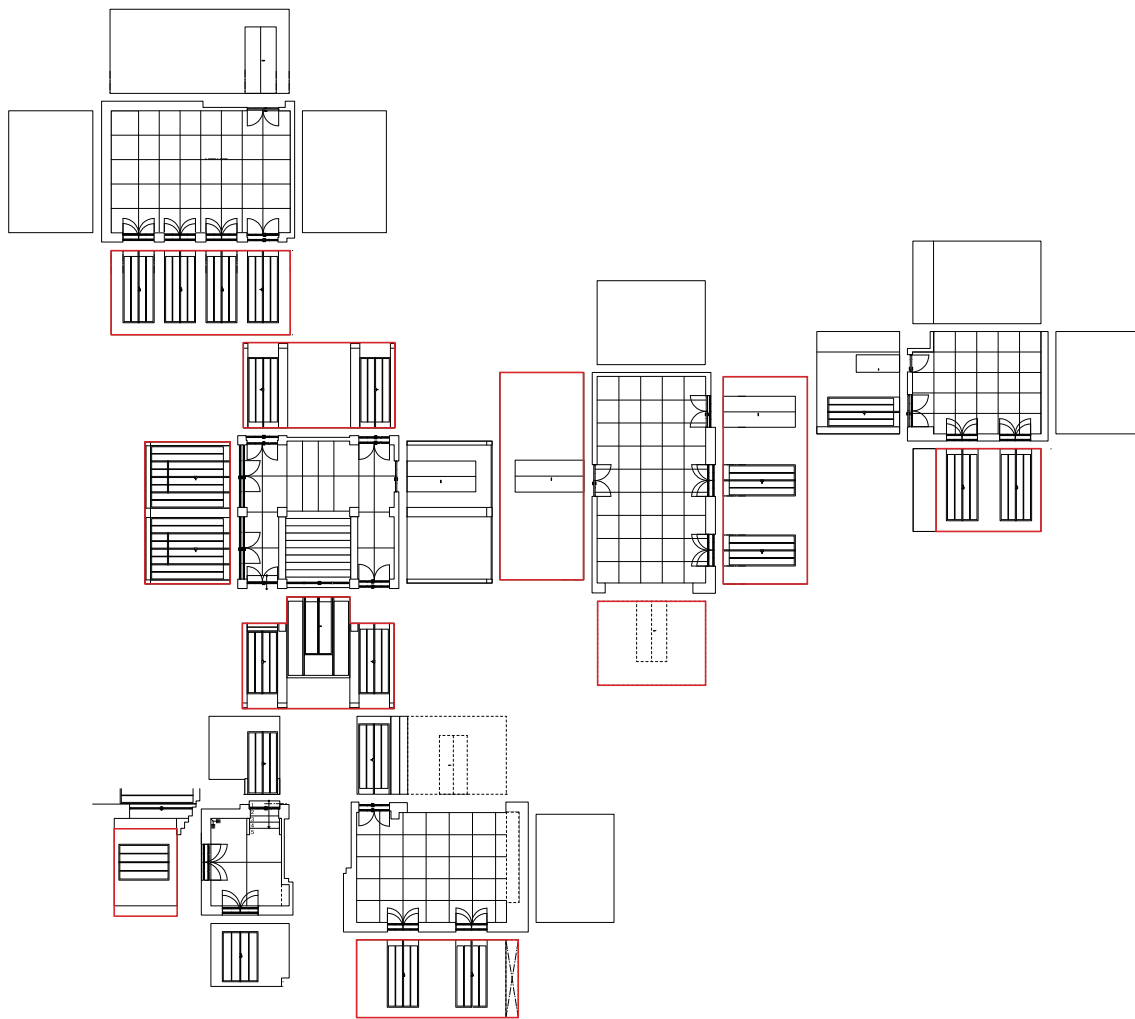


図2) 左右対称的な壁面。主階に配置されているドア寸法は、そのドアが属する内部壁面の秩序によって決定され、左右対称的な壁面を構成する造形要素の一部としての役割を担っている。

は「内部寸法表」として、開口部の寸法は「開口部寸法表」として整理し、それに対応する「建具表」を作成した。

また調査で得られた新たな寸法情報にもとづき平面図、各部屋の展開図、アクソノメトリック図を作成し、考察の基盤とした（図 1、2）。

こうした寸法に関する情報にもとづき、ホールを含む主階の5部屋に関して部屋の面積および容積の比較おこなった。これにより、「ホール」「サロン」「食堂」の容積の比率が1：1：1と等しいことが明らかになった。

次に、一重・二重、鉄製・ガラス製の組み合わせで構成されているドアの種類と寸法にもとづくその配置の中に存在する秩序を考察し、また各部屋の開口部の寸法および天井高を比較し、5部屋の中に存在する寸法体系を考察した。

特に、ドアの高さと部屋の天井高との比率を比較した結果、各部屋ともその比率はほぼ等しく、ドアの高さは部屋の高さに合わせて調整されていることがわかった。すなわち各部屋はそれぞれが自律的な内部の秩序を有しているということが明らかになった。

ストンボロー邸は、壁面の対称性という各部屋それ自身もつ自律的な秩序を有している。そして、各部屋はホールを中心とした構成によって成立していると考えられる。

実測調査の結果、外見上は同形状かつ同寸法に見えるドアにも、微細な寸法の差異があることが明らかになった。特に、部屋と部屋とを接続する位置にある「二重ドア」は、その前後で寸法の異なるものが存在していることが明らかになった。二重ドアは、一方ではそれぞれの部屋の壁面の左右対称性を構成する形態エレメントとして存在すると同時に、こうした各部屋の自律的な内部の寸法の体系を接続する二つの部屋の間でお互いに調整する役割を担っていたことが考えられる。また、ストンボロー邸に配置された二重ドアは前後の間隔も非常に大きく、内部に空間性を持ったドアであり、その開閉にともない視覚的に部屋の接続を示す形状をそこに生成するという特徴を有し、内部の空間構成において重要な役割を担っていたと考えられる。

図版出典

- 1) 石田優 (Yu Ishida) 作成
- 2) *ibid.*

註・図版出典

第1章 | 序論

註

- 1) Paul Engelmann, Letters from Ludwig Wittgenstein, Horizon Pr, 1968, p.78
- 2) ibid.
- 3) Rush Rhees, Recollections of Wittgenstein, Oxford Paperback Reference, 1984, p.6
- 4) Bernhard Leitner, Das Wittgenstein Haus, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.84
- 5) 多木浩二、「ウィトゲンシュタインの家について」、『ウィトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996、pp.176-179
- 6) Bernhard Leitner, Bernhard Leitner, Bernhard Leitner, Das Wittgenstein Haus, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.32
- 7) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.12
- 8) ibid., p.14
- 9) バーナード・レイトナー、「哲学者ルートヴィッヒ・ウィトゲンシュタインの設計した住宅」『a+u Architecture and Urbanism 建築と都市』、エー・アンド・ユー、1971年
- 10) ibid.7, p.15
- 11) ゲバウアーの実測調査をおこなったグループは以下の構成メンバーからなる。
Gunter Gebauer, Alexander Grünenwald, Rüdiger Ohme, Lothar Rentschler, Thomas Sperling, Ottokar Uhl
- 12) 日本語では「化粧壁」と翻訳をしている。ドイツ語は「Mauervorsprungs」、英語は「Wall Projection」となっている。
- 13) アウグスト・サーニッツは、ウィーンの建築家アドルフ・ロースやオットー・ワグナーについて下記の書籍を出版している。
・ Adolf Loos, Taschen Verlag, 2010
・ Otto Wagner 1841-1918, Taschen Verlag, 2013
- 14) Daniele Pisani, L'architettura è un gesto, Quodlibet, 2011
- 15) 磯崎新、「建築ウィトゲンシュタイン」、『現代思想 3・5・7・10・12月号』、青土社、1975
- 16) 「ウィトゲンシュタインの現代」『エピステーメ 9巻2号』、朝日出版社、1976
- 17) 磯崎新、「〈論理〉の表現として — ウィトゲンシュタインの〈ストンボロウ邸〉」、『建築の地層』、彰国社、1979、pp.319-324
- 18) 磯崎新、『建築の修辞』、美術出版、1984年、p.249
- 19) 磯崎新、「建築ウィトゲンシュタイン」、『現代思想 7月号』、青土社、1975、p.13
- 20) 磯崎新、「〈論理〉の表現として — ウィトゲンシュタインの〈ストンボロウ邸〉」、『建築の地層』、彰国社、1979、p.320

- 21) 増成隆士、「ヴィトゲンシュタインの建築作品—その特徴と存在意義について」、『美學』、美術出版社、1976, p.54
- 22) ibid.
- 23) 増成隆士、「ウィトゲンシュタイン」、『ヴィトゲンシュタイン読本』、法政大学出版局、1995, pp.320-332
- 24) 八東はじめ、「世紀末の二つのレトリック」、『現代思想』、青土社、1987、pp. 206-227
- 25) 八東はじめ、「建築」『ウィトゲンシュタインの知 88』、新書館、1999、pp. 32-35
- 26) ibid.24, p. 221
- 27) 小山明、「ストーンボロー邸 ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン」、『都市住宅 2 月号』、鹿島出版会、1985
- 28) 小山明、「ヴィトゲンシュタインの建築問題」、『ウィトゲンシュタイン』、河出書房新社、2011、pp132-140
- 29) 小山明、「ストーンボロー邸の二種類の平面図について」、『日本建築学会学術講演梗概集』2014、pp. 853-854
- 30) 多木浩二、「ウィトゲンシュタインの家について」、『ウィトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996
- 31) 小川英明、「ウィトゲンシュタインの建築・造形思想に関する考察」、日本建築学会東海支部研究報告集、1991、pp.617-620
- 32) 足立美比古、「ウィトゲンシュタイン造形語録」、『ART VIVANT 16』、河出書房、1985
- 33) 小林康夫、「治療としての建築」、『SD 93』、鹿島出版会、1993
田中純、「ウィトゲンシュタインの扉」、『建築文化 580』、彰国社、1995
後藤武、「ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン、超越論的ディテール」、『建築文化 631』、彰国社、1999
- 34) ゲオルク・ヘンリク・フォン・ライト、「ウィトゲンシュタイン小伝」、『回想のヴィトゲンシュタイン』、藤本隆志訳、法政大学出版局、1974
- 35) ibid.24, p.18
- 36) 黒崎宏、「ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、1980
- 37) 黒崎宏・山本信、『ウィトゲンシュタイン小事典』、大修館書店、1987
- 38) ヘルミーネ・ウィトゲンシュタイン、「家族の回想」、『ウィトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996
- 39) レイ・モンク、『ウィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994
- 40) ブライアン・マクネギス、『ウィトゲンシュタイン評伝』1994 年

図版出典

- 1) Rush Rhees, *Recollections of Wittgenstein*, Oxford Paperback Reference, 1984
- 2) 小山明 (Akira Koyama) 撮影
- 3) Bernhard Leitner, *The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation*, New York University, 1976, p.44
- 4) *ibid.*
- 5) *ibid.*, p.116
- 6) Ludwig Wittgenstein, *Tractatus logico-philosophicus*, Suhrkamp Verlag, 2001
- 7) Bernhard Leitner, *Das Wittgenstein Haus*, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.99
- 8) *ibid.*3, p.36
- 9) Bernhard Leitner, *Die Rettung Des Wittgenstein Hauses in Wien Vor Dem Abbruch*, Ambra Verlag MMag, 2014, p.15
- 10) *ibid.*3, p.55
- 11) *ibid.*3, p.97
- 12) Karl Schwazer, *Wiener Bauten - 1900 bis heute Taschenbuch-*, Österreichi-sches Bau-zentrum, 1964
- 13) Paul Engelmann, *Letters from Ludwig Wittgenstein*, Horizon Pr, 1968
- 14) *ibid.*9, p.31
- 15) *ibid.*3
- 16) *ibid.*7
- 17) *ibid.*9
- 18) Gunter Gebauer, *Wien • Kundmanngasse 19*, Fink, 1982
- 19) Paul Wijdeveld, *Ludwig Wittgenstein Architekt*, Loecker Erhard Verlag, 1993
- 20) *ibid.*, p.139
- 21) Jan Turnovský, *Die Poetik Eines Mauervorsprungs*, Birkhäuser Verlag, 1987
- 22) *ibid.*11, p.7
- 23) August Sarnitz, *Die Architektur Wittgensteins*, Böhlau, 2011
- 24) Daniele Pisani, *L'architettura è un gesto*, Quodlibet, 2011
- 25) バーナード・レイトナーの『*The Architecture of Ludwig Wittgenstein*』が全訳されて掲載された。『ART VIVANT 16』、磯崎新 (Arata Isozaki) 訳、河出書房、1985
- 26) *ibid.*, p.90
- 27) Benedetto Gravagnuolo, *Adolf Loos*, Rizzoli, 1982, p.127
- 28) 小山明 (Akira Koyama)、「*ヴァイトゲンシュタインの建築問題*」『*ヴァイトゲンシュタイン*』、河出書房新社、2011
- 29) 小山明 (Akira Koyama)、「*ストーンボロー邸の空間構成について*」日本建築学会学術講演梗概集、

2009、pp.123-124

- 30) 多木浩二 (Koji Taki)、「ウィトゲンシュタインの家について」、『ウィトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996
- 31) ibid.3, p.101
- 32) ibid.19, p.123
- 33) ibid.3, p.43
- 34) 石田優 (Yu Ishida) 撮影
- 35) ibid.19, p.41

第2章 | ヴィトゲンシュタインとストンボロー邸

註

- 1) レイ・モンク、『ウィトゲンシュタイン - 天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994, p.6
- 2) 黒崎宏、『ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、1980, p.26
- 3) ibid., p.16
- 4) ibid., p.17
- 5) ibid., p.35
- 6) 黒崎宏、『ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、1980, p.46
- 7) Brian McGuinness, George Henrik von Wright, Ludwig Wittgenstein Cambridge Letters, Blackwell Publishers Inc., 1995, p.85
- 8) ゲオルク・ヘンリク・フォン・ライト、「ウィトゲンシュタイン小伝」、『回想のヴィトゲンシュタイン』、藤本隆志訳、法政大学出版局、1974, p.14
- 9) ibid.7, pp.103-104
- 10) Paul Engelmann, Letters from Ludwig Wittgenstein, Horizon Pr, 1968, p.17
- 11) ibid.1, p.219
- 12) ibid.10, p.35
- 13) ibid.1, p.57
- 14) ibid.1, p.58
- 15) ibid.1, p.114
- 16) ibid.10, p.127
- 17) ibid.7, 1995, p.41
- 18) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.48
- 19) ibid.18, p.54

- 20) *ibid.*18, p.51
- 21) *ibid.*18, p.49
- 22) *ibid.*18, p.49
- 23) *ibid.*10, 94
*ibid.*1, p.158
- 24) *ibid.*10, p.50
- 25) Ilse Somavilla, *Wittgenstein – Engelmann Briefe, Begegnungen, Erinnerungen*, Haymon Verlag, 2006,
p.78
- 26) *ibid.*
- 27) *ibid.*1, p.252
- 28) Bernhard Leitner, *The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation*, New York
University, 1976, p.24
- 29) *ibid.*18, p.80
- 30) *ibid.*18, p.95
- 31) Bernhard Leitner, *Das Wittgenstein Haus*, Hatje Cantz Verlag, 2000, pp.23-24
- 32) *ibid.*7, p.222
- 33) ヘルミーネ・ワイトゲンシュタイン、「家族の回想」、『ワイトゲンシュタインの建築』、バーナード・
レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996, p.35
- 34) バーナード・レイトナー、『ART VIVANT 16、ワイトゲンシュタインの建築』、磯崎新訳、西武美術館、
1985, p.21
- 35) *ibid.*28, p.66
- 36) アレグザンダー・ウォー、『ワイトゲンシュタイン家の人びと』、塩原通緒訳、中央公論新社、2010、p.226
より引用、Paul Wijdeveld, *Ludwig Wittgenstein Architekt*, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.146
- 37) Rush Rhees, *Recollections of Wittgenstein*, Oxford Paperback Reference, 1984, p.6
- 38) *ibid.*28, p.20
- 39) *ibid.*7, p.224

図版出典

- 1) Paul Wijdeveld, *Ludwig Wittgenstein Architekt*, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.23
- 2) *ibid.*, p.172
- 3) *ibid.*, p.25
- 4) *ibid.*, p.26
- 5) Michael Nedo, *Ludwig Wittgenstein, Ein biographisches Album*, Beck C. H, 2012, p.37
- 6) *ibid.*1, p.62

- 7) *ibid.* 1, p.27
- 8) *ibid.* 1, p.27
- 9) *ibid.* 1, p.28
- 10) *ibid.* 1, p.28
- 11) *ibid.* 5, p.198
- 12) *ibid.* 5, p.271
- 13) *ibid.* 5, p.134
- 14) *ibid.* 5, p.262
- 15) *ibid.* 5, p.229
- 16) *ibid.* 5, pp.232-233
- 17) *ibid.* 5, p.102
- 18) *ibid.* 5, p.238
- 19) Benedetto Gravagnuolo, Adolf Loos, Rizzoli, 1982, p.195
- 20) *ibid.* 19, p.198
- 21) *ibid.* 1, p.30
- 22) Ursula A. Schneider, Paul Engelmann (1891-1965), Folio, 1999, p.10
- 23) *ibid.* 5, p.35
- 24) *ibid.* 1, p.54
- 25) *ibid.* 1, p.54
- 26) Allan Janik, Judith Bakacsy, Paul Engelmann und das mitteleuropäische Erbe, Folio, 1999, p.35
- 27) *ibid.* 1, p.55
- 28) *ibid.* 1, p.55
- 29) 石田優 (Yu Ishida) 撮影
- 30) Ralf Bock, Adolf Loos, Leben und Werk 1870-1933, Dva Dt.Verlags-Anstalt, 2009, p.67
- 31) 石田優 (Yu Ishida) 作成
- 32) *ibid.* 1, pp.58-59
- 33) *ibid.* 1, p.60
- 34) *ibid.* 1, p.100
- 35) *ibid.* 1, p.99
- 36) *ibid.* 1, p.80
- 37) *ibid.* 1, p.83
- 38) *ibid.* 1, p.87
- 39) *ibid.* 1, p.89
- 40) *ibid.* 1, p.90

- 41) ibid.1, p.93
- 42) Bernhard Leitner, Das Wittgenstein Haus, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.29
- 43) ibid., p.31
- 44) ibid.1, p.38
- 45) Bernhard Leitner, The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, New York University, 1976, p.56
- 46) ibid., p.93
- 47) ibid., p.93
- 48) 小山明 (Akira koyama) 撮影
- 49) ibid.29

第3章 | ドアを主題とした建築

註

- 1) Bernhard Leitner, The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, New York University, 1976, p.23
- 2) ibid.
- 3) 多木浩二 (Koji Taki)、「ウイトゲンシュタインの家について」、『ウイトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996, pp.177-178
- 4) 小山明 (Akira Koyama)、「ウイトゲンシュタインの建築問題」『ウイトゲンシュタイン』、河出書房新社、2011, pp.132-140

図版出典

- 1) 石田優 (Yu Ishida) 作成
- 2) ibid.
- 3) August Sarnitz, Die Architektur Wittgensteins, Böhlau, 2011, p.179
- 4) Bernhard Leitner, Das Wittgenstein Haus, Hatje Cantz Verlag, 2000, p.82
- 5) ibid.1
- 6) ibid.1
- 7) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.117
- 8) ibid.4, p.16

第4章 | 実測調査

註

- 1) 磯崎新、「建築ヴィトゲンシュタイン」、『現代思想 3月号』、青土社、1975、p.13
- 2) 研究の基盤となるストンボロー邸主階平面図は、研究者レイトナーの『The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation, 1976』45頁に掲載の施工図面と、『Das Wittgenstein Haus, 2000』49頁に掲載の建築申請図面、研究者ゲバウアー『Wien・Kundmann-gasse 19, 1982』の40頁に掲載の実測図面を示している。

図版出典

- 1) 石田優 (Yu Ishida) 作成
- 2) Gunter Gebauer, Wien・Kundmann-gasse 19, Fink, 1982, p.5
- 3) ibid.
- 4) ibid.1
- 5) ibid.
- 6) ibid.2, p.36
- 7) ibid., p.37
- 8) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.112
- 9) ibid., p.40
- 10) ibid.1
- 11) ibid.
- 12) 石田優 (Yu Ishida) 撮影
- 13) ibid.
- 14) ibid.1
- 15) ibid.
- 16) ibid.
- 17) ibid.
- 18) ibid.
- 19) ibid.
- 20) ibid.
- 21) ibid.
- 22) ibid.

- 23) ibid.
- 24) ibid.
- 25) ibid.
- 26) ibid.
- 27) ibid.
- 28) ibid.
- 29) ibid.
- 30) ibid.
- 31) ibid.
- 32) ibid.
- 33) ibid.
- 34) ibid.
- 35) ibid.
- 36) ibid.
- 37) ibid.
- 38) ibid.
- 39) ibid.
- 表 1) ibid.1
- 表 2) ibid.
- 表 3) ibid.
- 表 4) ibid.

第 5 章 | 化粧壁の役割

図版出典

- 1) 石田優 (Yu Ishida) 撮影
- 2) 石田優 (Yu Ishida) 作成
- 3) Jan Turnovský, Die Poetik Eines Mauervorsprungs, Birkhäuser Verlag, 1987, p.33
- 4) ibid.2
- 5) ibid.
- 6) ibid.2
- 7) ibid.1
- 8) ibid.2

9) ibid.

10) ibid.1

第6章 | ドアの寸法体系

註

1) Paul Wijdeveld, Ludwig Wittgenstein Architekt, Loecker Erhard Verlag, 1993, p.130

2) ibid., p.133

図版出典

1) 石田優 (Yu Ishida) 作成

2) ibid.

3) ibid.

4) 石田優 (Yu Ishida) 撮影

5) ibid.

6) ibid.1

7) ibid.

8) ibid.

9) ibid.

10) ibid.

11) ibid.

12) ibid.

13) ibid.

14) ibid.

15) ibid.

16) Gunter Gebauer, Wien • Kundmangasse 19, Fink, 1982, p.72

17) ibid.1

18) ibid.

19) ibid.

20) ibid.

21) ibid.

22) ibid.

23) ibid.

24) ibid.

25) ibid.

- 26) *ibid.*
- 27) *ibid.*
- 28) *ibid.*4
- 29) *ibid.*
- 30) *ibid.*

7 章 | 結論

図版出典

- 1) 石田優 (Yu Ishida) 作成
- 2) *ibid.*

参考文献

- 1) Bernhard Leitner, *The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation*, New York University, 1976
- 2) Bernhard Leitner, *Das Wittgenstein Haus*, Hatje Cantz Verlag, 2000
- 3) Bernhard Leitner, *The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN*, Academy Editions, 1995
- 4) Bernhard Leitner, *Das Wittgenstein Haus*, Hatje Cantz Verlag, 2000
- 5) Bernhard Leitner, *Die Rettung des Wittgenstein Hauses in Wien vor dem Abbruch Saving the Wittgenstein House Vienna from Demolition*, Birkhäuser Verlag GmbH, 2013
- 6) Gunter Gebauer, *Wien • Kundmannngasse 19*, Fink, 1982
- 7) Paul Wijdeveld, *Ludwig Wittgenstein Architekt*, Loecker Erhard Verlag, 1993
- 8) Jan Turnovsky, *Die Poetik Eines Mauervorsprungs*, Birkhäuser Verlag, 1987
- 9) Allan Janik, Judith Bakacsy, Paul Engelmann und das mitteleuropäische Erbe, Folio, 1999
- 10) Paul Engelmann, *Letters from Ludwig Wittgenstein*, Horizon Pr, 1968
- 11) Ilse Somavilla, *Wittgenstein - Engelmann. Briefe, Begegnungen, Erinnerungen*, Haymon Verlag, 2006
- 12) Ursula A. Schneider, *Paul Engelmann (1891-1965)*, Folio, 1999
- 13) August Sarnitz, *Die Architektur Wittgensteins*, Böhlau, 2011
- 14) Roger Paden, *Mysticism and Architecture*, Lexington Books, 2007
- 15) Nana Last, *Wittgenstein's House*, Fordham Univ Pr, 2008
- 16) Daniele Pisani, *L'architettura è un gesto*, Quodlibet, 2011
- 17) Allan Janik, *Wittgenstein in Vienna*, Springer-Verlag, 1999
- 18) Marjorie Perloff, *Wittgenstein's Ladder*, Univ of Chicago Pr, 1996
- 19) Benedetto Gravagnuolo, *Adolf Loos theory and works*, Rizzoli, 1982, pp.78-82
- 20) Brian McGuinness, *George Henrik von Wright, Ludwig Wittgenstein Cambridge Letters*, Blackwell Publishers Inc., 1995
- 21) バーナード・レイトナー、『ART VIVANT 16、ウイトゲンシュタインの建築』、磯崎新訳、西武美術館、1985
- 22) 多木浩二、「ウイトゲンシュタインの家について」、『ウイトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996
- 23) ヘルミーネ・ウイトゲンシュタイン、「家族の回想」、『ウイトゲンシュタインの建築』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、青土社、1996
- 24) バーナード・レイトナー、『ウイトゲンシュタインの建築』、磯崎新訳、青土社、1996
- 25) アレグザンダー・ウォー、『ウイトゲンシュタイン家の人びと』、塩原通緒訳、中央公論新社、2010
- 26) Ralf Bock, *Adolf Loos, Leben und Werk 1870-1933*, Dva Dt.Verlags-Anstalt, 2009
- 27) バーナード・レイトナー、「哲学者ルートヴィヒ・ウイトゲンシュタインの設計した住宅」『a+u Architecture and Urbanism 建築と都市』、エー・アンド・ユー、1971年

- 28) 磯崎新、「建築ヴィトゲンシュタイン」、『現代思想 3・5・7・10・12月号』、青土社、1975
- 29) 「ウィトゲンシュタインの現代」『エピステーメー 9巻2号』、朝日出版社、1976
- 30) 増成隆士、「ヴィトゲンシュタインの建築作品-その特徴と存在意義について」『美學』、1976
- 31) 磯崎新、「「論理」の表現として—ウィトゲンシュタインの「ストンボロウ邸」」、『建築の地層』、彰国社、1979、pp.319-324
- 32) 磯崎新、『建築の修辞』、美術出版、1984年、p.249
- 33) バーナード・レイトナー、『ART VIVANT 16』、磯崎新訳、河出書房、1985
- 34) ヘルミーネ・ウィトゲンシュタイン、「家族の回想」、『ART VIVANT 16』、バーナード・レイトナー、磯崎新訳、河出書房、1985
- 35) 小山明、「ストンボロー邸」、『都市住宅 2月号』、鹿島出版会、1985
- 36) 小林康夫、「治療としての建築」、『SD 93』、鹿島出版会、1993
- 37) 田中純、「ウィトゲンシュタインの扉」、『建築文化 580』、彰国社、1995
- 38) 後藤武、「ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン、超越論的ディテール」『建築文化 631』、彰国社、1999
- 39) ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン、『論理哲学論考』、藤本隆志訳、坂井秀寿訳、法政大学出版局、1968
- 40) ウィトゲンシュタイン、『論理哲学論考』、野矢茂樹訳、岩波書店、2003
- 41) ウィトゲンシュタイン、『論理哲学論』、山元一郎訳、中公公論新社、2001
- 42) 飯田隆、『ウィトゲンシュタイン読本』、法政大学出版局、1995
- 43) レイ・モンク、『ウィトゲンシュタイン -天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994
- 44) ブライアン・マクネギス、『ウィトゲンシュタイン評伝』1994年、英1988年
- 45) ノーマン・マルコム、『回想のヴィトゲンシュタイン』、藤本隆志訳、法政大学出版局、1974
- 46) ゲオルク・ヘンリク・フォン・ライト、「ウィトゲンシュタイン小伝」、『回想のヴィトゲンシュタイン』、藤本隆志訳、法政大学出版局、1974
- 47) 黒崎宏、『ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、1980
- 48) 山本信、黒崎宏編、『ウィトゲンシュタイン小事典』、大修館書店、1987
- 49) 岡田雅勝、『ウィトゲンシュタイン』、清水書院、1986
- 50) 滝浦静雄、『ウィトゲンシュタイン』、岩波書店、1983
- 51) カール・E. ショースキー、『世紀末ウィーン』、安井琢磨訳、岩波書店、1983

論文

- 1) 石田優、小山明、「ストンボロー邸朝食室の寸法について」日本建築学会学術講演梗概集、2014、pp.855-856

- 2) 石田優、小山明、「ストーンボロー邸のドアの寸法体系について」日本建築学会学術講演梗概集、2015、pp.855-856
- 3) 石田優、「ストーンボロー邸のドアの寸法体系に関する研究」、芸術工学会、2015、pp.114-121
- 4) 小山明、「ヴィトゲンシュタインの建築問題」『ヴィトゲンシュタイン』、河出書房新社、2011
- 5) 小山明、「ストーンボロー邸の空間構成について」日本建築学会学術講演梗概集、2009、pp.123-124
- 6) 小山明、「ストーンボロー邸のドアについて」日本建築学会学術講演梗概集、2010、pp.201-202
- 7) 小山明、「ストーンボロー邸の主階平面計画について」日本建築学会学術講演梗概集、2011、pp.751-752
- 8) 小山明、「ストーンボロー邸のドアと空間構成について」日本建築学会学術講演梗概集、2012、pp.357-358
- 9) 小山明、「ストーンボロー邸の二種類の平面図について」、日本建築学会学術講演梗概集、2014、pp.853-854
- 10) 小川英明、「ヴィトゲンシュタインの建築・造形思想に関する考察」、東海支部研究報告集、1991、pp.617-620

謝辞

本博士論文を執筆するにあたり、ご指導をいただきました小山明教授（神戸芸術工科大学）に心より感謝致します。

小玉祐一郎教授（神戸芸術工科大学）、岡部憲明教授（神戸芸術工科大学）、矢代眞己教授（日本大学）には、本論文をご精読頂き詳細な助言をして下さいましたことに感謝致します。

ブルガリ文化研究所の関係者様、特にアレクサンドラ・ジダロヴァ氏、ベラ・ガネヴァ氏には、本研究の基盤となる実測調査をサポートして下さいましたことに感謝致しております。

バーナード・レイトナー氏にはメールで本研究の助言をして下さいましたことに感謝致します。

石田 優

